
The Vampire Castle

二上 ヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Vampire Castle

【Nコード】

N2112Q

【作者名】

二上 ヨシ

【あらすじ】

人間界から突然、ヴァンパイア王国の後宮へ連れてこられたソフィア。彼女は汚れたヴァンパイアを毛嫌いしつつも、王は一枚の絵をきっかけに彼女を気にしはじめる。そんな彼女を陥れようとする後宮の女たち。帰りたいと密かに願う彼女。帰る方法はたった一つ、王妃となることだけ。美しいヴァンパイアたちにちよっかいをかけられながら、戸惑いの中で奮闘する。

s t . ?

The Vampire Castle (前書き)

微妙な残酷描写や微工口表現が出てくる予定なので、苦手な方はご注意を！

あと感想をいただけると嬉しいです^^

真つ黒な空。白い月。

一日、一月、一年。ここはずつと夜の帳が下りている。

不気味なコウモリが奇声を上げて空を舞い、黒猫の金の瞳が闇夜に浮かぶ。

小高い丘に建つ古びたお城は、人気もなくひっそりと佇んでいた。だが、気を抜いてはならない。古びた鉄の扉の向こうには、“彼ら”がいる。

そう、この闇の支配者、ヴァンパイア吸血鬼が

「はあ……」

私の名前はソフィア・クローズ。頭すら入らないような小さな小窓から、今日も外を眺める。硬いベッド、古びた机、石造りの冷たい部屋。そんな無機質な物たちの中で、窓枠に切り取られた外の世界だけが唯一の安らぎだった。

「アンタも強情ねえ」

クモのグリーン婦人。私は虫嫌いだったから最初はキヤーキヤー言っただけで、こんな何も無いところに長い間いるんだもん。今では良い話し相手。旦那さんともう自立した子供さんが（忘れちゃったけど確かたくさん）いて、人間の私よりかなり人生経験が豊富みたい。話してるととっても楽しい。

「あんだそんな可愛い顔してるんだから、ちょっと色目使えばあの

お方もコロツよ、コロツ！」

「でもミセスグリーン、私には無理よ。相手がヴァンパイアだなんて」

ここはヴァンパイアの王の城、ヘルグステイン・キャツスル。ヘルグステインっていうのは、この丘の名前らしい。ザルク・ヴィン・モルターゼフという強大な力を持つヴァンパイアの王が住まう巨城だとか。

私はそのキング・ザルクの後宮にいる。断っておけば、私はごく普通の人間で、決して穢れた吸血鬼なんかじゃない。ある夜、眠っているところを誰かに無理やり連れて来られ、気づいたらここに。私の住んでいた町がどの方向にあるのか、ここが一体どんな場所なのか、どんな者たちがいるのかまだよく分からない。ただ真っ白な顔の背の高い女性に部屋に放り込まれ、ドレスを投げつけられ、一言こつ言われた。

『逃げようだなんて考えないほうがいいわ』

って。まず状況説明をするのが筋じゃないかしら。

「ソフィア、ヴァンパイアに女は生まれえない。だからここにはアンタの他に方々から連れてこられた数百人の人間の女がいるわ。そこから選ばれる正妻以外は惨めな人生を送るのが目に見えてるんだから、この際もつとやる気を出すのよ。女は度胸よ、度胸！」

情報源はもっぱらミセスグリーン。ここがヴァンパイアのお城だということも、私が知らぬ間に後宮入りさせられたということも、そして二度と人間界へは帰れないことも知った。その事実を私以外の女の子たちも、どこかから知ったみたい。どうせ帰ることができないなら、惨めな妾生活よりも妻の座、妃の座を手に入れようと奮

闘してるんだって。

でも、私は。

「今日も陛下がお庭の鑑賞にいらっしやるらしいから、こんな小さな部屋にこもってないで、早く回廊に行っておいで。顔を覚えてもらえるチャンスなんだから」と彼女は両手を広げてみせる。

でも、何も答えないで外を望む私に、ミセスグリーンはため息をついた。

「人間を襲うヴァンパイアのイメージが悪いのは分かるけど、ここはそんな者たちばかりじゃないよ。王に気に入られるために、とか深く考えずに外の空気を吸っておいで。エンピツと紙を持ってね」

クモの表情は私にはよく分からないけど、きっとミセスグリーンは今、とっても優しい顔をしている。そう思うと、私も少し気が変わった。

s t . ?

The Vampire Castle (後書き)

あとがき

いきなり暗っ！

もう少し明るい感じにしたい……が。

「陛下……、ああ何とお美しい」

回廊は人でぎっしり詰まっていた。王が数人の衛兵と共に、美しい庭を鑑賞しているらしい。そんな王をさらに鑑賞する（失礼かしら）女性たちの脇をすり抜けて、私は庭に出た。

王がどんな姿形をしているのか確かに少し気になったけど、この群がる女性たちを掻き分けてまで見る気もなかった。

だけどシーツを頭から被って顔を隠す、怪しい私を気にする人もいなくて良かったわ。なるべく誰とも関わり合いになりたくないから。こんな暗闇の世界なんかで。

「キレイ……」

思わずそうつぶやいた。目の前に広がるのは、広い庭の敷地内にある大きな湖だった。まるで二つの空の狭間にいるように、雄大な景色が広がっている。私たちは指定された区域なら昼夜を問わず（もっとも、お昼なんてない）自由に歩くことを許されていたけれど、私は部屋に引きこもっていることが多かったから。

湖の傍にちようどよさそうな岩を発見すると、少し触って濡れていないことを確認し、ゆっくりと腰掛けた。足元の光る愛らしいスズランに笑みを零す。

月と、水と、風と。

こんなに血なまぐさいところにいるのに、それらは変わらず私の心をくすぐる。人間界とも変わらない。紙の上をすべるエンピツが、この状況をより鮮明に写し取るうと動いていた。

「ほう、上手いものだな」

集中していたところに、急に低い声をかけられて心臓が飛び跳ねた。その拍子に、思わずエンピツを落とす。それをその人物が、草の間に驚くほどに白い指を下ろして摘み上げた。

「どうぞ?」

「あ、ありがとうございます」

シーツの隙間からふと見上げて、息が止まるかと思った。切れ長の黒真珠のような目に、闇のように黒く美しい髪。彫刻のように均整の取れた面立ちに、少し意地の悪そうな笑み。月明かりに照らされたその半顔は、夢と現の区別を忘れるほどに美しかった。そう。本当に今まで見たたことも無いほど、美しい男性がそこにいた。

「……あっ」

受け取ろうとしたエンピツをまた落としてしまったというのに、私はそこから少しも動くことができなかった。彼は少々呆れたように息を吐くと、また屈んで拾ってくれた。

「君は私をバカにしてるのか?」

そこで初めて気がついた。彼の白い歯が僅かに尖っている。ヴァンパイアだ!

そう思うと今度は怖さで体が縮み上がった。足がすくんで震える。話に聞いていたヴァンパイアは、恐ろしいものだった。人間の血をむさぼり飲み、人を醜悪な怪物へと変える。銃で撃つても死ぬこ

とはない。ただ心臓に杭を打ち込み、大量の血を吐かせてのみ生を終えると。

これが、あの……。

「ああ、もしかして新人か？」

男性は手のエンピツをクルクルと回すと、物珍しそうに私を眺めていた。牛を品定めするブッチャー（肉屋）のような卑しい眼。

「私のことも知らないんだろう？」

全て見透かしたような漆黒の瞳とひしひしと感じる威圧感に、居心地の悪さが沸きあがってくる。胸に手を当て、一歩下がった。

「怖がるな。私の名はザルク・ヴィン・モルターゼフ（Zaarc Vin Morterzefz）。この城の主だ」

「え？」

だって王は。

「庭にいるのは私の影武者だ」

ど、どうして分かるの……。

王はそれすら読み取ったように、クスクスと笑っていた。

「で？ 王である私に先に名乗らせた、無礼者の君の名は？」

王の細い指が私の被っていたシートに伸びる。
ダメ、そんな血に穢れた手で触らないで。

私は胸に抱いた絵を握りしめ、わき目も振らずに部屋へと戻った。

s t . ?

The King) 後書き

あとがき

王様、女の子に逃げられる。

「聞いたかい？ 絵のコンクールのこと」

早耳のミセスグリーンが興奮気味にそう言った。私はやっぱり窓の外を見ながら、「いいえ」と首を振った。

「王が後宮の女たち全員から絵を募って、一番をお決めになるんですって。あんた絵の才能があるんだから、またとないチャンスじゃない！」

「チャンス……」

「あー、王がどうか考えず純粹にやってみればいいわ。この状況だって楽しまなきゃ損、損！」

ミセスグリーンはいつも明るくて、言葉に温かみがある。人間で言えばきつと、真っ赤なホッペの肝っ玉母さんなんだろうなと思っ

大きな宮殿を出て庭に出ると、みんな真剣な顔でキャンバスに向かい合っていた。題材は“月”らしく、絵の具やクレヨンを手紙に月とにらめっこしている。ちょうどアーケードになっている渡り廊下の下、メデューサの噴水前が人気スポットらしく、大勢の女の子が場所を取り合ってこぜり合いをしていた。

私はそこをさけて、なるべく人気のないところを探す。

今日はシーツを被っていなかったから、ジロジロ見られているようでやけに不安だった。でもまたシーツを被って出れば、あの人に会った時すぐに素性が知られてしまう。

あ、そういえば……。

エンピツが無いことに気づいた。部屋に唯一あった描く道具だったのに。あの時、王から受けとらずに帰ってしまったから。

「どうしたの？」

肩からひょっこりミセスグリーンが現れる。

「描くものがなくて」

「そう。アンタ支援してくれる貴族がまだいないもんねえ」

後宮は、貴族らの賭けの場にもなっていた。数多くいる女性の中から援助する一人を選び、生活や娯楽に関する全面的な支援を行う。ドレス、香水、装飾品、住む部屋のランク。全てが貴族からの援助でまかなわれ、その代わり王の妃になるための努力を義務付けられる。

なんでも、援助した女性が妃になると、その貴族の名前が上がって爵位に影響があるらしい。

私はそんなもの下らないと思うけど、これがものすごく人気の賭けになっているらしくて、これが元で破産した貴族もいるってミセスグリーンから聞いた。

私にはその支援を頼める貴族がない。パーティーやら交流会やらでそう言ったことをお願いするみたいだけど、私にはお金と自分を交換するようなマネはできない。おんぼろの部屋で、おんぼろのドレスだっていい。私は誰の商品にもなりたくなかった。ここの誰もそうは思わないみたいだけど、これってどこかズレてるのかしら……？

「そういう所が強情だって言うの」

ミセスグリーンはそう言うけど、呆れたようできて納得してくれている。本当にお母さんのような存在だった。私の心の癒し。今まで虫が嫌いだったのが嘘みたい。

「で？ どうするのソフィー。今回は見送るの？」

「いいえ。折角これだけキレイな月が出てるから」

「月はいつもキレイじゃない」

「そう。でも今日の私が見る月は、明日の私が見る月とは違うから」

ミセスグリーンは少しきよんとしていた。私はフフフと笑うと、

「お美しい黒衣の貴婦人さん、少々お力を貸していただけませんか？」とお姫様ぶつてお願いしてみた。

「まあ、すごいのができたわねえ。私も長年クモやってるけど、こんな月を見たこと無いわ」

ミセスグリーンはそうやって感激してくれた。褒められるのは悪い気はしない。いいえ、正直に言うわ。嬉しい。

描くものが無かった私は、傍に生えていた花や草をちぎって絵を描いた。糊は無かったから、ミセスグリーンの糸を借りて。時々通りすがりにそれを見ては“貧乏臭い”と笑われたけど、私は満足してる。

「これは二人の共作ね」

私がそういうと、ミセスグリーンはなぜか小さなハンカチを取り

出して泣いていた。涙もろいなあ。

「ねえ」

若い女の子の声に、ハツと絵を抱きしめて振り返った。その金色の髪を丁寧に巻いた少女は、きらびやかで愛らしいドレスに身を包み、高そうな靴を履き、手には大きなキャンバスを持っていた。肩には一匹のコウモリが毛づくろいをしている。

「それ、あなたが描いたの？」

「え、ええ」

「私はリザ・インスティテュート。あなたは？」

「ソフィア。ソフィア・クローズ」

握手を交わした。すごく小さくて柔らかくて手。

「あなたの絵、とっても素敵ね」とリザは柔らかく笑う。

「ありがとう」

「ねえソフィー、私の描いたものも見てくれない？」

リザがキャンバスをこちらへ向けた。あまり手馴れた感じはしなかったけど、とつても一生懸命に描いたのが伝わる。メデューサの手の上に浮かぶ月が、青白い顔でそれを見下ろしている構図。とても幻想的で、どこか絵本の挿絵を思わせた。

絵の具を使って彩られたそれを見ると、確かに私の絵は貧乏臭いかもしれない。でもミセスグリーンが手伝ってくれて、やっと完成したんだもの。王にだろつと貴族にだろつと、笑われたって構いやしない。

「あら、そろそろ締め切りの時間じゃないかしら」

リザがそう言った瞬間、南の棟（午前北のゴーンという重厚な鐘、午後は南のカーンという軽快な鐘が鳴る）の鐘が三つ聞こえた。それを合図に青白く背の高い女性が、大きな箱を持った侍女たちと共に、青白いガラスのベルを鳴らして歩く。絵を描き終えた女性たちが、我先にと集まっていった。

「あ」

私もリザもそこへ向かおうとして足を止めた。リザが「どうしたの」と振り返る。

「私サインするものがなくて」

「なら私を書いてあげるわ。つづりは？」

「S - O - P - H - I - A , C - R - R - O - W - S」

「ソフィア・クローズ……OK」

リザはフワフワとした羽ペンを取り出すと、私の絵にサラサラと書き記してくれた。

「ついでに出してきてあげるから、待ってて。良かったらこの後お茶しましょう」

そういい残して人ごみの中へ消えてゆくリザの背中を見つめながら、こんな所で出会う友達も悪くないかもしれないと思った。

s t . ?

The Competition (後書き)

あとがき

友達一号……。

「な……なんて豪華なお部屋」

私は場違いなところへ来てしまったと、出された紅茶に口もつげずに縮こまっていた。

「どうしたのソフィー、もしかしてファーストクラスのお部屋は初めて？」

「え、ええ。実はそうなの」

後宮には三つの棟があつて、それぞれにランクがある。王室から一番近い場所にあるのがファーストクラス。真つ白な外観に、内部は豪華な装飾が施された部屋がたくさんある。高級家具や広い浴室も各部屋に完備されていて、本来後宮は男子禁制だけど厳重な監視と制限付きで貴族とのパーティーが開かれるホールもあるらしい。

次に少々手狭ではあるけれど、一般的な家具の取り揃えられたセカンドクラス。バス、トイレも小さいながらもついていて、普通に生活する分には全く支障はなし。私が人間界にいる時に住んでいたうちちよつとだけ似てるかな。

私のサードクラスはランクが一番下で、棟自体も林のそばのちよつとじめつとした場所にある。外壁はひび割れているし、部屋はカーペットも敷かれていなくて石畳がむき出し。バスとトイレは共同だし、家具といえば硬いベッドと机と椅子くらい。あちこち隙間だらけで風が吹き込んできたり、時には雨が入って来たりもする。

ミセスグリーンに話は聞いていたけど、このファーストクラスとというのは相当にすごい。棟全体も広々と明るくて、玄関ホールの巨大シャンデリアとか、廊下に置かれた金の情天使の像なんかも素晴

らしい。プレイルームや観劇場もあるって聞いたけど、ファーストクラスの人以外は出入り禁止なんだって。

王もファーストクラス以外の女性のところへは通わないらしいけど、私が王でもそうするわ。雨漏りのするような部屋より、いい香りのするお洒落な部屋の方がいいものね。ここじゃ、又イグルミだつて首輪にエメラルドがついているし。

「紹介するわ」

都会へ出てきたての田舎娘のように、キョロキョロ辺りを見つめていた私はハツと現実に引き戻された。

テーブルを囲んでいるのはリザと私だけじゃない。左手からまっすぐな黒髪の少女と、赤いショートヘアの少女、それと茶色い髪を二つに結んだ少女が座っていた。

「ルルーに、ニーナに、ジェニファー。みんな、こっちはソフィアよ」

「よ、よろしく」

私が軽く微笑むと、みんな上品そうに軽く会釈した。多分三人ともファーストクラスなんだろう。着ているドレスが違つし、ネックレスも豪華だし、どこか顔つきも自信に溢れている。

「ねえソフィア、いえ、ソフィーでいいかしら？」

「え、ええ」

ニーナがにつこりとキレイに口角を上げて私を見た。きれいなアイデアとイヤリングがランプの明かりに輝いている。

「陛下とは何度？」

「え……」

何度……角度じゃないのよね。

「一度お庭で拝見したことはあるけど……」

そういうと三人はクスクスと笑った。面白くて笑っているんじゃないってことは、鈍感な私にも分かった。

「お体の関係のことを聞いているのよ？ 何度ご経験されたの？」

い、いきなりそんな話？ ここは外にも出られなくて暇なのは分かるけれど、初対面でそんな話をするのが普通なの？

「い、いえ……そういうことは全く」

「あら本当！？ あの美しい陛下の腕に抱かれる喜びを知らないなんて」

「は、はあ」

血塗れたヴァンパイアに抱かれる喜びなんて、知らなくたって全然構わない。確かに王の容姿は並外れているけれど、『男は顔じゃあない』とおじいちゃんに教わった。それに

だめ、せつかく楽しくしているのに表情が曇ってしまっ。

とにかくあの王は相当な女好きなんだろうな。王とそういう関係が無いことがそんなに珍しいのなら、こここの棟にいる百人ほどの女性たちとは既に……って私、何を考えてるんだろう。

「ここへ来てどれくらいなの？」

「えっと、一月ぐらいなのかな……」

カレンダーなんてないから本当のところはよく分からない。こころでは一日だって曖昧だし。

「何だか全然危機感ないのね。私はその頃セカンドにはいたわよ？ 支援してくれる貴族にしる陛下にしる、アプローチはしてるんでしょう？」

「いえ……」

「あなたまさか、一生乙女でいる気？」

バカらしいとショートヘアのニーナは笑う。

「可哀想よニーナ、サードクラスに陛下が足を運ばれるわけないじゃない」

ニーナをなだめるジェニファーム、どこか眼に道化を見ているような光を湛えていた。かなり居心地が悪い。

「どうして支援を受けないの？」

ルルーが長い黒髪をさらりと払う。その探られるような眼は苦手。

「あら、ルルーもルルーよ。受けたくとも、受けられない方はいらっしやるんだから、サードクラスには。ねえ、ソフィーちゃん？」

ここにミセスグリーンがいなくて良かった。私が一人、心の中に閉まっておけばいいことだから。言い返す？ まさか。あんまりゴタゴタを起こして目立ちたくはない。すごく悔しいのは認めるけど。

「皆、やめて。私たちだって最初はサードクラスからのスタートだったじゃない」

リザ……、庇ってくれるんだ。
三人はリザの言葉に怒ったような顔をしていた。でもリザは気にしていないみたい。

「ごめんね、ソフィー。ここ流の、ちょっとした手荒い歓迎だから」
「ええ、大丈夫」

私がそう言って笑うと、彼女の肩の上のコウモリが笑った気がした。

「リザ、どういうつもり？ まさかあんな芋虫くさい女と本気で友達になるうっていうんじゃないんでしょう？」

ソフィアが帰ったあと、三人はリザに詰め寄った。どうも納得がいかない。クラスが違うもの同士、それも一番上と下が仲良くなると言う光景はこの後宮のどこにも見られない。昔友達であるうと、暮らしが異なれば自然と消滅していくものであった。それがわざわざこちらから

「あら、いけない？」

テラスへ続く大きな窓の外を望みながら、リザは飄々とそう言うてのける。ソーサーに乗せたカップに上品に口をつけた。

「いい？ お友達はとっても大切だわ。きっとあなたたちも身に見て分かるときがくるはず」

彼女はそう言ってうつとりしたように月を眺めた。

「そう……近いうちに、ね」

三人はそれぞれに首をかしげていたが、リザは満足そうに赤い唇を緩めていた。

王のザルクは壁に張られた絵を一枚一枚丁寧に見回っていた。右手にはあの時のエンピツを持ち、上手にクルクルと回して弄んでいた。コツリコツリと足音が、長く薄暗い大理石の廊下に響きわたる。やがて一枚の絵の前でピタリと足を揃えて止まった。

「見つけた」

ザルクの視線の先にあったのは、花と草のちぎって描かれた淡い月の絵。クモの糸とあいまって、高級な絵の具すらも敵わない繊細な輝きを放ち、作者の澄み切った心を投影していた。数百枚あるものの絵も、全て霞んで見える。

ザルクはその絵をそっと撫でた。

「王である私に先に名乗らせた、無礼な君の名は」

絵の下に掲げられた、作者名の入ったプレートに指を滑らせる。

「リザ・インステイテュート……。リザ」

ザルクはしばらくその絵をじっと見つめ、何度もその名を口にしていた。

後宮には教養を学ぶための学校がある。まあ人間界から右も左も分らずに連れてこられた子たちばかりだから、ヴァンパイア界の“一般常識”とやらを後宮の女性たちに学ばせる必要があるみたい。

学校もスクール・ファースト、セカンド、サードのランクがあつて、選べる授業科目なんかが異なる。ファーストの教室はやっぱりきれいで広いし、授業で使われる器材も充実しているらしい。

ちなみにこの学校は強制じゃない。でも、ヒマだしすることはないし、王は教養のある女性を求めようだからってみんな真面目に通ってる。

私以外は……。

そりや人間界にいたころは、ちゃんと学校にも行ってたわ。こんな世界の常識になんて、溶け込みたくないだけ。

「いいじゃない、行きましようよ！」

でもリザがさっきから私の腕をグイグイと引っ張る。スクール・ファーストの授業に一緒に出ようといつて聞かない。

「けど私はサードだし」

「リザの言うとおり、大丈夫よ。ハイスクールっていうよりカレッジって感じだから。出席も取らないし、誰が誰か分からないって」

ジェニファアも、二つに分けた髪的一方をクルクルと弄びながらそう言った。それはどうやら彼女の癖らしい。

「ほら、行くわよ、ソフィー！」
「ああ、ちよつと……」

というよりそもそも勉強についていけないのですが……。そんな私の心の声など届くはずもなく、ズルズルと純白の壁が美しいキャンパスの中へ引きずられていった。

「で、あるからスて」

さしすせそに特徴のある話し方をする、ヒゲだらけのアンデッドル先生。土色の体に、大きな歯が一本飛び出ている。身長はそう高くないけれど、やけに細くて、白衣の下からチラチラと肋骨が見え隠れしていた。時々眼が飛び出し、そのたびに慌てて仕舞うのはご愛嬌。ちよつと舌たらずなのは、寝ている間に舌の先を鼠にかじられちゃったんだって。しかもその話は今日で二十七回目らしい。

先生が空中で光るチョークを揺らすたび、後ろの黒板に光の文字が書かれてゆく。時々くしゃみをして意図しない巨大な波線が描かれてしまうけど、そんな時は掌ですぐに消せるみたい。一体どういう仕組みになってるんだろう。

それにしても、学校なんて久しぶり。先生や黒板はともかく、こっちは皆と机を並べて授業だなんて。思い出すな、故郷の友達のこと。

「はい、ではその君。答えなシャイ」
「……」

「君、そのニタニタスてる君」

え、私？ ニタニタしてた？

「シヨれだけ笑顔だったら、これ分かるでソ？」

アンデッドル先生はチヨークで黒板をコツコツと叩いた。そこにはわけの分からない数式と魔方陣らしきもの。何ですか？ そこから火でも出せばいいんですか？

「……えっと、その」

私がモジモジしていると、リザがスツと手を挙げた。

「先生、彼女は陛下のことばかり考えて笑っていたんですね。代わりに私が」

クラスメートはそれに笑い、リザがウインクする。ありがとう……。でも心なしか何人かの視線が冷たい。まあ、そりゃあ一人の男性を数百人で取り合っているんだものね。私は参戦しているつもりはないんだけど、ここにいる限りは強制参加。

リザは階段状になっている教室をツカツカと降りると、先生からチヨークを受け取ってサラサラと答えを書いた。

「シエい解！ 君は優秀だね、えっと……アルフレッド君」

「インステイテュートですわ、先生」

「いやあシユまない、インチュチュチュート君。何せ頭に虫が湧いとるもんじゃから、ウヒ、ウヒ、ウヒ！」

先生が頭蓋骨をパカツと開けると、大きな虫が眼をパチクリとさせていた。それに皆は顔をしかめたけど、私はとっても面白い先生だと思っただわ。

「ごめんね、リザ」

キャンパス内のオープンカフェでお茶を飲みながら、勉強を教え
てくれるというリザの好意に甘えていた。しかも私はお小遣いをも
らえる人もいなかったから、この“魔女が作った最高のカフェオレ
”とやらもリザが奢ってくれた。申し訳なくてならない。

「いいのよ、友達でしょう?」

リザはそう言って、お気に入りらしいロイヤル印のアップルテイ
ーを飲みながらにつこりと笑う。本当にいい子。分厚い教科書は様
々な科目があつて、基本魔術書とか、王族歴史書だとか、悪魔大全
とか、あとは礼儀作法書にその……夜のそつという指南書なんかもあ
つた。ヴァンパイアの学校なんて下らないと思つたけど、あんな先
生がいるなら悪くない。次からはちゃんと授業に出よう。もちろん
スクール・サードの方だけだ。

リザはもう基本書はいらないから、全部くれるって。私は本当に
友達に恵まれたわ。

「実技がないのが本当に残念」

ルルーが黒い髪を撫でながらそう言った。彼女は黒魔術とやらが
得意らしく、その豊富な知識は頭から山羊のような角が生えた、デ
ビルド先生も長い舌を巻いているという。でも実技の授業はなかつ
たから、それも宝の持ち腐れなんだとか。

「そりゃあそうでしょ、ヘルドラゴンでも召喚する気? こんなと

ところで黒魔術なんか使われちゃあ、陛下だってお困りになるわ」

ジェニファーが例の如く、二つにくくった髪の一方をクルクルと指で遊んでいた。

「でも、あんなだつて本当はやってみたいんでしょう、ジェニー。部屋に魔法陣の書かれた紙がたくさん散らばつてたじゃない」

今日も赤い短髪に豪華なカチューシャをつけたニーナに凶星をつかれ、ジェニーはごまかすようにカップの中身を喉の奥へ押し流した。

楽しそうだな、なんて私はのんきに笑つてたけど、ここでも時々、冷たい視線も感じていた。そりゃあある一定の場所以外はファースト以外の者も自由に行き来しても良いけど、暗黙の了解というか、ファーストはファースト、サードはサードのいるべき場所があると思われていた。

「気にすることないわ、ソフィー。あなたが美人だから嫉妬しているだけよ」

「そ、そんなことないわ」

ミセスグリーンもそう言ってくれるけど、リザの方が数倍キレイだと思う。金髪に蒼い眼、かわいい唇に透き通るような肌。私が王だったら、彼女をきつと正室に迎える。

あ、社交辞令つてやつか……。

「お嬢さん方、相席をしても？」

低くて聞き心地のよい男性の声。

“男性”？ 全員声の主をハッと見上げた。

「へ……陛下……」

テラスにいた全員が息を呑んだ。おしゃべりの口がそのままの形で止まっている。王がこんなところへ、ひょっこり顔を出した事などないんだらう。

でもそんな私たちに構わず、王はお付の衛兵に当然のように椅子を引かせると、長い足を組んでゆったりと腰掛けた。

「どうした、みんな固まって。そんなに私が恋しかったのか？」

分かってやっているのか、それとも天性のものなのか。色気のある流し目で私たちに視線を投げかける。ヴァンパイアは人間の血を飲む薄汚い怪物だと分かっているにもかかわらず、その容姿の美麗さに胸が高鳴るんだから私も現金よね。

「あ……はい。もちろんですわ、陛下」

リザは頬を真っ赤にして、眼を潤ませながら王を見つめていた。そのドキドキがこっちにも伝わってきてそう。王は余裕な様子でふと笑うと、運ばれてきた赤い飲み物の香りを優雅に楽しむ。

ワインよね、血じゃないよね……。別の意味でドキドキしながらそれをじっと見ていると、王の漆黒の瞳とかち合ってしまった。

あの日、湖の傍のことを思い出して体に緊張が走る。

大丈夫、名前は言っていないし、シートで顔も見えなかったはず。

「君はサードクラスか」

王はワイングラスを置いて、私を興味深そうに見とめた。おそろく雰囲気を感じたのだらう。

「はい、でもあの……帰ります」

私はここにいるべきじゃないだろうし、何よりきまりが悪い。リザからもらった教科書を持ってそそくさと立ち上がった。

「なぜ」

それに足を止めた。

「君のような者が、この私に近づくチャンスだろう？」

少しイラツとする物言い。誰もが自分に興味を持っていると思ってる。少なくとも私はヴァンパイアなんかになんかに近づきたくない。それがたとえ、どれだけの美男でも。

「でしたら他の方にそれを譲ります」

「座るといい」

「……」

「どうした、サードクラスの女」

も、ものすごく不愉快……。でも確か王の命令に逆らうと、何かしらの処罰を受けさせられると聞いた。私はしぶしぶテーブルに戻って、椅子にストーンと腰掛けた。

「名は」

王にこれを聞かれるのは二度目。でも怪物に教える名前なんかありません。怒られたって構わない。

「……サードクラスの女で結構でございます。キング・ザルク」

リザやジェニファーたちは青ざめていたけど、

「なるほど、斬新だ。幾百もある女の名前なんぞ、覚えていられないからな。あえて大きく括るとは、お前はなかなか機転が利く」

しまった、逆に気に入られてしまった。王は長い指でグラスを取ると、私の目を見ながら一気にワイングラスの中身をあおる。何か言いたいことでもあるのかしら。そう思った矢先、

「だがサードクラスの女。私はおそらく君を知っている」

「！」

どうして？ 私は掌がじつとりと汗ばむのを感じた。私のようなサードクラスの女が王に知られているということは、何か大きなことをやらかしてしまったということだろう。まさか噛み付かれるのだろうか、足も僅かに震えていた。

「リザ・インステイテュート」……ではないか？」

「へ？」

一気に脱力した。何だ、勘違いだったのね。

「あの、恐れながら。リザは私ですわ、陛下」

自分の胸に手を当ててそう言うリザに、王は目を丸くし、心から驚いたような顔をした。

「君が？」

「は、はい。何度かお相手も務めさせていただきましたわ。名前もその際にお伝えしたかと」

記憶になかったらしい。王は少々ごまかすかのように咳払いをした。本当にひどい男。ヴァンパイア以前にね。

「すまない、あー、では君があ月の絵を？」

「ご覧いただけましたの？ 感激ですわ！」

「確かクモの糸で描いた……」

「ええ、花と草を貼って作った」

そこまで聞いて、私はどこかおかしいと思った。クモの糸？ 花？ 草？ ちよつと待って、それって……。

口を開こうとした瞬間、誰かにギツと足を踏まれた。ジエニファ―もルルーもニーナも、みんな冷たい目で私を見ている。

何なの……、一体どういうこと？

「そうだったのか。どうやら私は大きな思い違いをしていたようだ」「いいえ、陛下。構いませんの」

「実はあの絵を最優秀にしようと思ってな。私自らメダルを持って来た」

「まあ！ そんな！？」

リザは口元に手をやって、歓喜したように立ち上がった。王も続いてゆつくりと立ち上がると、上着のポケットからするりと美しいメダルを取り出す。

「おめでとう、リザ。君の感性に私は感服した。これは君のものだ」

周囲から割れんばかりの拍手が巻き起こる。リザはそれを受け取

ると、涙を流しながらメダルを胸に抱きしめた。

そんなリザに、王は彼女にだけ聞こえるよう、耳元に唇を近づけて何か話した。リザの顔がますます嬉しそうにほころぶ。

「では、待っている」

「はい」

「サードクラスの女、すまなかったな」

「……い、いえ」

「ではリザ、今夜」

「Yes, your Majesty」

リザはスカートを軽く掴んで膝を少し折った。

この騒動に、テラスはザワザワとどよめきが収まらない。でも私は、心に穴が空いてしまったかのようにだった。

王の姿が見えなくなると、私ははじかれたようにリザを見る。リザは冷たい眼で私を見つめ、口元には薄い笑みを浮かべていた。

彼女は私の抱いていた教科書を奪い取ると、分厚いそれを私に向かって思い切り投げつける。額に当たって、火のような痛さが走った。

「さあ、この安つい本を恵んであげるから、とつとと帰りな、サードクラスの女！」

「リザ……」

「あなたはここにいないべきじゃないでしょ？ サードクラスの女！」

「ジエニファア……」

「泥臭いおうちに帰りなさい。サードクラスの女」

「ルルー……」

「よかつたら、コーヒーも施してさし上げましょうか？ サードク

ラスの女さん」

「ニーナ……」

頭からコーヒーをかけられ、周囲の人のヒソヒソ声と笑い声がグルグルと渦巻く。

「友達だと……思ってたのに」

裏切られた？ 違う、彼女らはきつと初めから。気づかなかつた私が鈍かつたんだ。カフェのひさしからぶら下がったリザのコウモリが“ケケケケケ”と体を震わせて笑っていた。

私は本を掴んで、急いでそこから立ち去った。後ろから大きな笑い声がする。

悔しくて、悲しくて。私はここへ来てから初めて涙を流した。

s t . ?

S c h o o l A n d A g i r l o f T h i r d

あとがき

ちなみにコーヒーには牛乳が入っていたので、油分でソフィアの髪がつるつるに……はならないか(笑)

コンコン、とりザは大きなこげ茶色の扉をノックした。いつもならいるはずの衛兵がいない。特別待遇であることが見て取れた。しばらくすると、ゆっくり扉が開く。

「リザ、よく来たね」

ザルクの柔らかな笑みは、見るものを一瞬で魅了する。非の打ち所がないほどに均衡の整った顔の、更なる付加価値は、彼が本来冷酷で非道な王であることを忘れさせた。緩やかな手つきで彼女を迎え入れる。

「驚いたよ。君があのかのときの女性だったなんて……」

悪魔の牙が奏でるオーケストラの音色に合わせ、ザルクとりザは静かに踊っていた。

彼の部屋は、巨大な力を持つ一国の王らしく、豪華な装飾が施されている。ムスターという怪虫の糸でできた柔らかな絨毯は、思わずそこで寝入ってしまいそうになるほどに手触りが良く、上から釣り下がる人魚の涙でできた透明のシャンデリアは淡い淡い光を放つ。金のつるで飾られたキャビネットには、ドラゴンの骨格標本が今にも動き出しそうに大きな口を開けて置かれ、その隣には腕の骨のついた真つ黒な天秤や、カラスのように真つ黒な羽のついたぶ厚い禁断の書物が数冊並んでいた。

万華鏡模様の壁紙は闇に薄く星のように浮かび、金色の額の巨大な鏡が掲げられている。その中を青緑色の光が時々抜けてゆくが、

その正体を知るものはない。

ザルクは愛おしそうにリザの唇に自分のそれを何度も柔らかく合わせ、そつと顔を離した。

「あの時、なぜシートで顔を？」

リザは長いまつ毛を伏せる。

「絵を描いているところを、誰にも見られたくありませんでしたの」

「私のことを知らないフリをしてまでか」

「申し訳ございません、陛下」

「詫びなら態度で示せ」

「仰せのままに」

今度はリザの方から唇を合わせた。軽いキスの音がレコードの音の合間を何度も縫い伝わるにつれ、徐々に深みを増していった。

「リザ……っ」

そろそろ、とザルクはリザの細い手を引いて、大きなカーテンつきベッドへゆっくりと押し倒した。体を全て包み込もうとするほどに、マットレスが柔らかい。ザルクがパチンと指をはじくと、音楽は止まり、照明も薄暗くなった。

「魔法が使えるんですの？ 陛下」

「初歩的な魔術だ。並のヴァンパイアならこれぐらい扱える」

「まあ、」謙遜を「

「事実だ」

大人しく横になっっているリザの上にまたがると、キスを落としながらドレスを脱がせていった。服のすれる音と彼女の息遣いが部屋に充滿する。

「リザ、頼みがある」

「っ……はい」

上半身を露にされても、別段恥じらいはない。ザルクとはすでに何度も交わってきた。服を脱ぎながら首筋に埋まってゆくザルクに手を回し、リザは夢心地で聞いていた。

「私の絵を書いて欲しい」

「……陛下、の？」

「ダメか？」

ザルクは手を休めることなく顔を上げ、彼女のサファイアのような双眸を見つめる。リザは少し困ったように眉をひそめると、

「私は、風景画専門ですの」

「なら風景の一部としても良い。あの絵を描く君の目から、私がどのように見えているのか知りたい」

リザは二度、ゆっくりと瞬きをした。

「Yes, your Majesty. 喜んで……」

リザは美しい笑みを浮かべると、ザルクの手によって作られる快樂の波におぼれて行った。

情事が終わると、ザルクは疲れて眠るリザの傍を離れてテラスに出た。欲した女を抱いたはずなのに、“愛し合った”というよりは、どこか肉欲をぶつけただけのような気がしてむなしくなっていた。彼の見つめるその方向にあるのは、サードクラスの女たちが眠っているであろう建物。遠すぎて屋根の先しか見えないが、ザルクは左手に氷の入ったウイスキー、右手にあの時のエンピツを回してじつとそちらを見ていた。

「私に先に名乗らせた、無礼者の君。私に名も告げずに齒向かった、非礼の君。同じだと思っていたが」

王は大きいため息をついて「あー」とエンピツで額をかくと、

「後宮の女などに惑わされてどうする」

一気に酒を飲み干した。

そんなザルクの背中を、リザは髪の間からじつと見つめていた。

s t . ?

The King's room (後書き)

あとがき

そうは思いつつ、やることはやる王であった。

授業の終わりを告げるチャイムになると、私は真っ黒になるまで書き込んだ紙切れを本に挟んだ。エンピツも紙も学校からの支給品自由にいくらでも使えるわけじゃないから、一応節約しながら使っている。

コーヒーをかけられたあの後、眼を真っ赤にして部屋に帰った私をミセスグリーンがすごく心配してくれた。でもこんな惨めなことを言いたくなくて、テラスで転んだんだと嘘をついた。それ以上ミセスグリーンは問いただそうとはしなかった。多分真実じゃないだろうって思ってるだろうけど、私が話すまで待つてくれるつもりなんでしょうと思う。

彼女らとは、あれ以来会ってない。そもそもファーストとサードとの間には、作ろうとしなきゃ接点なんか生まれない。ファーストの棟へは近寄りたくなかったけど、時々顔も知らないファーストの子達がわざわざこっちへ来て、私を指差して笑っていた。

だから最近私はよくある場所に出かける。学校の内部にある図書館。そりゃファーストほどの規模はないけれど、町の図書館よりは大きいんじゃないかな。テスト前になると人がたくさんあつまるところだけど、普段はガラガラで使いたい放題。静かで指をさされることも無いし、人間界じゃ絶対に読めないような本がたくさんあって（例えば地獄の断面図とか、透明人間に出会った時の効果的な対処法とか、象鼻草の生態とか）、次はどんなことが書いてあるんあるうとわくわくしてページをめくる日々を送っていた。

金色のノブを回して、静かに足を踏み入れる。おそらく誰もいな

いだろっけど、ここの蛇男司書さんが怖いから、音を立てないようにしなきゃと少し緊張する。

天井ほどもある本棚がずらりとひしめき合い、古びた背表紙の本がびっちり隙間なく並んでいる。蛇男さんが几帳面に項目ごとに並べてくれているから、すごく探しやすかった。

「えっと、これ返却します」

蛇男さんは紫色の舌をチロチロと出すと、私の顔と本を厳しい目で一瞥し、返却期限日を確認する。待っている間に聞こえる小さな時計の針のと音が、まるで回答を迫られるクイズの挑戦者のようにやけに緊張感をあおって聞こえた。

期限内であると確認が終わると、何も言わずに頷く。それが別の本を借りるのが許されたというサインらしかった。

怖い。怖すぎるよ……、蛇男さん。天井近くの本を何も言わず取ってきてくれる優しい人なだけだね。

足音も極力立てないようにしながら、私は最近夢中になっている魔剣士物の続きを借りようと、図書館の両端にある階段の左側のを上って二階へと足を運んだ。ギイギイと板が軋む。

その物語と言うのは、魔剣士クロードが光の戦士レザーと戦う戦記ものの小説。普通、悪が滅ばされるように物語が進むんだけど、やっぱりこっちはヴァンパイアの国と言うこともあって立場が逆。悪が正義というスタンスで書かれてあるから、それが目新しく面白かった。その主人公の魔剣士がスマートですごくカッコイイしね。

「あれ……」

次の七巻を借りようとしたけれど、私の借りていた六巻とそれだけがちょうどぽっかり穴が空いたように存在しない。じゃあ飛ばして八巻というわけにも行かなかったから、折角来たし別の本でも見ようと棚をかえようとした。

その時、

「んんっ……」

後ろからガバツと大きな手で口をふさがれ、身動きが取れなくなっってしまった。何これ……！ 誰なの？

耳元に相手の唇が近づいてくるのを感じる。

「お探し物はこれですか？ カワイイお嬢さん」

ささやくような男性の声とともに、目の下から『魔剣士の騎道』七巻がぬつと現れる。あ、あつたんだ！ じゃなくて、ちよつと待って……“男性”の声？

後宮は王以外原則男子禁制。ただ蛇男さんのように人間の女性との間に子供ができないような場合はOKらしく、人間界のように後宮で働いている人たちが全員女性、というわけではなかった。それでも珍しいんだけど。

王の声じゃない。だとしたら、司書2号さんかしら。だったらもつと普通に教えてほしい！

口を塞がれていた手がどけられると、私は急いで振り返った。そして目を見開いて息を呑む。

「ごめんね、オレが先に取っちゃった」

にっこりと微笑むその男性に、私は二、三度目をしばたかせた。

想像していた姿とはまるで違う。てつきり蛇男さんのような人だ
と思っていた

彼は金色の髪にエメラルドのような瞳、柔らかそうな白い肌を持
ったものすごい美青年だった。まるで天使のようにも見えるけれど、
につこり笑う口元からは尖った犬歯がお目見えする。

(ヴァ、ヴァンパイア……?)

男のヴァンパイアは恐らく完全にアウトのはず。それがなぜこの
青年はサードクラスのこんなところに入り込んでいるの？

「あ……あの、えっと」

「ソフィア・クローズちゃん……かな？」

どうして私の名前を？

「あ、やっぱり当たった？ オレって天才かも。……って、一巻か
らの貸し出しカード見たただけけど」

そう言って小さく舌を出す。

「あの、あなたは……？」

そう尋ねつつも、どこかで見たことがあるような気がしていた。
顔立ちが誰かに似ているような。

「オレはレオナルド・ヴィン・モルターゼフ (Leonard V
in Morterzefz)。レオって呼んでね」

“呼んでね”じゃなくって！

「あの、姓とミドルネームが同じということとはつまり……」
「うん。王はオレの兄。兄弟いるって知らなかったの？」

知らなかった。あの人、弟さんがいたんだ。それにしても随分雰
囲気が違う。明るくて人懐っこいのは、次男坊さんの特徴なんだろ
うか。後宮にも入り込んでくるし、何というか、すごくフリーダム。

「あ、あの、ここは陛下以外立ち入り禁止なんじゃないんですか？」

百も承知で来たんだろうけど、一応の警告はしておかないと。

「いいのいいの。オレは兄上のお許しがあるから」

「お、お許し？」

「そ。ねえ……ところで君さあ」

急に熱を帯びたような表情をする弟さんに、私は思わずあとずさ
りした。ドンと冷たい壁に背中が当たる。弟さんは壁に両手をつき、
私をその間に閉じ込める。彼の影に全身包まれてしまった気分だっ
た。何、どういうこと？

光の溶け込んだ瞳でじつと見下ろされる。ヴァンパイアは誰も彼
も、表現に困るほど飛びぬけて美しい容姿をしている。そんな人に
射るように見つめられて、私も徐々に顔が熱くなって行った。

艶やかな唇がゆっくりと開かれる。

「兄上とはもうシた？」

「！……し、しし？！」

ここはもう少しオブラートに包んで……じゃなくて、初対面での
その質問?! ジェニファアたちとの会話を思い出す。ここは太陽

が出ずにつつと夜だから、いつもこういうノリなの？

「ねえ、もう何発かやられちゃったの？ それでなくとも途中までは……とかさあ」

顔を近づけられ、慌ててそむけた。だが不意にあごをつかまれ、ぐいっと上を向かされる。

「どうなわけ？ ソ・フィ・ア・ちゃん」

ふつと優しく息を吹きかけられて、思わず目をつむった。男性物の香水のいい香りに翻弄される。だめだめ、しっかりしないと！ど、どうといわれても何にもないけど、それをなぜこの人に報告する必要があるの？

「……」

「ふーん、教えてくれないんなら、君の体に直接教えてもらおうつと」

弟さんはスカートの上を一気にたくし上げると、下着に手をかけてぐいと下へ引っ張った。

「ええ！？ ヤッ……ちよ！」

何するの、この人！ 私は必死でそれを押さえつけ、慌てて、

「へ、陛下は私のことなど気にも留めておられないようですから全くそうだったことは心配すらございません！」と真っ赤になりながらも、魔界ラジオDJも驚きの速さで言い切った。

全く、仮にも王族のくせに一体どういう教育を受けてきたのかし

ら……っ！

弟さんはそれに満足したらしく、スカートから手を出してにっこりと子供のように微笑んだ。

「良かった。実はね、兄上が正室を選んだ後、好きな女を一人選んで妻に迎え入れて良いって言われてるんだ。だからオレ、君に決めた」

「は、はい？」

「冗談じゃないよ、本気。なんならレッドドラゴンの血で誓い合おうか？」

「そ、それでしたらファーストクラスの方々からどうぞ。私のような貧乏臭い女なんて」

それに彼は拗ねたように口を尖らせる。

「やだよ。あいつら全員兄上のお手つきだろ？ オレはオレだけの女が欲しいんだ、君みたいな女がね。……愛してるよ、ソフィア」

ギョツと抱きしめられ、頬にキスを落とされた。嘘でしょ、何これ……。何してるの？
図書館で。

「あ、あの……そもそも陛下はすでに妃をお決めに？」

腕の中から弟さんを見上げた。背も高くて本当にきれいな顔立ち。

「知らないの？ 昨日なんとかっていう女を王の部屋に呼んだらしいよ」

なんとかでは分からない。あ、でも、もしかして。

「リザ・インステイテュート……さん？」

「ああー、そんな感じだったかなあ。普通は後宮に王が足を運ぶものだろ？ それに向こうを呼び寄せるんだから、正室はその女で決まりでしょ。ソフィア、オレたちも早く結婚してじゃんっじゃん、子供作るうねえ。え？ 子供を作る行為が好きなんだろっつて？ あははは、図星、図星！ でもオレは優しいから結婚まで待つてあげるね！」

この人は一体、一人で何を言ってるの！？ 何この明るいヴァンパイア……！

でも急に鼻を引くつかせると、腕の力をぬいた。

「コーヒーでもこぼしたの？」

あつ、と思った。これはあの時ニーナにかけられたもの。替えのドレスが無いから一応洗ったけど、まだ匂いは少し残ってる。

「おでこにもケガしてるし」

リザに投げられた本が当たった時のだ。すると弟さんはひとさし指と中指で、空中に何かを描き始めた。それを追いかけるようにスーッと金色の線が現れ、小さな魔法陣が出来上がる。

何？ 何かの魔法……？ 目をしばたかせていると、彼はその魔法陣を指でそつと押した。魔法陣と共にふんわりと暖かい風が私を吹きぬけ、髪を揺らして優しく包み込んだ。

「よし、これで治ったよ」

”治った”？ 額に触れてみると、確かに痛くない。治癒系魔法の一種なのかしら、スゴい。

「支援してくれる貴族もいないみたいだし、困ったらオレに何でも相談して！でもその代わりキスを」
「ええ！？」

その時、弟さんの後ろで咳払いが聞こえた。

「公爵殿……」

司書の蛇男さんだった。若き公爵はしまつた^{デューク}とばかりに頭をかく。

「ごめんごめん。じゃあね、オレのソフィア。兄上に襲われそうになつたら、心臓に杭を打ち込んでやれえ！」

「な、何を言っておられるんです！」

仮にも弟なのに……！！

そうやって公爵は、魔剣士の騎道七巻を私の手にねじ込みながら、こめかみに随分と長いキスを落として帰っていった。私は顔を赤くしながら、気まずい空気の中、魔剣士の騎道七巻を手にしばらく蛇男さんと向かい合っていた。

ザルクの広い執務室で、レオナルドは巨大なソファーに我が物顔で腰を下ろし、ローテーブルに足を掛けていた。書類にサインをするザルクを顔だけで振り返る。

「ねえ、兄上。オレ、好きな女ができた」

「ほう、そうか」

ザルクは手を休まずにそれを聞く。仕事のとぎだけかけるメガネの向こうで、漆黒の瞳がせわしなく書類の文字を追いかけていた。

「もらっても良いよね、約束だよね？」

「好きにしる。よほど惚れこんでいるようだが、どんな女なんだ？」

「ファーストなら分かるかもしれない」

「残念ながら、兄上の手垢がついてない子だよ」

「手垢とは言ってくれる。名は？」

レオナルドはよっこらせと立ち上がると、立派な悪魔型のドアノブに手をかけながらニコリと笑う。

「サードクラスの女……っってことにしておこうかな」

「サード……レオそ　っ」

ザルクは僅かに瞳を揺らしてメガネを外すが、レオナルドはすでに出て行った後だった。

s t . ?

The Duke (後書き)

あとがき

レオは自由な男です。

うちのヴァンパイアは基本的に変態なのであしからず。

「えっと、今日は王室の歴史に、危険生物学、あとは……」

今日のタイムテーブルを確かめつつ、持ち物を確認する。今日は朝食に大好きなフルーツが出たからちよつと嬉しい。鼻歌を歌いながら用意を進めていると、部屋の外が騒がしいことに気づいた。何？ また巨大昆虫が出たのかしら。

ここは林が近かったから、よく奇天烈な虫が入ってくるがあった。黒猫がじゃれてそれを追い掛け回しては、みんなキヤーキヤー言っただけで逃げ回る。

けどそれっぽくもないか。

叫びと言うよりは、どこか興奮気味に囁きあっているような感じ。誰か珍しいお客さんでも来たのかしらと思っていると、部屋の前で足音が止まった。

「おはよう、マイスイートハニーベビーシュガー！」

「……ッ！」

う、嘘、この声……。レオナルド公爵！？

大きな学校のようにただっ広い上、ごちゃごちゃとしているサードクラスの居住棟。その中からどうして私の部屋が分かったんだろう。

でもすぐに、ああ、あの後宮管理人さんに聞いたのねと思った。

後宮には住居者リストのようなものがない（手紙等は一括して管理人さんの元へ届く）代わりに、後宮管理人さん（初めに私をこの部屋へ押し込んでドレスを投げつけた人）が、何と数百人もいる後宮の女性全員が、どの棟のどの部屋に住んでいるのかを正確に把握し

ていた。

「ねえ、起きてるんでしょ？ オレのソフィア！ マイスweet
ハニーベビーシュガーソフィアー！」

こつ恥ずかしいことを言いながら、扉をドンドンと容赦なく叩きつける。サードクラスの後宮に突然の男性の訪問、それも美男公爵様の登場に、嫌でも私の部屋の周囲がどよめきたっていくのが分かった。何で？ 何でこんなトコに朝っぱらから？ いくらんでも自由すぎる。彼はフリーダム王国の王子に違いないわ……！

「開けてよ、ねえ！ ソフィアちゃん！」

でもこのまま放っておくわけにも行かず、渋々扉をゆっくり開けると、隙間からグイと手を差し込んで無理やり開け、そそくさと体をねじ込んで来た。左手には大きな箱を抱えている。

「おはよう、未来のオレの妻！」

「お、おはようございます」

おんぼろな部屋と金髪美公爵様。全く持って不釣り合いな光景だった。

「あの、ご用件は……」

彼はアハハと笑いながら下の方を指差す。何？

「いやあ、朝起きたら太陽の代わりに、オレの三日月」が昇っててさあ。ソフィアちゃんに慰め」

「ご用件はなんですかあつ！」

何て物で何てモノを例えるの、この人は！ このさわやかな朝からいきなり下ネタなんて！

公爵はニタニタ笑うと、ベッドへ水玉模様の四角い箱を置いた。きれいにラッピングが施されてある。

「何ですか？」

「大人のオモ」

「なあんですかあっ？」

「ははは、ウブで可愛いなあ」

公爵は楽しそうに笑ってるけど、私は朝からどつと疲れる。彼が「開けてみて」とリボンの端を渡す。笑顔が怖いけど、大丈夫だろうとそれをスルリ引いて解いた。

「わあ……」

中には金粉をちりばめたような美しいドレスが入っていた。シルクのようなとろける手触りに、私にも高級品であることが分かる。

「あの、これ……」

「替えのドレスが無いって言ってたから、オレからプレゼントしようと思つて。今から学校に来て行ってくれてもいいよ」

う、嬉しいけど……これ着て学校に行けだなんて。明らかに浮きまくること間違いなし！

地味っぽい洋服が多い中、一人お姫様のような格好で授業を受ける自分を想像して戸惑った。

「どう？ 受け取ってくれるよね？ ちなみに、いらなんなら捨

てるから」

「え、は、はい。もちろんです、“公爵様”」

それは彼のお気に召さなかったらしく、ムツとして口を尖らせると、私の体をいきなりベッドへ押し倒した。

「こ、公爵さ」

「レオって呼んでっていったよね？ オレの言うことが聞けないのかな？」

またスカートの中へ手を入れて、太ももをスーツと撫でてくる。

ちよつと、ちよつと……！ ヴァンパイアとはいえ、王族に“レオって呼んで”なんて言われて、普通呼べるもの？ 呼べませんよ！ まあ、彼は呼べるんだろうけど。

で、でもこの状況はかなりマズイ……。ああ今、ミセスグリーンがいれば！

「ほら、早く」

彼の手がかなり際どい所までできていたし、据わった目が怖い。し、仕方ない。

「れ、レオ……様」

いくらなんでも呼び捨てにはできない。これが精一杯なの、お願い、分かって！

おそろおそろ見上げた彼は、うーんと少し考え、

「なんかよそよそしいけど、ま、それでいっか。結婚前だしね」

良かった、ありがとう神様。ヴァンパイアの国にいるのか知らないけど。

「そっだ、今夜来るでしょう?」

いきなりそう言われても、ピンと来ない。

「“来る”とは?」

「オレの部屋……と言いたいところだけど、パーティーだよ。ほら後宮を支援してる貴族らとの」

「わ、私も行かなければならないのですか?」

「そっだよ。君の受け取ってしまったそれは、そのためのドレスなんだから。底に招待状も入ってる。じゃ、授業が終わったあとで迎えに行くよ」

「は、はい……」

公爵が出て行ったあと急いでドレスをベッドの上に出すと、たしかにその下に黒い封筒が入っていた。このドレスは初めから普段用じゃなかったんだ。やけにきらびやかだと思った。それにしても

恐るべし、フリーダム王子（色々と）。

s t . ?

The Gift (後書き)

あとかき

おバカに見えて、
実は策士……いや、ただの工口公爵か。下ネタ
失礼！

s t . ?

A n o t h e r f a c e

「はあ……」

私はため息をつきながら、ドレスにかけられた砂を払った。最近ファーストクラスに影響された、サードクラスの子達も私を眼の敵にするようになった。サードはサードで力の強い女性がいて、どうやら彼女が指示してるみたい。

……人間界に帰りたいああい！

どうしてこんなことに？ 目立たないように過ごしてきたじゃない！

薄暗い廊下を歩きながらも、ヒソヒソ声と奇異なものを見る視線を感じる。私がそつちに目をやると、みんな魔女にでも睨まれたように慌てて扉を閉めた。

「あれ……」

部屋の扉が開いている。一応鍵をかけて出たはずなのにどうして。まあでも別に取られて困るようなものなんて……

ド、ドレス！

慌てて部屋の中へ駆け込んだ。急いでベッドの下から箱を出して空ける。

「よかった。無事だわ」

これ以外に盗られて困るようなものなんてない。安心してベッドに腰掛けて、私はすぐに弾かれたように立ち上がった。机の引き出

しが空いていて、紙が散乱している。

「無い……全部」

私が今まで描いてきた絵。それが全て無くなっていた。もしかして

そう思った時、何人が私の部屋を覗きこんでいた。サードリーダーの子分の子たち。クスクス私を見て笑っていた。

ここへ来てからずっと描きためてきた、その時その時の思いが詰まった絵。私はどこか、心の一部を盗まれたような気がした。

「どうしてこんなことをするの！」

「あら、私たちが何かした証拠でもあるの？」

「疑うんなら私たちの部屋を探すなり、素っ裸にするなりすれば？」

アハハと大声で笑う。

「だってあなたたちしか」

その時、扉からバサバサとコウモリが顔に襲い掛かってきた。

「きゃ」

コウモリはケケケケと笑いながら、部屋の窓から滑るように出て行く。あのコウモリって。そう思った時には、もう誰もいなかった。ただ廊下に何人もの笑い声が響いている。窓の外を見ながら、大きくため息をついた。

コンコン、と軽くドアをノックする音に顔を上げて振り返る。

「公爵……じゃなくてレオ様！」

彼はすでに部屋の中にいて、気づかない私の気を引くために腰に手を当て、内側からノックしていた。

「どうかした？」

「あ、いえ……」

「そう？　なんか変だよ、何かあったらオレに言って」

「大丈夫です！　ちよつと授業で肩が凝っちゃって」

私は床に散らばった教科書を拾い上げ、机の奥に並べた。

「今日は何の授業があったの？」

彼は話を変えようとしてくれたんだろう。天使のような美しさで微笑むと、さらさらとした髪を払って私を後ろから抱きしめた。

「危険生物学とか、歴史とか」

「歴史って王族の？」

オレも年代やら事件やら手柄やらをみっちり教え込まれたなあと、嫌なことを思い出したように頭をふった。

「第十一代目の王のところまで勉強しました」

「じゃあ次は兄上のところか」

「はい」

それにレオ様は押し黙る。見上げた顔はどこか寂しそうだった。

「どうされたんです？」

「いや、もしかしたら兄上のが嫌いになるかもなあって思って」

「なぜ？」

レオ様はきれいな顔でため息をつく（そのため息も春風みたい）

「まあクラスでどの程度教えられるか分からないけど、いずれは知ることになるだろうから言っておくよ。オレの兄上、ザルク・ヴィン・モルターゼフはヴァンパイア王国始まって以来最も優秀な王でかつ……冷酷な王だ」

冷酷……？ あの人が？ 少なくとも会った感じではそんな風には思わなかった。

「誤解しないで。普段はすごく穏やかだよ、優しいし。でも兄上は裏切りや、誰かを傷つける嘘を心から憎む。以前つと言ってても百年以上前だけど、敵対している王国の密偵がいるっていう情報が入ったんだ。調査で三人までは絞れたんだけど、皆当然無罪を主張。そこから中々口を割らなくてね。結局どうしたと思う？」

分からない。と言うより、知るのが怖かった。

「各々の妻や子を連れてこさせて、目の前で拷問にかけた。それも君には言えないほどの残酷な方法でね……」

そんな

「ふ、二人は……無実なんでしょう？」

「ああ、でもそんなことは兄上には問題じゃなかった。結局犯人は分かっただけど、無実だった一人は舌を噛み切って自害、一人は精神が崩壊して廃人になった。拷問を受けたものたちも、全員苦しみぬ

いて狂うように死んでいったしね」

思わず耳を塞ぎたくなるような話。あの人が直接手を下したわけではないのだからけど、それを指示したのは紛れも無い事実。

怖い

「“怖い”」

「え？」

「そんな顔してるなと思って」

グツと私の顔を覗き込む。

「す、すみません……」

「いや。身内の弁護だって、笑ってくれたって構わない。でもオレは、それが兄上の狙いなんだと思う。事実それ以来、どの国もオレたちに密偵を送ろうとしないからね。確実に暴くために、手段を選ばない非道の王だと向こうも思ったろうと思う」

公爵は私の髪に顔を埋めた。

「拷問を受けて死んだもの達は、きっと戦で死んだようなものなんだ。国を守るために、命を捧げた。……いや、オレが何を言っても説得力無いね。ソフィーの目で兄上を見て、ソフィーの頭で判断して」

柔らかく笑うレオ様は、王を心から尊敬して慕っているんだろうと思った。言葉の端々から、その表情から、優しい思いが伝わってくる。

「ところでさ、そんな兄上を持つオレはどんな男だと思う？」

「ど、どんなつて……」

まさかフリーダム王子だとは言えない。

「君を一途に想う男だよ」

そう言つて額にキスされた。全く、この人には敵わない……。

「ん……っ、陛下……」

ザルクとリザは、彼女の部屋で熱い口付けを交わしていた。ベッドの周囲には脱ぎ散らかされた衣服が散乱している。

ザルクは大きく一息つくくと、腕にリザを抱いてヘッドボードにもたれかかった。そしてサイドテーブルに置かれてあった絵を手にする。

「これがあの時の月の絵か。私たちが最初に出会った時の」

「はい。他にもたくさん書き溜めたものがアトリエにありますの。いつでもご覧にいらして」

「そうだな、ぜひそうさせてもらおう。……ところで私の絵は完成しそつか？」

肩口に頬をよせながら、リザは首を振った。

「私、やるなら完璧に物事をこなしたいんですの。ですからもう少しお時間をいただければ」

「急ぎではない。じっくり取り組んでくれ」

「はい。陛下に頂いたアトリエを有効に役立てますわ。……それよ
り」

リザはゆっくりとザルクの上にまたがるように体重を乗せてゆく。
首に手を回してジツと見上げた。

「陛下は、私との未来をどのようにご覧になっておられるのです？」

「リザ……もちろん明るいものにしたいと思っている」

リザの顔がパアツと輝いた。

「嬉しいですわ、陛下！ やっとプロポーズのお言葉を頂けたのね
！」

そう言ってザルクに口づけた。

プロポーズ。聞きようによってはそうなのだろうが、ザルクはそ
んなつもりではなかった。唇に吸い付く彼女を引き離すと、

「ま、待て。君はあくまでも最終候補の一人だ」

それにリザは少々顔色を変えた。

「他に誰をお慕いに？ 私以外を陛下のお部屋へ呼んだとは聞いて
おりませんわ」

「まだ彼女ときちんと話をしたことがないからな」

「陛下ともあるうお方が何をおためらいに？ 後宮は全て、あなた
が自由にしても良い女たちですわ」

「君の言つとおりだ。だが自分でも何を恐れているのか分からない」
「陛下、よもや私の心を弄んでおられるのですか」

それにザルクは形のよい眉をひそめた。

「まさか。君の絵に君の心を見、そして揺さぶられたのは真実だ」

ザルクはリザの髪をそつと撫でる。いつもは涼しげなその眼に、紛れもなく熱がこもっていた。それにリザはうつとりとする。彼女は一目見たときから彼に恋をしていた。その時はまだサードクラスだったが、この男のためにあらゆる手段を使ってここまで来た。

その思いが叶い、これほどまでに見目麗しい男が自分を想って胸を熱くしているのだ。リザはザルクに対し、ますます愛おしさがこみ上げてきた。

「陛下……、御心をお疑いするような真似をいたしたこと、心より反省いたしますわ。申し訳ございません」

「リザ、この間も言っただろう。詫びなら態度で示せと。幸いパーティーまではまだ時間がある」

「はい。仰せの通りに」

リザの熱い口づけを合図に、ザルクは再び彼女をシーツの海へ押し倒した。

そんなザルクの広い背を抱きながら、リザは冷たい目でサードクラスの棟がある方向を見つめていた。

s t . ?

A n o t h e r f a c e (後 書 き)

あとがき

王&リザと、ソフィー&レオの進行具合の差……。

まあリザは色々やらかすでしょう。

「わあ、すごい……」

ここはちょうど後宮と城の境目に建っている来賓ホール。ファーストクラスの棟と繋がっているけど、厳重な警備が敷かれていて普段は絶対に立ち入ることができない。たぶんお城の側もそんな風になっけていて厳しく出入りが制限されていると思う。

ダンスホールは高い高い天井に巨大シャンデリアがぶら下がり、ただっ広い大理石の床が広がっている。ときどきバサバサとコウモリが飛び交ったり、給仕係のゴーストが床や壁から出てきたり、半漁人シエフが炎を上げていたり、ワインを運んでいたミイラさんが皆に包帯を踏まれて慌てていたり、人間界のパーティーとは少々様相が異なる。

でも食べ物に関しては全然問題ない。モンスターたちのパーティーだから、てつきり目玉スープやら怪物の丸焼きやら悪魔の腕のソーテーなんかが出てくるのかしらなんて思ったけど、いたって見た目は普通なものばかりだった。……多分本当に普通だと思う……。骨付きチキンとか、チーズを乗せたお洒落なクラッカーとか、甘い甘いヌガーとか、宝石みたいなミニケーキとか。

まさか今さら“それ風の別のもの”、何て言わないわよね……？

「こつというのは初めて？」

エスコートしてくれているレオ様が、金の髪を揺らして微笑んだ。今日はいつもより華やかな衣装に身を包んでいる。雰囲気やパーティー用の服もあいまってか、王室の高貴な香り漂う、いつも以上に素敵な男性になっていた。

もちろんヴァンパイアは基本的に美形揃いだから、若い人からファンディーなオジサマまで、まるで映画俳優やアイドルたちが一堂に会したよう。でも、そんな中でさえこの公爵は引き立っていた。

だからたくさん女性の彼に見とれて、ワイングラスやらお皿やらをガチャガチャ落とし、掃除係の毛玉鼠が足元を縫うようにせわしなく動いていた。時々くるぶしにぶつかって、くすぐりたい。

「は、はい。サードクラスは交流会があまりありませんし、あつても行きませんから」

「行かなくていいよ。オレが君を支援するから。一生ね……」

レオ様の何度目か分からないプロポーズ（頬への口づけ付き）。その度に心臓がうるさいほどに脈打つけど、恋心を抱いているわけじゃない。こんなにステキな男性なのにね。

それは彼がヴァンパイアだからなのか、それとも別の理由があるのかは、私にはよく分からなかった。これから彼を愛することになるのか、ずっと友達感覚なのかどうかも。

「あ、兄上」

王にヒラヒラ手を振る。さすがフリーダム王子。自分の兄とはいえ、一国の王相手にもものすごく軽い。

「レオ……とサードクラスの女」

大勢の人に囲まれていた王が、シャンパンを片手に近寄ってきた。その途中も度々呼び止められていたが、適当にかわす。

私をじっと見つめる王に、軽く挨拶した。王の方も今日は、いつもとは違う風格を滲ませていた。こうしてみると、王とレオ様は別

格だと思った。これだけの人がいるというのに、決して人に埋もれることなどない。ざっと会場を見渡せばどこにいようとすぐに分かる。

背が高いからとかそういうことではなかった。独特の王族オーラを放ち、圧倒的な存在感を示していた。現に会場の多くの視線を彼らは集めている。

そんな二人が今わたしのすぐ傍に並んでいるのだから、その緊張感といったらない。まるでイエス様やマリア様を間近で見ているみたい。まあ、ヴァンパイアを神に例えると双方に怒られるだろうけど。

「あれ、兄上一人か？」

「ああ、リザなら今支援している貴族のところへ挨拶に」

“リザ”の名前に胸がグツと痛む。

「あれ、大丈夫？ 気分が悪くなったの？」

「い、いえ。平気です」

レオ様がそつと心配そうに私の頬を撫でてくれた。ヴァンパイアとは思えないほどに優しい。そう、ヴァンパイアだから穢れてるだのなんだの思うのは、きつと間違ってるんだらう。少なくとも、彼は人間よりも純粹で穏やかなんだから。

ただ下ネタが大好きなのは、玉にキズだけど。

「本当に？ よかったら休む？ オレの部屋で」

「え？」

「オッホン！」

王は急にわざとらしい咳払いをした。たぶん“王である自分を放

「つておくな」ってことなんだろう。

「兄上、紹介するよ。こっちは」

王に私を紹介しようとしたレオ様を手で止める。

「ま、待てレオ」

「何を？」

「いや、直接聞こうかと」

直接私の名前を聞きたい？ どうして。

「いいよ、面倒だから。こっちはソ」

「ゴホンッ！ ゴホゴホ！」

王は思い切り大きな咳をして、周囲の人たちの視線を集めていた。どうしたのかしら。

「兄上、風邪か？ ヴァンパイアなのに」

「いや、ちよつとワインが……」

「それシャンパンだろう？ いつ飲んだのが引っかかったんだよ。腹の中で熟成中？」

「うるさい、言い間違いだ！」

「レオ様……っ」

あまり間違いを突っ込むのは哀れだと思った。ワインとシャンパンなんて、どっちだっていいのに。

「“レオ様” あ？」

王は怪訝な顔で私を見た。や、やっぱり“公爵様”とかで呼ばなきゃダメだったのかな……。公式な場でいきなり失態だ。

王は私がレオ様と組んでいた手を、無理やり引き剥がすように握手した。

「私はザルクだ」

繋いだ手をブンブンと上下させる。

「？ 存じ上げております、陛下、」

突然の自己紹介に私はそう返答した。

「……」

「あ、あの……？」

なぜか握手したままじいっと恨めしそうに私を見る王に、首をか上げた。な、何？ 何だろう……。はつきり言ってくれば良いのに。

やがて王は諦めたようにため息をついて手を離れた。

「ま、まあいい……君の名を聞いても？ もうサードクラスの女なんて呼ばれたくはないだろう、どうなんだ、ん？」

どこか私の機嫌をうかがうような、怒りや焦りを隠したような表情に見えた。そんなに急いで私の名前を知って、何をするつもりなのかしら。まあ、この人のことだからどうせすぐ忘れるだろうし、いいか。

「私は」

「おお、陛下！ このたびはお招き頂きありがとうございます！」

「チツ……これはこれはノランディー子爵」

今、舌うちした？

無理やり作ったような笑顔で、陛下はでっぴりとしたオジサマヴアンパイアと挨拶を交わす。

「行こう。邪魔してもなんだし」

「はい」

「あ、ちよ……」

王は何か言いかけたみたいだけど、私はレオ様の手に引かれて人ごみに紛れ込んだ。

「ふう……」

外のベンチに座って息を吐いた。白い満月と星が浮かんでいる。遠くのにぎやかな話し声と音楽を聴きながら、やっぱりこういうのは慣れないなと思った。お世辞の飛び交う会話、きついコルセット、歩きづらいヒール。これをくれたレオ様に文句があるわけじゃないけれど、きつと私にはこんな場所は向いていないんだろうな。何といても私は、一般庶民なんだから。

レオ様は飲み物を取ってきてあげると言い残して、会場へ戻った。ここへ連れてきてくれたのも彼。苦しそうにしている私に気づいてくれたんだろうなと思うと、感謝の気持ちで一杯になる。

庭の冷涼な風に体の熱を冷まし、そつと目を閉じた。時々遠くで狼の遠吠えや、ガイコツさんの歩く骨の音が聞こえる。ここが人間界じゃないというのは、とつても不思議な感覚だった。

人間界……か。

昔のことを思い出していると、涙が溢れそうになって眼を開いた。するといつのまにか、湖上にある休憩スペースに誰かが佇んでいるのが見えた。じつと湖を見つめるその背中が、肩から上が影になっていて、誰かは分からない。

でも私はそのまっすぐな後姿に心を奪われた。

広く、大きく、獅子のように力強く。刃のような凜とした情緒、何者をもその前にひざまずかせる威圧感。英雄とは、カリスマとは、このような人のためにある言葉だろうと思った。

そこからは微塵の弱さも不安も感じることができない。この背中の後ろにいるだけで、彼がその両腕を広げるだけで、すべての風雨から守られるような気がした。

「サードクラスの人？」

「陛下……」

私は花の蜜に吸い寄せられる蝶のように、気づかぬうちにフラフラとそちらへ歩いていった。

私の気配を感じて振り返った背中が、この国の王のものだった。

ザルク・ヴィン・モルターゼフ。

ヴァンパイア王国始まって以来最も優秀な王であり、最も冷酷な王。そんな王が月明かりを反射する湖面を負い、私の姿に穏やかな笑みを浮かべている。夢想的で、どこかおとぎ話の中のような笑み。

「どうかしたのか？」

「いえ、ただ……」

言葉を切った私を、王は不思議そうに見つめる。

「陛下の背は……特別なんです」

「？ 特別、とは？」

「なんでもありません」

私は誤魔化すように笑って首を振った。こんな恥ずかしいこと言えるはず無いもの。王は笑みを忘れ、じっと私を眺めているようだった。

「陛下？」

「……レオは？」

「飲み物を取りに行かれました」

「そうか。ではチャンス到来というわけだな」

王は再び頬を緩めてゆつくりと私の方へ近づくと、緩慢な動作で掌を差し伸べた。私が震えながら手を添えると、王は手の甲へ柔らかな口づけを落とす。王が今さらなぜそんなことをしたのか。そしてヴァンパイアに触れられるのをあれだけ嫌だと思っていたのに、私はなぜそれに心を震わせているのか。

全てはこの頭上に浮かぶ満月のせい。きっと、そう。

だって、それをリザが影から憎しみを込めて見つめていたなんて、全く気づかなかったんだもの。

s t . ?

H i s B a c k (後書き)

あとがき

一番早く出会った王が未だソフィアの名前を知らないという……。
カワイソ。

次回『H e r n a m e i s …』、王は予想外の場所で彼女
の名を知ることになる。

s t . . . ? ?

H e r n a m e i s . . .

「ソフィア・クローズ。お前に右手首切断、及び死刑を申し渡す」

王直々の判決に、周囲は静まり返った。何て冷たい眼。これがきつとザルク・ヴィン・モルターゼフのもう一つの顔なんだろう。

法廷は多くの貴族と判定員で埋め尽くされ、一気にざわめきたつた。私の手には手枷がはめられ、鉄の柵に囲まれた証言台に立ちながらその重さと冷たさを感じていた。

王の傍に控えるリザが、右手に巻いた包帯をわざとらしく擦りながら私を見つめる。口にはあの美しい笑みを湛えて。

ここに味方なんていない。この真実なんて伝わらない。

でもこんなところでダラダラと一生を送るなら、いつそのこと

『やはりあの時、もっと厳罰に処すべきだったな。まさかワーム以下の女がいたとは……』

審判を下された後のその言葉が、頭の中をグルグルと回る。あの人の残酷なほどにつめたい瞳が心をえぐった。

何度も違うと言った。何度も事実を話した。

でも彼は 冷たい瞳で見下ろすだけ。

リザの、ジェニファアの、ルルーの、ニーナの、作られたおとぎ話を信じるだけ。

だったらもういいや。何を言っても信じてもらえないのなら、もういいよ。

私は死刑を待つ檻の中で、どこか他人事のように空を見上げていた。

「ソフィア」

それは何日か前のことだった。

いつものように図書館から帰る途中、私は後ろからその声をかけられた。聞き覚えのある声。これは

「リザ……」

だけじゃない。ジェニファーもルルーもニーナもいた。皆沈痛な面持ちで立っている。その日はやけに月が大きくて、影ができるほどに明るかった。

「な、何……」

本を握りしめて、思わず後ずさった。今度は一体何をされるんだろうって、怖かった。私が彼女らに何かされる意味が分からない。私は王にあの絵のことを言うつもりなんてない。だから放っておいて欲しかった。

「あの、逃げないで！ 私たちはただ、謝りたかっただけだから」

“謝りたい”？ あんなことしておいて、いまさら一体どういう風の吹き回しかしら。

「疑ってるって顔してるわね。でも嘘なんてついてない。今から陛下の所へ行って絵のことについて全部話すつもり」

王のところへ……？

リザは申し訳無さそうにお腹の前で手をそろえ、伏せ目がちに、

「私ね、あなたが羨ましかったの。美人で、優しくて、穏やかで、絵の才能にも恵まれていて……。でも気づいたの。陛下のお部屋に呼ばれて、あの方の正室になるだろうって思った時、こんな卑怯な嘘をついたままじゃダメだって。だからねソフィー、……本当にごめんなさい」

「ごめんなさい」

「ごめんね」

「悪かったわ」

そう言ってみんな、私に頭を下げた。

「みんな……」

素直に謝る彼女らに、私は責める言葉が浮かばなかった。信じて良いのか分からなかった。”いいよ”なんて言った後で、”嘘に決まってるじゃない、バカね！”なんて笑われるかもしれないと疑心暗鬼になっていた。

でもそんな様子も見られなかった。私は神様じゃないから“なかったことにして許す”なんてことはできないけど、悪魔でもないから謝っている彼女らをそれ以上に批判する気にもなれなかった。

穏やかな時間が流れ、大きな怪鳥が上空を過ぎ去ったあと、

「……分かった」

謝罪を信じて受け入れよう。そう思って、そう言った。

「ありがとう……っ」

リザは涙を浮かべてにつこりと笑う。
でもそんなリザに、ジェニファーは怒ったように胸倉を掴んだ。

「ありがとう」じゃないでしょう!? 元はといえば、アンタが卑怯な手を使ったでしょうが!」

そう言っただけで思い切りリザの頬を引っぱたいた。リザはどさりと地面に倒れこむ。キレイなドレスがドロだらけになった。

「ちょ……ジェニファー!」

突然のことに驚く私をよそに、ニーナも「そうよ!」と追い討ちをかけるようにドロを放り投げる。

「や……やめてッ……!」

リザは必死に抵抗していたけど、足も膝もすりむいていたし、きれいな顔は泥まみれになっていた。

「ちょっと、みんな、どうしたの? やめてよこんなこと!」

一体何が始まったって言うの?

「ソフィーは優しすぎるのよ! こんな女! 悪魔にでも魂を食われればいいんだわ!」

「ジェニファーッ!」

蹴りつけようとするジェニファーの腰に抱きつき、私は懸命に止めた。彼女のしたことは間違ってるけど、これだってそう。無抵抗

の彼女を殴るなんて。

「ねえ……皆ちよつとどいて」

静かな声にそちらをみると、ルルーが何やら魔方陣を書いた紙を掲げていた。彼女が得意だという黒魔術だろう。それを使うの？
実技は習ってないはずなのに。

「これでコイツを悪魔のエサにしましょうよ……！ アツハハハハハ！」

「ダメ！ ルルー！」

「何すんのよ！ 離してよ、ソフィー！」

ルルーの手を握ると、持っていた紙を急いで取り上げようとした。その瞬間、陣が一瞬私の右手に触れてビリッと小さな赤黒の稲妻と共にとんでもない痛みが襲った。ナイフで手をグリグリとえぐられたよう。

「あ……っ」

手がしびれたように震え始めたけど、それでもルルーから懸命に取り上げた。

その時、誰かの足音が響いた。

「何をしている！ リ……リザッ！」

「陛下」

王は地面にドロだらけで倒れているリザを抱き起こした。

「何てことを……お前たち！ よってたかって、何てことをするんだッ！」

王の瞳孔がキツと萎縮した。その目の冷たさに凍りつく。リザを腕に抱いたまま、私たち四人を射るような視線で睨み据えた。そして、私の持っていた紙に目を止める。そこに描かれていた印形シジルにハツと目を見開いた。

その王の様子からも、これはとんでもなく危険なものなんだろうと感じた。王の目が憎悪の闇を湛えてゆく。威嚇する狼のような表情だった。

「サードクラスの女……ッ！」

「こ、これは」

それを地面に落とした。だが王の怒りは収まらず、憤怒に体を震わせていた。漆黒だった瞳が、徐々に赤みを帯びていく。初めて見る殺気だったヴァンパイアに、足がガクガクと震え、知らず涙が零れていた。

「お前……！」

王はいつの日かレオナルド公爵がやっていたように、素早く人差し指と中指で空中に何かを描き始めた。でもあのときのような優しい金色ではない。どす黒い血の色の線が浮かび上がり、魔法陣が描かれる。

「待つて、陛下！」

リザが王の腕を下ろし、それをやめさせた。スツと印が消える。リザは涙を流し、その顔を見上げた。

「私が悪いのです。私が、彼女に酷いことを言ったから……。うらまれても仕方が無い女なのです！」

「だからといって、こんなケガまで！」

「いいえ、陛下。どうかこれを私の彼女への償いとさせてください。お願いします！　お願いします！」

リザは必死に頭を下げていた。王は怒りを必死に堪え、震えるリザをそつと横抱きにして立ち上がった。

「サードクラスの女。君には失望した」

「……っ」

体の芯に氷を突き刺されたような感覚が走った。しびれる手首をそつと押さえる。

「やはりサードクラスは、サードクラス程度の女だな……。！　リザにもレオにも私にも一切近づくな！　近づいたら……。オレはお前に何をするか分からない」

そう言い残し、王は立ち去った。

私、どうして泣いているの？　怖かったから？
違う。それだけじゃない。

あの人に、真実を見てもらえなかったから。

「ソフィア」

あの後王が、リザに正式にプロポーズしたらしい。正室になることが決まったりザの登場に、スクール・サードのキャンパス内は驚きと羨望に満ちた視線で溢れていた。

私はベンチに座りながら、まだかなりしびれの残る手であるとき彼女に貰った教科書を開いていた。これを見るたびに色々なことを思い出すけれど、物に罪があるわけではないし、何より貴重な勉強道具だった。

「リザ……」

私の隣に、彼女はそっと腰をかける。居心地が悪かった。

「色々ごめんね。迷惑、掛けちゃって」

あの事件の後、レオ様もぱったり来なくなった。多分私に愛想を尽かせたんだと思う。そりゃあそうだろうな。王の婚約者を集団で襲ったんだから。しかもおそらく、私が主犯格だと思われる。

でも王からも特に処罰等の話は来ていない。リザが王に事実を話してくれたのかも知れないと思った。

「ううん。それよりリザ、正室入りが決まったんだってね。おめでと」

「ありがとう！」

花が零れるような美しい笑みを浮かべる。頬を赤く染めて、本当に嬉しそう。でも私はなぜか、ひどく寂しかった。彼はまだ、私に怒っているんだろうか。

「実はね、ジエニファーたちとも仲直りしたの。あなたに嫉妬して

酷いことをするように言ったのは私だから。そんな私を、皆がよく思わなかったのは当然だもの」

リザは悲しげに顔を伏せた。口元にはどこか自嘲気味な笑み。

「でもね、ジエニファーたちも謝ってくれたの。やりすぎたって。今からアトリエで仲直りパーティーをしようと思ってるの。ねえ、ソフィーも一緒に行きましょう！ 私が王妃になったら、もうこんなことできないだろうし。ね？」

「リザ……。うん、行こう」

私はどこかヤケになっていた気がする。あの日のことがまだ尾を引いていたからかもしれない。

リザは嬉しそうに目に涙を溜めて、にっこりと微笑んだ。その笑顔の裏で、何か考えていたなんて、愚鈍な私は気づかなかった。

「あそこに皆いるわ」

ファーストクラスの棟の外れにある、小さなログハウスへ案内された。元々昔、誰かがアトリエとして使っていたものを、王がりザのためにと改築したらしい。大事にされてるんだな、と思った。ヴァンパイアは人を襲うけれど、だからと言って全てのヴァンパイアが悪いわけじゃないってことは分かってるつもり。

まるで心臓のような形の実が鼓動するたび、内部から蛍のような淡い光を放っていて、ログハウスは幻想的な雰囲気を中心に佇んでいた。光る蝶が、星屑のような金の粉を撒き散らして池の上を滑るように飛んでゆく。花の甘い香りが喉元を落ちてゆく。

「1111よ」

三段ほどの階段を上がって、リザが扉を開けた。キイという蝶番ちやうがつがいの音と共に、座っていた三人の顔が見えた。

「ソフィア……いらっしやい！」

「今日は楽しむわよあ〜」

机の上にはどこから持ってきたのかと思うくらいに、たくさんのお菓子。

乾杯をして私たちだけの仲直りお菓子パーティーが始まった。ジエニファーがにっこりと笑って、

「ねえ、聞いたソフィー？ 今度リザ、陛下の絵を描くんですって。言っておくけど、高級な絵の具を使ったからって上手くかけるわけじゃないわよ、ねえ？」

そうかもね、と頷く。

「最優秀賞を取ったあなたなら、どういふ絵を描くのかしら」

ルルーは興味深そうに、瞬きもせず私を見つめる。観察されている昆虫の気持ちがよく分かった気がする。

「そうね……王のことはよく知らないけど、私だったら正面は描かないかな」

「どうして。折角あんなにキレイなお顔なのに」

ニーナがお菓子をほお張りながら首をかしげた。

「うん。でも、あの人の背中が特別だと思うの。大勢の人たちの期待を背負って、国の全てを背負って、それでも負担なんて感じさせずに堂々と先頭を歩いている。王のそんな背中を見て人々は“ああこの人になら国を任せられる”“ついて行こう”って思うだろうから……。なんて偉そうだけど」

でも、思わず引き寄せられる魅力をたたえていた。

「ねえ、ちょっと描いてみてよ」

ジェニファーに紙を差し出された。でも、私は

「ごめんなさい。手に痺れがあつて、上手く描けないの」

あ のとき魔法陣に触れてしまった後遺症がまだ。

「手に痺れ……か」

リザはゆっくりと息を吐き出すと、「そう、よかった」と言った。

「これで私も安泰ね」

「え？ それはどう　ツ、リ、リザ……!!」

私は椅子からガタリと立ち上がった。その拍子にグラスが落ちて割れる。

テーブルの下から現れたリザの手には、小さな銀のナイフが握られていた。それを持って、ゆっくりと近づいてくる。皆お菓子を食べながらくすくす笑っていた。

何？　何なの?!

逃げようにも出口は一つ。それも彼女の側にあった。

「どういうことなの……ねえ！　ねえ！　リザア！」

リザはカッと目を見開いた残忍な表情でニタリと笑うと、ナイフを振りかぶる。

怖い……。誰か……！

そんな思いが誰かに届くこともなく、彼女はナイフを勢いよくズブリと突き立てた。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア　ッ」

鮮血が滴り落ち、悲鳴が夜の闇に響き渡った。

「リザ……大丈夫か？」

「はい、陛下」

ザルクは、事件のあったアトリエの椅子に腰掛けて、辛そうに手を擦るリザの背を撫でてやっていた。

散乱する菓子や割れたガラス、飛び散る血痕に怒りを押し殺したような表情を見せる。

「へ、陛下……折角いらしたのだから、これをご覧になって」

リザは健気に笑いながら、引き出しの中から絵を取り出した。庭や建物、クローズアップした花や人の絵。月の絵と同じく、柔らかで優しいタッチだった。触れれば描いた者の心が垣間見えるよう。

「やはり私は君の絵が好きだ。純粹で、繊細で、見るものを笑顔にする絵が……。手は大丈夫か？」

「は、はい。すぐに助けが来てくれましたから大事には」

「まさかサードクラスの女が……」

王の眉間に縦筋が入る。彼とて信じられなかった。あんなに柔らかな雰囲気を纏う彼女が、と。だがその場にいたりザだけでなく、前回リザを襲っていたルルーもジェニファーもニーナさえも口を揃えて彼女がリザを殺しかけたと言うだ。

信じざるを得なかった。

「おそらく、彼女も陛下をお慕いしていたのでしょう。それで陛下の寵愛を受ける私が憎かった。哀れな子なのです」

「すまない、助けてやれなくて」

涙を流すリザをその腕に抱きしめる。

「いいえ、陛下は前回危ないところを助けてくださいましたわ。でなければ、私はあの魔法陣の餌食に」

「たまたまあの辺りに用があつてよかつた。リザ……よく無事でいてくれた」

「ん……ふっ」

深い口付けを交わしながら、ザルクはリザの体を優しくテーブルの上へ寝かせた。ゆっくりと身に付けている服を脱がせてゆく。

「陛下……？」

「ん？」

胸に沈む彼の頭を抱き、リザは少し嬉しそうに名を呼んだ。

「来月には陛下の絵ができあがりそうですわ」

「嬉しいな。どんな絵なんだ？」

「んっ……陛下の、背中の絵ですわ」

「背中？」

ザルクは少し顔を上げる。

「ええ。陛下の背は大衆を率いる背。大勢の人たちの期待を背負い、国の全てを背負う。けれど陛下はそんな負担などまるでないように、堂々と先を歩いておられる。人々は、そんな陛下の背を見て“ああこの方になら”と思うのですわ……。私はそんな陛下の背がとても好きなのです」

「リザ……っ」

ザルクは眉を寄せ、頬を僅かに震わせて笑う。内側から湧き上がる熱い感激を、漏れ出さないように押し殺している風であった。

「間違いない。君はやはり特別な女性だ」

「陛下……っ」

しばらく見詰め合った二人は、またたく間に熱い愛の波に吞まれていった。

「あの女、どうかしているよ！」

ミセスグリーンは震えた涙声でそう言った。檻の中はとても寒くて、窓も高いところにあるから外なんて見えない。恐ろしい怪物たちのうめき声がそこから中から聞こえ、時折狂ったようにガチャガチャと鉄柵を揺らしている。

「自分で自分の手を傷つけて、それをソフィアのせいにするなんて……っ。みんなでグルになって他人を陥れるなんて。ああ！ 天使よりも狡猾で恐ろしい！」

悪いのが悪魔じゃなくて天使なのは、ここの価値観がそうだから。

私は王の婚約者殺害未遂容疑で、死刑が言い渡された。傷ついた彼女の右手を償うため、私の右手首が斬り落とされる。執行は七日後。それまでは食事も与えられずに、ここへ閉じ込められるそう。

今が何日目かなんて分からない。ここが城のどの位置にあるのか

分からないけど、時間を知らせる鐘の音も聞こえない。空腹もいつかからかなくなった。そして、生きる気力さえも。

何度私は裏切られるんだろう。あの時、リザについて行かなければ良かったんだろ。信じなければ。

そつと右手を見つめた。ゆっくり、開いて閉じる。まだ痺れはしつこくまとわりついていて。それでもあるだけ良い、でももうじき無くなる。天国に行っても、絵が描けなくなっちゃうのかな。それってすごく悲しい。

「私がどうにか頑張るから、お願い、そんな眼をしないで！」

ミセスグリーンはかすれた声で、心から叫ぶようにそう言ってくれた。彼女は彼女なりにあちこち小さな体で駆けずり回ってくれたのを知ってる。でもこれは王の決断。ひるがえすには王自身が考えを変える必要がある。それ以外は何をしても無駄。

避けられない死の前に、私は様々なことを思い返していた。亡くなった優しい家族のこと、友人のこと、住み慣れた古い町並のこと。そして

私は傍に落ちていた石を拾うと、持たれていた壁に向かってゆっくりと立ち上がった。足に力が入らなくてよろけそうになったけど、何とか持ちこたえさせる。

「ソフィー……？」

「ミセスグリーン、太陽を見たことがある？」

石を壁にこすり付けると、白い線が生まれる。

「太陽？」
「ええ」

私は話をしながら壁にたくさんの草花を描いていった。まだ思うように動かない右手に、左手をそつと添える。

「いいえ、ないわ。話に聞いたことはあるけれど、ここはずっと夜だから」

「そう。今までお世話になったから、いいもの見せてあげるね」

月とは違う太陽の光は、眩しくて暖かくて情熱的で。力強い“生”に満ち満ち溢れている。朝が来れば昇る日を当たり前のように思っていたけど、今になってそれが恋しい。一度も見ることがないというのなら、その輝きを見て欲しい。食べてない分貧相になっちゃったかもしれないけれど、手が震えて上手くかけないかもしれないけれど、私の“生”を注ぎ込むから。

「できた」

私の太陽の絵。私の最後の絵。

柔らかな日差しの下で、人も植物も動物も、建物さえも生き生きと息づいている。暗い牢屋の中、そこではみんなが笑顔だった。できるなら、もう一度見たかったな。

「キレイだねえ……長年クモやってるけど、こんなにキレイなもの見たこと無いよ……」

ミセスグリーンは思った以上に喜んでくれた。絵を褒められるの

は嬉しい。それはきつと、私自身を褒めてくれている気がするんだろっな。

ありがとう、ミセスグリーン。ここへ来て一人ぼっちだった私をすつと励まし続けてくれた、お母さんのように大事な存在。

どうか元気で

「死刑囚がお絵かきとは、随分とのん気なもんだぜ」

その声に戻ると、褐色肌の美しい女性が銀色のトレーを持って檻の前に佇んでいた。女の私でもドキドキするようなセクシーな服。そして、二本の牙が見えた。

ヴァンパイア……？

「ほら、食いな。明日が死刑執行日、その前の最後の食事だ」

女性は床の上に開いた小窓から、それを中へ押し込んだ。パンやスープ、そして薄い肉とサラダ。

「“食わない”なんて言うなよ？ 栄養のねえマズイ血なんて飲みたくなえからよ」

「あの……あなたはヴァンパイアなの？」

ヴァンパイアに女は生まれないと聞いていた。だから人間の女をさらってくるのだと。

「アタシが男ならそうだろうけど、女だからその呼び名は正しくない。フリーエス 蚤女だ」

フリーエス……、ノミ女。その名前を聞いて即座に感じた。ヴァンパイアの女は卑下の対象なのだ。だからこんな地下の仕事を担

当しているのだろうか。

でも彼女からはそういつた悲壮を一切感じなかった。何ともあつけらんとしていた。その長く赤い髪は、太陽のような活力に満ちていた。まばゆいくらいに。

「ごく稀に、ヴァンパイアとの間にでも女が生まれることがあるだよ。この間一人死んだから今はアタシだけ。バカみてえに頑丈なヴァンパイアと比べて、大分か弱えもんでな。けど久々の若い人間の血だ、精々味わってアタシの糧にしてやるよ」

「あ、あの、お名前は？」

遠ざかる彼女の背にそう問いかけた。

「お前、処刑執行人の名前が知りてえのか？ まさか呪う気じゃねえだろうな！」

彼女はそう言ってシュツと攻撃の構えを取る。ちよつと面白い人。

「い、いえ、呪術の授業は記号を少し教えてもらっただけで……」
「なんだ。ツマンネ」

がっかりしたように両手を下ろす。一体何を期待したんだろ……。少し申し訳ない。

「アタシの名前はシェイラ。まあ残り少ない時間の間だけでも覚えててくれ。じゃあな」

素晴らしい残し、シェイラさんはダンと入り口を閉めて牢獄から出て行った。

「ねえ、ミセスグリーン。私、シェイラさんみたいな女性ってすごく憧れ……あれ、ミセスグリーン？」

あちこち探したけど、ミセスグリーンの姿はどこにもなかった。

s t . ? ? ?

The FLEAS (後書き)

あとがき

あれ……王とリザってヤミでは
k r y

「自分のやっていることが分かっているのか、兄上ッ！」

レオナルドは口元を震わせ、噛み付くようにザルクへ突っかかっていた。今日がもう最後の日だった。今日がもう最後のチャンスだった。幾度となくザルクの説得を試みたが、彼は一向に決定を覆そうとはしなかった。

最初こそ冷静だったが、もうそんなことは言ってられない。彼女の命がかかっている。

「ソフィアはそんな女じゃない！ 何度言ったら分かるッ！」

ダンダンと強く机を叩きながら詰め寄るが、ザルクは執務机に座り、淡々と書類整理していた。レオナルドの話を、聞いているのかいないのかすらはつきりしない。まるで彼を空気のように扱っていた。

「兄上ええ！」

バンツといつそう強く机を叩いた。

後宮への出入りが突然禁止されたと思えばこの事態。牢にいる彼女に何度会わせてくれと言っても聞き入れられず、焦りと苛立ちばかりがつのって行く。

レオナルドにはこの兄の性格を良く知っていた。一度決めたことは絶対に曲げない。誰の言葉も聞かず、己の真実だけを信じていた。だからこそ最悪の事態しか思い浮かばない。

ザルクはため息をつくとき、かけていた眼鏡を外してレオナルドを

見上げた。

「レオ、いい加減目を醒ましたらどうなんだ？」

「は……？」

「いや、そんなことよりリザの手の傷を治してやってくれ。歯にマグリドスの実の精毒が塗つてあつたらしくてな。私の担当医でも治しづらいらしいんだ。だが彼女は絵描きだ、後遺症が残つては可哀想だろう。医療分野の第一人者であるお前なら……」

「断る！ そんな嘘つき女、そばに寄りたくもない。治してやりたいんなら、ご自分でどうぞ？ ああ、無理なのか。‘あの時’から、医療系魔術が使えなくなつちやつたもんねえ。愛する女を治してやれなくて残念だ」

ザルクはゆっくり、やれやれと首を振る。

「相当毒されているようだな」

「……何だつて」

「だが、サードクラスの女のことだ。どうせ、お前の容姿や公爵としての地位だけを見ているのだろう」

あざ笑うかのような表情。

「……っ！」

レオナルドは傍にあつたランプを掴んでザルクに投げつけた。ガシャンとガラスの割れる音がしたが、ザルクの前には青い魔法陣が浮かんでいる。それが壁のようにランプを食い止めていた。

「王に向かってとんでもないことをする公爵だ」

余裕の笑みを浮かべ、腕と足を組んで見つめる。

「だったらオレも死罪にすればいい。ソフィアと共に逝けるなら、オレは幸せだ……」

「叶えてやれなくて残念だ、わが弟よ」

態度を一向に変えようとしないザルクを、見限ったようにそばを離れた。「チクシヨウオオ！」と怒り狂ったように厚いドアを蹴り倒して出て行く。同時に彼から漏れ出た魔力で壺や本棚やキャビネットのガラスが全て崩れ落ちた。廊下からも何かを蹴り壊す音が響いている。

「で？ お前は何をしに来た」

それでも冷静なザルクの言葉に反応するように、壁の隙間からクモの長い手足が伸び出た。

「よくこんなところまで忍び込めたものだな」

ザルクは鼻でハンと笑う。

「陛下、あの子は無実です。私はあの子がここへ来た頃から、ずっと傍にいました。あの子は今回のような事件を起こすような子じゃありません！」

「直訴か。意味のある行動とは思えんな。だがその勇氣は称えよう」「あの子は他人を傷つけられるような子じゃない！ 繊細で穏やかで……とつてもいい子なんです！」

「世の中で罪を犯すのは、その者が悪人だからか？ いや、違う。悪人が罪を犯すのではなく、罪を犯したものが悪人なのだ」

ミセスグリーンは八つの瞳に涙をたくさん溜め、

「ではその罪に加担しておられる陛下は、何なのですかア！」

「私が……？ ハッ、話にならない」

ザルクはため息をついて立ち上がると、半分なくなった出入り口ドアへ向かう。

「牢の壁画を見てやってください！ ソフィアの描いた太陽の絵を！ 彼女の命の輝きを！ お願いします！ 陛下、陛下アア！」

「おい」

しつこく追いかけてくるミセスグリーンを振り返った。そして冷たく見下ろす。

「さっさと帰れ。踏み潰されなくなかったらな」

足を近づけられ、ミセスグリーンは怯えたように後ずさった。

ザルクは騒ぎに慌てる召使いたちに「部屋を片付けておけ」とだけ命令すると、彼はロクに話も聞かず、さっさと彼女の前から立ち去った。

「何て……無慈悲な……ッ」

僅かな希望すら断たれ、ミセスグリーンはいつそのこと、自分の上を駆け抜けてゆく召使たちに踏み潰されても構わないと思った。

レオナルドは鉄臭い地下の小部屋にいた。天井からはとげのついた鎖やムチが垂れ下がり、不気味に血の滲んだマスクやヤリ先のついた棺が乱雑に置かれてある。彼は小さな古い箱の中に眠っていた、銀の腕輪に手をかざしていた。周囲を金色の光が柔らかく包んでいる。

その光が消えると共に、そつと手を下ろした。それを見つめる彼の表情は、悲哀と静寂に満ちていた。

「ごめんね、ソフィア……オレはこんなことしかしてあげられなくて……、ごめんね」

レオナルドはそう言って、苦しげに頭を抱えてうずくまった。

牢の小窓から入ってくる月明かりは、まるでスポットライトのように一点を明るく照らしていた。私はそれをそつと指で触れる。

「よく考えれば、これだって太陽の光なのよね」

すっかり冷えきってしまったけれど、これも月の跳ね返した太陽の明かり。

「お父さん、お母さん……お兄ちゃん」

頬を雫が伝う。それらは冷たい石畳の床へ落ちてゆっくりとしみ込んでいった。

「怖い……怖いよ……」

楽しかったあの頃の、温かな太陽の日差しに触れたくて。私は震えの止まらない手で、ただひたすらに実体の無い月明かりを握りしめていた。

s t . ? ? ?

Their Tears (後書き)

あとがき

タイムリミットはすべてそこ。

s t . ? ? ?

L i s a ' s T h o u g h t (前書き)

*リザ視点

「フフフフ……」

金で縁取られた鏡の前で、ゆっくりと髪をとく。湧き上がる笑みを押さえることができず、思わず声が漏れた。

部屋はいつでも陛下を気持ちよく迎えられるよう、たくさんの花で埋め尽くしてあった。蜜のいい香りが私を満たし、そして気分を高揚させる。

クシを下ろして、首についた彼との愛の証をそつと撫でた。陛下はどうやら独占欲が強くあられるらしく、体のあちらこちらに印がついている。婚約より前はこんなことは全くなかったから、それが増えるたび、愛される実感を噛み締める。

「やだわ、陛下だったら。こんなところまで」

太ももの内側についたそれに、アトリエでの行為を思い出していた。

「クス……今日か」

彼女に残された時間。私はこれから無限とも思える時を彼と過ごすけれど、彼女は明日という日を迎えられない。

これって最高にオカシくない？ あの目障りな女がいなくなるのよ？ アツハハハハハ！

プロポーズ前、陛下は他に気になるとおっしゃっていた。私を王の寝室にまで呼んでおいて、まだ迷ってる女がいるですって？ 直感したわ。“あいつ”だって。“あの女”だって。

陛下を初めてお目にかけてのは一年前。一目ぼれだった。白く大きな月の下、その淡い光に包まれるあの方を見て、体中に電流が走ったわ。まるで満月の夜、心の清らかなものだけが見える伝説の生物ハギスを見たかのような衝撃。

涼しい目元、サラサラとした黒髪、高い背に威風堂々たる佇まい。あんなの人間界にはいない。ヴァンパイアは恐ろしいなんて聞いてたけど、確かに怖いほどにあの方に引き込まれた。心が囚われた。

それからずっとあの方を思い続けた。陛下が後宮にいらっしやると聞きつけるたび、何をも差し置いて向かった。陛下が好きだとウワサされるものは、何でも手に入れようとした。

金持ちの貴族らに媚を売って、やっとファーストクラスにも入った。ええ、初めて彼の腕に抱かれた日のことは、昨日のように覚えているわ。見たことも無いくらい美しいあの方を、私の上で切なげに私を求められるあの方を、ああ、私だけのものにしたって思った。

何度も逢瀬を重ねていくうち、私はいつかあの方の特別になることを夢見ていた。きれいに着飾れば、もっと美しくなれば、それを現実のものとできるって信じていたの。

でも

「ソフィア・クローズ」

陛下はあの女を……！ あんな絵を描く以外何の取り柄もない、地味で貴族の援助も受けられないほど要領も悪いあの女を！ 抱いてすらいない……あんな女を！

『だがサードクラスの女。私はおそらく君を知っている』

あれほど夜を共にした私の名前も覚えていなかったくせに、あの

女の元へはまるで吸い寄せられるように向かわれた。愛おしさの溢れる清らかな目で、あの女を見つめていた。

あの二人の間に赤い糸があるというのなら、私はそれを引きちぎる。あの絵が二人を結びつけるというのなら、私がその絵を手に入れる。あの方の心にあの女が巣食うのなら、私がその存在を消し去る。

あの方の心を手に入れるために

でも、あの女が生きている限り、私はあの人に選ばれない。あの女が生きている限り、私は真実を恐れて生きなければならぬ。あの女が生きている限り……私は大勢の女の中の一人としかかなりえない！

体まで私だけにしろなんて言わない。でも、心だけは……その心だけは私だけのものじゃなきゃイヤ！

陛下を横からさらっていった泥棒ネコ。あの女だって、絶対に計算してやってるはず。そういうのが上手い子なんだわ。あのレオナルド公爵まで誘惑して、弄んでるんですもの！

「……あら、ひどい顔」

私は釣りあがっていた眉を下ろした。やわらかく頬を叩く。だめだめ、忘れなきゃ。あの女はもう死ぬんだから。陛下に怒りと憎しみをぶつけられてね。

そうよ、陛下はもう私の味方。薬指に光る指輪を見つめた。まるで銀河のような宝石に、あの方の愛が詰まっている。

「ヨウあなたの予言のおかげよ」

鏡の傍に佇むコウモリの頭を撫でてやった。嬉しそうに眼を細める。

私とこの子は相性が良いみたい。この子は私の心を読み取るよう
に行動し、私もこの子の思いが分かる。前に妙なクモが『本当のこ
とを話して！』なんてヒステリックに叫びに来たことも、追い返し
てくれたしね。

真っ赤な眼に醜い豚のような顔をしているけれど、役に立つ獣。

「あなたがあの夜、あの湖に来る女を見張れって教えてくれたから。
あの女の絵が陛下と結びつけるって教えてくれたから」

そう、私は本当に彼と結ばれることになった。ヨヴも嬉しそうに
目を見開き、牙をむき出しにして“キケケケケケケ”と笑う。

「ねえ、本当に絵のことは心配いらなのよね？ 陛下はこの手に
負った傷のせいで描きづらくなって言えば納得してくれるのよね？
そのためにナイフにしびれ毒まで塗ったんだから。ねえ、どうな
の？ 卑しいケダモノさん……いたッ！」

指先には牙の痕。そこから赤いガラス玉のように血が溢れた。

「何するのよ！」

ぶとうとした瞬間、ヨヴは天井高く舞い上がった。“ケケケケ
”と笑いながら私を見下ろす。

「何ですって？ “太陽が昇る”？ はあ？ バカじゃないの？
ここは太陽なんて出ないわ！」

それでもヨヴは、翼をバサバサと羽ばたかせて天井を舞っていた。

「……ねえ、あなた一体何者なの？ ルルーに魔術のやり方を教えたり、私の願いを聞いたり」

ヨヴの真つ赤な瞳には、まるで水面に浮かぶように私の姿が映る。

「あなたの狙いは何？ 一体何が」

その時、ゴーンと鐘の音が聞こえて私は言葉を切った。まあいいわと、カーテンを開けて窓の外を望む。サードクラスの棟が見えた。あの女がいる建物を見たくなくて、ずっとカーテンを閉めていた。けど、もうその必要もないわね。

「さ、最後にあの哀れな罪人とお話でもしてきてあげましょうか」

サラリと髪を払い、私はあの女の元へと向おうと部屋の扉を開いた。

「！」

「やあ。“義姉上”」

「レオナルド公爵様……」

ああ、この方もなんて美しい。やはりご兄弟ということもあって、お顔立ちが似てらっしゃるわ。”義姉上”だなんて、照れちゃう。

「ライバルを蹴落とした気分はどう？」

「け、蹴落としただなんて……誤解ですわ」

「取り返しのつかないことになるよ」

脅すおつもりかしら？ おあいにく様、私には陛下がいる。

「今からでも遅くない。兄上に」

「私を裏切った友人が、今から処刑されるのです。お願いします、どうか……これ以上心を乱さないでくださいませっ！」

私はいく筋もの涙を流し、口元を押さえた。公爵様に背を向け、早足に廊下を歩く。誰が何と言おうと、たとえ相手が陛下であろうと、拷問をかけられようと、私は絶対に真実を口にしないわ！ もう誰も止められない！ あとはあの女の処刑を待つだけ！

そう、あの女が死ねば、私が真実になる。

あと一時間。それがあの女の余命。

手錠をかけられたまま檻の外へ連れ出され、看守に導かれるように暗く湿っぽい廊下を歩いていた。こんなコケだらけで腐った水の匂いが充満する通路が、彼女の歩く最後の道なのね。ま、お似合いだわ。

でもなぜか、あの女は悲壮感に溢れているというわけでもなかった。まっすぐに前を見つめて歩いている。

覚悟でも決めてるといふの？ 最期まで癪に障る女……。

「とんでもないザマね、ソフィア」

前を通り過ぎようとする彼女に声をかけた。

「リザ……」

彼女は眉を八の字にひそめ、私を見る。その目は濡れてすこし赤く、そして私への怒りと悲しみで満ちていた。でも。

でも憎しみが見当たらない。嫉妬も恨みさえも。何こいつ、本当に純真な女だって言いたいの？ その目で男をたらし込むくせに……。

『あの絵を描く君の目から、私がどのように見えているのか知りたい』

陛下を惑わせる狐の目、雌猫の目。

その澄んだ瞳を潰してやりたい……！

私は傍の衛兵が腰に差していた短剣を抜くと、あの女の目に向かってそれを突き立てた。

「！」

突き刺さる直前で、私の手を褐色肌の女が掴んだ。口元から二本の牙が見える。ああ、こいつがフリーエスとかいう出来損ないのノミ女ね。なんて力かしら。長い爪の生えた指が手首に食い込む。

「どうせ死ぬんだ。目くらい残してやんな」
「……」

私はグツと怒りを堪えて手を下ろすと、短剣を持ったまま彼女の耳に唇を寄せた。

「ソフィア、最高の舞台^{シュー}にしてね……」
「っ」

思わず口を開きかけた彼女の背を、イノシシ顔の看守が強く押し
た。私をじっと見つめながら唇を噛み締め、張り詰めていた糸が解
けたようにハラハラと涙を零した。

そのやつれた背中を見送る。

勝った。

私の勝ちよ、ソフィア……。

バイバイ、月の絵の女さん

s t . ? ? ?

L i s a ' s T h o u g h t (後書き)

あとがき

友達どころか、近所にも住んで欲しくないレベル()() ;

。()()() ガクガクブルブル

次回、ソフィアが処刑へ。

『お兄ちゃん、どうやったらそんなにじょうずに絵が描けるの？』

幼い頃の私？ これは何の香りだろう。風に乗った草……太陽。

『ソフィアも絵が上手になりたいの？』

いつものように、やんわりと眼を細めるお兄ちゃん。

『うん！ お兄ちゃんみたいにじょうずに描きたい』

『それじゃあ優しい子にならなきゃね』

『優しい子？』

『そう。絵は人の心を映す鏡だからね。心のきれいな子になれば、それだけきれいな絵が描けるようになるんだ。分かった？』

『うん、分かった！』

そう、そうやって優しく頭を撫でられるのが好きだった。

「あ……っ、ん」

「そこまでだ、フリーエス」

ザルクの言葉を受け、ソフィアに覆いかぶさっていたシェイラは退けた。ソフィアは冷たい石の椅子に手足を固定され、真っ青な顔で軽く痙攣を起こしていた。その首筋には、赤い斑点が二つ。

高座に座ったザルクは、それを虫けらでも見るように見下ろしていた。隣に座るリザの眼はほんのりと笑っている。

まるで小さなコロセウムのような地下の処刑場は、わずかに血の匂いが漂い、そして肌寒かった。警備関係者や看守、物見見物に來た貴族らがまばらに席を埋め、じっとその様子を見ていた。もし今日が休日なら、席はすべて埋め尽くされていただろう。

誰も彼女に同情するものなどいない。彼らにとってこれは暇な日常のスパイスでしかなかった。

「まだ意識はあるだろう、ソフィア・クローズ。今からお前に“贖罪の腕輪”をはめる。これは徐々にお前の手首を喰い、最後には無様に切り落とすだろう。その頃には、傷口からあふれ出た血でお前は死を迎えている。こうしてあらかじめ血の量を少なくし、お前の死を早めてやっているのは、他でもないリザの慈悲。その優しさに感謝しながら、ゆっくりと痛みと恐怖を味わうがいい」

耳の尖った薄汚い小鬼たちが、シェイラの元へ供物台を届ける。

そこには悪魔の顔があらわれた銀の腕輪が乗っていた。それを手に取るシェイラの目が、わずかに見開かれる。だが即座に何も無かったかのように取り繕った。

しかしそのささやかな動きに、ザルクは敏感に勘づいた。

「フリーエス、どうした」

「いえ、何も」

「それをこっちへ持って来い」

手を伸ばすザルクに、シェイラは戸惑っているようだった。

「何でもありません」

「フリーエス……お前も死にたいのか？」

ゾワツとするような寒気がシェイラを襲う。王が目を薄くしたその一瞬で、全身に鳥肌が立った。この王が恐ろしいのは、単に冷酷だからではない。真に強大な力を持っているからだ。

それも権力などと言うあやふやなものではない。数千数万の軍兵を相手に、たった一人で立ち向かえるほどの魔力をその身一つにそなえている。本気になれば小さな国などいとも容易く潰せるだろう。たった一人の女ならもつと簡単に。

逆らうことなど、できるはずはなかった。

「……は」

シェイラは高座の前までそれを持っていくと、衛兵が腕輪を受け取ってザルクに手渡した。一目見て、ギツと歯噛みする。

腕輪の内部には痛みを軽減する魔形字が、ぐるりと取り囲むように刻まれていた。まるでこの腕輪をはめる宿命にある者を、必死に庇護しようとするかのように。こんなことをするのは、こんな高度な医療魔術を扱えるのは

「レオ……」

ザルクはそれを親指の爪でガリツと傷つけた。綿のように繊細な印は、それによって容易く崩れて消える。

シェイラを睨みつけるように見下ろし、腕輪を投げつけた。

「死刑囚に情けなどいらん！ 違つか、フリーエス」
「は、仰せの通りにございます」

ザルクは凍てつくような視線をソフィアへ送った。

「さて、死ぬ前に何か言い残すことはあるか？ ソフィア・クロール。言いたいことがあれば言え、最後の情けだ」

ソフィアは小刻みに震える唇を開いた。今にも涙を零しそうに怯えている。

『ソフィア、何泣いてんだ。辛いときこそ、楽しかったことを思い出して笑え。ブハハハハ！ ってな！ そしたら兄ちゃん……いつでも一緒に笑ってやるから』

「ありがとう、ごさいま、した……と」
「……」

遠くを見つめているようなその顔は、どこか穏やかだった。

「……ミセスグリーン……と、レオナルド公爵様に……」

今わの際に謝礼だとは。目の前の自分に、恨み言の一つや二つ吐き散らかして死ねば良いものを。そうザルクは思っていた。

『オレがいなくなっても、絵は残る。そしてこれを見てオレを感じ、オレを想う人がいるんだ。なあ、これってスゴイと思わないか、ソフィア？』

「あの絵で……あの絵で私を思い出してくれれば……嬉しいです、

と……あの絵で時々でも、私を、想ってくれれば……」

震えながらも、ソフィアは焦点の定まらない眼で柔らかに微笑んでいた。

「……やれ」

「は」

シエイラがソフィアの右手に腕輪をはめた途端、それはソフィアの手首にあわせてギツと縮んだ。そして徐々に赤く色をおび始め、黒い霧をわき立たせる。

「あああああああ！」

鎖で繋がられた手足がガチャガチャと苦しげな音をたてた。

焼けるような痛みが襲い掛かる。炎で身を焼かれ、肉を溶かされえぐられているような痛み。いや、熱いのか、痛いのかももう定かではない。ただ分かるのは、これで命を落とすだろうということだけ。

苦しげに眉をひそめ、震えていた体から今度はどつと汗が噴き出していた。身悶えるソフィアに、リザは勝ち誇ったように笑みを浮かべている。

だがソフィーはそれ以降、グツと歯を食いしばって痛みを堪えた。これは意地だった。彼女の最後の抵抗だった。自分は無実であるのだと、無言で抗議していた。

それにザルクは怪訝な顔をする。彼には分からなかった。彼女のこの強さの源が一体何であるのか。本来なら、痛みで命を落としてもおかしくはない。それをこんな少女が歯を食いしばって、涙を流しながらも耐えているのだ。

『牢の壁画を見てやってください！ ソフィアの描いた太陽の絵を！ 彼女の命の輝きを！ お願いします！ 陛下、陛下アア！』
ミセスグリーンンの言葉が頭を過ぎる。ザルクは肘掛をギュツと掴んだ。

「陛下……いかがされたのです？」

隣のリザが心配そうにそれを見つめる。

「なぜ君はこんな光景を冷静に見ていられる」

「……え？」

「なぜこんな悲惨な光景に眼を背けようともしない」

「あ、あの……っ」

リザは慌てたように眼を泳がせた。彼女はここへ来てわずかに気の緩みが出てしまったことを悔いた。焦って涙も思うように出てこない。

「あのように儂い月を描いた女に、そのような冷血なことができるのか」

「そ、それは………陛下？ 陛下！」

ザルクは椅子から立ち上がると、刑場を飛び出した。風のように階段を駆け下り、驚く衛兵を突き飛ばして進む。
胸のざわめきを感じた。

もしかして

その思いが一步足を踏み出すごとに、いつその強さを持ってザルクに問いかける。そうであって欲しいという思いと、そんなことはありえないという思いがめちやくちやに絡み合っていく。

(リザはちゃんと月の絵を持っていたじゃないか！ 湖のほとりでは会った話をしたじゃないか！ 胸を打つような言葉をくれたじゃないか！ なのに……なにになぜこうもざわつく！)

今まで何百と言う女を抱いてきた。抱いて抱いて、抱くだけ抱いて、名前も顔もロクに覚えせずに飽きて記憶から捨て去った。彼女らを支援する貴族がちらつき、女が信用できなくなっていたのかもしれない。優しく誘えばすぐに落ちる女たちに、何だこの程度だと失望していたのかもしれない。

それが初めて愛しいと思える女に出会った。抱きたい思いより、自分を愛し、自分だけを見て欲しいと思える女を見つけた。

満足に顔も名前も覚えなくせに、顔も名前も知らない女を想い続けた。自分の傍にいて欲しいと、どうしても手に入れたいと切望した。

何が自分をこうまで駆り立てるのは分からない。闇の住人である自分が、彼女の放つ淡い光に恋をしたというのなら、これほど可笑しいことはない。

その”彼女”はリザであるはずだった。

だが、親しげにレオと名を呼び合う彼女を見たときの妙な焦燥感。他の男と仲良く腕を組む手を思わず引き離したくなったあの衝動。

あの時見ることでできなかった、あの白いシーツの向こう側。その全ての答えが、今向かう先にあるのかもしれない。

『で？ 王である私に先に名乗らせた、無礼者の君の名は？』

そう、あの時そうやって手を伸ばした。今も

混乱する頭で厚い鉄の扉を抜け、彼女のいたという檻の前に立つ。
冷たい鉄柵を掴んだ。

「はあっ……はあっ……っ」

大した距離ではないというのに、彼は息を切らしていた。胸を圧迫する何かが、彼からいつももの力を奪い去る。ザルクはガタガタと震える手で胸元をグツと握った。それでも震えが収まらない。国の命運すら左右できる男が、その足先までもを打ち震わせていた。

「……っ」

石の壁に描かれていた絵を瞳に映したザルクは、その日差しに足を折られたかのようにどっと膝を崩した。

『あ……ありがとうございます』

『……サードクラスの女で結構でございます。キング・ザルク』

『陛下の背は……特別なんです』

「ソ……ファイア……」

目の前の壁一面に描かれた絵の太陽は、まるで彼女を投影したかのようにだった。美しく、純粹で、暖かくて、そして力強かった。花も木も草も人も、その柔らかな光につつまれ、優しい笑みを零しているようだった。

今まで見たことも無いその輝きと、魂を揺さぶられるような情動。

太陽など見たことはない。その光を浴びるなど忌々しい。でも、この光には包まれないと思った。儂げなこの光をああこの手で守ってやりたいと思った。

彼女だ。

あの日、驚くほどに美妙で幻想的な月を描いていたのは。名前も言わず怯えたように立ち去ったのは。

あの日からずっとずっと恋焦がれ、捜し求めていたのは。伸ばした手をすり抜けた、あのシーツの向こうにいたのは

ザルクは胸のポケットに入れていたエンピツにそっと触れた。

「やめる……」

ソフィア

「やめる！ ヤメロ！ ヤメロツ！ 今すぐ刑の執行を停止しろオオ！」

ザルクはよろめきながら立ち上がり、狂ったようにわめき散らしながら元来た道を駆け抜けた。曲がり角で足がすべり、無様に転倒した。心配して手を貸そうとする家来を思い切りはじき飛ばした。

『ソフィア、いい子だったね……もう、いいよ……』
「おにい、ちゃ……」

優しい兄の記憶に包まれ、ソフィアは穏やかに目を閉じた。

ザルクはただ前だけを見据え、唇を震わせていた。こんなときに限って足が動かない、声が上手く出ない。

「早く……腕輪をはずせ！ 早……ッ！ 早くしろオ！」

扉を蹴破るように戻ってきたザルクは、半狂乱の状態でそう指示した。

「陛下？」

「早く外せええええ！」

「っ……は、はい！」

シエイラは驚き入りながらも、急いで不気味な音と霧がふき出す腕輪を解除した。手首は切り離されていないものの、彼女はすでに多くの血液を失って、あたりは真っ赤だった。鉄の匂いが充満する中、意識も手放し土気色の顔でぐったりとしている。

「早く彼女を手当てしろ！ 絶対に死なせるなあああ！ これは国王の命令だッ！ 助ける！ 絶対だ！ 助けるおおお！」

周囲は騒然となり、緊急用救護班があわただしく彼女を取り囲んでいった。怒号に似た指示が飛び交う。

「すまない、ソフィア……すまない……！ ソフィアあッ！」

運ばれてゆくソフィアを追いかけることもなく、ザルクは髪をわしづかみにして床へ崩れ落ちた。

冷徹だと、非道だと謳われる王が涙を流して打ち震えていた。

そのか弱い、たった一人の女のために。

s t . ? ? ?

U n c o v e r Y o u (後 書 ぎ)

あとがき

そしてリザの心境 「ヤ……ヤバイ……」

「ん……」

石のように重いまぶたを持ち上げると、天井がぼんやりと見え、まるで抽象画のように様々な色が入り乱れていて、頭もはつきりしない。まだ寝ぼけているのかしら。今日学校は何の授業があったわけ？ 課題の提出はまだだったわよね。

次第にはつきりしてきた景色が人の顔で、ハッと息を吸い込む。

「ソフィー！ 大丈夫？」

「ソフィア！ ああ、よかった」

「レオ様……ミセスグリーン？」

私を覗き込んでいたのは、心配そうなレオ様とその肩に乗るミセスグリーンだった。あれ、何でここに？

急いで体を起こそうと手をついた。ズキツとした痛みが走り、思わずついた手を引っ込める。

「体を起こしたいの？」

レオ様が手を差し伸べてくれ、ゆつくりと大きくて柔らかかな枕へもたれかけさせてくれた。どうやら自室ではないらしいここを、未だ混乱する頭でぐるりと見渡した。とても豪華で大きな部屋。

綺麗なグレーのチェストにはたくさんトロフィーやメダルが並んでいて、壁には何かのチームの旗とたくさん術写真（こちらの世界の写真）が張られている。スポーツ好きでアクティブな人の部屋かと思えば、厚い本のビッチリ詰まった大きな本棚がいくつも並

んでいて、金の望遠鏡やひし形の地球儀、安らぐようなセンスのいい大きな額縁の森の絵も飾られていた。この部屋の主はきつと、文武両道に秀でた人なんだろう。

そしてこの私の部屋くらいある大きな天蓋つきのベッドは、ふかふかと体全体を包み込み、思わずここで住みたくなるほど心地よかつた。

「あの……」

状況がよく理解できなかった。ここはどこで、私はどうしたんだっけ。

「ここはオレの部屋だよ。ソフィア……本当に良かった」

レオ様がギュツと私を抱きしめてくれた。温かい。でも彼は少し震えていた。どうして？

動かした手首を、刺すような痛みが再び襲って一気に記憶が甦ってきた。

血の匂いにする処刑場、冷たい椅子、腕輪、あの人の冷たい目……。そうだ私、処刑されて……！

あれ？ ならどうしてここに？ 私、わたし

「生きてるの……？」

薄れ行く意識の中、もうダメだと思っていたのに。天国の家族の元へ行くんだと考えていたのに。お兄ちゃんの声だっけはつきり聞こえた。

「そうだよソフィア、あんた助かったんだよ……！ あんたが無実

だって分かってもらえたんだよ！ 怖かったねえ、よく頑張ったねえ」

レオ様の肩の上には、彼女の涙の跡と思われるたくさんの水玉模様ができていた。きつとすごく心配をかけたんだろっな。本当に申し訳ない。

レオ様は私の頬をすこし圧迫するように両手で包んだ。宝石のよくな瞳が、わずかに揺れている。辛さを隠したように、綺麗な顔が歪められていた。

「ソフィア……ごめんね。もう二度と放さないから！ 何があるうと、絶対……」

「んっ」

突然口づけられ、反射的に身をこわばらせた。あの端整な顔がすぐ目の前にあつて、温かさが柔らかな唇を通して伝わり、男性用香水のほんのりとスパイシーな香りが鼻腔をくすぐる。男性にキスされている。その恥ずかしさに、顔が焼けたように熱くなった。

それにこれは、初めての……。

ど、どうしよう！ 一体どうやって受け止めればいいのか？ 背中に手を回すの？ 目をつむるの忘れてたわ！

あたふたしているうちに、彼はゆっくりと顔を離した。背中に腕を滑らせまます強く私を胸に抱く。レオ様の肩からミセスグリーンも降りてきて、私の首に手足を回した。彼女の足のうぶ毛がくすぐりたい。急に連れてこられたこの世界で、見も知らずの私のことをこんなに思ってくれる人がいるなんて、私はなんて幸せものなんだろう。

ありがとう、二人とも……。

「ごめんなさい、心配かけて」
「いいんだよ！ 悪いのはアンタを陥れた奴らと、アンタを信用しなかった王なんだから！」

ミセスグリーンの掠れた声に、彼女がどれほど私の身を案じてくれていたのか察することができた。私が彼女を母のように慕っているように、彼女も私を娘のように想ってくれていたら嬉しい。でもどうして王が私を信用する気になっただろう。あんなに怒っていたのに。

「ああ全く！ だからアタシは陛下に見てくれって言ったんだよ！ あの壁の絵を！ それなのに……あの方は！」

壁の絵？ そっか、牢に描きつけた……。あれを見たんだ。

「オレだって何回ソフィーはそんな子じゃないって言ったか！ 扉じゃなくて、兄上の大事なところを蹴飛ばしてやればよかった！」

そ、それは……。

二人とも王に対してものすごく怒気をみなぎらせ、黒いオーラに包まれていた。その矛先にいない私も、ちよっと怖いくらい。

後宮へ来なくなっただレオ様にはつきり愛想をつかされていたと思っていたけれど、私のために頑張ってくれていたんだ。感謝しなきゃ。

ふと気になって、そつと首筋を触った。特に痛みは無いけれど、私はシェイラさんに吸血を。どうなったんだろう。怪物にはなっていないの？

「安心して。非人間化に至るのは、全血液量のうちの40%以上を

吸血された時だけだから」

「そ、そうなんですか40%……」

それがどのくらいかよく分からないけど、大丈夫みたいでホッとした。まさか私もヴァンパイアに血を吸われる日が来るなんて

途端に心細くなって、いつもつけていたネックレスへ手をやった。

……あれ。

「どうしたの？」

「あ、あの……私のネックレスが！」

私は相当焦ったような顔をしていたのだろうか、レオ様は「落ちて着いて」と微笑むと胸のポケットからそれを取り出した。球をすこし押しつぶしたような、厚みのあるペンダントトップは、元々は金色だったけれど、今ではすっかり色が落ちてシルバーになっていた。でも表の花の絵はまだちゃんと綺麗に残っている。

「ゴメンね。治療に邪魔だったから勝手に外したんだ」

「いえ、そんな。ありがとうございます」

よかった……。ギュツと掌で包み込むように握りしめた。これは、お兄ちゃんの残してくれた大切なものだから。きつとお兄ちゃんも見守ってくれてたんだね。ありがとうございます。

その時、コンコンと扉を叩く音がして誰かが入ってきた。開いたドアの隙間からヌツと長い足が出て、柔らかなカーペットを踏みしめ後ろ手でドアを閉める。誰だろうと思えば、巨大な花束。ではなく花束で上半身がスッポリ隠れてしまった人だった。

「……何しにきたの」

顔が見えなくてもレオ様はすぐに誰か分かったみたい。ものすごく低い声で目には殺気すら漂わせている。ミセスグリーンも威嚇するように二本の足を構えていた。

「み、見ま」

「毎日毎日追いつ返されてるのに、まだ性懲りもなく来るわけ？ 見舞いはいらなくて言ったよね？ 花束も邪魔だから持って帰ってね。あゝ甘クツサイ。何そのでかさ、意味不明」

「……」

花束の人はグツと言葉を飲み込んだ。何も言い返せないみたい。

……もしかして。

「陛下、下……？」

王はバサリと花束を下へ落とした。多分前が見えていなかったから、私の目が覚めたことにも気づかなかったんだろう。

花束の向こうから現れた王は、いつも整っている髪がパサついていて、顔色も少し悪かった。私の顔を見て慌てたように手で髪を整えると、早足でこちらへ向かってくる。

「サードクラス……いやソフィア……め、目が覚めたのか。良かった、この度のことでは」

「はいストップ」

王の前にいきなり大きな青い魔法陣が現れ、焦っていた彼はそこへ高い鼻をガンと思い切りぶつけた。鳥がガラスにぶつかった時のような痛そうなる音が響く。

おそらく赤くなっているだろう鼻を押さえ、恨めしそうにレオ様を見つめた。王がパチンと指を弾くと、目の前にあつた魔法陣が姿を消した。

「何をする、レオ……私はソフィアに謝罪を」

「謝罪？ あーいらぬ、いらぬ。ソフィアの手キズも心のキズも、オレが癒してあげるから。ね？」

「んっ……」

レオ様は、まるで見せ付けるかのように口づけを落とす。まだ慣れないキスに羞恥を覚え、顔がカツと熱くなる。

ふと見た王は頬を震わせ、

「おい！ それは私の後宮の女だぞ！」

その一言に私が反応する前に、レオ様の瞳孔がギツと萎縮した。多分この人、怒るとものすごく怖い。

「はああ？ オレのフィアンセだけど」

「黙れ！ 誰がそんなことを許可した！」

「正室を選んだ後だったら、誰でも好きな女をくれるって言ったのは誰ですか？ 国王が約束破るんですか？ うわあ、最っ低っ」

「わ、私はまだ正式には」

「嘘つかないでください。何とかって女と婚約したじゃないですか。えっつとウジムシだっけ、クソ虫だっけ？ 早く元気な卵が産まれるといいですねー」

け、結構辛らつ。

「し、知らん！ 私はソフィアと」

「だからソフィアはオレのもんだって言ってんだろが！」

「いや、私のものだ！」

「もう心も体もオレのモンだもーん。ね、ソフィア。キスしよう…」

…

「んんっ……………」

「レオ…………貴様ッ、一体何度……………」

「うるさああああああい！」

ミセスグリーンの怒声に二人ともピツタリと口論を止めた。

「ソフィアの体に障るでしょう」

彼女に一喝され、二人は大人しくなる。王族を、国王を黙らせるなんて、さすが大勢のお子さんを育ててきた肝っ玉母さんだけある。王は本日何度目かの咳払いをすると、

「ソ、ソフィア、今回のことは……………」

「帰ってください」

布団を見つめながらそう言った。

「ソフィア……………」

幾何学模様の柔らかなシーツをきつく握りしめる。私の中を雑多な感情が沸きあがっていた。“怒り”、“悲しみ”。そんな言葉だけでは言い表すことのできない、吐き気すらもよおされるほどのどす黒い渦。それが胸の中をグルグルと回り、時に私の呼吸を止め、時に全身を冷やしきった。

助かったからって、手放して喜べるわけじゃない。私の心はあの

時に死んだようなものだもの。彼に処刑を申し渡された、あの時に話したくない。顔も見たくない。

鼻の奥がツンとした。でも泣いちゃダメ。汚い感情があふれ出てしまう。どうして信じてくれなかったのと、どうして話を聞いてくれなかったのと、あの人を口汚くののしってしまっただろう。そんなもの、みんなには絶対見せたくない。

「帰ってください」

「ソフィア、この償いのためならなんでもする。それまでは私も納得できん」

そんなのいらぬ。ただ早く目の前から去って欲しいのに！
乾いた喉に何とか唾液を流し込む。

「では、お許しくさいますか」

王を強く見据えた。

「……何を」

「陛下、私」

帰りたいです。人間界に。

本当はそう言いたかった。でも直前で、その言葉を喉の奥に押しこむ。私のために震えてくれる人がいて、私のために泣いてくれる人がいて、私のために駆けずり回ってくれた人がいる。そんな人たちの前で、何の恩も返さないまま“家に帰りたいです”だなんてどうしても言えない。

「……レオ様と結婚したいです」

「！」

この部屋にいた全員が息を呑んだのが分かった。レオ様自身も驚いたように眼を丸くする。

一言そう言っただけなのに、私は緊張のあまり息が上がっていた。それを無理に整えると、レオ様の肩に手を置いて口づけた。彼は私の頬に手を添えながら、大人しくそれを受けてくれる。

「ソフィア……」

眉をひそめ、どこか戸惑ったようなレオ様からそつと顔を離れた。

「許してくださいませよね。何でもしてくださいさるんですよね」

見つめた先の王は、言葉を完全に失っているように見えた。口を薄く開いたまま、瞬きすらしない。

「陛下……!!」

私は先を促した。

その瞬間、王の目は鋭く変貌する。

「ダメだ」

ダメ？ どうして……？

「後宮の女が、王を差し置いて他の男と結婚したいだと？ そんなバカな話、聞いたことがない」

「では陛下のご結婚を待って」

「ダメだといったらダメだ！ 君はやはり卑しい女だな、サードク

ラスの女。レオの優しさにつけ込む気が！」

「ち、違います……っ」

「嘘をつくな！」

「兄上！」

王は冷たく私を睨むと、花束を青い炎で灰にして扉へ向かう。

どうして……？ 私にどうしろというの？

帰れないのなら、せめて私を想ってくれる人と穏やかに暮らしたいのに。それすら許してはもらえないの？

王はドアノブを握ると、なぜか扉も開けずにそのまま固まっていた。眉間に手を当て、

「……ソ、ソフィア、ち、違うんだ、あの、私はただ」

「かーえーれ！ かーえーれ！ かーえーれ！」

突然のレオ様とミセスグリーンの手拍子つき帰れコールに、王は「グッ」と声を詰まらせた。驚くほどに合った二人の掛け声に、練習でもしていたのかしらと思うくらい。

「お前た」

「かーえーれ！ <二度とくるな> かーえーれ！ <今更何だ>

かーえーれ！ <おとといきやがれ>」

ミセスグリーンの調子のよい合いの手に、王は悔しそうに歯噛みすると、何も言わずダンと扉を強く閉めて出て行った。

「ったく……！ ごめんねソフィー、大丈夫？」

王がいなくなつて、張り詰めていた糸が解けたようにホツとした。

「レオ様、ごめんなさい。勝手なことを言いました。ミセスグリーンも驚かせて……」

「大丈夫」

レオ様はそう言つて手を握つてくれた。でも、プロポーズを逃げ言葉にするなんて、最低だったわ。

「やっぱり本気じゃなかったんだね。でもまだ混乱してるだろうし、さっきの君のキスで帳消しにしてあげるよ」

「ごめんなさい」

ミセスグリーンは、ふつと小さくため息をついた。

「もう少し、ゆっくりお休み。次に眼が覚める頃には王も頭が冷えているだろうし、状況はきっと良くなつてるわ。さあ、もう一眠り」

「そう言つて寝かしつけてくれた。」

温かく柔らかかな布団の中でまどろみながら、私はこれからここで、一体どうすべきなのかを考えていた。

「というわけなのだ、シュレイザー……」

ザルクは光沢の美しいケリーの木の大きな机に突つ伏したまま、骨が溶けたかのように力なく経過報告をした。

シュレイザーと呼ばれたヴァンパイアは、国王補佐官を務めていた。肩を撫でるような美しい紫色の髪に、洗練された高貴な雰囲気をかもし出している。黒革の大きな手帳を広げ、ザルクを冷めきった眼で見ている。

「私のソフィアは、レオに惚れているらしい。……折角見つけたと思ったら、他の男と結婚だと?! 自ら口づけまでするなど、ふざけるなッ……! 私にしる!」

「いさぎよく諦めて次にいかれては?」

ザルクはガバツと顔をあげ、シュレイザーへ噛み付く。

「諦める!? ソフィアは後宮の女だ、私が好きにしていはいはずだろっ!」

「では無理やり結婚されてはいかがです。陛下なら可能でありましよう!」

「彼女の意思を無視してなど、男が廃^{すた}る!」

「では、諦めて次にいかれては?」

「なぜだ! ソフィアは私の後宮の女だぞ!」

「では無理やり結婚されては?」

「そんなことができるわけがない!」

同じことを何度繰り返したか、とシュレイザーは面倒くさそうに肩に手をやって首を捻った。

「私も申し上げましたよね? 処刑は待たれてはと。双方の言い分に食い違いがあるのなら、徹底的に確認すべきです。あなた様は確かにとっさの判断や政治的、軍事的手腕に長けておいでだが、頭に血が上ると他人の意見を聞かず見境も無くなる。リザなる女とどのような会話を交わされたのか毛ほども興味ありませんが、国王と

いうご身分でありながら全くもって情けない。幼少期からお仕え申しあげておりますが、肝心なところは何もお変わりになりませんね。お体ばかり大きくなられて、いつまで中身はそのままなのか。一回死にますか」

「……」

ザルクはまつすぐに座って無駄に襟を正す。何も言い返せなかった。確かに子供の頃、飼っていたコカトリス（鶏の体に蛇の尾を持つ獣）が突然死んで、誰が殺したんだと暴れて西の棟を半壊させたことがあった。病気かもしれないと家臣に言われても聞く耳を持たず、昨日までは元気だったんだぞと怒りを増長させた。しかしこれが結局病死と判明。次の日どれだけこの男の目が冷ややかだったか。

「……それはそうと陛下、あの女たちはどうするおつもりです？」

その言葉で、ザルクの目の色が変わった。冷徹なヴァンパイアの目。両肘をつき、組んで手の上に細いあごを乗せた。

「せいぜい苦しんでもらおうではないか。簡単に殺すなど生ぬるい。私のソフィアがあれだけの目に遭ったんだ」

「ええ、ですがあなたもその一端を担ったことをお忘れなく」

「やはりお前は手厳しい」

ザルクはそつと右袖のボタンをはずした。

捲り上げられた腕に、シュレイザーはハッと目を見開く。

そこには、あの贖罪の腕輪があった。今も腕を溶かし、徐々に中へ食い込んでいる。止血の術式が腕に刻まれており、血は出ていない。だが、身を焼かれ、神経を喰いちぎられるような激痛に変わりはなかった。

「彼女が苦しんだ分の報いは受けるさ。彼女が許してくれるその日まで」

「いくら人間より丈夫といえど、大概にしておかなければ腕がイカれますよ」

「腕の一本や二本、無くなったからといってどうということはない。私はそれほどのことをした。それにもう慣れたしな」

袖を伸ばして腕輪をしまった。

「へえ、Mっ気があるんですね」

「なぜそうなるッ!」

シユレイザーはやれやれと息を吐き、「それが自己満足で終わりませんように」とだけ忠言し、明日のスケジュールを告げ始めた。

そんな彼らを、遠くから赤い瞳で見つめるコウモリがいた。忌々しげに牙をむくと、バサバサと闇の中へ飛び去っていった。

s t . ? ? ?

A w a k i n g (後書き)

あとがき

シュレイザーは毒舌。

Side Story：登場人物人気投票結果発表（前書き）

* 本編同時更新しようとしたけど、間に合いませんでした……（ー
ー；）

ご協力いただきました投票の結果発表を行います。「世界観壊し
たくないわぁ」という方や「興味ねえ」という方はスルーの方向
をお願いします。「見てやろう」という方は、こちらの【招待状】
をお持ちの上、ヴァンパイア王国ヘルグステインキャッスルの特別
ホールへどうぞ。特別優待席をご用意しております。ああ、どうか
ドレスコードにご協力を。では行ってらっしゃいませ

Side Story：登場人物人気投票結果発表

この一年中暗闇に包まれているという世界。月は落ちてくるかと思っほほどに大きく、地面には影も伸びている。小さなランプを持った精霊に誘われるかのように、大勢のモンスターたちが集う会場へ足を踏み入れた。時折聞こえる狼の遠吠えに、「雰囲気あるなあ」と一人つぶやいた。それに鋭く反応した緑色の顔の女性は、頬紅を塗りたくりすぎてひどい様になっていた。笑ってはいけないと堪えながら、ぎこちなく頭を下げる。

遠い遠い山の向こうで雷が落ち、そのライトニングが一瞬建物を白く照らした。パルテノン神殿を思わせるような、大きくて美しい建物。ただ柱はイオニア式で、柱頭が羊の角のように渦を巻いていた。全体的にツタがたくさんからみついているが、この世界ではそれも洒落に見える。実際わざと掃除していなさそうだ。

屋根には、背中に翼を持った恐ろしい顔のガーゴイルが真っ赤な眼でこちらを見すえ、喉をクルクルと唸らせていた。こういうのは大体石像だけど、本物なのはさすが。襲い掛かってこなければいいけど。

「あの、お客様？ 招待状を」

いけない、壁のあまりに精巧な悪魔の彫刻に見とれていた。真っ黒な下地に銀文字で書かれたインビテーションを手渡した。正装した受付のミイラに「ようこそ」と座席表を渡されて入場を許される。口もとの包帯が僅かに動いたから、きつと笑ったんだろう。

「ああ、じきに始まりますから、お急ぎください」

こちらの背中に向かって忠告するその声に気を取られ、誰かとぶつかりそうになった。

「おっと、失礼」

相手が先にそう言った。謝罪にシルクハットを取った彼は顔がない。だが突如ニパリと真つ赤な三日月を描いて笑う彼に、ああ人間をからかっているのかと解した。まあ正直ちよつとびっくりしたから、きつと彼の思惑は成功したんだろう。けれど表情には出さなかつたから、向こうさんは少しがっかりしているようだった。今さら気を遣つて“わあ！”とか言つても……遅いか。

二重扉の前に佇むカメレオン男の傍を抜けようとすると、小さな眼を光らせて止められた。それがまるで大統領のSPさながらだったものだから、ヒヤツとした。でも座席表を見せると「失礼いたしました。どうぞこちらへ」と誘われる。案内つきとはありがたい。受付で手渡された座席表は、これまた不親切にも見たこともない文字で、一体どこか分からなかったから。

「こちらです」

オレンジ色の光に包まれる観客席へ足を踏み入れた。すでにほとんどが埋まつていて、いかにも高貴そうな人たちがばかりだ。ちょうどワインのお供についての話で盛り上がっていたところだったらしいヴァンパイアたちが、通路を通る人間の登場にピタリと話しを止めた。上から下まで舐められるように見られて、少しばかり居心地が悪い。あまり目は合わさないでおこう。

ホールはともきらびやかで、ドーム状になった高い天井には大きな丸いシャンデリアがぶら下がり、客席が何重もの半円を描きな

がら配置されていた。左右にボックス席もあるが、今日は使われていないらしい。カーテンが引かれて中が見えなかった。

悪魔や精霊の像がそこかしこに飾られ、一杯になった座席は少々熱気に包まれていた。上部に大きな国旗が掲げられたステージは、まだ深紅の幕が下りていて何も見えない。

すいませんすいません、と美麗なヴァンパイアたちの前を通り抜け、案内係に言われた席へ遠慮がちに腰かけた。まるでマシユマロに腰掛けたように座り心地がいい。ど真ん中のかなり見やすい位置だしね。ここが特別優待席か。あれ、でも何か違和感が。

どうやら置いてあったウエルカムカードに気づかず座ってしまったらしい。おかげですこし曲がってしまった。綺麗な顔立ちのヴァンパイアたちに物珍しそうに見つめられながら、「ハハハ」とそれを掌で伸ばしていると、開幕を告げるブザーが鳴って明かりが落ちた。ゆっくりとカーテンが上がっていく。

「魔界および人間界のからのお客様、ごきげんいかがでしょうか。本日はお忙しい中、ヴァンパイア王国の本会場まで足をお運び頂き、まことにありがとうございます」

司会の男性がスポットライトの中、コウモリの飾りがついたマイクを手にしていた。そのそばで妖精が金の粉を撒き散らし、キラキラと輝いている。

ざわめいていたホールはすぐに静寂に包まれ、くしゃみをして首が回ったガイコツや透明人間が必死にほどけた包帯を巻く姿が垣間見えた。

「どうぞ天井をのぞいてください。出迎えのゴーストたちです」

半透明のゴーストたちが、白い布を持って宙を舞う。小さな花を撒きながらこちらへ向かって投げキッスする女性や、ゆったりと笑

顔で手を振る紳士的な男性がいた。それにこちらにもこりと笑って返す。まるで雪の中に舞う天使を見ているようで、とても幻想的だった。

「えー本日のこの会場の進行をいたしますのが、国王補佐のシュレイザーでございます。どうぞ最後まで、お付き合いください」

割れんばかりの拍手の後、一度真つ暗になった。天井にはもうゴーストはいない。ただときどき頬を撫でるように何かが通り過ぎて寒気を感じた。

ダツと次に明かりがついたときには、エントリーした者たち十名と一匹が順にステージ左の椅子に一人ひとり腰掛けていた。

「全く、何なんだこれは。ソフィアとの婚前パーティーではないのか」

腕を組んでイライラとしているのはこの国の王、ザルク。ああそうか。高い位置にあるボックス席が使われていないのは、王が壇上にいるからか。国王を足元の方で見下ろすなんてあり得ないもんね。彼は確かに威厳も感じるし、相当顔もいい。だが隣に座るソフィアをチラチラと見ては、セクハラかと思えるほどあからさまに体を近づけていつていた。

ソフィアは色白で瞳の綺麗な本当に可愛らしい子。そんな彼女が気になるのは分かるけど、舞台上でそれはやめなさい。ほら、それに気づいた彼女がそれとなく椅子を遠ざけた。またそれをしつこく追いかけるサマがなんとモイタイ。横の席に座るレオナルドに、おもしろい椅子を引き戻されたしね。

わあ……それにしても金髪碧眼の彼もかなりの色男だ。やっぱりヴァンパイアってすごい。

「えー、登場人物人気投票、お一人様一票ずつ投じていただきました。その総数は実に148票でございました。まことにありがたい限りです。ではさっそく第1位から発表いたします」

ドラムロールが鳴り響いたのに反応して周囲を見渡すと、ガイコツが前に座る別のガイコツの頭を叩いて音を出していた。会場を舞うスポットライトも、会場後ろに控えるチヨウチンアンコウの怪物が頭を左右に振っている。

ジャン、と言う音と共に照らされたのが、

「エントリーナンバー3番！ レオナルド様！」

「え、オレ？」

レオナルドは驚いたように自分を指し、ゆっくりと立ち上がった。歓声に手を振る。こちらを見てウインクした気がしたのは、思い過ぎだろうか。

「オレはてつきりソフィアかと」

遠慮がちに首を振る彼女の頭を優しく撫でる。それに小声で何か言う王に、また小声で返されて口をつぐんでいた。何を言ったのかは知らないけど、勝てないのなら何も言わなければいいのに。

「レオナルド坊ちゃんは71票獲得の堂々の一位です。えー、理由をいくつか抜粋してご紹介を。【ソフィア信じて大切にしている所です】【主人公一筋っぽいから。優しいし、大切にしてくれそう】【男らしい！優しい】【ソフィアのことをずっと信じて助けようとしてくれてたから。】【どんだんイイ男になってきた〜vv】【つか勝負にならなうか？ぶっちぎりで、レオの方が良い男

なんですが【面白いし、優しいし、なんだか可愛い！是非ソフィ
ーと幸せに】などと。主にあの件に対するレオナルド坊ちゃんの
姿勢が高く評価されたようです」

「男らしいとかイイ男とか照れるな。オレはただ、自分の愛する女
性を信じ続けただけなんだから」

「さすがどこかの国王とは違います」

「だからソフィアのは、オレが必ず幸せにするよ」

「おい、どうということだッ！」

不機嫌そうな王を無視して、シュレイザーは資料を見つめる。

「えー、あとこちらは、叶 妹さんか何かですかね？ 【ソフィア
を唯一信じてあげたmen'sだから】」

「多分関係ない人だと思うよ、シュレイザー。でも、ありがとう」

ゴーストの運んできた花束を受け取ると、笑顔で拍手を送るソフ
ィアの頬に口づけて座った。顔を赤くする彼女との仲睦まじい様子
を眺みつける王からは、どす黒いオーラが目に見えるかと思えるほ
どにじみ出ていた。でもそれをものともしないのは、なんともレ
オらしい。

「では第2位の発表です。エントリーナンバー1番、43票を獲得
したソフィア様！」

「わ、私……？」

戸惑ったように立ち上がり、観衆の数と拍手に気おされるように
ぎこちなく礼をした。

「本当にありがとうございます、皆さんのおかげです……」

「理由をいくつか。【心が強いと思ったから！】【真っ白で健気で、

かわいいです^^【幸せになって！と思わずにはいられない素敵な主人公だと思います、】【けなげだけど、意思が強く心根もやさしいから。本当に大切なこともはんだんできそうで人としても好感持てる】【好感がもてる主人公のソフィアがすきです】【健気でいいこだし大好きです】とソフィア様のその内面が評価されたようですね」

「全部もつたいないお言葉です。ずっとずっと大切にします」

彼女の両目に浮かぶ薄い涙が、ライトに反射してキラキラと輝く。ブーケを受け取り、花がほころぶように微笑んだ。

「この上位お二方を応援する言葉がたくさん届いておりますよ。例えば、レオナルド坊ちゃんへ【押せ！押せ！にーちゃんに負けんなー！】や、【想いが通じてレオとソフィアが幸せになってもらいたい！】、【二人がほんとうの意味で好きあって、結婚してくれるといいです】、【レオナルドの方がソフィアの相手に相応しいですよー。王よりよほどソフィアをよく見ているし分かっていると思う】【ソフィアには明るく優しい彼を是非非プツシュしたいです】【ソフィアの旦那様にピツタリ！】などなど」

それにレオナルドが立ち上がり、花を持ったまま頬を赤く染める彼女の背中へ手を回した。

「どうするソフィア。期待に応えちゃおっか？」

「あの……」

「シュレイズアー、次だ次！」

王は立ち上がってレオナルドの首根っこを掴むと、椅子へ放り投げるように無理やり座らせた。とことん邪魔する気らしい、執念深いな。

「……はいはい。えー第3位はエントリーナンバー4、26票を獲得したミセスグリーン！」

「いやっほーい！」

その様子に観客席から笑いが漏れる。

小さくてあまりよく見えないけれど、飛び跳ねながらもろ手を挙げて大きく振っているようだった。今日はどうやらテンションMAXらしい。

「では理由を。【ソフィアのよき相談相手というポジションが何とも素敵です！】【肝っ玉かあさんみたいで、温かいから（笑）】【ソフィアのためにまっすぐなところ。登場人物の良心だと思っ】【かつこいい！】【お母さん〜】【主のために愚王に対して直訴した点】など」

「ううう、ありがとうね……長年クモやってるけど、こんなにたくさん温かい言葉をもらったのは初めてだよ……ううう」

飛び跳ねたり泣いたり大変だな。彼女は小さなハンカチを取り出し、チーンと鼻をかんだ。あれ、クモって鼻あるのか。

今まで黙って聞いていた王が、こらえ切れない様子でガタンと椅子から立ち上がった。

「ちょっと待て、納得いかん！」

「そうですね！ どうしてここまで私たちが入ってませんの!？」

「夫婦そろって何を」

王に追従して立ち上がったリザへ、シュレイザーは面倒くさそうにそう言った。

「夫婦なわけがあるか！ ソフィアに負けるのは仕方ないとして、なぜ私がレオやこんなクモ以下なのだ！ それにさつき“愚王”とか聞こえたが、私のことか！」

「ご心配なく、陛下。あとで発表しようと思っておりましたが、実は陛下も1位です。」

そう言ってシュレイザーは、下の方から資料をピックアップして一番前に乗せた。それに王は不敵な笑みを浮かべて椅子に座りなおす。

「何だランク外と見せかけて、私を驚かせる予定だったのか？ はは、下手なことを。レオと同率なのは気に食わんがまあいい、理由を読み上げる」

「えー主な理由【ヘタレすぎ！！笑】」

「……」

一瞬で王は真顔になる。

「あとは、【あほだから。王なのに、感情で動きすぎ。周りがいくら優秀でもあれでは】【本来、主役の男性ザルクが、良いはずなのだけど、あまりにも、カッコ悪くて頭にくる。（*＜w＞*）】【リザ達にまんまと騙されて、見ててイライラしたから！】、【嫌いではないけれど、諸々の行動からソフィアとの恋愛に関しては応援し辛い】、【真実を見抜けない愚鈍な王】、【もっと早く気付けよ】、【救いようがない】あとは……」

パラパラと資料をめくった。

「待て！ 待て待て！ 何だそれは！ 本当に1位なのか!？」

「60票獲得、‘逆’人気投票堂々の第1位でした。本国への懸念

を示してくださる方もおられ、全く、補佐官としてお恥ずかしい限りです」

「何!?!」

「ですが、建設的な意見もございますからご紹介を。【ちょっとここで一発大きなカウンターをくらつといた方が、彼も一回り成長出来るのでは】【一万年反省してから出直しておいでなさい。一万年と二千年前からあ・い・し・て・る を歌いながら反省しましょう、ザルク君】」

「どこが建設的だ! そんな歌知らんわ!」

むしろ歌わんでくれ。名曲が腐る。

「もつとこう、可愛げのある意見はないのか!」

「可愛げ……ああこれですか【だってたらしでバカちゃん?】」

「言い方が可愛いだけで、内容はボロカスだろうが! 私は断じて、たらしでもバカでもない!」

「【自分が正しいと信じて疑わない所です】」

「うるさアい! 何だこれは、一体人気投票ではどうだったんだ」

「陛下は4同情票ですね」

「妙な単位をつけるな! くっ……見る目がある者もいるようだが、この私がたつたの4票だと?」

体を震わせる王にシュレイザーは、次のページをめくった。

「ちなみに、陛下とソフィア様とのことに関するご意見をご紹介」

「今度はまともだろうな」

「ええ、当然。例えば……【主人公に対してあれほど酷い事をしてしまった後では、愛を請う資格もないと思います】【自分が惚れた相手が解らんような馬鹿に、ヒーローを名乗る資格は無い! (断言)】

【気持も分かるし嫌いではないんですが、ソフィーの相手としては…】【ソフィアのことについてはレオがんばれば超がんばって！というのが現時点の評価です】【自業自得。とっととソフィアを諦めて、レオと幸せになるのを、指を銜えて見てろ！って感じですね】【正直、一番ソフィアのお相手にならないで欲しいキャラかな】【すいません。話の都合上とはわかってても、イラツとします。報われたくない人です。本当にすいません】
「全否定ではないか！特に最後のは低姿勢とみせかけて心の破壊力がハンパないぞ！」

堪えきれずに立ち上がって「違っだろう、もっと別のものを！」と吠える。

「別の……あー、ありました、ありました。これですね、【リザととってもお似合いだなと思いました】」

「別の女になっているだろうが！」

「これしかなかったので」

「全く、何たる由々しき事態だ……」

王は頭を抱えた。全部お前のせいだろう。

そんな王に、リザはにんまりと笑う。

「もういやですわ陛下、お似合いだなんて言われてお照れにならないで」

「うるさい、二度と私にまわりつくな！」

「もう陛下だったら、あんなに愛し合ったではありませんか？」

「黙れ。又いただけだ」

「はいい!？」

「オッホン！ 45票獲得、逆人気投票第2位はエントリーナンバー15、リザ」

「な、私が!？」

リザは王の腕から手を離してシュレイザーを睨みつける。

「主な理由【怖いっす】【ひどいから。とゆうか残酷】【好きになれる訳がない】【いくらなんでも、酷すぎる】【恐いです…】【悪女】などなど。痛い目にあわせてほしいとの意見もありますね」
「あーら、一般市民の皆さんにはこの愛の深さがお分かりにならないのね」

完全にこちらを見ながらそう言っている。一般市民以下のお前に言われたくない。

「えー、他には【「情けは人のためならず」かと…実際そうはいかないかもですが、やはり自分のしたことって自分に反ってくるのでは?】、【完璧に悪い子ではないだろうが、善悪くらい自分で考えてほしかったな】という意見もあるので、やはりきちんと反省し」

「反省!？ 何をわけの分からないことを！ 私に入れた方々は私のこの美貌に嫉妬してるのでしょうか？ 正直に言いなさいよ、ク・ヤ・シ・イ・で・すって。オーツホツホホホ！」

「はい、誰か舞台から下ろしてください」

屈強な衛兵たちがリザの周りを取り囲む。

「ちょっと！ 放しなさいよ！ 私は悪くなああい！」

「ああ、ついでにその【性格が悪い】【中途半端な悪役】たちも誰が中途半端ですって?」

「どうして私たちまで!」

「リザのせいだわ……」

「何ですって!?!」

リザがジエニファアーら三人のおまけたちと共に、ギヤーギヤーわめき散らしながら衛兵に舞台袖へと引きずり下ろされていった。

「どうもお騒がせいたしました。あ、人気投票の方でも一票入っていたのを忘れていた。【あまりの悪女っぷりに感服!】とのこと。あんなヤツにありがとうございます。私が代わってお礼を」

そう言ってペコリと頭を下げた。

「えー陛下に流れをすっぱ切られてしまいました。人気投票同率第5位、エントリーナンバー9、シェイラ、エントリーナンバー10、司書の蛇男、エントリーナンバー11のアンデッドル先生! それぞれ一票ずつ獲得です」

「え、アタシらも?」

「一度しか出ておりませんのに」

「フヒ、フヒ、フヒ嬉ひ恥ずかひ!」

シェイラは驚いたように眼を丸くしていたが、蛇男はいたって無表情であった。先生は笑った瞬間コロリと目玉が零れ落ち、「あららら」とそれを追いかけてそのまま舞台袖へと消える。

王は舞台に突っ立ったまま、怒りに拳を震わせていた。

「私(4票)がこんなやつらと大差ないだと……ッ」

ビシッと観客席を指した。いや、完全にその指先がこちらを向いている。

「人間たちよ! このたび私を“好きな登場人物”へ入れなかった

ことを、あとで泣いて詫びるがいい！ 彼女は私が必ず手に入れてみせる！ なあソフィ……あれ」

王が席を振り返ると、すでにそこには誰の姿も無かった。

「何かゴメンね、バカな兄上で。いざとなったらオレが王になるよ。じゃあ、ソフィア帰ろうか」

「はい。皆さん、本当にありがとうございました！」

レオナルドは手を振り、ソフィアは丁寧にお辞儀して舞台袖へと帰っていく。

「おい、どういうことだ！ 待て！」

その後を追いかけていく彼の姿は、何とも哀れに見えた。あれで一国の王なんだからなあ。

「みなさま本日はお越しいただき、まことにありがとうございます。頂いたコメント全てをご紹介できず非常に残念です。私が責任を持って全てに目を通し、メーカーで線を引いて陛下の部屋の壁に貼り付けておきます。ではまたお会いできる日を楽しみに……ああ、【シュレイザーにも期待しています】と書き込んでくださった方、まことにありがとうございます。【もつとやっちゃってください】との意見もありましたので、これから腕輪以上にきつく陛下を締め上げて参ります。それではこれにて閉幕。人間界へのお帰りの際は、どうぞお気をつけて……」

大きな拍手と共に幕が下り、みな帰り支度を始めた。

混雑を避けようと、誰もいなくなるのを待ってからゆっくりと席

を立つ。やれやれやけにドタバタしていたな、と軽く息を吐きながら、ホールの出入り口に立って目の前の巨城を見つめていた。時々壁から出たり入ったりしている青白い光は、ゴーストだろうか。

頭を下げる受付のミイラに会釈して通り過ぎたその時

「いやあ、ワタクシまでお褒めくださる方がおられるとは。いやはや、ありがたい」

そんな独り言が耳をかすめて足を止めて振り返ったが、そこにはもう誰もいない。

少々曲がったウエルカムカード握りしめ、さっきまでのことが現実であったことの証を求めた。

S i d e S t o r y : 登 場 人 物 人 気 投 票 結 果 発 表 (後 書 き)

**T h a n k
y o u !**

「ああ、ああ。そうでございますか」

世話係の若いゴースト、ミントさんは、部屋の片付けをしてくれながらそう相槌を打った。彼女は少しばかりおっちょこちょいで、水差しをひっくり返したり、レオ様の体を通り抜けてしまったり（彼はそのあまり冷たさに閉口していた）、でもとてもおしゃべりで明るくてやさしい人だった。特徴的な語尾ののびし方が、何だかほっこりする。

彼女によると、私はあの処刑のあと一週間ほど眠っていたらしい。血がたくさん出ている、もう少しでショック死するところだったと聞いて寒気がした。あの時は覚悟みたいなものを決めていたけれど、今から考えてみると正常な思考ができていなかったただけかもしれない。今になって、恐ろしさに足が震える。

柔らかな枕にもたれ掛りながら、手首の包帯を見つめた。未だズキズキと痛むし、指先は痺れが残っている。頭も少しクラつくことがあった。

でも、私は生きてる。みんなに助けられて。

恩返しをしたら、人間界へ帰る方法を探してみよう。それに關しては授業でチラッと、人間が魔界から戻る方法はないと聞いていたし、あったとしても別れがたい人たちはいる。

でも突然連れてこられたこの世界には、生まれ育ってきた私の歴史がない。それは私を、とても空っぽな存在へと変えてしまった気がしていた。どこか非現実的な日々が、いつか変わって見えるときが来るとは到底思えなかった。誰かを愛せばまた違うのかもしいけれど、それはまた分からない。

「で、ですねレオナルド様はそりゃあ、頭もいくて、エ工人なんですよ。ここへ来てかれこれ五十年ほどになりますかねえ、あの方の悪い話なんて妬み以外にはほっとんど聞かない。この国の医師の中でもトップクラスですし、尊敬を集めてらっしゃるんです」

短い髪を耳にかけながら、ミントさんは天蓋つきベッドの柱を拭く。

医師師とは医療系魔術を扱うプロフェッショナルのことらしい。合格率1%以下の超難関国家資格で、膨大な術式と数万種類の魔術の意味や組み合わせを覚えなくてはならない。さらにその術式はガラス細工のように繊細で、発動させるのが非常に難しいSランク魔術らしい。

一度この部屋の本棚にある基礎本を手にとって開いてみたけれど、文字で真つ黒なページに頭がくらくらとした。正直、お勉強は得意じゃない。

「ですからソフィア様も、あっちの方はご安心くださいませね」

「あっちの方……とは？」

「ほらあ、やつぱり“初めての時”は緊張なさるでしょ？ けど医師師のあの方ならそこはウマあく」

誰もそんな心配してませんッ！ というかこの人たちは、ヴァンパイアに限らずそんな話題ばかりなの！？

「ムフフフ」
と笑う彼女に、下手な愛想笑いをしていると扉がノックされた。

「あいあゝい。今開けます」

誰だろう。レオ様が帰ってきたのかしら。ここは一応彼の部屋だ

けど、私が着替えていたりしてはいけないからと、必ずソックをして
てくれていた。

「えっと、どち陛下アアッ！」

半ば叫ぶような声に、ビクッとした。

“陛下”……？ 扉の向こうに佇む、黒い瞳と視線がぶつかって
ヒヤッとした。どうしてそっとしておいてくれないの？ あの日の
ことは忘れたいのに。

手首が、痺れとは別の震えを起こし始めていた。

「あああ、あの、陛下。申し訳ございませんが、レオナルド様に
入れるなど申し付けられておりまして」はい

「五分でいい」

「ででで、でも……」

ミントさんは困ったように私を振り返った。

王と私は、いずれ何かしらの話し合いをしなければならぬはず。
それならもう、この際一気に終わらせてしまおうと思った。その方
が早く前に進める。両手を握りしめ、無理やり震えを封じ込めた。

「中へお通ししてください」

「ソフィア様……よろしいんですか」

「はい。五分だけなら」

王は私を見つめたまま、部屋の中へ足を踏み入れた。ミントさん
は心配そうにしながら、ここをそっと出て扉を閉めた。

怖い、逃げ出したい。けど、皆に頼ってばかりはいられない。

私だって頑張らなきゃ……！

「いや、そのままがいい」

ベッドから下りようとした私に王はそう言った。めくった布団を掛けなおし、王がベッドのそばの椅子に座るのを俯き加減に見ていた。

「何の御用でしょう」

「ソフィア、これはほんの詫びの印に……」

そつと、赤いベルベット生地のカースを差し出してきた。細長いそのの中身は、大体想像がつく。

「結構です」

手を出さず、それだけ言った。王は自らカースを開けると、そこには息を呑むほどに美しいネックレスが収められていた。人間界のダイヤモンドより美しいものが、この世にあったなんて。でも

「いりません」

「これだけでは不満か？」

それに少しムツとした。私は物が欲しいわけじゃない！

「いいえ。もしレオ様が同じものを差し出してくれたなら、私は涙を流して喜んだと思います」

それに王は頬をピクリと上げた。

「つべこべ言わず受け取れ、それまでここから動かんからな！」

な、何て勝手な……！　　というか仮にも謝りに来たのになぜ上から目線なの？　私はそっぽをむいて、かたくなに受け取りを拒否した。

王は諦めたように手を下ろすと、大きくため息をつく。

「分かった、では何が欲しい？　レオとのことは絶対に認めん！　だが物なら宝石でも家でも君だけの国でも、何でも与えてやる」

「何でも？」

「ああ、何でも言え」

「……せん」

王は僅かに小首を傾げた。聞き取れなかったらしい。

「すまない、もう一度……」

「いらなと言ったんですッ！　何も！」

「……ソフィア」

この部屋に誰もいなくて良かった。いいえ、たとえ誰かいたって、そんなことは構っていられなかったかもしれない。それほどまでに今ここは、様々な思いに支配されている。

この人は何でも物で償えると思っっているのだろうか。だとしたらヴァンパイア王国史上最も優秀な王が聞いて呆れるわ。心の傷が物で満たされるのなら、そんな簡単なことってない。ヴァンパイアには分からないのかしら。それとも彼にそんな人情の機微が解せないだけ？

マイナスの感情が、火山のマグマのように熱く煮えたぎる。

「陛下、どうして信じてくれなかったんですか……」

聞かれたことはいくら素直に答えても、彼はそれを嘘だとはねつけた。

「ずっと違つと言っていたのに！」

私は一度たりとも嫌疑を認めなかった。分かってもらいたくて、何度だって必死に話した。

「ずっと真実を話していたじゃありませんか！」

きっと分かってもらえると、思っていたのに。王なら真実を見してくれるはずだって信じていたのに……彼が下した結論は

『ソフィア・クロース。お前に右手首切断、及び死刑を申し渡す』

あの冷たい目を忘れたことなんてない。あの残酷な言葉の記憶が消えることなんてない。今だって、本当は怖い。目が覚めたらまた、私はあの暗くて寒い檻の中にいるんじゃないかって、明日が処刑の日なんじゃないかって、恐ろしくて恐ろしくてたまらない。

「今更何をしに来たというんですか！ あなたなんて……あなたなんて……っ」

ダメ、押さえなきゃ！ 感情をぶちまけたって何も解決しない。

「ソフィア、私を恨んでいるのなら、私を好きにしてくれて構わない。煮るなり焼くなり、君の気の済むようにしてくれ」

「そんなこと」

できるわけではない。

とどめきれずに零してしまった雲に、王は胸ポケットから青いハンカチを取り出した。それを、首を振って拒否する。頬を伝う涙を、自分の手で乱暴にぬぐい取った。

王は椅子を下り、ベッド脇で膝を折る。

「分からないんだ。どうすれば君に償えるのか。その傷を癒せるのか。レ、レオとのことを認めれば……君は幸せか？」

そんなこと私にも分からない。どうすれば傷が癒えるのかなんて私だって知りたい。分からないの！ 私自身にも。

ダメ、どうしよう……涙が止まらない。この人の前で、おいおい泣いているところなんて見せたくないのに。

「すまない、ソフィア。……すまない」

あんなことされたのに、眉をひそめ目を閉じて謝罪の言葉を口にする王に、これ以上の思いをぶつけることなんてできなかつた。恨んでいるわけじゃない。ただ胸が苦しい。深く傷ついた心が痛い。手首のケガなんかよりずっと。

助けて……誰か。

「 ようが」

ポツリと言ったそれに、王は固まっていた。私はきちんと涙をぬぐって、呼吸を整えた。

「太陽が欲しいです。くださいますか？」

あなたにとって忌々しいその光を。心にまとわりつく氷を溶かすあの温かな日差しを。この胸の闇を明るく照らすあの金色の陽を私にくださいますか。

もちろん “太陽のように赤いルビーのネックレス”、なんてオチはいらないわ。

王はキリツとした眉を尺取虫のように寄せ、じっと床を見つめた。闇の住人である彼に、そんなもの与えられるはずはない。きつとこれで、まとわりつくのをやめてくれるだろう。それでいい、きつと。

「いいんです、その代わりもう私に」

「いいだろう。君がそれを望むなら」

……え？ “いい” だなんて、何を言ってるの？ どうするつもり？

「宝石ならいりません」

「君の意図は分かっているつもりだ。今すぐにと言うわけにはいかんが、約束は絶対に違わ^たん。国王の名に懸けて」

そんな大層なものを懸けてどうするの。

でも熱を帯びたように潤う漆黒の瞳から、なぜか目をそらすことができなかった。どうしてそんな光を湛えて私を見るんだろう。私に対する謝罪の念以上に、何か別のものを感じて戸惑った。これが処刑しかけた人間を見る目？ 一時とはいえ、あんなにも恨んでいた人間を見る眼差し？

「ソフィア……」

王は突然、こらえきれない感情をぶつけるように私を抱きしめた。強く引き寄せ、髪に顔を埋めて切なげに息を吐く。

これは一体

「や、やめてください！」

胸を精一杯強く押した。それに王は苦虫を噛み潰したような顔で、

「それほどレオが好きか」

レオ様がどうかなんて話じゃないじゃない！ 王は身勝手すぎる！

「え、ええ！ とても好きです！ レオ様はお優しいですし、頭もよくて、男らしくて。陛下なんかよりずっとステキな方ですから！」

たたみ掛けた言葉に、王はイライラと口元を震わせた。さっきレオ様とのことを認めるようなことを言ったのに、何なのこの変わり身の早さは。

王は掛け布団の上に乗っていたネックレスのケースを掴むと、あるうことかそれを二つにへし折って打ち捨てた。

「何をするんです！ 物に罪はありません！」

「うるさい！ 後宮の女でありながら、他の男に色目を使うとは何事だ！」

い、色目！？

「まさかレオともう……」

王は自分で勝手に言っておきながら腹が立ったのか、勢いよく立ち上がって私を見下ろした。

「どうなんだ！ 答えろッ！」

どうしてまた私が怒られてるの？ 何がしくて何が言いたいのか、さっぱり分からない。

「陛下には関係ありません！」

「関係ないわけがあるか！ 君は私の妻になるんだぞ！」

「……え……」

一瞬頭の中が真っ白になった。今、王は“妻になる”って言った？ 誰が？ 私が？ 誰の？ 王の！？

王は自分でも少し驚いたような表情をしていたけれど、どこか満足そうにベッドの端へ腰掛けた。

「まあ、女性である君の体に傷をつけてしまったのだ。私が責任を取って罪滅ぼしさせてもらわんとな」

そのニヤケ顔が、罪滅ぼししたい人の顔ですか？ 何いいコト思いついたような表情をしているの？

ふとおじいちゃんのことを思い出した。町で女性をナンパしている男性を指差しては、よく言っていた。“ああいう顔をしとる男は、大体目の前の女を裸にするために言葉を吐いとるだけじゃ。絶対に聞くんじゃないぞ、ソフィー”と。これはまさしくそんな顔じゃないの？

「結構です！」

それでも王は「それに」と言葉を繋ぐ。何を言われたって、私は

「私の妻になればこの国の全てが手に入るのみならず、“アラゾークの魔鏡”^{まきよう}が何でも願いを聞き入れてくれる」

私の心は、絶対に揺れたりしないと思っていたのに。その一言に、激しく揺さぶられてしまった。

「何……でも」

「ああ。数万年に渡ってヴァンパイアを守護してきた鏡は、王妃の願いを魔力の及ぶ範囲、どんなことでも叶えてきた。あれなら海とて干上がらせることができる。山とて砂地にできる。星を降らせることも、川の水を銀色に変えることも可能だ」

そんなことができるんなら、きっと人間界にだって帰れる。掌がジツと汗ばみ、緊張して心臓がバクバクと鳴いていた。見つかったんだ、家へ帰る方法が。あつたんだ、帰る道が！

「その気になつたか？」

王にグイとあごを引き上げられた。瞳に勝ち誇つたような笑みを浮かべる彼が映る。

帰る方法は見つかった。でも、それにはこの人と……。

「では誓いのキスといこうか」

王は私の唇をスツとなぞると、ゆっくりと顔をよせてきた。これを受け入れれば帰れる。暖かな日の下へ、町みんなの元へ、家族の思い出がつまつたあの家へ。

でも

「イヤあつ！」

王の胸を思い切り突き飛ばした。完全に気を抜いていたらしい彼の体は予想外にたやすく吹き飛び、ベッドの下へズトンと落っこちる。その様子とあの処刑を申し渡されたときのギャップが著しくしかもあまりに見事なコケっぷりだったものだから、思わず笑いそうになって慌てて口を押さえる。

「な……にをする！」

勢いよく立ち上がった王は、ぶついたらしい頭をさすりながら私をにらみつけた。

「つ、罪滅ぼしと結婚が一体何の関係があるです！」

「君は何も分かっていないようだな！ 私と結婚するということは、君と私の子が次の国王になるのだ！ 国の母になれるんだぞ、素晴らしいではないか！」

“君と私の子”って、そんなことまで妄想してるの？ この人気持ち悪いよ、お兄ちゃん……っ！ ギュッとネックレスを握った。

「何だその嫌そうな顔は！ 私のものになる覚悟を決めたんだろう。だったらさっさと子を成そうではないか」

肩を掴んでベッドへ押し倒され、馬乗りにのしかかられた。また唇を近づけられて必死に顔を背けるけれど、それをしつこく追いかけてくる。頬に何度も王の唇が当たった。帰りたいのはやまやまだけど、そのためにこの人に身も心も売るなんてこと……。

「いや……あつ」

「こちらを向け！」

無理やり上を向かされ、唇が触れ合いそうになったその時　バ
アンと扉が開いた。

「陛下ああ！　五分経ちましたよ。ちょうど！　きっかりです」
「！」

ミントさんが時計を手に戻ってきた。それに王は顔を上げ、「ウルサイ！　二時間延長だ！　出て行け！」と怒鳴りつけた。

だめ、ミントさん！　私を置いて行かないで！

「出て行くのはそつちでしょ？」

穏やかな声に、王は肩をビクつかせ、私は胸をなで下ろした。

「なにやってんだよ」

ミントさんの背後から出てきたレオ様は、思わず背筋がゾクツとするほどに鋭い目つきをしていた。

王は咳払いしながらゆっくりと上からどけると、「考えておいてくれ」と小さく言ってその場を後にした。それを追うようにレオ様も「まだ仕事が残ってるからゴメンね」と出て行く。

ミントさんは気を遣ってお茶をいれに行ってくれた。

考えておいてくれも何も無い。私を処刑しかけた相手と結婚するなんて、絶対にあり得ないことなんだから。

迷うとすればただ一つ……。その魔鏡の存在だけ。

「傷口は完全に治りそうなのか」

部屋を出たザルクは、開口一番そう言った。

広い廊下の天井は、火を吹くドラゴンや戦う悪魔、そして魔歌を歌う精霊たちが競うように描かれていた。一定間隔で並んだ人よりも大きな絵は、歴代の王や活躍した騎士が描かれて眼をらんらんと輝かせている。

「彼女にバカなところを見せて、自分への恐怖を払拭しようってハラ？ それとも」

上から釣り下がる豪華な電飾が、二人の姿を白い大理石の床へ映し出す。

レオナルドは靴裏が廊下を叩く小気味のいい音を響かせながら、ゆっくりとザルクの方へ歩みよった。

「ッ」

腕を強く掴むレオナルドに声を詰まらせる。

「こんなもので自分を傷つけて、彼女の同情でも買う気なのか」

それをザルクは自嘲気味に笑う。

「この腕輪のことを彼女に言いつもりは毛頭ない。自戒だ、あんな事態を招いたことへの」

「そ」

レオナルドは掴んでいた手を離すと、ザルクの頬に思い切り拳を叩きつけた。受身も取らなかつた彼の体は吹き飛び、廊下の端に置いてあつた大きな壺をガシヤアンと激しく音を立てて割る。

「兄上、オレが弟でよかつたね。赤の他人だつたら……殺してる」

その眼は氷のように冷たく、そして青かつた瞳は血のような紅あかに変わつていた。ザルクは切れた口内から横へ血を吐き出し、服についた壺の破片を払つてゆつくりと立ち上がった。

「お前ごときに私が殺せたとも思えんがな」

「さつき彼女にしたキスの分も殴つてやろうか？」

「生憎だが未遂だ」

「へえ、オレは今朝もしたけどね」

青筋を立てて怒りを湧き上がらせるザルクに、いつもの瞳の色に戻つたレオナルドは呆れたように息を吐いた。

「ま、これに懲りたらさ 今度からはオレの言うことを聞け」

前髪をサラリとゆらし、カツカツと廊下を歩き出すレオナルドの背を見つめる。

「生意気なことを」

だがザルクは内心驚いていた。これに懲りたら……“二度と彼女には近づくな” そう言われるだろうと思つていたのに。

レオナルドに殴られたのは初めてだった。彼も普段、人間の女の生死ぐらいで感情を乱すこともない。それほどソフィアに入れ込ん

でいるのだらうことは容易に想像できる。それでもあの男はこの事件を盾に、自分を突き放そうとはしなかった。後宮から出せとすら言わない。彼女へ抱くこの同じ思いに、気づいているはずなのに。

「本当に、生意気な弟だ……」

彼女のことを一番に考え、彼女の望むことをしてやろうと誓う彼の思いを、ザルクはひしひしと感じていた。それほどまでに彼女への思いが深いことも。

しかしそれが分かっているにもかかわらず、それでも彼女から手を引く気は起こらなかった。それは自分も、それだけ彼女を愛してしまっているからだらう。身勝手なのは分かっていた。あんな目に遭わせておいて。

「同じ女を、同じように想っているのに……私の方は随分と格好が悪い」

ザルクは大きくため息をつくとき、痛む頬をさすりながらレオナルドとは反対の方向へと歩き出した。

s t . ? ?

The Razor's Magic Mirror

あとがき

二人とも仕事さぼって彼女の部屋に行っていました。

(# ^ ^) ` ` o ` ` 「陛下マジ戻ってきたらぶっ殺す B Y シュ
レイザー」

「一時はどうなるかと思ったけど、本っ当に良かったわ、ソフィー」

私の肩の上で、ミセスグリーンは私の頭を撫でながらやれやれと軽く息を吐き出した。少し照れくさい。

数日後、私は無事に学校へ通えるようになっていた。ジンジン響いていた手首のしびれも、ひどかった傷口もレオ様のおかげで随分と良くなってきた。

「たくさん迷惑をかけて、ごめんなさい」

「迷惑だなんて思っただけよ。少なくともアタシたちはね」

「ふふ、ありがとう」

嬉しいその言葉。私にできることは少ないけれど、その中でできる限りのことをしたい。この優しき恩人たちに。

ちなみに王と私の事件は、王やりざたちを支援していた貴族の名誉のため、徹底したかん口令が敷かれてある。

先の処刑云々に関しては、“別の者と取り違えた”なんてあり得ないことになっているし、王とりざとの婚約はもちろん解消だけど、病で困っている方々の力になりたいと泣きつくりざらを“慈悲深く寛大な王”が泣く泣く城から出してやったなんてことになっていた。それを聞いたときのレオ様とミセスグリーンの無表情っぷりは、今でも忘れられない。

そつと灰色の空を眺める。あの時もそう、こんな大きくて白い月が出ていた。

「彼女らはどうしているのかな」

それだけでミセスグリーンは、私が何を言いたいのか分かってくれた。たくさんの時間いっしょにしていると、言葉少なでも分かり合える。

「今は牢に入れられてるって聞いたよ。ただ今も罪を認めてないらしいわ。あとは……陛下次第かね」

どうするつもりなんだろう、あの人は彼女らを……。それを考えると、傷が少し疼いた。あの子たちを、同じ目に遭わせられたら満足？

「会いたい、って本気？」

別の日。リザたちに会いたいという私の言葉に、往診に来てくれていたレオ様が綺麗な瞳を丸くした。

「はい。彼女たちが今どうなっているのか気になって。ダメ……で
すか」

牢へ入るには許可が必要だし、そもそもそこは後宮の外。たぶん叶わないだろうなと思いつつ、一応相談してみた。

レオ様はベッドに腰掛けたまま“うーん”とあごに手をやり、

「後宮の女性といえど、君はあの事件の当事者だからね。希望する
なら本来は会えるんだろうけど、何せ彼女らは城から出て行っ
たっ
てことになってるからなあ。君が牢を出入りしているのを見られる

「のはやっぱりマズイよ」

ダメなんだ。“会って何を話すの？”と聞かれれば少し困るけれど、彼女らの現状をこの目で確かめたいのかもしれない。

「ああそうか。見られなければいいんだ」

「え？」

イタズラっぽい笑みを浮かべる彼に、私は首をかしげた。

「あ、あの……レオ様」

「シツ。大丈夫、ちゃんと隠れてるよ」

ほ、本当に？ レオ様から手渡された、姿が消えるという黒いマントを頭から被り、後宮と城の境目にあるチェックポイントへ近づいていた。こんなので本当に通過できるの？

レオ様は何事もないかのように内ポケットから三折の紙を取り出し、向かい合う二つのカウンターのうち左側に乗せた。チェック終了を彼の後ろで待っているけど、背中から別のカウンターの巨大一つ目さんの視線が突き刺さっているような気がする。

ここは相当に厳重な警備が敷かれてあって、壁際には大きな槍を持った巨大な岩男衛兵さんがずらりと並んでいた。ゴゴゴゴと石同士の間を擦れ合う音を立てながら私たちを見下ろし、他にも数人のブルドッグ衛兵さんがスンスンと鼻をヒクつかせていた。そのつばらな瞳の眼光っていったらない。

っていつてるそばから目が合った！ こ……怖いよ。

「妙な匂いシナイか」

「ああ、そだな。女だ」

ヒソヒソと話すその声に心臓が飛び跳ねた。だって確実に私のことよね？ 彼らはレオ様の方を目くばせし、身なりを整え咳払いをしてそつと声をかける。どうしよう、レオ様に知らせたほうがいい？！

「レオナルド公爵様。大変恐縮ですが、少々調べさせていただきます。も？」

ブルドッグ1号2号さんがレオ様にそう声をかけた。し、調べられたりなんてしたら私……！ レオ様に助けを乞うように見上げた。でも彼はただにっこりと笑っている。

「どうぞ？ 気の済むまでいくらでも調べてよ」

そんな、ど、どうしよう！ そっか、これは今の内にどこかに隠れるっていう合図なのね！

「ただ治療でかなりの時間一緒にいたから、もしかしたら女性患者さんの匂いが結構ついてるかもしれないけどさ」

それに私は上げた足を止め、ブルドッグさんたちは顔を見合わせ何かヒソヒソ相談した後「いえ、失礼いたしました。結構です」とゲートを通された。

……それだけでいいの？

レオ様はクスクスと笑いながら、「オレって信頼されてるんだよね」と小声で言った。そういえばお世話係のミントさんも、彼の悪いウワサなんて聞いたことがないって言ってた。

後ろを振り返ると、彼らはすでに持ち場へ戻って仕事を再開させ

ていた。本当に一切疑っていないらしい。レオ様、ありがとうございます！

誰もいないのを確認して、マントを少しだけ開けて周りの景色を見渡した。

ここを通るのは初めてじゃない。あのときも通った。処刑の宣告を受けに行くときに。

リザのアトリエに駆けつけてきた女性たちが衛兵を呼び、血を流して涙ながらに訴える彼女の証言を元に、私はしばらく後宮内の牢へ入れられていた。王が正式に処分を発表するからと手に縄をかけられ、殺人未遂犯を見る冷たい視線の中、私はここを通って行った。このどこか、どんよりとした細い通路を。

「ソフィー、こっちこっち」

「え？」

レオ様はこの渡り廊下へ通ずる通路ではなく、城内へと続く太くて立派な廊下の方を指差した。

「ついでだから少し、城の中を案内してあげるよ」

「い、いいですよ……！」

そんなバレる可能性をわざわざ高めなくたって。でも私はすっかり忘れていた。彼がフリーダム王子であるということ。

「遠慮しないで、ほら行こう！」

「せ、折角ですが今日は本当に……」

「いいから、いいから。オレと城内デートすると思ってさ」

そうやって私の手を引っ張っていく。

彼はとっても自由で、そしてそんな奔放さは彼の魅力をより高めていた。一緒にいると、まるで気ままに空を飛び回る鳥を見ているような、開放的で雄大な気分になれる心地がした。

諦めたふりをして温かい手をギュッと握り返し、その実イタズラをするときのようなワクワク感を覚えながらその後について行った。

「うわぁ……すごい」

まるで部屋のような昇降機を下りると、そこは執務室の並ぶ北棟の十階だった。大勢のヴァンパイアがいて、書類を持って走ったり、上司の後を軍人のようにずらずらついていたり、隅で雑談していたり。みなさんそろいもそろって顔立ちがいいから、ちよつとドキドキする。

「このフロアは主に国の中核行政を取り扱ってる。経済や外交や法務、もちろん一番重要な判断は兄上がしてるんだけどね。皆エリート中のエリートだよ」

これほど豪華で立派な造りなのは、国の中枢機関でもあるからなんだ。

大きな窓からは真ん丸い月が顔をのぞかせ、金色のアーケードが見事な装飾を施されて高い天井を飾っていた。不気味な巨大怪獣の剥製がドンと置かれ、下から橙色の明かりで照らされている。ゴードのプレートに説明が書かれてあったけど、一瞬だからよく分かんなかった。

壁にはこれまた大きな、バロック美術の絵が掲げられていて、天使エンジェルと思しき背中に羽の生えた人が、黒い騎士に踏みつけられて楽園

から追い出されている情景が描かれている。人間界じゃまずない絵
だけどここでは一般的らしい。

「この城の全体的な話をするとね」

レオ様はそう切り出した。

正門をまっすぐ行くと、ずらつと長い正面階段があるらしい。その
階段の手前、左右に貴族らが暮らしてる第一南棟と第二南棟が建
ってる。最近古くなって改装したばかりだからすごく新しいみた
い。

そして階段を噴水のある中腹辺りまで上がると、西側と東側にそ
れぞれ西棟と東棟があつて、そこはこの北棟以外の国の業務や他国
からのお客さんを出迎える来賓館、あとは婦人の館とか騎士の館、
歌人の広間、競技場なんかの設備が整つてる。

最後、階段を上りきったところにあるのがこの北棟。王やレオ様
のような最上級貴族がこの上に住んでるらしい。これらは全て渡り
廊下で繋がっていて、行き来は基本的に自由だとか。

「まあこんなとこかな、かなり大雑把だけど」

私がどうやってここへ連れてこられたのか全く記憶に無いけれど、
そんなに立派なんだ、このお城。北棟の裏にある後宮からは、北棟
以外は何も見えないから。

「あれ、レオ公爵様！」

眉のキリツとした利発そうな人がレオ様にそう声をかけた。

「ステップフォード」

「今日はお休みじゃなかったんですか？」

「ちょっと忘れ物を取りにね」

「そうですか。あ、それより今度はウチのチームが勝たせてもらいますよ！」

「お前さ、この間もそう言っておいて、結局すっころんで顔面打って泣いてたろ」

「いゝやいや、今度こそ見ててください！ オレの華麗な術捌きを！ ハイヤーってね！」

空中に何か描くようなそぶりを見せ、その人は無邪気に笑いながら立ち去っていった。

チーム？ そういえばレオ様の部屋に旗やら優勝カップやらが並んでたけど、あれのことかな？ 確かXボードとかって書いてあったよな。

「今度見せてあげるよ」

この世界のスポーツなのかしら。その後も同じ話題で何人もの人に声を掛けられていたし（レオ様ってものすごく人気者みたい）、みんな少年のようキラキラした表情をしてから、この国で最もホツトな競技なんだろうな。

このフロアはちょっとゴチャゴチャしてるねと、レオ様は会議室の並ぶ一つ上の静かな場所へ案内してくれた。確かに足元を走り回る雑用係のゴブリンさんに、何度もぶつかりそうになった。

ここは一階違っただけでかなり雰囲気異なる。ホコリが舞い落ちる音すら聞こえそうなほど、静寂に包まれていた。

「へえ、ソフィーにもお兄さんがいるんだ」

待合室に並べられた美術品を鑑賞しながら、たくさんお話をした。ここには絵や彫刻なんかが展示されている。一部芸術性がよく分からないものもあったけど、壁に並ぶ絵はとても壮大で美しく、まるで本当に美術館のよう。それを一つ一つ見ながら色んなお話をした。好きなもの、住んでいた町、そして……家族のこと。レオ様はとも聞き上手で、思わず色々話してしまう。

お兄ちゃんのことも。

「はい、六つ年上で。でも」

ギョツとネックレスを掴んだ。

「じ、事故で……亡くなってしまって」

「ごめん」

「いえ、そんな。でも兄は色んなものを私に残してくれたんです。絵も兄に教わりました」

そう。お兄ちゃんの描く優しい絵が好きで、ああ私もこんな絵が描きたいってずっと思っていた。

「兄は私が生まれてすぐ亡くなった父の代わりに、本当に一生懸命働いてくれていたんです。その傍ら、絵を。川原に座って魚を描いたり、海辺へ行って貨物船を描いたり、丘へ上って町全体を描いたり。疲れていただろくに、いつも私と一緒に連れて行ってたくさん遊んでくれました。たくさんのお話を教えてくれて、たくさん幸せをくれました」

お兄ちゃんのことを思い出すと涙がこぼれそうになる。悲しいからだけじゃない。お兄ちゃんのおかげで、私の中から言葉と共

に溢れ出してくるから。幸せだった、とても。

「なるほどね」

私の顔をじつと見つめていたレオ様がふとそう言った。

「どこか君には、男に対する警戒心が見当たらないと思ってたんだ。今もこんな人気のないところで、オレと二人つきりだしね」

指の背でゆっくりと頬をなでられた。

「けど、そんな優しい男が一番君の近くにいたんじゃないかな。そうなるかもね。本当はもっと危険で怖いよ？ オレたち」

本気なのか冗談なのかよく分からない、どこか挑戦的な笑顔。

「そ、そうですか？ ですがレオ様はお優しいと思います」

「それはどうかな。少なくともオレは、君を妹としてではなく女性として見てるんだから」

レオ様は急に声を落とすと、そっと体で私を壁へと追いやっつけていく。

「あ、あの………？」

いつも何気なく一緒にいたけど、真っ白に透き通った肌、柔らかそうな金色の髪、ランプに反射して輝くサファイアブルーの瞳。間近で見ると、その美しさがいかに際立っているのか再認識させられる。

首筋を白い指でなぞられ、少しゾクツとした。何だろう。何だか

いつもと少し様子が違う気がする。目の奥にどこか不安をあおるような光が瞬いていた。そのまま彼が何か言いかけたその時

『お願いいたします陛下アア!』

突然、廊下から大砲のように大きな声が轟いた。

なんだろう、と二人で待合室を出ると廊下の先の方に声の主を発見した。

「あれ兄上たち。廊下で何やってんだ？」

王とその後ろにもう一人、つやつやした紫色の髪の男性が控えていた。“デイスイズ高貴”と言わんばかりの気品。

「あれはシュレイザー。兄上の補佐官だよ」

国王の補佐官……なるほど頭がすごくよさそう。

その二人の前で膝をついているのは、ものすごく体の大きな牛頭人だった。両膝を折って屈んでいても小山ほどはある。レオ様たちと同じく高貴そうな人だけど、その身からは何やらものすごい必死さを感じた。お付きの人たちなのか、同じような姿の人たちが数人、彼をなだめようとしているようだった。

「ああ、なるほど。あれはミノタウロス国の王。隣国に攻め込まれそうになってるって聞いたから、応援を要請しに来たんだろうね。あそこはそこそこ規模が大きいけど、周辺国との仲はかなり悪いし、最近国家プロジェクトとして大きな設備投資をしたからお金もない唯一頼りにしていた同盟国にも裏切られたらしいしね」

「それで陛下に頭を下げているのですか、あの人も王なのに」

「ウチが応援につけば、その話だけで片がつくと思ったんじゃない

かな。かなりせっぱ詰まってるみたい」

「応援の軍を送らず、話だけで？」

「近隣には数え切れないほど国があるけど、ウチははずば抜けて強大な力がある。兄上の言葉一つで他国の情勢に影響を与え、兄上の嗜好品一つで経済が動く。兄上を中心に世界は回っているといっても過言じゃない。同程度の力を持つのは白龍国くらいだけど、あそこだってここへは容易に手出しできない。そもそもヴァンパイアは元々魔力が強いのに加えて、兄上ははずば抜けてるからね。実質、この世界の王ってとこかな」

そう言って肩をすくめる。サラツと言ってるけれど、ものすごくすごい。

王はため息をつき、冷たくミノタウロス国王を見下ろした。

「ミノタウロス国王。仮にも頂点に立つものが、部下の前で無様な姿をさらすことはないでしょう。さつきも申し上げた通りお受けできかねます、どうぞお帰りを。シュレイザー、明日の会議は時間を変更してくれ」

「承知いたしました。では午後に回します」

「陛下あ！ 陛下！ これをご覧ください！ 我が国民たちの血の嘆願書でございます！」

ミノタウロス国王は王の進路を塞いだまま、厚い封書を取り出した。それを陛下は鼻で笑う。

「メリットは」

その言葉に、ミノタウロス国王は顔を上げる。

「あなた方の国を助けて、我々に一体何のメリットがあるのです。あなた方のような弱小国相手では、高額な賠償金も見込めないですよ。」

「ナノソドル地方を譲渡いたし。」

「我らには十分に豊かで広い国土がある。いまさら田舎国の寂れた土地などもらうほうが迷惑だ。」

「で、では金200万メセブ（1メセブ 103円 約2億円）献上いたします。」

「200万……魔豚小屋でも改修しろと？ 話は200億メセブ（約2兆円）からお願いしたい、ミノタウロス国王。」

「そ、そんな……わが国の国家予算だって」「無理なら結構。では。」

嘆願書を手に頭を下げるミノタウロス国王にも、陛下は全く意に介さなかった。まるでその辺の石ころのように、ぞんざいに扱う。ヒドイ。もう少し話を聞いてあげたっていいのに。

ミノタウロス国王はあっさりと話を止めて通り過ぎていく陛下に体を震わせ、歯軋りをし始めた。ビリビリと空気が震える。

「この……ヴァンパイアごときが調子に乗るなあああ！」

ミノタウロス国王が空気を切り裂くような大声を上げて立ち上がると、奇声を発しながら両手を広げた。その途端に全身の筋肉が膨れ上がり、血管が不気味に浮き出始める。

「だあああああああああ！」

空気がビリビリと震える。その勢いのまま空中に真っ赤で巨大な魔法陣を描きつけた。ものすごい迫力と巻き上がる突風に、マント

療系なら瀕死の重傷でも一瞬で回復させると教わった。医療系ではこのレベルを扱えるのは世界で唯一レオ様だけ。私はそのおかげで助かったようなもの。

相当の魔力とセンスが必要で、一種の天賦の才が必要といわれるレベルのものを、ホコリでも吹き飛ばすかのようにたやすく。

ミノタウロス国王は、絶望したように膝を崩した。二つの魔法陣は、役目を終えたかのようにスツと消える。

「くそっ……くそっ！」

大きな拳を握りしめ、ミノタウロス国王は床を叩いて大粒の涙を流した。そのひどく憎しみのこもった視線の先には、何事もなかったかのように廊下を行くこの国の王の後姿があった。

ああ、何て冷たい背中。

「どうして陛下はあの国の応援についてあげないのですか。助けはあげないのですか」

「……ダメなんだよ、ソフィア」

少し哀愁を含んだような声だった。

「数百年前にも同じようなことがあったんだ。当時の王は、その応援要請を受けて出兵の決定をした。ところがそれに反感を持った敵方が、秘密裏に白龍国へ応援要請しているとの報告が入ってね。しかも白龍国はそれを受けるつもりだと。このままでは周辺国による代理戦争、果てはウチと白龍国との大戦争が起こる寸前だった。幸い直前で回避できたけど、同じ轍は絶対に踏めないからね」

救済を願う手に応えれば、この国を含めたもつと多くの国の平和

が危ぶまれるかもしれない。だから震えるその手を冷たく振り払う。それがミノタウロス国にとってどんな結果を招くのか分かっていても。

それが正しいのかそれとも間違っているのか、私には分からなかった。あの人は、違うんだらうか。

そんな私の暗い空気を察したのか、それを吹き飛ばすかのようにレオ様はにっこりと笑った。

「大丈夫、あの国だって立派な独立国家なんだから。王が命がけで護るよ、兄上がそうしているように。オレが君をそうするように」
「んっ……」

少し開いていたマントの隙間から手を差し入れられ、柔らかく口づけられた。間近で微笑まれ、さっきの言葉もあって心臓がドクドクと強く波打つ。

「よし！ 王様も見たことだし……そろそろ行くか、彼女の元へ」

真剣な眼差しのレオ様に、私は赤い顔を隠してゆっくりと頷いた。

s t . ? ? ?

I n s i d e o f t h e C a s t l e (後 書 き)

あとがき

次回、リザ再登場？

巨大な収監所へ着き、入り口でレオ様が何やら申し入れると看守たちはすんなりと中へ通してくれた。あの時はいつぱいいつぱいで何も思わなかったけど、随分とおどろおどろしいところ。離島の絶対に脱獄不可能な牢獄みたい。

「あ、シエイラさん……！」

案内を断って先へ進むと、壁際の椅子に座り、あくびをしながら監視する彼女を見つけた。

周りに他の看守がいないことを確認し、レオ様に「彼女へお世話になったお礼を言いたいのですが」と訴えると「いいよ。話しておいで」と快く許してくれた。

「シエイラさん、お久しぶりです！ 覚えてますか？」

突然マントから顔だけ出した私に、彼女は一瞬ギョツとした。けどすぐに、

「ああ、アン時の。何してんだ？ ここで」

レオ様の姿を見つけると椅子から立ち上がり、胸に手を当てて膝を軽く曲げた。

「あ、あの、彼女に会いに」

「彼女つてまさかリザ・インステイテュートか？ よく顔なんか見に行けんなあ。あ、もしかしてぶん殴りにいくのか？ だったらア

「タシも協力してやるよ！」

黒い笑みを浮かべながら、彼女はポキポキと指を鳴らす。

「い、いえそんなんじや。ただ色々言いたいことがあって」

「色々ねえ……あの女なら地下の特別監視室だ。本来あそこは普通の檻じゃ手に負えねえ奴らが入るとこなんだけど、なんせあいつらはこの城にはいねえことになってるからな」

シェイラさんは椅子を横にして壁へやると、「こつちだ」と先を行く。

「案内していただけるんですか？」

「ああ、お前の血、すんげえ旨かったからな。その礼だ」

「ごちそうさんとニツと笑われたけど、何だか変な気分だった。

時々聞こえるうめき声やすすり泣き、囚人たちの好奇に溢れた視線の中を歩きながら、彼女はしげしげと私を見つめた。

「結構血を吸わせてもらったアタシがいうのもなんだけど、よく生きてたな。そんだけ生命力あんなら限界値までいっても大丈夫だったんじゃねえか？」

「”限界値”？」

「人間が非人間化するライン40%の血液量を、限界値っていうんだ」とレオ様が説明してくれた。

「なるほど……」と頷く私の耳に、シェイラさんはそつと唇を寄せた。

「お前も気いつけるよ？ 異性間の吸血行為ってのは、同性間と違

つてすげえ快感が伴うんだ。“ブラッド法”があるとはいえ、お前もボーツとしてると、いつこの優しそうな面した公爵様にガブツてやられるか分かんねえぜ？」

シエイラさんは言葉とは裏腹に、ククククともものすごく楽しそうに笑っていた。

それになぜか今日の待合室でのことを思い出した。首筋に指を這わせ、真剣な眼差しで私を見つめて……彼は一体何を言おうとしてたんだろう。

まさか、ね。

「彼女に余計なこと吹き込まないでくれる？」

「あ、すんません」

“ブラッド法”とやらのも少し気になったけど、それよりも言っておかきやならないことがある。レオ様の方をチラリと見て、なるべく小声で、

「あの、シエイラさん。あの時はありがとうございました」

「え？ “あの時”ってどの時だよ」

ダイレクトにリザに襲われたときだとは言いづらかった。レオ様に聞かれたら、また心配をかける。

「あの、処刑場へ向かう途中。ほら……」

「ああ。あのトチ狂った女に目ん玉串刺しにされそうになったやつか。いいのいいの、大して労力使ってねえんだから」

も、もの見事に全部言っちゃった……。

「ソフィア、それ本当？」

案の定、殺気を漂わせるレオ様に「でも寸でのところで助けてもらったので」と言っただけ、多分まだ怒ってる。何て誤魔化そうかと考えていると、古びた鉄の扉の前に到着した。

「特別監視室はここを抜けたところに。ソフィー、ちょっとマントかぶってな」

「あ、はい」

扉にはただれたおどろおどろしい文字で“特別監視室”と書かれてある。何だか恐ろしいものが待ち構えていそう、思わず身構えた。彼女はノックをしてメッキのはげたノブを引くと、「さあさ、どうぞどうぞ。汚えところでございますが」とおどけたように中へ招き入れてくれる。やっぱり彼女は明るくて楽しい人。

ここはチェックポイントのような所なんだろう。四隅には少々小柄の衛兵さんたちが立っていて、奥に鉄格子と鉄の二重扉がある以外は全く何もない小部屋だった。衛兵さんたちはレオ様の姿に、全員揃ってビシツと敬礼をする。

「何かここ、天井低くない？」

レオ様はとても窮屈そうに身を少し屈めていた。私は大丈夫だけど、彼は私より随分背が高いから。

「囚人が自由に暴れらんねえようにしてあるんですよ。なんせここに入れられるようなのは、ひどい奴らばっかなんで。監獄の方は高々としますけどね」

その分厚い鉄扉を見つめる。この先にあなたがいるのね、リザ…

…。カラカラと鉄格子の扉が横へ開けられ、ギイツと重厚な音を立てて厚い鉄の扉が開かれた。目の前には下へと通じる階段。周囲を石で囲まれ、ヒタヒタと湿っぽく、どこか鉄臭い。レオ様が「案内はもういい」と告げると、シェイラさんは黙って頷いて扉を閉めた。マントを取って階段を下りると、靴の音が不気味に反響し、消えかけのランプの火が大小に揺らめく。

「あ、そうだソフィア。ちょっとだけここで待っていてくれる？」

前を歩いていたレオ様が突然振り返ってそう言った。

「いきなり君が行ったら向こうもパニックになるだろうし、オレが最初に話しつけてくるよ」

頬にキスを落とし、一人で階段を下りて行った。色々気を遣わせてしまって、本当に彼には頭が上がらない。

レオナルドはソフィアの視線を感じながら、階下にあった二枚目の扉へ入ってゆっくりと閉めた。囚人たちの不気味な唸り声があちこちから聞こえる。

明かりはあるが、どこかどんより湿っぽく薄暗い。看守はここには配置されていないようで、囚人以外の人影はない。それもそのはず、みな檻に書き込まれた魔術で正常な意識を失わされているようだった。ただうめき声をあげて、ぶざまに床へ倒れこんでいる。

「もうイヤ！ どうして私が！ 頭がおかしくなりそう！」

やけにキンキンした女の声があった。何やら腹立たしげなそれを辿っていくと、すぐに彼女を見つけられた。一瞬にして湧き上がった憎悪の念を、必死に押しとどめる。

「やあ、久しぶり。義姉^{あね}上。いや、今はただの極悪人か」

冷たい床に座り込んでいたリザは、レオナルドの登場に顔をほころばせて格子まで駆け寄ってきた。どうやら彼女の檻の魔術は解かれてあるらしい。

衣服は薄汚れ、顔も化粧がまともに施されておらず、城内で見たときの輝きはなかった。ソフィアも同じような状況だったろうに、救護室へ運ばれた彼女を見たとき不謹慎にも美しいと思ったというのに。

「公爵様、どうかお助けください！ 私は決して悪くありませんわ！」

「ずっとそうやって否認してるらしいけど、ちょっと往生際が悪くない？ 素直にごめんなさいって言ったほうがいいと思うけど。ま、どのみち死罪は免れないだろうけどさ」

リザはそれに顔色を変えた。

「死罪……」

「まだ正式には決まってないみたいだけど、当然でしょ」

彼女は唇をキュッと噛み締めた。だが次の瞬間笑みを浮かべると、目を潤ませて色っぽくレオナルドを見上げる。

「公爵様……どうかお助けを。お助けくだされば私、何でも言うことを聞きますわ」

「何でも？」
「はい」

リザはレオナルドを誘うように、両手でドレスのすそをゆっくりと上げた。白い足が露となり、レースの下着がわずかに見えている。

「ああ、そういうこと」
「公爵様……っ、どうぞご自由になさって」

熱っぽい声に、レオナルドは鉄格子へ近づくとその間からそつと手をさし入れた。彼女の柔らかな内腿を優しく撫で回す。この場には相応しくない、衣のすれる音と熱のこもった吐息が響いた。官能的なその手つきにリザは恍惚とした表情を浮かべた。

「ん……っ公爵様……あ」
「すぐくイヤらしい顔だね。気持ちいいの？」
「は、い……っ」

リザは悦びに浸るかのようになり、そつと目を閉じた。

「ここは？」
「ああ……っ、気持ちいい、です」
「そ」

レオナルドが妖しげな笑みを浮かべたその瞬間、リザは額に割れるような痛みを覚えた。急なことにそれが彼に胸倉を引っばられ、鉄格子へと打ちつけられたのだと気づくのに少々時間を要した。

“なぜ”と驚き入った表情でレオナルドを見上げる。その視線の先の彼は、ゾツとするほどに妖艶で恐ろしかった。その人形のように端整な顔を、唇が触れ合いそうになるほどに近づけてくる。

「悪いけどさあ、オレは兄上のお古になんか興味ないんだよね。…
…勃たないんだよ、お前じゃ」

「そ、そんな！」

「オレも長く生きてるから、正直、女を殴りたいって思ったことの一
度や二度はあるよ。けど……八つ裂きにしてやりたいって思った
のはお前が初めてだ、売女^{ばいど}」

ビリツとするような怒りを感じた瞬間、リザを緑色の光が包んだ。
足元にはいつの間にか魔法陣が浮かんでいた。レオナルドは掴んで
いた胸倉から乱暴に手を離すと、ポケットに手を入れて冷たく微笑
んだ。

「召喚魔術、I - 28 ヘルエンジェル」

彼女の立っていた床はあつという間に地獄の血に染まり、どす黒
い煙が噴出し始めた。まるで巨大な心臓が下から押し上げるように
鼓動し、風の声とも不気味な唸り声ともとれる“おおおおおお
”という低音ヴォイスが渦のようになって反響し始めた。

「こ、公爵様……？ ギャア！」

何かに足首をつかまれる熱いような冷たいような感覚に、リザは
震えながら足元へ目をやった。

「ああああああ
」

髪の毛の長い女がそこにいた。目蓋のないまん丸な白い目、表面がど
ろどろに溶けた顔でジツと見据えていた。

「いやあああああ！」

異形のそれに引つ張られ、バランスを崩したりザはビタンと腹から冷たい床へ倒れこんだ。そのままズルズルとどす黒い闇の中へと引きずり込まれてゆく。その中は驚くほどに熱く、体が溶けてなくなるような感覚が走った。この中へ入れられれば、どうなるかは察しがつく。

鉄格子を掴んで耐え、泣きながらレオナルドを見上げた。

「た、助けてください……っ、公爵様ア！ お願いします、ごめんなさい！ ごめんなさい！ いや……もうしません！ お願いです、助けてください！」

「情に訴えようってか？ 外見で判断するな。いくら人間の姿形をしていようとオレたちは」

ゆっくりとリザの方へ屈みこんだ。

「血をすするヴァンパイアだ」

真っ赤な瞳に、今度こそリザは言葉を失った。

「あの、レオ様？」

「！」

その声にレオナルドは目を見開いた。

「ん？ なに？ オレを待ちきれなかったの、ソフィア」

檻に向かつて屈みこんでいたレオ様は、いつもの笑顔で立ち上がりながら振り返った。やんわりと私を抱きしめ、額に何度かキスを落とす。すごくくすぐったい。

「すみません。何か叫び声がしたような気がして」

「そう？ 他の囚人じゃないかな。オレは事情を説明して、ちゃんと反省しろよって注意してただけだから。ねえ……？」

「は、はひい」

レオ様の視線の先には、ぐったりと床へ座り込みリザの姿があった。なぜかとても疲れたような引きつった表情をしている。

「ねえソフィア……オレも付き添おうか？」

「いえ、一人で大丈夫です」

「分かった。じゃ、オレは上で待ってるから。何かあったらすぐに呼んでね」

「はい」

レオ様が扉を閉めたのを確認し、私は彼女と向き合った。

「リザ……」

リザは服の乱れを整えると、頬を震わせて立ち上がる。

「ソフィア……何しに来たの？ 公爵様までたらしこんで、何て歪んだ性格をしてるのかしら！」

「リザの方が歪んでそうだけど」

「何か言った、ルルー！」

どうやら他の三人も、すぐ傍の独房に入れられていたらしい。みんな飽き飽きした表情で座り込んでいた。

「リザ、はっきり言うわ。……謝って欲しいの、あの時のこと」

「はあ？」

「お願い」

寒くもないのに、震えが止まらなかった。彼女の眼が、言葉が、笑顔が、全てが怖い。でも、謝って欲しかった。それである事件に区切りをつけて、私の中で終わりにしたかった。

リザは口元に弧を描く。

「フフフ。いいわよ、ごめんなさあい！ これで満足？」

「そうじゃなくて……」

どうして分かってくれないの！

「うるさいわね！ うつとおしいのよ、あなた！ 純粹そうな顔して、あの方を！」

「私が一体、何をしたというの」

「分からないなんて、あんたバツカじゃないの！？ 本当にくだらない絵を描くしか能がないのね！」

「絵をバカにしないで！ あれは」

「ウツサイって言うてんのよ！ ブス！」

眼をキツと吊り上げ、彼女はそう吐き捨てた。一体何が私への憎悪をここまで膨らませているの。なぜあんな仕打ちを。話しかけられてお茶を飲んで、お話しして。それだけだったはずじゃない！

私が悪かったのなら謝る。でもそんな原因となりそうなものが見つからない！

「陛下はね……陛下はこの私のものなのよッ！」

“陛下”？

「私は別に陛下と何の関係も」

「ウルサイウルサイウルサイッ！ あんたなんかあの時さっさと処刑されていればよかったのに！ 厚かましく生き残って、ノコノコとこんなところにまで顔を出してるんじゃないわよ、この死にぞこない！」

リザは鉄格子を握ってガタガタと揺らした。私に対する憎しみをヒシヒシと感じる。

「リザ。本当にお願いだからちゃんと話を」

「いい子ちゃんぶって何様のつもりッ！？ あんたなんかのどこが いいのよ！」

「そんな話しに来たんじゃない！」

「尻軽のくせに！」

「ねえリザ！」

「言っておいてあげるわ！ あんたがどれだけあの方に擦り寄ろうと、無駄なのよ！ アンタなんかじゃ相手にしてもらえないわ！」

「私は王と何の関係も無いって言ってるじゃない！」

「絶対に無理よ！」

「ちゃんと聞いてっいたら！ 私が言ってるのは」

「正室になるのはね、あの方に選ばれるのはこの私なんですからッ
！」

「残念ながら違うな」

静かで低い声が、スツと会話の隙間をすり抜けるように通り過ぎていった。これはと振り返ると、王がそこに佇んでいた。

この殺伐とした雰囲気の中、この場に不釣り合いなほどに美しく、そして凜としていた。これが王の威厳というものなのだろうか。

「へ……陛下……っ。あの、違いますの、これはその……ふふ」

リザは慌てたように髪を耳の後ろにかけ、笑顔を取り繕う。王がなぜここに？

「ここから出してやろうか、リザ」

それにリザは顔をパツと明るくした。

「陛下……やはり私を信じてくださるのね！　そうです、悪いのはこの女」

「ソフィアがいいと言うなら、の話だが」
「え？」

わ、私？　王は漆黒の瞳で私を見つめた。

「君は彼女らの非であんな目に遭ったんだ。君にこの彼女らを裁く権利がある。生かすも殺すも、君が決めればいい。どうする、同じ目に遭わせるか？　それともっとひどい目に遭わるか？」

「そんなッ、どういうことですかの陛下」
「ソフィア、どうする」

どうするって……。どうしてそんな大事なことを、私が？　リザの視線を感じた。

「あの、そ、ソフィア？ ごめんなさい、あなたを陥れるようなマネをして。あの、あなたってすごく美人で純粹だから、嫉妬してしまったの。本当よ？ え、絵もとっても上手でステキだわ！ 羨ましい！ 本当に……本当に、つく、ごめんなさい……」

リザはさつきまでの態度を一変させ、涙を流して謝った。“可哀想に”。そんな風には思えなかった。私だってバカじゃない。さつきまでと全く違う様子に、彼女がここから出たくて言ってるってことくらい分かる。

「そ、ソフィア？ 私たちだって反省してるわ？ とうかそもそもりザがこの話をもちかけてきたんですもの。ね、今度は私たちだけでお菓子パーティーをしましょうよ！」

「ちよつと、ニーナ、どういふつもり！？」

「本当のことじゃない！ あんたが正室になったら、私たちもイトコロの貴族との結婚に口を利いてあげるって言ったから乗ったのよ！」

「そうよ！ ねえソフィア許して、私たちだけはお友達でしょ？ 悪いのはリザなんだもの。私たちも騙されてたの、お願い助けて？」

ジェニファアたちは私に媚びるような視線を送り、無理に笑顔を作っていた。

彼女らとのん気にお菓子パーティーだなんて、冗談じゃない……

！ 私は……私はッ！

「やはり認めるんじゃないか」

王はぽつりと、呆れたようにそう言った。

「陥れてすまないだの、アイツが悪いだの。散々違うといっておき

ながら、やはりお前たちに非があったのではないか」

「あ……」

助かりたいばかりに、ついポロポロと口を滑らせてしまったらしい。みんな苦々しげな顔をしていた。

それを見て、空虚だった胸に何かがストーンと落ちてきたような心地がした。

今度はちゃんと……真実を確かめようとしてくれた。

「もう無理ね。あなたの負けよ、リザ」

ルルーの言葉に、リザは唇を噛み締める。すっきりとは行かなくとも、あの件に少し終わりが見えた気がした。

王を完全に許せたかといえ、まだもやもやとしたわだかまりが心を泳いでいる。でも、この人も変わろうと足かいてくれているのなら、ほんの少しだけ信じてみたい。恨むよりも、こっちのほうが救われる気がするから。

ふと目が合った瞬間に微笑んだ。王はなぜか顔を赤くして目を泳がせていたけれど、何も照れることなんてないのに。変な人。

「ソフィア」

リザたちから離れ、階段を上がる途中で王は私を呼び止めた。それに足を止めて振り返る。

「すまない、あのようなやり方は君を傷つけただろう」

「陛下……いいえ、平気です」

確かに彼女らの本音と建前をありありと知って、少し暗い気持ちになった。でも、王がちゃんとあの事件のことを今後に活かしてくれるなら。今の気持ちを忘れないでいてくれるなら。

「そうか、よかった」

ジッと私を見上げる王と、しばらく無言で見つめ合っていた。

「何ですか？」

「あ、い、いや……その、そ、そ、そうだソフィア」

「はい」

王はツカツカと早足で階段を上がってくる。傍まで来ると、私の腕をキュッと掴んだ。

「君は、一体今までに何度レオとキスしたんだ」

「……え？」

「さっきそこで抱き合ってただろう！」

み、見てたの？ どこから？

「ひ、額に少ししただけです」

「何が“額に少し”だ、全く！ 君は後宮の女だという自覚が足りん！ 私が一度もしていないというのに、何なんだその差は！」

「後宮にいるなんて自覚、はなからありません！」

「今夜私の部屋へ来い。ベッドの上で、イヤと言っほど自覚させてやるっ」

「お、お断りします！」

「では私から行く。必需品はこちらで用意するから安心しろ」

ひ、必需品！？ 何言ってるの？ さっきちょっと見直したかも
しれないと思っただけど、勘違いだった！

「来たら人を呼びます！」

「ハッ、他国の王ですらひれ伏すこの私に、逆らえる者がいると思
っているのか？ 次期国王の顔を早く皆に見せてやろうではないか」

だからなぜ私がッ！ 王はがっちりと私の後頭部を押さえ、顔を
近づけてくる。

「ちょ、放してください！」

「私にも“唇に少し”キスさせる！」

「いやですッ！」

「ははは、せいぜい粋がつているがいい。そのうち君のほうから私
を」

「なあにやってんの、兄上……」

階段の上からものすごい形相でレオ様が見下ろしていた。ハッと
した王の足元には赤い魔法陣。

少々間の抜けた叫び声が響き渡った。

s t . ? ? ?

C r i m e A n d P a n i s h m e n t (後書き)

あとがき

リザはリザでした。

「はい、ここに足をかけて。 1、2、3はい！ OK！ OK！」

今日は魔獣学の実習で、サードクラスの隅にある広い乗馬場に来ていた。前から興味があつただけけれど、魔獣の数に限りがあることと先生の監視が行き届きにくくなるという理由で希望者の中で抽選が行われていた。応募者が多くて何度も外れたんだけど、やつと当たつたみたいで嬉しい。

総勢三十人ほどが集まって、最初に簡単なレクチャーを受けた後、いよいよ本番ということになった。

「はい次、君こっち来て」

「は、はい」

でっぷりとした悪魔のグラトニル先生が、ふくよかな手で手招きした。そのたびに洋ナシのような鼻と腕の肉がふるふると揺れる。それと共にどこかケーキのような甘つたるい香りが漂ってくるのは、彼のポケットにたくさんお菓子が詰まっているかららしい。今も棒付きキャンデーをくわえながら生徒たちの相手をしていた。

ちよつと緊張しながら一歩踏み出した。学校掲示板のカレンダーによると、今回は“スレイプニール”という魔獣の実習の日だった。一見ただの馬かと思つてよく見ると、なんと足が一本の足が二股になつていてひづめが八つもある。とつても足の速い、最高の軍馬……なんだけれど、やっぱりここはサードクラスだからなんだろう。ファーストでもセカンドでも受け入れてもらえなかったような、年老いた馬や、怒りっぽい馬、全然動かない馬や食べてばかりの馬など問題のあるものばかりだった。それに困っている子たちがちらほ

から見受けられる。

私の前に現れたグレーのスレイプニールは、パツと見た限りは普通っぽい。でもどこかオドオドしていて、ちょっぴり体を震わせていた。少し臆病な馬なのかも。大丈夫かしら？

「ほら、ここに足かけて。1、2、3はい！」

まだ全然準備できていないのに、グラトニル先生は問答無用で私の体をぐいと押し上げた。

「わわっ……」

危うく向こう側に落ちそうになり、急いでたてがみにしがみつく。そんな状態だというのに先生はスレイプニールのお尻をパチンと叩き、さっさと次の生徒を乗せていた。

「い、いくらなんでも適當すぎるわ」

恐る恐る手綱をにぎり、ゆっくりと体を起こした。きちんと教育されているから、初心者でも大丈夫って言った先生の言葉を信用する。本来スレイプニールは空を飛べるんだけど、ここのは安全を考慮してそれができないよう手綱に術式が組まれているらしい。とりあえず暴走させさなければ大丈夫よね。

徐々に慣れてくると、いつもとは違う高いところからの景色と風に、もぞもぞと心がくすぐられた。高揚感と好奇心が香り立つブレンドコーヒーのようにまじりあう。スレイプニールも落ち着いているみたいでよかった。

「もう少しこうやって背筋を伸ばしてみて？」

「え？」

突然声をかけられてそちらへ顔を向けた。

「あ、ごめんね。あなたのことよくウワサになってるから、つい知り合いみたいに感じちゃって……」

そばかすがチャーミングな彼女は、ウェーブがかかったブルネットの短い髪をゆらして馬をそばへ寄せた。「驚かせちゃってごめんね」と肩をすくめニツとはにkindのように笑う。

こんな敵意の無い笑顔を見たのはいつぶりかしら。何だかちよっぴり感激……。話しかけられたときは、リザのこともあって正直ドキツとしたけど、彼女の笑顔に裏はなさそう。

「私はアリス・ドーソン」

「私は」

「ふふ、知ってるわ。ソフィア・クローズでしょう？」

私は「ええ、ソフィーでいいわ」と言っ握手を交わした。

「あなたのおかげで、ここで威張り散らしてた子たちが大人しくなっつて、本当に感謝してるのよソフィー」

内緒話をするかのように、手を口元に当てていたずらっぽい笑みを浮かべる。

彼女は小動物のように愛らしくクスクスと笑った。何か話すたびに大きな眼をクルクルと動かして、とても表情豊かな子だった。

こつやっつて誰かと話していると、すごく気が紛れる。かん口令のせいで彼女に本当のことは言えないけれど、それでも牢に入れられていた私を「災難だったわね……」と気遣ってくれる彼女の優しさが嬉しかった。

その災難を巻き起こした拳句、“罪滅ぼしのため”なんて最低なプロポーズをしたどこかの誰かさんとは大違い。

その時、突然周囲がどよめきたった。

「何かしら」

「そ、ソフィーあれッ！」

興奮気味のアリスの視線の先の姿に、私はしおれたシエパーズパース（ぺんぺん草）のようにゲンナリした。

「皆、どうだ。乗馬の実習は楽しいか？」

「は、はい！ もちろんですわ、陛下」

王は周囲の女の子たちと会話しながら、輝くような笑顔を振りまいていた。彼の跨っている漆黒のスレイプニールは、すらりと足も長く毛並みもキラキラときらめいていて、王と比べても遜色のないくらいとても凛としていた。とてもじゃないけどサードクラスの馬とは思えない。

自分のを持つてきたんだ。わざわざ。

ジッと彼の方を見ていると、ふと視線がかち合った。胡散臭いまでに整った笑みを浮かべ、ゆったりとこちらへ手を振ってくる。

それに応える気にもならなかったし、のうのうと姿を現す彼にとっても腹立ちを覚えた。

「ね、アリス。向こうの方へ場所を移動しない？」

そう声をかけた先のアリスは、ポヤーツとした表情で手を振り返していた。ダ、ダメ、あの顔に騙されちゃ！ あれは人の皮をかぶ

った、変態と災いの化身なんだから！

「ソフィーもほら、振り返さなきゃあ〜」

まるで酔っ払っているかのような赤い顔で、私の方へ笑顔を見せる。手を振っただけで毒牙にかけることができただなんて。その恐ろしさに身震いした。

その時、闇から舞い落ちるように降ってきた一匹のコウモリが、私の乗っていた馬の顔に翼をすり当てて通り過ぎていった。それに驚いたスレイプニールは“ヒヒヒヒヒヒイ”と前足を上げて暴れだし、めちゃくちゃに体を揺らして走り始めた。

アリスも青くなって叫ぶ。

「ソフィーッ！」

一瞬で乗馬場が騒然とした。私は振り落とされまいと、必死になつて首筋にしがみ付いていた。それを嫌がったのか、馬は激しく首を振りながら柵を越え、林の中へと突っ込んでいく。頭がガクガクと振られて真っ白になった。

「待つ、て……ッ！　お願い！」

手綱を引けば止まるかもしれない。でも、この状況で上体を起こすなんて無理！　数十頭の馬を合わせたほどの速さに体が浮く。飛び出た枝が、顔や体をネコのように掻き、引っかけ傷で血がにじんだ。スレイプニールは私を振り落とそうとしているのか、ジグザグに走つてそのたびに体が大きく振り動かされる。自分の両手だけが唯一の命綱。とんでもないスピードに目もまともに開けられなかった。今にも手が離れてしまいそう。

「いやあッ！」
「ソフィア！」

必死になってしがみつきのながら薄く眼を開くと、陛下がすぐ横を並走していた。

「ソフィア！ 掴まれ！」

黒い髪を激しく風に揺らし、そうやって手を伸ばしてくる。

「む、無理です！」

今、片手でも離せばどうなるか。おそらく体が吹き飛んで

「いいか、この先は崖になっている！ 今すぐこちらへ移るんだッ！ 早く！」

そんなこと言われたって……。枝に顔を叩かれ、荒れ狂う馬に今にも振り落とされそうになりながら、恐れだけが体にまとわりついていた。一段と激しく馬が体を揺らす。

「きゃあああ！」

「ソフィア、頼む！ この手を取ってくれ！」

「そんな、できない……」

涙で景色が滲む。王は進行方向に現れた木に舌打ちをして一旦距離を離すと、すぐさままた手を差し伸べた。

「頼む！ 絶対に君を落としたりはしない！ ソフィアッ！ 手を取ってくれ！」

零した涙の向こうに、まっすぐな漆黒の瞳があった。この手を握ってくれと、まっすぐにこちらへ腕を差し伸べている。

やらなきや……。バカみたいに震えながら呼吸を整えると、思い切って手を離して王の方へ手を伸ばした。指先が触れ合った瞬間、一層馬が暴れだして手が滑ってしまった。

「きゃあああああ！」

やっとのことだてがみにギョツとしがみ付く。もうダメ……。そう思ったとき、王がギリギリまで馬を寄せて腰を浮かせた。

「へ、陛下!？」

「私がそちらへ行く」

「！」

驚く私をよそに、王は鎧よろいから片足を抜いて馬の背中へ乗せた。この速度の中でそんなこと！ 彼はこちらへ手を伸ばし、風にハタハタとたなびいていた手綱を捕まえた。もし馬同士がぶつかれば、確実にお互い跳ね飛ばされてしまう！ そんな数インチの間を巧みに保ちながら、王は限界まで横へ迫った。

「陛下……っ、危険です、やめてください！」

「大丈夫だ、じっとしてろ」

こんなときだというのに、王は微笑んでいた。どうして……。

「ソフィア、私を信じてくれ。ひどく傷つけてしまった分、今度こそは君を護ると誓うから」

「陛下……っ」

風が涙をはるか後方へと飛ばす。

王は呼吸を整えると、タイミングをピッタリと合わせて一息にこちらへ飛び乗った。王の乗っていた馬は即座に自分から距離を取る。王が移った瞬間大きく振動が起こり、馬を一層刺激した。必死にしがみ付く私を片手で支え、もう片方の手に手綱を巻きつけて絡めとる。

でもだめ、もう崖がッ！

もう目の前にすでに道はなかった。間に合わない！ 馬の後ろ足が崖を蹴った。

ゆっくりとした時間が流れる。

「っ、きゃあああああ」

気持ちの悪い浮遊感のあと、まるで内臓が下へ引つ張られるかのように真つ逆さまに崖下へと舞い落ちていく。下から吹き上げる風で髪が視界を塞ぎ、あらゆる隙間から空気が吹き抜けていった。体が浮きながらも、すぐるものを求めて必死にたてがみを握った。下にはゴツゴツした硬そうな岩が崖壁から突き出している。耳は塞がれたかのように風の轟音だけを響かせていた。

もうこのまま……そう思った瞬間、小さな光が走った。

馬は“ヒヒヒヒヒイ”と甲高い声をあげて上体を起こして前足を空で掻く。急に体が上へ引つ張られた。

「ソフィア、大丈夫か？ ソフィア」

そう声をかけられたけど、怖くて目が開けられなかった。

「もう大丈夫だ、ソフィア」

「！」

頬をなでる緩やかな風に、恐る恐る目を開けて息を呑んだ。

私は空を飛んでいた。涼しい風が髪を通り抜け、やさしく頬を撫でて後ろへ通り過ぎていく。墨を流したような天空を、まるで泳ぐかのように滑らかに進んでいた。

「手綱の術式を解いたただけだ」

私はきつと、ものすごく驚いた表情をしていたんだろう。何も聞いていないのに王はそう説明してくれた。術式を解いただけだなんて簡単に言うけど、崖から落ちながら解除式を組み立てられるなんて。これはさすがと言ってもいいのかもしれない。

「怪我はないのか？ ん？」

王は柔らかな手つきで私を抱き上げ、横乗りさせると、手綱を握る腕の間に収めて顔を覗き込んだ。でも思いのほかシヨックが大きくて、声が出ずただコクコクと頷く。王の服を掴む手がカタカタと小刻みに揺れていた。それに王はキュツと手を握り、髪を撫でる。まず思ったのはそう、お礼を言わなきゃということ。

「あの、へ、か……っ」

喉まで震えているのか、それともカラカラに干上がってしまったからか、声が出てこない。王は笑みを浮かべると、手綱を持って前を見据えた。

「？」

「気分転換をした方がいいだろう。君もこのスレイプニールも。少

し空を散歩しようか」

そうイタズラっぽく笑って、月へ迫るかのように高く空へ舞い上がった。

わ……すごい。

雲の中を通り抜け、初めてこの世界の町の明かりを見た。まるで星の絨毯のように散らばって、いくつかはまっすぐに移動している。それはまるでゆっくりとした流れ星のようで、天地が逆さまになったよう。

それにしても随分大きな町。四方ずつと先まで明かりが見える。ただっ広いまっ平らな大地が、どこまでも延々と続いているみたい。王の肩の向こうにはお城が見えた。改めてこうしてみると、やっぱりものすつごく大きい。その主がこの人なんだから、実は（という失礼だけれど）すごい人なんだなと思う。遠くの方で色とりどりの花火が噴き出す火山を見つめながら、ぼんやりそう考えていた。爽やかで穏やかな風に髪をゆらし、徐々に心が平静を取り戻していくのを感じた。

今なら言える。温かな胸に頬を寄せながら口を開いた。

「陛下、ありがとうございます。で、でもこれあの事件のことをチャラにしたわけではありませんからね」

「ああ、分かっている」

「ですが今回助けていただいたことは、本当に心から感謝いたします」

笑顔で王を振り仰ぐと、彼は不自然に髪を払って「あ、ああ」ときこちなく答えた。

王はオホンと咳払いすると、頬を染めたまま真剣な眼差しになった。頬に手を滑らせて漆黒の瞳でこちらを見つめる。

「き、キスならやめてください！」

ちゃんとそう言ったのに、王はまるで聞こえていないかのように額へ唇を寄せ、頬にもゆつくりとキスを落とした。そのあまりの優しさに驚く。拒否するのも忘れていた。

顔を離して見つめた先の彼の表情は、私に処刑を言い渡したときとは随分違っていた。あの自信と威厳に満ち溢れた、切り裂くような冷たい空気はない。瞳を揺らして眉をひそめ、どこか探るような不安げな様子を見せていた。

コツンと額同士をつき合わせ、ギョツと両腕で抱きしめられる。

「良かった、無事で。もし君にまた何かあったら、私はこのさき生きては行けん」

喉の奥から搾り出されたように、ポツリとそう言い放った。

そっか。もしかしてこの人は、愛するリザの犯した罪も二人分背負って、代わりにこれからずっと償おうとしているのね。だから私がないと困るんだ。

「陛下、それほどまでに愛した女性をあんな風に失ってしまったのですね。確かにあなたは判断を誤ってしまいました。ですが私よりも心から愛する女性の言葉を信じたかったお気持ち、少しはお察しいたします」

それに王は眉をひそめる。

「ん？ 何の話だ？」

「何のって、リザですよ。婚約までなさっていたんですもの」

王は短く「ああ」と言つて額をかいた。

「そのことなら、そうだな、間違い………というか、なんというか」「え?」

「あ、いや、あのような他人を陥れるような女に未練はない。それに、そもそも私は君が」

ゴニヨゴニヨと言いよどむ彼に首をかしげる。王は話をむりやり変えようとするが如く、「ああ」と声を上げた。

「彼女らの処分が決まったぞ」

それにヒヤリとした。もしかして、やっぱり王は……。

「あ、あの、陛下。私は彼女らを同じ目に遭わせたいだなんてことは」

「分かつてる。処刑処分にはしないことにした。彼女らのためじゃない、君のために」

“君のために”?

王は私の頬に指を滑らせる。

「それより聞いておきたい。彼女らは私の与える罰を受ける。ならばどんな罰を受ければいい。いや、もっと正直に言おう」

肺の中の淀みを吐き出すように、一度きつく目を閉じて開いた。

「私自身が落ち着かないのだ。君にあれだけのことをしておきなが

ら、君とこうして話しているのが。いつそのこと、短剣で胸を貫かれたほうがどれだけいいか」

黒曜石のような瞳が悲しみや苦しみに満ちていた。こんな眼をするんだ、この人も。

「ソフィア、私はどうすればいい」

王から視線を外し、少し考えた。どんな、罰を……。

「あなたの心に、あの日のことを刻みつけてください。決して忘れず、もう二度と同じことは繰り返さないと約束してください。それが、私からあなたへ与える罰です、陛下」

「分かった、約束する」

私は小さく息を吐くと、微笑んでそつと手を差し出した。まだこのわだかまりが消えていないことは自覚してる。でも、ここから新しく始まるのだと信じたい。そのための握手だった。それに王もすんなりと応えてくれる。

「いいお友達になりましたよね、陛下」

「もちろんだ。いいと……と、友達だと!？」

王は突然我に返ったように、握っていた手を無理やり引き剥がした。ムツとしたように見下ろしてくる。何かマズかった？

「君は後宮と言うものが分かっているようだな！そこにいる限り、身も心も王に捧げるべきだろう！“女として”！」

「あの、陛下は一体、私とどうなることをお望みなのですか？」

どうして人対人（ヴァンパイアだけど）ではなく、女性対男性でなければならぬのかわからない。というより、王の言動全てが謎だった。危うく処刑されかけて、陛下にそれを謝ってもらってさあではこれからお互い頑張っていきましょうねという流れにつきさつき行き着いただけ。それがなぜ後宮がどうだのと怒るのだろう。そんなに後宮の女性を独り占めしたいの？

「お、お望みもなにも男女のことなのだから、どうなるか分からないだろう」

「それはつまり、私たちがいずれ愛し合うようになるかもしれない、ということですか？ ふふ、ご冗談を」

「……」

王はふて腐れたように押し黙った。私の方を見ようともしない。

「あの、陛下？」

居心地が悪くなってそう呼びかけた。すると王は突然「見ろ」と町の端を指差した。

「え？」

その先を見た瞬間、唇の端を下から上にねっとり熱いものが通りすぎた。

「っ！」

今もしかして……舐め

反射的にそこをぬぐって王をにらみつけた。彼の方はとても満足げに笑っている。信じられない！ あんな古典的な方法に引っかけ

る私も悪いけど、やることが変態すぎる！ それに王は女性に見境がないみたい、最低！

怒る私とは反対に、王の私を見る目に熱がこもり始めた。今は二人きりで、当然助けもない。危ない空気をヒシヒシと感じ、彼が次なる言葉を発する前に急いで話題を変えた。

「そ、それで彼女らを、どのような処遇になさるのですか！」

少し声が上がったけれど仕方がない。王はチラッと町をみて、にんまりと笑った。

「もうすでに実行に移してある。他人を陥れようとしたのだ、今度は他人の役に立ってもらわんとな」

それがどういふことなのか聞いてみたけれど、王は笑うばかりで答えてはくれなかった。

「まあ陛下が一般向けにこんなサービスを開始してくださるなんて助かるわあ。じゃ、よろしくね」

そう言って、頭に角の生えたおばさんが嬉しそうに出て行った。

「ちょっと、何で私がこんなことッ！」

リザたちは城外の魔豚小屋で、歯の開いた汚いブラシでゴシゴシと床をこすっていた。独特の獣臭が充満し、思わず顔をしかめたくなる。

「うるたい、文句言わじにやれよ、メス豚」

丸々と太った豚頭人が、ポロポロとドーナツを食べこぼしながら命じる。

「豚に豚って言われたくないわよ！ だいたいあんた豚なんだから、あんたがお仲間の世話をすればいいでしょが！」

「オレは豚じゃねよ！ 陛下が直々に、お前らの監視係をオレに与えてくださつたんだ。あん方のご期待を裏切るわけにやいかね。もつと腰入れてやれメス豚！」

「豚豚うつるさいわね！ オス豚！ 私を誰だと思ってるの？」

「元陛下婚約者、現ボランティア掃除人」

「もう、いやあああ！」

ブラシを放り投げて頭を抱えるリザに魔豚たちは意地悪そうに笑い、その上を空飛ぶスレイプニールが通り過ぎていった。

s t . ? ?

The Vow (後書き)

あとがき

ソフィアは帰った後、すぐさま王に舐められたところを思いっきり石鹸で洗っているでしょう(笑)

今日部屋に戻ると、私の荷物がすっかりなくなっていた。引き出しの中に入れていたレポートも、ベッドの下にあるはずの着替えや本も。

「何で？ どうして？」

混乱してゴミ箱の後ろやシーツをめくってみたけど、何も無い。まさかまた泥棒に？

「ソフィア・クローズ」

冷やかな声にびくりとして振り返った。管理人のルモールさんが、柳のようにそこに佇んでいた。目玉が零れ落ちそうに見開かれ、その眼力つたらない。「……はい」と返事しながら恐る恐る近づいた。

「あなたはファーストクラスに移るようになりました。ついてきなさい」

そう言っただレスの裾を翻してスタスタと歩いていく。

ちょ……ちょっと待って？ ファーストクラスに移ることになりました？ 何それ、どういうこと?! だってこのシステム上、クラスを移るには支援してくれる貴族が必要なのに、そんな話一切

「早くなさい」

「は、はい」

でも疑問を彼女にぶつけることができず、大人しくその後につき従った。

「ここがあなたのお部屋です」

キイと分厚く立派な扉が開かれる。私がさっきまでいた部屋とは桁違いの豪華さだった。柔らかな絨毯、クイーンサイズの天蓋付ベッド、大きなソファアームにクッション、素晴らしい化粧台。壁際の精巧な装飾のされたキャビネットには、高そうな陶器の人形やクリスタルクレーンの置物が並んでいる。窓の傍には四人用の白いテーブルと椅子があり、風景画の美しい食器の並ぶ棚が配置されていた。

「左手奥の扉にはバスルーム、右手奥はウォークインクローゼットになっています。中のドレスは自由にお使いなさい。お食事はすべてこの部屋へ運ばれます。時間指定が可能ですから、あとでそのテーブルの上のベルを鳴らしてこの部屋専属のメイドを呼ぶこと。何か用事があるときも同じように」

そう言つてガラスの羽のついた美しい鍵と封筒を渡された。封筒には“Dear My Princess【Dearマイプリンセス】”とあり、裏には“Your Knight, Joe Public【匿名の騎士より】”なんてキザな言葉。中にはラメの入った黒いカードが入っていた。

「鍵はこの部屋のもの。カードは後宮内のカフェやレストランなどで支払いの際使うものです。無くさないように」

「でも私はお金なんて」

「代金は支援貴族様のアカウントから引き落とされます」

「あ、あの一体どなたが支援を？」

私にはそんなことを申し出てくれた貴族もないし、いたとしても断ってる。

「さあ、私は陛下に申し付けられた通りにしているだけですから。あのお方が来られる前に、しっかりこれを読んでおくように」

ルモールさんは私に一冊の本を手渡すと、そのまま扉を閉めて出て行った。今まで狭い空間にいたのに、いきなり大きなところへ連れてこられて戸惑う。でもとりあえず荷物は全部こちらへ持ってきてもらっていたようで安心した。

部屋をぐるっと見渡す。レコードらしきものはあるけど使い方が分からないし、キャビネットの上に布でカバーされた巨大な絵がかかっているけど、高い位置にあって手が届かない。他にすることも無くベッドに腰掛けた。ものすごくふかふかで気持ちいい。

「何の本かしら」

少々厚みのある本。表紙には“知っておくべきこと”とのタイトル。何だろうと開いてみると、このファーストクラスでの生活指南書のようなだった。

「えっと、なになに？ “はじめに。ファーストクラスへ移られたみなさんへ覚えておいて欲しい基本事項。一つ、あなたがたは正室に選ばれるべくここへ移されました。いつ妃となってもよいように、日ごろから礼儀作法や教養を身につける努力を怠らないようにしましょっ”」

まあそれはそうよね。私は興味ないけれど。

「一つ、いかなるときも王を敬い、常に心から王を愛すること」
無理。

「一つ、王に愛されるべく身のまわりや体のケアを怠らないこと。
特に甘いものの過剰摂取や臭いには気をつけること」

余計なお世話……。

「一つ……」

そこで言葉が詰まった。何度もそこを読み返すうちに、顔が熱くなった。

「一つ、王の夜の誘いを絶対に断らないこと。やむを得ない事情がある場合はメイドに事前に報告しておくこと。また、ベッドの上では最大限に王を喜ばせるよう努めること」p.38以降参照のこと」

何これと思いつつ、好奇心もあいまって恐る恐る38ページをめくった。

「！」

そこには、“王の喜ばせ方”なるものが卑猥な絵と詳しい解説つきで、何ページにもわたって紹介されていた。心臓が早鐘のように鳴り、血液が顔へ集中する。これをやれと？ 私が王に？ 絶対いやあー！

その時、コンコンと扉がノックされた。それにドキツとする。まさか

「ソフィア、入るぞ」

やっぱり王だわ！ タイミング最悪！ 私は本を放り投げ、急いでベッドの下に身を潜めた。

カチャツとノブを捻って入ってくる。ああ、鍵をかけておけばよかった！ 魔術で開けられちゃうだろうけど。

「ソフィア、いるんだろう？」

王の足元を凝視しながら、どうか早く帰ってきてくれるようにと願う。何か包装紙のすれる音が聞こえる。どうやら花束が何か持ってきたらしい。

「ソフィア？」

王は私の姿を探して歩き回り始めた。まるで命がけのかくれんぼをしているような心地がする。心臓の音すら聞こえてはいないかとヒヤヒヤした。

その心配に追い討ちをかけるように、王は突然ベッドへ方向を転換して向かってきた。いやあ！ やめて、来ないで！

「まだ温かいな」

どうやら私がさっきまで腰掛けていたシートに触ったらしい。少々笑いを含んだようにそう言った。変態くささ満載じゃない！

「どうしたソフィア、私を焦らしているのか？」

花束をベッドへ乗せる音がしたかと思うと、なにやら紙をめくる音が聞こえた。何して……そっか、あの本を開いたままベッドの上に置いてきちやっただ。それを見てるんだわ！ もう最悪！ 私のバカバカバカ！

「可愛いな。私のためにこんな研究をしてくれているのか」

そんなわけないじゃない！

「私に言えば全て直に教えてやるのに。ソフィア？ ソフィー？ シャワーでも浴びてるのか？ 噛みついたりせんから出てこい」

王はそう言うと、奥の扉を開けて入っていった。何だか今日は少しテンションが高い気がするけど、思い過ごしかしら？

それよりシャワーを浴びていたらとんでもないことになっていたけど、今はチャンス！ 急いでベッドを抜け出すと、扉へまっすぐ向かってドアを引く。

「あれ、開かない」

鍵を回してもう一度引いた。やっぱりだめ。何で？ 何度も鍵を回しては扉と押し問答を繰り返した。お願い、開いて！

「何をしているんだ？」

真上から低い声が降ってきて、ピシッと体が固まった。恐る恐る見上げる。

「へ、陛下……」

王がドアを手で押さえ、不気味な笑みを浮かべて背後に立っていた。これで開かなかつたんだ。でもどうして。バスルームに入ったんじゃないの？

彼はふと笑みを零すと、両手首を掴んで体で私をドアに押し付けた。扉と陛下に挟まれて息苦しい。動けない私をあざ笑うかのよう
に、頬にそつと口づけた。

「や、やめてください！」

「君が私を焦らすからだろう？」

「焦らしてません、逃げようと隠れてたんです！」

王の手が緩んだ瞬間に、傍を離れて距離をとる。

「これは一体どういうことなんですか。どうしていきなり私をこへ」

「忘れたのか」

王は目を薄め、少々機嫌悪そうに言った。忘れたって、何を？

「結婚の約束をしただろう。そのための前段階だ」

『君は私の妻になるんだぞ！』

指先から氷が這うように、ゆっくりと私を浸食していった。アレは本当に……本気だったというの？ リップサービスでもなんでもなく？

「罪滅ぼしのための結婚なんて、必要ないと言ったではありませんか」

「もちろん、そんな理由じゃない。愛のない結婚などしない」

”愛のない結婚なんてしない”？

王はポケットから小さな箱を取り出すと、ゆっくりとそれを開けた。そこにはこの世のものとは思えないほどに美しい指輪。リザがしていたものよりもっと。でもそれを見た瞬間、どす黒い感情が沸きあがってきた。

“なにそれ”……って。

「本気、なんですか」

氷が肺に張り付いていくよう。この人、自分の言っていることが分かってるの？ ついこの間リザとの婚約を破棄したと思ったら、次は私？

そっか。きつとこの人にとって、人間の女性なんて玩具と同じなんだ。身も心も好きなように扱って、飽きれば簡単に捨てる。そしてこう思ってるんだわ。いくら傷つけたって、いくらひどい目に遭わせたって、“キスでもしてやれば悦ぶ”。

許したつもりになっていた。彼が変わろうとしているならって。あのことを忘れないでいてくれるならって。彼もそのつもりだっと思ってたのに。根は悪い人じゃないって。

許せると思っただ。けど　今は吐き気でどうにかなりそう。

王は急にそわそわと歩き始め、胸に手を当て、何度か呼吸を整えるようなそぶりを見せた。

「ソ、ソフィア、あの時は勢いで言ってしまったが、やはりきちんと。じ、実は、その、は、初めて会ったあのときから私は、ず

つと君を」

「帰ってください」

「！」

聞きたくない。この人の薄っぺらい愛の告白なんて。どうせダメならダメで、またいそいそと別の女性の元へ行くのでしょうか？ だったら私になんて構わないで早く次へ行けばいい。ここにはそのために集められた人たちがたくさんいるんだから。

「あなたに相応しい女性はきっといるでしょう。そしてそれは私じゃない」

「……ソフィア」

なに傷ついたような顔をしているの？ 私がそんな軽薄なプロポーズを受けると？ ここまで他人の心が分からない人だとは思わなかった。

「帰ってください。今すぐ」

ベッドの上に乗っていた花束を押し付け、扉の方へ押しやった。

「ま……待ってくれ。急にどうした？ そんなにこの部屋が嫌か？ だったら早急に別の」

「違う！」

王の手にあった指輪を床へ払い落とした。リングはコロコロと転がり、そのままどこかへ姿を消す。

「陛下は本当に申し訳ないと思っているんですか？」

彼の漆黒の瞳を見上げた。ひそめられていた眉がゆっくりと元に戻り、眼に力が宿る。

「当然だ。あのことは忘れないし、もう二度と繰り返さない。一度した約束も必ず守る」

「嘘です」

「嘘ではない」

「いいえ！ 本気で申し訳ないと思っているのなら、なぜこんな風に平然と私の前に現れられるのです。愛しているから結婚しようなどと言えるのです！」

王は言葉を失い、何か言いかけた口をそっと閉じた。

「あの件のことは忘れてくださって結構です。約束も償いも必要ない。あなたの心を二度と縛りつけはしません。その代わり」

溢れそうになる涙を、震える喉の奥へ押しやる。この人の前になんて泣きたくなかった。

「それでもう、全てを終わりにしてください」

王は目を見開き、私の顔を見つめたまま硬直していた。唇が少し震えていたように見えたけれど、それはシヨックからなのか怒っているからなのかは分からなかった。

あの暴れ馬の時のように、彼の手から指が滑って離れていくような感覚が走る。

ゆっくりノブを引き、扉を開けた。ちようつがいが悲しげに鳴く。

「どうぞ、出て行ってください。私も元の部屋へ戻ります」

これ以上苦しめないですむのなら、一生何もない狭い部屋で十分だわ。

王は床に転がっていた空の指輪ケースを、ひどく緩慢な動作で拾い上げた。

「いや、君はここにいてくれ。もう手続きも済ませてしまった。だが安心しろ、私は……もう決して君の前には現れない」

王はそう言いながら小さく笑ったようだったが、俯いていた私にはどんな笑顔を浮かべていたのかは分からなかった。ただ、その声の震えだけはなぜか鮮明に感じられた。

そんな演技に、騙されたりしない。

「どこへ行ったのかと思っていたら、こんなことに連れてこられたのかい？」

ミセスグリーンは信じられないと頭を振った。

「ごめんなさい。あまりに急な話だったものだから」

もぬけの殻になっていた私の元部屋は、彼女をそうとう驚かせてしまったらしい。当然よね。ああ、置手紙でもしておけばよかった。

「全くあのお方は一体何を考えているのやら……」

「そうだね、せめていい暮らしをさせてやろっつていう償いの気持ち。もしくは彼女にプロポーズでもしようってハラかな」

レオ様が紅茶を口にしながら、呆れたようにそう言った。さすが

に鋭い。ミセスグリーンに私の居場所を教えてくれたのは、どうやら彼らしい。

「やゝ、それにしてもお二方に、またお会いできるとは」

そう言って、以前レオ様の部屋でお世話をしてくれたゴーストメイトのミントさんがお茶を注いでくれた。彼女がこの部屋の専属メイドになってくれたことはとっても嬉しい。

「かゝんげきです、はい」

彼女の入れてくれる紅茶はとても美味しかった。なんでも彼女自身も紅茶が好きらしく、歴史から最近のトレンドや茶葉の旬まで知っている。ミセスグリーンも専用の小さなカップにお茶を注いでもらって、とても優雅にそれを味わっていた。人間で表現するならば、きっと小指は立ててるわ。

彼女はカップをソーサーに置くと、少し心配げに私を振り仰いだ。

「でもソフィー、ここへ移されたってことは、陛下に変なこと要求されたりしてるんじゃないだろうね？」

その瞬間、あの人の張り裂けそうな顔を思い出した。

どうして？ あんな目にあわせた張本人に、もう会わなくていいのよ、喜ぶべきじゃない。

それなのに、笑うのにひどく頬に力が必要だった。

「だ、大丈夫！ 心配しないで。そ、それよりあの、支援してください。さっている貴族と言うのはレオ様なんですか？」

堪えきれずわざと話題をそらし、隣に座るレオ様に話をふった。

不自然だと思われていないといいけど。

「そう、オレ……と言いたいとこだけど残念ながら違う。明文化されている決まりじゃないけど、王や王族は後宮の支援ができないんだ。貴族どもが不公平だつてうるさいからね」

「ああ、やつぱり」

その言葉に引っかけかりを覚えたのか、レオ様は「どうして？」と小首を傾げた。私は支払い用のカードが入っていた封筒を差し出した。“Dearマイプリンセス”、“匿名の騎士より”と書かれたそれ。少なくともレオ様はこんなこと書く人じゃないから。王だつて　いえ、あの人はもう関係ない。

「……」

レオ様もその封筒に、表情を固まらせる。息を小さく吐いていたけれど、ため息と言うよりは肺から空気が漏れ出たといったほうが正しいと思う。

「それで、これはどなたが？」

「うん、オレも君の支援者が気になって調べたんだ。兄上が古くからの知り合いに頼んだみたい。まあ名目上はそいつが支援者だけど、お金は全部兄上持ちらしいから遠慮なくじゃんじゃん使つてやれ」

それに苦笑する。

王が……。もう会わないとは言え、生活を彼に支えてもらわなきゃならないなんて。やつぱり何とか人間界へ帰る方法はないのかしら。もちろん、レオ様たちとはすごく離れがたい。でもここにいる以上は誰かに頼らざるを得ないというのに、よりによってそれがあの人だなんて。自立する方法があるなら別だけど、人間がこの世界

で働けるものなのかし

「ん……っ！」

突然唇へ舞い降りた柔らかな感触に、思考が一時停止した。いつもの香水が鼻腔をくすぐる。レオ様にキスされたと分かって、血圧が一気に上昇した。

「ごめん、ぼうつとしてたみだいだから、つい」

至近距離でキレイな笑みを見せられ、顔から湯気がでそうなほどの熱さを感じた。そうよ、呆けてる場合じゃなかった。すっかりしなきゃ！

一人決意を固めていると、再び優しく口づけられた。止まらなくなったように何度も唇を重ねるレオ様に、さすがに私も少し焦って軽く胸を押す。

「嫌？」

悲しげな光を瞳に宿し、悩ましげに眉をひそめた。あまりの色気に心臓が激しく脈打つ。い、嫌、というか……。その間にまたゆっくりと唇を近づけてくる。ダメ、い、息ができない！

「おおっほん！」

ミセスグリーンの咳払いに思わず肩がビクついた。

「そういったことは、お二人のときにどうぞ」と笑いを含んで紅茶を口にする。レオ様はいたずらっぽい笑みを浮かべて離れ、それに胸をなで下ろした。

「それは失礼。にしても兄上もよくやるよ。王自ら支援を内々に頼むなんて、バレたらどうするつもりなんだか」

レオ様は背もたれを使って伸びをすると、やれやれと天井を仰いだ。

「それで公爵様、ソフィアを支援していることになっている方というのは、一体どんな方なんです？」

ミセスグリーンの問題に、レオ様は唇を軽く噛みながら「うーんと唸る。」

「名前は、ロキ・グット・ステイラー。伯爵で一族自体もおおむね評判がいい。父親はその道では知らぬものはいないっていうほどの優れた学者だし、叔父さんは法曹界の重鎮。オレたちの父親同士が仲よかったから、その縁で兄上もオレも小さい頃から知ってるよ。いわゆる幼馴染ってやつ。けどアイツは」

レオ様は何か思い出したのか、苦虫でも潰したような顔をする。どうしたんだろう。

「何ていうか、一言でいえばバカ……っていうか。ソフィーも関わらないほうがいいよ、女性にだらしないしね。まあ会うことはないと思うから、気にしないで」

そう肩をすくめるレオ様に、どんな人なんだろうと気になりつつ、大人しくうなずいておくことにした。

「そうですね、それはようございました」

イヤイヤ連れてこられたものの、スクールファーストでの授業は
かなり面白かった。以前リザに連れられて行ったときも思ったけれ
ど、実験器具や楽器、もちろん魔獣の種類や質もかなりいい。今日
は特別な顕微鏡で小さな小さな生き物の観察をした。イチゴほどの
大きさの箱に山があつて川があつて、街があつてびっくり。もちろ
ん牛や羊まで飼つて生活しているんだから世界って広いわ。

学校へ行きたての小さな子みたいだけど、宿題をしながらミント
さんに授業のことを色々報告していた。

「で？ 陛下はよく来られるのですか？」

それに、ノートに書き込みをする手が一瞬とまった。

ありがたいことに彼女はそれに気づかず、プレートを口元へ持つ
ていって「クククク」と肩を震わせる。こういう話題好きなんだ。

「あ、いえ」

「私もここへ来て五十年ほどになりますけどね、あの方があれほ
ど一人の女性に執着しているのを見るのは初めてです」

「“執着”？」

付きまとわれていたのは事実だけど、それは愛や恋によるものじ
やない。どうせ暇つぶしに遊んでただけ。処刑しかけた女を落とせ
ば、さぞかし楽しいでしょうね。

「そうですね。あれだつてもものすごく苦手なのに、一生懸命」

“あれ”？

そこでコンコンとノック音がした。

「あ、陛下ですかね？」

違うと思う。と言う前に彼女はフフフと楽しそうに笑うと、「ごめ
つくり」と壁の向こうへ通り抜けていった。違うだけだな。

急かすようにもう一度コンコンと鳴る。

「は、はい……」

恐る恐る扉を開けた先には、男性が立っていた。もちろん王でも
なければ、レオ様でもない。

後ろで縛った長いアツプルグリーン色の髪に、少々タレ目ぎみのヴ
アンパイアだった。その後ろには衛兵らしき者たちが複数立ってい
るとはいえ、後宮に男性のヴァンパイアが入ってくるなんて。

相当な権力の持ち主なのかもしれない。

「君が僕のプリンセスかい？」

ぷ……プリンセス？

彼はスツと胸のポケットから紫色のバラを取って香りをかぐと、
得意げな笑みを浮かべた。

「君の支援をしている“匿名の騎士”とは僕のことさ、ハニー」

まるで“バーン”とでも言いたげに、ピストルの形にした手を私
の胸へ向けて放つ。

『何ていうか、一言でいえばバカ』

そんなレオ様の言葉が頭をよぎった。

s t . ? ? ? ?

The First Class (後書き)

あとがき

変人登場。

「はあっん……陛下……」

男女の熱い吐息が部屋を満たし、シーツの擦れ合う音とベッドの揺れが一層激しさを増した。女は甘い声を発しながら、その華奢な手を男の逞しい背中へ回す。じつとりと汗ばむ男の額に、自分を求める必死さを感じて喜びを覚えた。男の美しさと腰使いの巧みさもあいまって、女は荒々しく揺さぶられながらも恍惚とした表情を浮かべている。

男も限界が近いのか、苦しげに眉をひそめて迫り来る快樂に耐えていた。女も男の腰にからめていた足がずり落ちる。

「っあ……ん、へいか、も、もう、ダメ」

「ぐっ、ソ……ファイアっ」

女は背中を弓のようにそらして一際大きな声を出すと同時に、男も小さく息を漏らした。部屋は静けさを取り戻し、荒い息だけがその名残をとどめる。

ザルクは女の上から退けると、気だるい体をベッドへ預け、余韻に浸るように天井を仰いだ。

「陛下、いつもより情熱的でしたわ」

女は濡れた唇もそのままに、うっとりとした表情でそう言った。それはそうだろう。愛しい彼女に“これで終わりにして欲しい”と告げられ、その悲しみを晴らすためにまっすぐこの女の元へ来たのだから。だがそれは特別、この女に慰めてもらいたくてというわけではない。別に誰でもよかった。この心に空いた穴から沸きだす、

モヤモヤとした思いがぶつけられるなら。

「このような時間にいらすなんて。執務は大丈夫ですか？」

女は恥らうようにシートで胸元を隠し、彼を見つめる。彼女へプロポーズをする予定だったから、スケジュールを無理やり調整して午後から予定を空けていた。彼女に返された花束が目の端に映り、胸をえぐられるような痛みが走った。

「問題ない、気にするな」

女は「そうですか」と微笑み、ぐったりしながらも甘えるようにザルクの肩に頭を乗せる。行為の終わった後では女のこういう態度は、ことさらにわずらわしく感じられた。欲をぶつけに来たのだから、それさえ済めば用はないのだ。それが何を勘違いしているのか、さらに優しくしてくれといわんばかりに擦り寄られる。埋まるはずだった正室の座が空き、この女だけでなくファーストクラス全体がどこか喜びに浮き足立っているようだった。

面倒だ。

「陛下……ふ、んっ」

名前も覚えていない女の内なる要求に応え、黙ってキスし頭を撫でてやっているのをありがたく思ってもらいたいくらいだ。

だがこれが彼女ならば、いくらでも慈しんでやれる。甘える姿に身悶えるだろう。キスはねだらねらずともいくらでもするし、終わった後もきつと放さない。この違いが愛なのだと思った。もうすでに取り返しはつかないが。

許してくれようとした彼女の、その優しさを踏みにじってしまった

た。いくら後悔してもしきれない。冷静になつて考えてみれば、愛を囁くことは時期尚早だった。彼女は自分がリザを、少なくとも婚約破棄するまでは愛していたと思つていたのだらう。それがこうも早く自分へと切り替えられたと受け取れば、怒つて当然のこと。薄っぺらい愛だと思われたはずだ。そもそも反省などしていないのではと思われたかもしれない。

だが待つ余裕がなかったのだ。他の男に触れられぬよう、早く彼女を自分の腕の中へ囲い込みたい。レオナルドとの関係が気になつて仕方なかった。二人はやはりもう……。

心の闇が広がっていくのを覚え、ザルクはイラついたように再び女に覆いかぶさつた。女は一瞬驚いたように眼を丸くしながらも、どこか色っぽく笑う。だが美しい女の誘うような笑みも、ザルクの視界には全く入っていなかった。

彼女が誰か他の男に取られると考えただけで、とんでもない絶望感に襲われる。それならいつその事、監禁でもして一生自分の傍に縛りつけてやるうか。細い体を押さえつけ気が狂いそうになるまでレイプし、自分の子を妊娠させてやるうか。子供がいれば彼女だつて……。

『もう、全てを終わりにしてください』

涙を必死に耐え、壊れそうな表情で懇願する彼女を思い出した。いや、彼女をこれ以上傷つけることなどできはしない。絶対に。

ザルクは一瞬でも彼女を苦しめるような想像をした自分に吐き気がした。

「陛下、あ、もう……いけませんわ。少しはッ、休ませてくださいませ」

そう拒否の言葉を吐きつつ、女は嬉しそうに高みへと導かれていく。

「そういえば……んっ、先ほど、何とおっしゃったの？」

“先ほど”？ 突然の問いかけにも、ああ、達する直前のことかとすぐに分かった。

別の女の名前、とは言えるはずもない。感情が高ぶってつい声に出してしまったのは不覚であったが、このあたりの女を本命の彼女に置き換えて抱くのも最近では珍しくなかった。彼女を想いながらのそれは、身も心も普段の何倍も満たされた。

だから彼女と会った直後には、決まって誰か後宮の女を抱く。さっきまで感じていた彼女の匂いと手触りを思い返しながら精を放つのが、このところの楽しみだった。ただ終わった後の虚無感だけはどうしようもないが。

ザルクは別段、それを悪趣味とも最低なことだとも思っていない。純粹な彼女を前にすると、自分のこの肉欲が汚らしいものを感じられてならない。もちろん彼女をこの腕に抱けるのなら嬉しくて飛び跳ねるだろうが、その行為はあくまで愛を深めるためのものでなければ。自分の欲望を優先することなどあり得なかった。

だから有り余る性への欲求を、この女たちで充足させる。彼女以外の女が泣こうが喚こうが汚れようが知ったことではない。自分はフェミニストでもジェントルマンでもないのだ。それに元々この女たちのことなど、大して気に留めてなどいなかった。

「さあな。君が良すぎてよく覚えていない」

そう言って胸元から顔を上げて微笑んでやれば、女は顔を赤くして目を伏せた。これだけのことで、あっさりとそれ以上の追求を止めるのだから簡単なものだ。そう、彼女以外の女はこんなにもたやすく自分のものにできる。

それなのになぜ、本当に手に入れたいものは指の間を滑り落ちていくのだ。報われることはないのか。自分はこれまでずっと、ずっと

「陛下……それよりその腕の包帯は大丈夫ですの」

それにザルクは思考を止めた。彼の肘から下にはぐるぐると包帯が巻かれてあった。痛々しいそれに気遣いを見せるのは当然だろうが、ザルクは余計なことを詮索されたことに呆れ、突然女から体を離して服を着始めた。

「あ、あのだつてうつ血が包帯の外にも」

「君がそんなにも差し出がましい女だとは思わなかった」

それに女はサツと顔色を悪くする。体をシートで隠すことも忘れてすがつた。

「も、申し訳ございません！ 陛下っ」

そう謝罪を口にする女を突き放し、肩に上着をかけたままさつさと扉へ向かった。女の涙交じりの叫び声を掻き消すように、無造作に扉を閉める。

だがその表情は、大変な苦痛に満ちているようであった。

「えーっと……匿名の騎士様、ですか」

部屋の出入り口で、私はバラの香りを嗅ぎ続けるその人を見上げ

た。

「そう。本名が明かせなくて残念だ」

知ってるのですが、とは言い出しにくいこの空気。確かレオ様はロキ・グット・ステイラー伯爵様だって言ってたわよね？

「僕の話はナイト様と呼んでくれ、マイプリンセス」

“マイプリンセス”まさか私のことはずっとそう呼ぶ気じゃ。それにナイト様だなんて。何が悲しくてそんな風に呼び合わなければならぬの？

でも名義上とは言えこうやって私を支援してくれている人なんだから、感謝はしなきゃだめよね。

「は、はい、ナイト……様」

笑っているつもりだけど、顔が引きつりそう。

「今日は一体どのような」

「ああ、僕のことはお構いなく。ただ美味しい紅茶と少しのバタークッキーを用意してくれるだけで十分だよ」

伯爵さんはそう言って無理やり部屋へ足を踏み入れる。黒い軍服に身を包んだ緑色の顔の衛兵さんたちも、ベレー帽からツノをのぞかせてズカズカと他人の部屋へと押しかけてきた。

伯爵さんは衛兵の引いた椅子へ腰掛け、見せつけるように脚を組む。その途中で膝をガンとテーブルの裏へぶつけたのは、見てみないフリをしてあげた。

そんなトラブルをもとめせず、彼は「はあ」と黄昏た風にバラ

に口づけた。左手はそつとぶつけた膝をさすってるけど。
どうでもいいけどこの人……いくら何でも格好つけすぎだわ。

「マイプリンセス、君も座ったらどうだい？」

そう言っつて衛兵さんに自分の向かい側ではなく、隣の席の椅子を引かせた。三人いるうちの一人は、勝手にガチャガチャと食器をいじっている。けれど扱いなれていないのか、なぜかとてもフラフラして危うくカップを落としかけていた。

「私が」

ミントさんと呼ばうかとも思ったけど、いつも彼女がやるのを見ていたし一人で対処できそうだったから止めた。何より余計なことに巻き込みたくない。

ティーポットを傾けてカップへ注げば、ふわりと湯気が立ちあがる。伯爵さんは親指と人差し指で取っ手をつまむと、まるでワインのように香りを楽しんでほんの一口含んだ。

「ん〜、こんなに美味しい紅茶は生まれて初めてだ」

「あ、ありがとうございます」

たったそれだけで味が分かるの？　なんて言えない。ヴァンパイアは人間と舌の構造が違うという可能性もあるにはあるし。

「さ、君も遠慮なく座りたまえ」

「は、はい……」

ちょこんと遠慮がちに彼の隣へ腰掛けた。すると伯爵さんは自分の椅子の位置を何度も微調整して私に微笑みかける。どうやらそれ

が彼の一番キマる角度らしい。キラリと白い歯を見せつけるように笑った。

「今回はザルクがすまなかつたね。僕が代わって謝罪するよ」

「？」

一瞬誰のことだか分からなかった。あの人の名前を忘れていたわけじゃないけど、そんな風に呼ぶ人を見たことが無かったから反応が鈍った。

「ああ、すまない。陛下と呼ぶべきか。レオもそうだけど、僕たちとってもフレンドリーな間柄だから、ついさ」

そつとカップをソーサーへ置く。

王や王族と仲がいいのが自慢なんだろう。とりあえず伯爵さんはたくさん彼らとの思い出を喋った。王とは同い年らしく、小さい頃からよく一緒にいたんだとか。彼は成績がとってもよくて、王やレオ様に勉強を教えてやっていたとか、狩りに行ってもいつも一番だったとか、アイスマウンテンの麓で氷穴釣りをしたとき、誤って落っこちたレオ様を助けた話とか。一番興奮気味に語っていたのは、大白熊のくんだり。襲ってきたその怪物を伯爵さんがあっさり魔術でやっつけた時、終わって振り返るとレオ様は震えて木の陰で泣いていたんだって。

まあとにかくおしゃべりが大好きみたい。

伯爵さんにとってはナルシストな感じがしたけど、身振り手ぶりの話はとても上手で引き込まれる。ここへ来て話し相手といえば、ミセスグリーンとレオ様くらいだったから何だか新鮮だった。私、きつと会話を楽しんでる。

「……というわけさ。ま、ザルクも即位したのは、六つの時だったからねえ。よくやっていたとは言え、僕のサポーターイングなしじゃこの国は今頃他国に乗っ取られていたかもしれないよ」
「六つ？」

そんな小さな頃からあの人は王だったの？

「そうさ。でも僕はとってもクレバーな子供だったから。王の補佐ぐらいできて当然なのさ」

それよりそういえば、伯爵さんの話の中にも王が出てくる回数よりレオ様の方が圧倒的に多かった。それに出てきてもいつも、仕事関係の話の中がほとんど。

「あの……」

「なんだい、マイプリ」

略すくらいなら名前で呼んで欲しいわ。

「ナイト様からみて、陛下はどのような方ですか」

もう考えないと決めていたのに、それがなぜかとても気になった。最後にして欲しいと言ったのは自分なのに、今更何を知ろうというのかしら。自分でもよく分からない。

伯爵さんは鼻の頭でバラの花を回していた。そのせいか大きなくしゃみをしていただけ、それもあえて触れない。

伯爵さんは鼻をこすり、

「失礼。そうだね、ザルクはとても気の毒だと思っよ」

「“気の毒”？」

「小さい頃から大国の王というスーパービッグな責任を負わされ、過ちを犯すことも、弱音を吐くことも、欲しいものを欲しいと言うことも、したいことをすることも許されなかったから」

なぜ？

私あまり理解していなさそうだと感じたのか、彼は肩をすくめ、「過ちは不信につながり、弱音は民の不安をあり、我欲は国を衰退させ、職務第一は当然の義務。先頭に立つというのは、思いのほか自由が制限されるものなのさ」と言った。

その言葉は、私をとて複雑な心境にした。優秀と言われる傍ら、冷徹な王だと囁かれている。それはきつと、あの人を怨み嫌っている人も多いからだろう。そんな話をものともしていかないように見える裏側で、あの人はそんな風にこの世の中を生きてきたんだ。幼い頃からずっと、欲しい物もしたいことも我慢して、重い責任を一人で背負って。それなのに賞賛されるどころか、どこかで誰かの憎しみを一身に受け続ける。時には呪いの言葉だっけかけられるのかもしれない。

だ、だから何？ 私には関係ない。

なのに彼が時おり見せる赤い顔や、子供のように無邪気で純粹な瞳が頭をよぎった。王である時とは様子の違う、その自然な表情。

「まあザルクは過ちなんで犯さないけどね。例え犯しても、周りがそれを真実へと捻じ曲げる。だから彼のやることは百パーセント全て正しいのさ」

そういえばあの件だって、私は“間違っただけで処刑された”ことになっていた。“すまない”と謝罪を口にしていた彼が、それに納得しているようには見えなかったけれど。

「王の仕事なんて僕はなんなくコンプリートできるけど、そういうことはやっぱりねえ。つくづく王じゃなくてよかったって、レオも思ってるんじゃないかな。根っから冷たいザルクじゃなきゃ勤まらない仕事さ」

それに違和感を覚えた。

『私を恨んでいるのなら、私を好きにしてくれて構わない。煮るなり焼くなり、君の気の済むようにしてくれ』

『すまない、あのようなやり方は君を傷つけたらさう』

『良かった、無事で。もし君にまた何かあったら、私はこのさき生きては行けん』

王の言葉が甦った。私を氣遣うその言葉たち。少なくともそれらは、心からの声に聞こえた。彼が冷酷だといわれているのは知っている。私だって実際ひどい目に遭った。

でも……

「本当にそうでしょうか。本当に“根っから冷たい方”なのでしょうか」

「なんだい？」

伯爵さんは至極不思議そうに、パチパチと二度目をしばたかせる。

「あ……いえ」

どうして私、あの人を庇ってるの？ 彼のそれに反論しているの？

違っわ、少し疑問に思っただけ。きつとそう。

「君だつて危うく処刑されかけたんだから分かるだろう？ 他国からの救援要請をあつさり断るし、弱者には目を向けない。仲間内だと裏切り者や違反者には心底冷徹に接するし、時には独断で突っ走る。顔色一つ変えずに目の前の相手を殺せるような、冷血無慈悲な奴なのさ。温厚かつジェントルな僕には絶対に無理だね」

確かにあの人に見下ろされて処刑が申し渡されたときには、背筋の凍る思いだった。あんなにも残酷な眼を私は知らない。連続殺人犯のそれとなんてきつと比べ物にならない。あれはまるでそう。“死”そのものだった。

「ああ、でも昔シュレイザーと同じことを言ったとき、彼はこう言つてたなあ」

思い出すように眉をよせて天井を見上げる。

「陛下は職務を懸命にこなすうち、何か大切なものを見失つてしまったのです。そしてそれを必死になつて探し求めている。ご自身でも気づかぬうちに」って。僕には何が何だかさっぱりだけど」

伯爵さんはやっぱり紅茶をほんの少しだけ口に含みながら、肩をすくめた。

シュレイザーさんの言葉はとても的確な気がした。王の見失つたものが何なのか、なぜなのかと思つたのかは自分でもよく分からないけれど、何だか彼はとても必死に

待って。あの人が何に苦しんでいようと、それは私の関わるべきことじゃない。それにもう会うこともないんだから。

「そんな悲しげな顔をしないでマイプリ、いや、ソフィー」

何だか名前を呼ばれるより、変なあだ名の方がマシな気がする。

「僕と結ばれないのが悲しいのは分かる。でも、僕だって辛いんだ」
伯爵さんは胸に手を当て、「はあ」と息を吐いた。

……え、突然何の話？

「あの、ナイト様？」

私が首をかしげていると、彼は衛兵さんたちに向かって小さく頷く。彼らはまるで雲の上でも歩くように焦点の定まらない眼でふらふらと立ち去り、扉を閉めた。
なに、どういうこと？

「話をしている最中から、君の熱い視線はずっと感じていたよ」

普通に見てただけですけど。伯爵さんはラベンダー色の瞳を揺らし、熱っぽく私を見つめた。尋常ではない空気を感じ、私は椅子から立ち上がった。

「私は一応後宮の者ですので、男性と二人きりというのはちょっと
テーブルの上のベルへ伸ばした手をがっちり掴まれました。

「そんな悲劇、僕が喜劇へと変えてあげるよ」

それって喜劇の意味勘違いしてない？ 誰を笑わせるの、ここで。

「結構です」

「運命から逃げちゃダメだ！」

全然、逃げてないです！ むしろ真っ向から受け止めています。
この人、面倒くさいよ……。

「分かった。僕たちは出会ったその瞬間から恋に落ちるのだと。
でも君が怖がるのも無理はない。少し痛いかもしれないけれど、僕
たちのフォーエバーラブのためだから」

その瞬間、体にビツと電流のようなものが走った。お腹に掌を当
てられ、魔法陣をぶつけられたのだと分かったときには、すでに意
識は遠のいていた。

s t . ? ? ? ?

The Odd Knight (後書き)

あとがき

ナイトがプリンセス攻撃してどうする (笑)

st.???

Kidnap?

ぼんやりとする視界。何か心地よい揺れが体に伝わってくる。

「ここは、どこ？ 次第にはつきりしてくる光景に、体を起こしながら目をこすった。

「お目覚めかい、マイプリンセス」

「な、ナイト様……ッ」

目の前には、バラでポーズを決める伯爵さんの姿があった。周りを見渡せば、どうやら窓のある小さな箱の中のように。移り行く景色とひづめの音にあわせた振動に、“馬車に乗っているらしい”と判断した。柔らかな腰掛けに、スカートの裾を直しながら座って改めて周りを見る。

まるでホテルの一室のように豪華絢爛だった。絵の描かれた天井からは小さなシャンデリアがぶら下がり、車内をオレンジ色に染めている。伯爵さんとの間には小さなコーヒーテーブルがあって、椅子はネコの体のように柔らかかった。それにしても随分と広い。

「あの、ここ……」

外の景色はどう見ても城内じゃない。まさか。

「ここはヘルグステイン・キャッスルの裾野に広がる町さ。このあたりはちょうどアーチタウンかな」

やっぱり！ 何てことに。

「でもどうやって外へ？ それにこれは許されていることなんですか」

伯爵さんは私の気持ちを落ち着けようと、まるで指揮者のように両手をたおやかに振る。でもそれが妙に癪に障ってしまったのは内緒にしておく。

「大々丈夫、何も心配しないで。ザルクは僕に頭が上がらないんだから」

「でも……」

勧められた紅茶を断って、おずおずと窓の外を眺める。別に怒られるのが怖いわけではないけれど、このすぐ外に広がっているだろう未知の世界に少し不安があった。この間、王と空から眺めていたときは単純に町の明かりに感動できたけど、いざそれが自分の傍に来ると少し怖気づいてしまう。

本当にそう？

もし目の前に座っているのが伯爵さんではなく、漆黒の瞳を持つあの人だったら？ あの不敵な笑みを湛えた彼が座っているのだとしたら？

威風堂々としたその空気に安心して、きつとこんなに不安になるなんて

いえ、何を考えいるのかしら私は。あの人はもう私の前に現れないと言ったんだから。

あの声の震えが耳に甦り、ダメ、と軽く頭を振って景色を見ることに集中した。

窓の向こうは、どこか私の生まれ育った町に似ていた。光るタイルでできた道、二階建てのレンガ造りの家が軒を連ね、見慣れぬ文

字で書かれた小さなシヨップの看板がチラチラ見える。

可愛らしい花屋さんが目に留まり、奇妙に動く入り口のランプをじっとみつめた。グルリと振り返ったランプの炎には、驚くことに小さな目が二つついている。こちらをつぶらな瞳で見つめ、小さな手のようなものが出て一生懸命こちらに手を振ってくれた。

それに戸惑いながらも返すと炎は“キキキキ”と体を震わせて楽しそうに笑う。その可愛さに心がくすぐられた。

町を歩いているのは当然モンスターたち。大きな体のフランケンシュタインが野菜……の隣にならぶネジを選んだり、ガイコツの親子が仲良く手を繋いで歩いていたり、三頭犬の子犬がキャンキャン駆け回っていたり。

みなモンスターというだけで、あとは何も変わらないように見えた。ただ“腕を直します”、や“ウジ取り専門店”、“目玉ジュース屋”とか、なんだか変わったお店もあったけれど。

それより気になったのは人間らしい人たちの姿だった。皆、薄汚れた衣服を身に纏ったとてもみすばらしい格好をしている。

「あの、この町には人間も住んでいるのですか」

「ああ、住んでいるとも。誰かに連れてこられたり、もしくは迷い込んだりした人間たちがね。ただ人間は体も弱いし魔力もほとんどない。だからまともな仕事ももらえず、大半が乞食のようなことをしているのさ。ここで人間がよい暮らしをするにはヴァンパイアと結婚やなんかして匿ってもらうか、もしくは平民の中で比較的裕福な暮らしをしているヴァラヴォルフ（狼男）と仲良くなるしかないよ」

「男性もですか？」

「鋭いね。まあ僕はメールには興味ないけど、結婚という逃げ道がない分、女性より大変な思いをしてるだろうさ。人間界に帰ることができれば一番いいんだろうけど」

それに全身から汗がじつとりと噴きだした。スカートをギュツと掴む。もしかしたら、帰れるルートが聞けるかも！

「無理だろうね。人間はこちらへ来ることはイージーいけど、向こうへ帰るのは超至難の業だから」

緊張した分、がっかり度も激しい。やっぱり王と結婚するしか道はないのかしら。あの時プロポーズを断るべきじゃなかった？

いいえ、後悔の念なんて全くない。心を弄ぼうとするあの人の元へなんか、絶対に嫁ぎたくない。

そう思って視線を上げた瞬間、お店の角に小さな男の子が立っているのが見えた。茶色いフードを被っていてよく分からないけれど、もしかして……人間？

「あ、あの止めてください！」

「なぜ？」

「えっと、す、少しこのあたりを見たいのです」

「ふうむ、そうしてあげたいけれど、ちょっと急ぐから。フライー！」

私の願い事はあっさりスルー？

伯爵さんが口にバラをくわえ、手を二度叩きながらそう叫んだ瞬間、馬車はガクンツと急浮上して体が一瞬浮いた。私は慌てて椅子の端を掴んで耐えたけど、当の伯爵さんは見事に浮き上がって天井にガンと頭をぶつけていた。その反動で口から「ブツ」とバラが吐き出され、窓の外へとむなしく飛び去っていく。

「あたたた……」

「こ、これは何か言っさしあげべき？ “大丈夫ですか”ぐらい言おうかしら。“バラの件は残念でした”とか。でもそんなフオロ」すると、格好つけることに命を懸けていそうな彼の自尊心に關わるのかな。けど何も言わないのも恥ずかしいだろうし。ど、どうすれば……。

そんなことを考えている内に、伯爵さんの口には何も無かったかのように新たなバラがくわえられていた。

「ん？ なんだい？」

「あ……いえ、全然何も」

どうやら心配するだけ無駄だったらしい。あの男の子のことは気になるけれど、まさか今更飛び降りられない。

「あの、これはどこへ向かっているのですか」

「決まっているだろう。僕たちの輝かしい未来さ！」

伯爵さんはそう言っ、ビシツと窓の外を指差そうとしたけれど、その人差し指がガツンと壁に当たっグニツと指先が関節と逆方向に曲がっ涙目になっていた。

「いっ！」

「……」

私、決めた。この人が何をしようと、決して何も言わない。

「さ、降りて」

伯爵さんの手に支えられ、ゆっくりと馬車を降りた。森の中に立つ立派な洋館が目に残る。その前にはガラスのような、光るレンガでできた広場があり、大きくて美しい精霊の噴水が設置されていた。

「このあたりの山々は僕の所有地さ。ここは四つある別荘地でも一番小さいんだ」

そんなにあるんだ。それにこんなに大きな館が一番小さいだなんて。さすがに王たちと仲がいいだけある。中途半端なお金持ちじゃないんだわ。

「こつちだよ、マイプリンセス」

伯爵さんの手に引かれ、この噴水前の別荘ではなく森の中へと入って行った。

「さあさあ、こつち」

森の中にそびえ立つ、大きな教会風の建物。天辺には十字架の代わりに五芒星のようなものが飾られている。外壁にはツタは巻きついているし、ダークブルーの光に包まれていて、とてもおどろおどろしい雰囲気立ち込めていた。

ギイと扉が開かれ、中へ足を踏み入れた。やっぱり教会のように左右に長いすが設置され、ロウソクの明かりがゆらゆらと揺れていた。黒い長絨毯を踏みしめ、正面の説教台へ近づいていく。そこには淡い光を放つ細長いピラミッドと、その隣にワイン一本とグラスが二つ並んでいた。

「こんなところで酒盛り？」

「ここなら誰にも邪魔されずにできるだろう。運命にヴィクトリー！」

「あの、何のことですか？」

悪い人には見えないけれど、少し嫌な予感がする。彼は頬を染めてジッと私を見つめ、「ソフィアちゃん！」といきなり肩をガツとものすごい力で掴み、タコのように尖らせた唇を「うっ」と近づけた。

嘘でしょう？

「いやああっ！」

思い切り顔を背けて彼の胸を押した。すると彼は以外にもあっさり引き、

「ああそっか、そうだよねえ。僕としたことが、つい先走って」

どっぴいっこと？

「じゃ、ちょっとゴメンよ」

伯爵さんはポケットからペアリングを取り出して台の上へ置き、さらに何やら術式の書かれた万年筆を取り出した。一部がガラスの筒のようになっていて不思議なペン。

彼はそれで私の首筋をスツと撫でた。鈍い痛みと冷やりとした感覚が走る。

わけの分からないままそれを見守っていると、彼はペンを軽く振った。空だったはずのガラス筒には、何か少量の液体が入っている。グラスへ向かってその万年筆の尻を押し、まるで注射器のように中

身を注いだ。

「血……？」

その赤い液体に目を見張った。

「そうさ、レッドロッドを知らないのかい？ 血液採取のための器具だよ。検査用だからあんまり取れないんだけど、今はこれで十分」

彼は当然のようにそこへワインを継ぎ足し、もう一つ彼自身の血で同じものを作って私の方へ置いた。

何？ 一体何の儀式なの、これは！ 怖くなって腕があわ立つ。

「ヴァンパイアの婚姻は互いの血を飲んで永遠の愛を誓うのさ。それによつて新婦はヴァンパイアと同じ不老長寿を得、新郎は新婦から定期的な血液提供の約束を得る」

何それ、そんなこと聞いてない！

「私、匿名のナイト、おっと失礼、ロキ・グット・ステイラーはソフィア・クローズの夫として妻を護り、永遠に愛し続けると誓います」

ワイングラス片手に口角をニツと押し上げる。

冗談でしょう？ 夢だつてありえない！

「さ、早く」

「申し訳ありませんが、私はあなた様と結婚する気はございません。早くお城へ帰してください」

ちょっと強く言い過ぎたかもしれないけど、これだけはつきり言えは伝わるはず。

伯爵さんはやれやれとため息をつくと、

「全く、君ほどのシャイガール初めてだよ。ま、僕の魅力を前にすれば当然か。分かったよ、僕はとってもスマートな男だからね。そんな君のお手伝いをしてあげようぞ」

“あげようぞ”って。

彼は私の目の前で揃えた人差し指と中指を二度振った。その風を感じた瞬間、体が金縛りに遭ったように強張る。それがゆっくりと弛緩してゆくと同時に、伯爵さんが白いモヤがかかったようにはつきりしなくなっていくた。

「さ、早く飲むといい、マイプリンセス」

「……はい。ナイト様」

ぼんやりとする心地よい世界の中で、ゆっくりと差し出されたグラスを受け取った。何が何だかよく分からない。まるで春の心地よい日差しの中、温かな布団にくるまっているような気持ちいい気分。口が勝手に開いて何か言葉を発するけれど、なんだかよく分からなかった。

「私、ソフィア・クロースはロキ・グット・ステイラー様の妻として夫を支え、永遠に愛し続けると誓います」

何？ 私、何を言ってるの？ 聞こえないよ。

「ジュテーム、マイワイフ、ソフィア」

「愛しております、ロキ様」

ガラスのぶつかり合う、小気味のよい音が響き渡った。

ザルクは肩に上着を乗せ、ため息をつきながら執務室の扉を開けた。気が乗らないが提出期限がまだ先の書類も片付けてしまおう。午後から予定を空けていたものの、ずっともやもやとしていて何かしていないと落ち着かない気分だった。

巨大牛トリコンの本革でできた、高そうな椅子に上着をほつり投げ（実際この椅子一脚で血統書つきのスレイプニールが二頭買える）、机の上に腰掛けた。

手に持った空っぽの指輪ケースを見つめるが、もうため息すら出ない。

あの指輪はとても特別なものだった。この世のものとは思えないほどの美しい光を放つあの指輪は、いずれ自分が心から愛する女性へ送ろうと長い間大切に保管していたもの。

そう、自分にとって世界中の誰よりも尊かったあの人が世を去ってから、ずっと。

だが今はどこかへ行った指輪よりも、彼女のことを心に突き刺さる。

「ソフィア」

愛しい彼女の名を呼んだところで、広い執務室にむなしく響くだけだった。泣ければ楽なのだろうが、生憎そんな可愛らしさも体力も持ち合わせていなかった。

「おや、陛下」

突然扉を開けて入ってきたシュレイザーに、ザルクは息が止まりそうになるほど驚いた。急いで空のケースを引き出しへしまいこみ、何事も無かったかのように再び机に腰掛けて咳払いをする。

だが不自然極まりないその行為に、彼は不審なものを見るような目をしていた。

「どついう風の吹き回しなんです？ 普段から隙あらばサボろうとなさる方が、お休みの日に執務室にいらっしやるなんて」

シュレイザーは本棚から目的の資料ファイルを取り出しながら、横目でこの国の王を見た。上着も羽織っていないシャツのボタンもきちんと留まっていなかったところから察するに、後宮帰りで見受けられる。

だが女を抱いてきた後とは思えぬほど覇気がなく、何やら憔悴しきっていた。まさか男の尊厳に関わる下半身的なトラブルがベッド上で？

いや、それはないかと表情に出さずに笑った。

落ち込んでいるのは分かってても、シュレイザーは慰めの言葉をかける気などなかった。どん底から這い上がってくるなり、ずっとそこに居座るなり好きにすればいい。どうなるうと自分はまだ傍で彼を支えるのが務めだと思っていた。今までそうしてきたし、これからもそうするつもりだ。

まああの指輪のことや昨日までずっとそわそわしていたところからも、大方落ち込んでいる理由は察することができる。あえてそれには触れないように話題を振った。

「そついえば先ほど“彼女ら”から連絡がありました」

具体的な名を言わずとも、それが誰か分かったのかザルクは腕を組んで顔をしかめた。

「またか。最近やたらと多くないか？」

「まあ確かにここ数年は」

「返事は言わずとも分かっているのだろう」

ため息混じりにそういうと、立ち上がって上着に袖を通した。

「もちろん。“ぜひ”とお答えしました」

「それでいい。“彼女ら”と会う気など」

襟を直していた手をハタと止めた。目を見開いたまま自分の補佐官を振り返る。

「何だと？」

「ですから“ぜひおいください”とお答えしました」

「ま、まさか私に“彼女ら”と結婚しろと言うのか」

「いいえ、それを決めるのは陛下ご自身。私が口出しできることではありません」

「ならなぜ」

「覚えておられませんか、陛下」

ザルクはポケットに両手を突っ込んだまま肩をすくめた。何も心当たりはないと見える。それにシュレイザーはため息をつき、さつき取った資料のファイルを脇に挟んで黒革の手帳をパラパラとめくった。

「あなた様は八十年前、まだ幼かった“彼女ら”の第一王女と約束されたではありませんか。こうです。“ヴェーナの二つの星が重な

るとき、再びこの城でお会いしましょう。あなたがお美しい姫と
られた暁には、私の妻と迎えるとお約束します”」

パタンと手帳を閉じて漆黒の双眸を見つめる。

目の前の彼は頬を引きつらせ、目は死んだ魚のように光を失わせ
ていた。

「言ったか？ 私が」

「言いました。あなたが」

「本当に言ったか」

「はい、本当におっしゃいました」

「本当に、本当に言っ

「あんまりしつこいとぶん殴りますよ」

ザルクは右手で髪をかきむしって、大きく息を吐き出した。どう
やら彼には全く記憶にないことらしく、“やってしまった”とばか
りに口元を押さえて目を泳がせていた。

「ご存知の通り“彼女ら”はプロメス（約束）を重んじる。それも
男女のこととあればなおさら」

「だ、だが美しい姫なってなければよいのだろうか？」

「最低な断り方ですよ、それ。それに“彼女ら”が美しく成長して
いないとでも？」

ザルクは右手を机につき、腰に手を当てていらだったように指で
机を叩いて何やら考えていた。

やがてシュレイザーに向き直り、

「わ、私には別に想っている女性がいる。抱いてやるだけならいい
が、やはり結婚は彼女以外無理だ」

「ですがソフィア様にはフラれたのでしょうか？」

「心の傷をえぐるな！　ふ、フラれたのではない。少しすれ違っているだけのことだ」

「そうですか。へー」

興味がないのか、あまりにポジティブな考えに呆れているのかシユレイザーは大根役者のようにそうつぶやいた。

「こちらとしても“彼女ら”を無碍にはできません」

「分かっている。我々の中にも“彼女ら”の血が幾分かは入っているのだから」

そう言うとザルクは突然「そうか」と指を鳴らした。

「王女はレオと結婚させよう！　私もアイツも似たようなもんだろう」

「ならレオナルド坊ちゃんとソフィア様が結婚しても問題ないですよ」

「ダメに決まっているだろうが！　絶対許さんからな！」

勝手な言い分にシユレイザーは本日何回目かのため息をついた。

その時突然、乱暴に扉が開き、息を切らしたレオナルドがわき目も振らずザルクに詰め寄った。

「レオ、ちょうど良かったお前」

「ソフィアをどこへやったんだよ！」

間髪いれずにそう凄んで胸倉を掴みあげる。

「何の話だ」

「とぼけるな。まさか監禁したんじゃないだろうな！」

必死な形相の彼にザルクは眉をひそめた。“監禁”の言葉に、思わず先ほど後宮でした妄想が甦ってしまったが、あくまであれは妄想で押さえてある。現実には移していない、少なくとも今は。

「だから何の話だと言っている」

レオナルドの方もさすがにそれはないかと冷静になったのか、手を離して美しい金色の髪をかき上げた。

「いないんだよ、どこにも」

「彼女がか？」

相当必死に探したのか、額には汗まで滲んでいる。あのただっ広い後宮を隅から隅まで探したに違いない。だが

「そんなはずないだろう、後宮内のどこかにいるはずだ。逃げるにしてもあの周りは断崖絶壁。出入り口へ行けば衛兵が止める。やつらを倒すか惑わせるかして突破すれば分らんが、人間の彼女にそんなマネが」

そこで二人は同時にとある男に思い当たった。幼馴染でいつもとんでもないことをやらかすあの男。いつも振り回されてはとんでもない目に遭ってきた。それが当の本人は全く反省せずに、というより無自覚にまた新たな問題を起こすのだから付き合ってられない。

「そういえばあのバカ、幻術系魔術だけはやたら得意だったよね」

「ま、待て。あいつがいくらバカでも、王の所有物たる後宮の女を連れ出すなどするはずないだろう。国家反逆罪並みの暴挙だぞ」

「兄上覚えてないの？ アイツ前にも一度、格好つきたいがために王の代理だとほざいて、勝手に遠征先で同盟結びまくってたじゃないか」

それにザルクの顔色が変わった。それがよほど腹立たしい記憶なのか、奥歯をギリギリと噛み締めて拳を震わせる。瞳孔は完全に萎縮しているのに、口元には薄い笑みを浮かべおぞましい顔をしていた。

「忘れるわけがないだろう。あの尻拭いで久々の休暇が丸つぶれになったどころか、一ヶ月までもに寝られなかったんだぞ……っ」
「だったらやっぱり」

顔を合わせて互いに頷く。間違いない、アイツだ。

二人は同時に部屋を飛び出した。早く彼女を助け出さねば、何をされるか分かったものではない。

だがザルクは途中で何か思い出したように歩を緩めた。今からどんな面を下げて会おうと言うのか。もう彼女の前には現れないと言ったばかりではないか。

完全に足を止め、後ろも見ずに駆けていくレオナルドの背中に向かってつぶやいた。

「お前なら、彼女を幸せにできるのか。私が傷つけた分、癒してやってくれるのか」

わざわざ問うまでもない。ヤツは王である自分に盾ついてまで彼女を信じ続けた男。彼女も心の底から信頼しているに違いない。

しょせん自分は、彼ら二人が織り成すラブストーリーの恋敵でしかなのだろう。いや、それとも二人の間を引き裂こうと画策する悪役

だろうか。

彼女のごとは心から愛している。彼女のためなら命とてなげうつ覚悟はある。

だが、自分が幸せにできないのなら。それができる男が他にいないのなら。

それなら自分は

「あれ、陛下は行かれなかつたんですか」

廊下に出てきたシュレイザーは、部屋を飛び出したはずのザルクの立ち尽くす姿に首をかしげた。

「シュレイザー、“彼女ら”の出迎えは豪華にしてやれ」

「ええ、承知しました」

ザルクはポケットに手を入れ、廊下を逆方向へ歩き出す。

「この国の王妃となる女性なのだから」

「っ」

その言葉に絡みつかれたがごとく、シュレイザーはしばらくそこから動くことができなかった。

s t ? ? ? ? ?

K i d n a p (後書き)

あとがき

何回ポーズしてんねん。

心地よい霞の中、私の唇にグラスの端が当たった。きっと高級だろうそのグラスはやけに手に馴染む。

なぜかしら。“早くこの中身を飲み干さなきゃ”という思いと“飲んではダメ”という思いがぐるぐると交錯している。“飲んじゃいけない”という方が正しいような気がしているのに、手が勝手に動いて自分の意思ではどうしようもなかった。まるでマリオネットにでもなったよう。

ワインレッドの真つ赤な液体に唇が濡れる。

その直前、薄氷を踏むかのような音がしたかと思うと、持っていたグラスがバリンと割れた。それに呼応するかのように、突然目の前がクリアになる。

布団の中でまどろんでいた最中に、いきなり体を引き起こされたように。

「あれ……私」

何が何だか分からないままに何か持っているらしい自分の手を見ると、グラスの上半分が無くなっていた。足元に散らばる赤や透明のガラス玉から察するに、どうやら何かの術で変化したらしい。

あれ、何これ？ 何でこんなもの持ってるんだっけ。

「水臭いなあ、口キ。結婚式に幼馴染を呼んでくれないわけ？」

入り口に佇む人の発した言葉に、記憶が戻った。そうだ私、結婚を

「れ、れ、レオ君！」

不敵な笑み（というより怒りすぎて笑っているような表情）を浮かべるレオ様に、伯爵さんはガタガタと震え始めた。

「ごっご、ごっご、ごめん！ ゴメンね！ 支援してる子がどんな子か気になって見に行ったら、あんまりキュートだったから。お願い、謝るから大王様には言わないでえ！」

「兄上も知ってるに決まってるだろうが！ このアホロン毛！」

美しいまでに見事なとび蹴りを鼻に食らわされ、彼の体は壁にまで吹き飛んでめり込んだ。

レオ“君”？ “大王様”？ あれ、伯爵さんついさっきまで“ザルク”とか言って呼び捨てにしてなかったっけ。しかも王と同一年ならレオ様の方が年下のはずなのに、何だろうこの力の差。

「ぐほおっ！ ぐはあっ！ れ、レオくん……」

馬乗りになれ、ボコボコにされる哀れなナイト様の姿があった。レ、レオ様、それ以上やると……。

伯爵さんは鼻から血を流しながら白目をむいていて目も当てられない。

一応止めないとグラスの下半分を台の上へ置こうとした瞬間、カシャンと何かを落としてしまった。いけない、拾わなきゃ。

青白く光る謎の小さなピラミッドへ手を伸ばした瞬間、「ソフィア！ それに触っちゃダメだ！」

「え？」

指先が触れた瞬間、まるで巨大な吸引機のような大きなつむじ風が巻き起こり、真っ青な光に包まれて何も見えなくなった。体が強力な磁石のようにピラミッドへ吸い寄せられ、踏ん張ろうにも風で足が浮く。

「きゃああああっ！」

「ソフィア！」

目の前の世界が高速で回転し、竜巻の中へ放り込まれたかのように頭の中がかき混ぜられて気分が悪くなる。

レオ様の叫びを後ろに聞きながら、何もできないまま、体が激しい風と共に飲み込まれていった。

「いたたた。ここは……どこ」

土の香りを感じながら、気だるい体を起こした。パンパンとドレスについた汚れを払う。真っ白な霧に包まれた周囲は、夜ほどの暗さはなく、どちらかといえばどんよりと曇ったような明るさだった。でもいつもは真っ暗だから、明かりなしで周りが見えるなんて珍しい。

も、もしかして、人間界に戻ってこられたのかしら。

嬉しいながらも、少し肌寒さを感じて腕をさする。霧が深すぎて何も見えない。森の中のようにだけ。

「あの、誰かいませんか。すみませーん」

あたりは鳥の声も水のせせらぎも聞こえないほどに静かだった。本当に不気味なくらい。

どうしよう。人間界に戻ったはいいいけれど、もしかしてこれは遭難？ 早く誰かに助けを求めなきゃ。

「すみませーん！ どなたかいらっしやいませんか！」

ミストをかき分けながら呼びかけた。心配がぐるぐるとうずまき、不安が心をじわじわと冷やす。その時、後ろからぬつと人影が伸びた。

よかった、誰かいた！

「あの、すみま　」

血の気が、一瞬で引いた。影ははつきりと人の形をしていたのに、振り返ったそこにいたのは人ではなかった。

「何、これ」

鹿？ それとも鳥？

ナイフのように鋭利な角、真っ青な軀むくろ、巨大な羽、カツと見開かれた真っ赤な瞳。目が合った瞬間、瞳孔がギョツと萎縮した。

ゆっくりと開いた口から“ぐああああああ”とうめき声を漏らし、気味の悪い唾液を滴らせていた。それがひどい腐敗臭を放って鼻が取れそうに匂う。狼が唸るように歯茎を見せ、同時に何百本もあるサメのような牙が見えた。

心臓がドツドツドツドと波打つ。全身から汗がにじみ、喉が干上がった。

草を踏む音が後ろにもたくさん聞こえ、周りを取り囲むように次

々と同じ姿の怪物が集まってくる。人間界じゃなかった。

怖い。逃げなきゃ……。

そう思うのに、足が震えて一步も動かない。化け物たちは走り出す前の猛牛のようにひづめで土をかき始め、頭をゆっくりと下げた。首をポキポキと鳴らしながら羽を大きく上下させ、こまかい砂を舞い上げる。尖った角の先が、私の体をえぐるうと狙いを定めるように向けられていた。

逃げなきゃ……逃げなきゃ！

震える足を必死で動そうとしているのに、まるで自分の足じゃないみたいに動かない。怖さと情けなさで涙が溢れ出てきた。歯が力タカタと音を立てる。怯えて泣いている場合なんかじゃないのに。

怪物は一瞬ドツと強く地を蹴ったかと思うと、翼を使い、風を切って頭から猛スピードで突っ込んできた。キラリと光る角が突き立てられようと迫る。

「きゃあああああああ！」

足から力がぬけ、地面にしりもちをついた、そのわずか上をザァツと通り過ぎていく。バサバサと翼とはためかせ、方向転換して赤い目で私をギリギリと見据えた。同じような目が霧の向こうにたくさん浮かび上がっている。

分かった。

危険生物の授業で習ったことがある、“ペリュトン”だわ。彼らには自分の影がなく、光が当たると人の影ができてしまう怪鳥だっ
て教わった。自分の影を取り戻すには、人間を殺してその血に体を
浸すことだっ。だから影の持たない彼らは人を襲うのだと。

人間の武器で彼らを殺すことはできず、群れで行動するかなり危険な生物だったはず。

私に対処法なんてない。逃げなきゃ！

荒い呼吸のまま、もつれそうになる足を必死に動かして逃げた。動いて、お願いだから動いてッ！

後ろからするびづめの音に恐怖心を掻き立てられながら、ガクガクとする足で必死に走った。途中ドツと石に引つかかってバランスを崩し地面に滑り込む。擦れて掌に焼けるような痛みが走った。

逃げなきゃ！

急いで体を起こしたそのすぐ前には、赤い目の怪物が牙をむいていた。後ろからもゆっくりと足音が響いて止まる。

囲まれた。

何か脅せるようなものは？ 逃げ道は？ 周りにあるのは小さな石や木の枝だけ。逃げ道もない。 木々を揺らすかのように怪物たちがひときわ大きく鳴いたその時、

「こっちよ」

茂みの中から現れた手に急に腕を引つ張られ、痛いくらいの強さで引っぱられた。

な、何？

彼女に引かれたままよろよろとその場から離れ、霧の中へ姿をくらますように逃げ込んで大きな岩の陰へ身を潜めた。

「大丈夫？」

息が不自然に乱れ、心臓の鼓動が髪を揺らすよう。

「は……い」

何とかそう言って顔を上げた先の女性は、息を呑むほどにきれいな人だった。長く指どおりのよさそうな髪は黒い滝のようで、美しい双眸はまるで黒曜石のようだった。あれ、私どこかでこの人と会ったことのあるような

「すぐに助けに来るわ、安心して」

彼女に力強く励まされ、何とか落ち着こうと何度も頷いた。

「私はルイーズ、あなたは」

「ソ、ソフィアです」

「そう、ソフィアちゃんね。大丈夫よ」

彼女はふと左手をお腹にあて、そこで初めて彼女のお腹が大きいことに気づいた。赤ちゃんがいるんだ。

“ウィアアアアアアアアアア”と喉から出るような甲高い声がすぐそばで聞こえる。体がそれに凍りついた。

探してる、私たちを。

ガサガサと雑草をあさる音があちこちで聞こえ、それは徐々に近づいてくる。これじゃ見つかるのも時間の問題だわ

「大丈夫、大丈夫よ。すぐに“陛下”が来てくれる」

そう抱きしめてくれるルイーズさんの手も震えていた。しっかりとしなきゃ。誰かに甘えて助けられてばかりじゃダメ！

「ルイーズさんはここにいてください」

「え？」

彼女は目を丸くし、怪訝な顔で私をじっと見つめた。

「助けてくれてありがとうございます。もう私は大丈夫ですから、あなたはここに隠れていてください」

「ダメよ、何をする気？　すぐに助けがくるから落ちついて！」

土を踏む足音が、すぐそこまで迫っていた。

「ありがとうございます。でも、赤ちゃんまで巻き添いにはできない」

「あなた……待って！」

彼女が止めるのも聞かず、私は岩の陰からガクガクと頼りない足でダツと飛び出し、力の限り地面を蹴って走った。

背中に冷たい視線が一斉に突き刺さり、急いだような足音が迫ってくる。

どこか！　どこか隠れられるところ！

後ろから迫る羽音やひづめの音が、まるで死神の足音のように聞こえた。

もう、だめ……。

そばの木の根元に空洞を見つけ、慌ててお腹から滑り込むように中へ入った。そのすぐ後ろで歯の当たるガキンという音が聞こえる。膝をすりむいてもそんなことに構ってられない。迫りくる鋭い牙に急いで足の中へ引き入れた。

追いかけてきた怪物も中へ入ろうとしたけれど、角が引っかかって入ってこられない。真っ赤な目がこちらを見つめ、それは「まだ諦めてはいない」と言っていた。

口元を穴の中へ押し込み、鋭い牙を見せて私の足を捉えようと噛み付いてきた。大きくはないその穴の奥に張り付きながら、「だめ

え！」と死に物狂いで足を引っ込める。すぐ傍まで迫るその醜い巨大な顔が、勢いをつけて何度も出入りを繰り返した。

「やめて……お願いだからっ」

体に飛び散る緑色の唾液をぬぐうこともなく、私はただ身を縮めるしかなかった。

助けて。

お願い、誰か助けて！

『ソフィア、私を信じてくれ。ひどく傷つけてしまった分、今度こそは君を護ると誓うから』

え？

あの人の言葉が脳裏をよぎった。温かな手の感触を思い出す。どうして？ 約束も償いもいらなかったのは私なのに、なぜ今更あの人の誓いを思い出すの。

彼らの草木を揺さぶるような咆哮が森に轟く。久しぶりに浴びる血に歓喜しているのかもしれない。顔を突っ込んできた怪物の歯が、スカート先端に引っかかってガクンとバランスが崩れた。布の裂ける音と引きずられる音が不気味に混ざり合う。

「いやあああああ！」

一息に穴の中から引きずり出されそうになり、懸命に暴れた。その拍子に足が怪物の顔に当たってひるんだ隙に、急いで穴の中へ戻る。怪物は忌々しそうに空気を裂くような声で鳴くと、今度は木に向かって体当たりを始めた。

ドォンドォンという不気味な音と一緒に、木屑が頭の上から降っ

てきて息ができなくなる。メキメキメキと幹が軋みだし、根が徐々に土から飛び出してきた。土の香りがムツと広がる。

お願い、もうやめて！

恐ろしさのあまり、耳を塞いで目を閉じた。

『大丈夫よ、すぐに陛下が来てくれる』

“陛下”？ 陛下ってあの陛下？

あのルイーズさんという女性は一体……。

名前に聞き覚えがある。それに濡羽のように黒い髪、黒曜石のような瞳、美しい面立ち。

まさか！

あの時、王に差し出された指輪を思い出した。あのこの世のものとは思えないほどに美しい輝きを放っていたあの指輪。

お腹を撫でる彼女の薬指にも。

「あ、あの人は……まさか王の」

何が何だか分からない。私は過去へ飛ばされたともいうの？

教科書で彼の両親はすでに亡くなったと習った覚えがある。もしそうならあの指輪は、お母様の遺した……？

そんな大事なものを私にくれようとしたの？ 結婚を約束していたリザにはあげなかったのに、どうして。

『そ、それに元々私は……』

『お、お望みもなにも男女のことなのだから、どうなるか分からんだろう』

『ソ、ソフィア、あの時は勢いで言ってしまったが、やはりきちんと言う。じ、実は、その、は、初めて会ったあのときから私は、

ずつと君を』

彼の、はにかんだような表情が浮かんでは消える。

嘘よ。ならなぜリザと婚約したの？ 彼女を愛していたんでしょ？ だから彼女の手を傷つけた私をあそこまで憎悪した。

けれど。

彼はあのことをずっと償いたいと言っていた。罰を与えて欲しいと言っていた。過ちを胸に刻みつけていてくれると言っていた。眉をひそめ瞳を閉じ、いつだって素直に謝ってくれていた。

でもそんなの、初めから私を信じてくれていれば。声を聞いてくれていれば。

あれ。

どうして彼は牢に描いた壁画を見て、私が犯人ではないと分かったの。

コンテストに出した絵とあれが同じ雰囲気だったから？

その絵のサインがリザのものだったから？

それで彼女が嘘をついていると？

それだけのことで？

それじゃあなんだか、彼にとってあの月の絵がすごく重要みたい。それとも絵の書き手かしら。その絵を描いたと思っていたリザと婚約までしていたし。

“月の絵”？

『ほう、上手いものだな』

さっきまで聞こえていた木の割れる音も、むせるような土の匂いも感じなくなつた。

あの日の記憶が鮮明に甦る。

あの人を最初に見たときの衝撃を思い出す。キレイだった。月明かりの下の彼はとても。

もしかしてあの人は、私を探していたの？ あの時シーツを被っていて顔も見えず、名前を言う前に逃げ出してしまった私を。

私、うぬぼれてる？

『“初めて会ったあのとき”から私は』

けれどそう考えれば、全てつじつまが合う気がした。あの後に続くだろう言葉も察しがつく。

だったら彼は、彼は本気で。

『帰ってください。今すぐ』

私の冷たい物言いが甦る。彼の言葉を遮り、拒絶し、指輪を叩き落とした。あの人がどんな思いであれを差し出したのか。私に渡す決意をしたのか。プロポーズの言葉だって一生懸命考えていたかもしれない。あの花束だって自分で選んだものかもしれない。

いいえ、あれだけじゃない。彼は私が床に伏せているときも、ずっと。

あの指輪だって花束だって言葉だって、彼にとって大事なものだったのに、私は自分の感情を優先させて冷たく払いのけた。

あの時、王は目を見開き、私の顔を見つめたまま硬直していた。唇だって震えていた。

ひどく傷つけてしまったに違いない、その心を。

『ザルクはとても気の毒だと思うよ。小さい頃から大国の王と

いうスーパービッグな責任を負わされ、過ちを犯すことも、弱音を吐くことも、欲しいものを欲しいと言うことも、したいことをすることも許されなかったから』

『分からないんだ。どうすれば君に償えるのか。その傷を癒せるのか。レ、レオとのことを認めれば……君は幸せか?』

『すまない、ソフィア。……すまない』

私は一体、あの人の何を見ていたんだろう。少なくとも私の前では、彼は“王”じゃなかった。

償い方が分からないと膝を折って苦しみ、すまないと何度も自分の過ちを認めて謝っていた。

『もし君にまた何かあったら、私はこのさき生きては行けん』

『愛のない結婚などしない』

心が締めつけられるように痛い。

熱い雫がいく筋も落ちた。

涙が止まらなかった。自分が恥ずかしくて。

自分を信じてくれなかった彼を当然のように罰したくせに、私だって彼の言葉を信じようとしなかった。話を聞こうとさえしなかった。精一杯、たくさんの思いが詰まったものを全てはねつけた。

あの指輪だって。

『だが安心しろ、私は……もう決して君の前には現れない』

ちようつがいの悲しげ音の向こうに、彼が消える光景がフラッシュバックした。

行かないで!

なんてことを。あんなことを繰り返さないでと言った私が、あの
人と同じ過ちを犯してしまった。信じてくれない苦しみを、誰より
も知っていたはずなのに。分かっていたはずなのに！

鼓膜を破るような木の倒れる音と共に、現実が降りかかって来た。
砂埃を払う清涼な空気が流れ込んでくる。

とても静かで、穏やかな風が髪を撫でた。

そつと耳を塞いでいた手をおろし、目を開けた。

“ぐぎあああああああああああ！”

「！」

目の前に、鋭い牙の生えそろった真っ赤な口があった。それが頭
部めがけて勢いよく落ちてくる。

もうダメ、私

助けて……助けてっ！

「陛下あああああ！」

尖った歯が突き立てられる。恐怖に目の前が真っ白になった。

これはきつと私に与えられた罰なんだわ。

あの人を最後まで信じようとしなかった私への。誠意を尽くす彼
を突き放した私への。

同じ轍を踏んでしまった、私への。

「陛下、いかなさったのです」

王妃になるべくやってくる“彼女ら”を盛大に出迎えると言ったばかりの彼が、廊下の途中でピタリと足を止め、そのまま微動だにしない。シュレイザーはそんなザルクの後ろ姿に首をかしげた。

「少し出かけてくる」

それだけ言うと、弾かれたように反対方向へ駆け出した。

「ソフィア！ ソフィアあああつ！ くそっ！」

目の前で姿を消したソフィアに、レオナルドは口元を震わせ、落ちていた青白く光るピラミッドを手を取った。

「ど、どうしようレオ君！ まさかこの“約束の塔”の中に？」

「これは重要な儀式で用いられる、時空と繋がるピラミッド。これに誓いを立てることで、未来永劫その契りを守る意思を示す。だがこれを魔力のない人間が触れれば永遠に時空をさまよい、いずれ魂だけになって一生苦しみ続けることになる」

ロキはその言葉に真っ青になり、口を金魚のようにパクパクとさせていた。

「あ、そ、そうだ！ それが時空に繋がってるなら、そこへ魔力を流し込んで術で探索すれば」

「無理だ。今この瞬間の一秒前にいるのか、昨日なのか、それとも数百年前なのか何万年前なのか。あるいは未来かもしれない。そんな膨大な範囲から彼女を探そうとしても、こっちの魔力がもたない！」

砂漠から一本の針を見つけそうというほど困難な事態に、レオナルドは奥歯をギリツと噛み締めた。魔術で床に何か術式を書き始め、書いては消し、書いては消して必死に解決策を模索した。

「ど、どうしようレオ君っ！ このままじゃソフィアちゃんが……ソフィアちゃんが！ どうしようっ！ ねえ、レオ君！ レオ君っ

たら！」

「ウルサイ、黙っててくれ！」

限りある魔力の中でどうやって彼女を探し出すのか、途方もないその術を求めた。

いや、これは探している“ふり”なのかもしれない。なぜならそんな方法など存在しないだろうことは分かっていたから。以前にも何度かこのような事故が起こったことがある。だが無事に戻ってきた者など誰一人としていない。

レオナルドは悲惨な末路を予期し、頭をかきむしってイライラとした様子で舌打ちした。

「チクシヨウ！ どうすればいいんだっ、クソ！」

めったに使わない罵り言葉を吐いて床を叩くほど、混乱に頭がかき乱されていた。

「落ち着け、レオ」

そんな彼の元へ静かな声が降り注いだ。

そつと声の方を振り仰ぐ。快晴の夜空のような、静寂と奥みのある墨染めの瞳の男が凝然とそこに立っていた。

「兄上……」

何人をも畏怖させる男が、凜として扉の向こうの月を負う。風に黒髪が揺れた。

「私がやる」

ゆっくり屈むと床に掌をつけた。ピラミッドを中心に山、いや国すらも覆おうかというくらいに巨大な魔法陣が一瞬で構築され、あたりを金色の光が包んだ。

レオナルドには兄のしようとしていることがすぐに分かった。彼女を見つけるには迅速なスピードでもって広範囲を一気に探索すればいい。彼女が再びどこか別の時空へ飛ばされる前に。単純なことだ。だが

「兄上、いくら兄上でも無理だ。これほどの魔術を使い続ければ体への負担が大きすぎる。それに魔力がなくなれば、体が動かなくなるだけじゃすまないぞ！」

今更言われるまでもないことなのか、ザルクは無言だった。あたりはこれほどの明るい色に包まれているというのに、その双眸の闇色は何にも染まらない。

「兄上！ だったらオレがやる！」

「お前では無理だ。魔力が足りなさすぎる」「だからって！」

本気ならば、なおさら止めさせなければならぬ。彼はただのヴァンパイアではないのだから。

「兄上！ 兄上は」

「私は彼女の命を奪いかけた」

ザルクは言葉を被せるように口を開いた。悲痛な表情に一瞬顔をゆがめる。あの日のことは後悔してもしきれない。冷たい凍りつくような戦慄の過去。なのに彼女はもう、償うことすら許してはくれない。

だが、すぐに目に力が戻った。

「だから今度は、この命をかけてでも彼女を護りたい」

レオナルドはそれに一瞬返す言葉に詰まった。

「命をかけてつて……自分の立場分かってんのか？」

「王はいなくなっても誰かが代わりをやる。だが、彼女の代わりはどこにもいない。違うか」

その張り裂けそうな表情から、額から流れ落ち始める大量の汗から、兄の彼女に対する気持ちの痛いほどに伝わってくる。

確固たる覚悟を持っていた。自分の命よりも彼女を優先させようという。

ヴァンパイアの国王がたった一人の人間のために命をかけるなどはばかかしいことこの上ない。彼が与える億単位の者たち、万単位の国々への影響を考えれば当然ありえない。王が変わることで、この国や周辺国の情勢は一変する可能性とて否定はできない。

だがレオナルドは出しかけた言葉を飲み込んだ。

“あなたは王なのですから”という一言で、自身の兄がどれほどのことを我慢させられ、そして耐えざるを得なかったかを知っている。自分が遊んでいる傍らで、どれだけの重責をたった一人、担ってきたかを知っている。

『遊びたい？ 何をおっしゃっておられるのですか、あなた様はこの国の王なのですよ？ いいえ、レオナルド様はよいのです』

『陛下、そのようなことをしては立派な王にはなれませぬ

ぞー！』

『我慢なさってください。王という立場をお忘れなく』

『それくらいできて当然です。国王なのですから』

『陛下』

『陛下ッ！』

これは王であるはずの彼の、とても個人的なわがままだった。

だが愛する人を救いたいと願う彼を止めることなどできなかった。彼を苦しませ蝕み続けてきたであろう“王なのだから”という言葉を使つて。その言葉にさいなまれ苦悩し続けてきた彼を、誰よりも間近に見てきたのだから。

全身から汗を流して歯を食いしばる兄の姿に、レオナルドは諦めたように息を吐く。

「この術は本来、体の中の異常や異物を探すための魔術。兄上の場合、医療系はほとんど使えなくなってるってこと忘れてるんじゃないよね」

「レオ……」

消えかかっていた魔法陣にレオナルドがそつと触れた。金色の光が勢いを取り戻す。随分と楽になったのか、ザルクはホツとしたように汗をぬぐった。

「でもオレがフォローできるのは僅かな調整部分だけ。あとは」「分かつてる」

繊細な技術が必要なこの魔術。攻撃系や防御は力任せに何とでもできるが、こればかりは。

レオナルドがサポートしてくれると言っても、ほとんどは自分で行わなくてはならない。

震えだす指先に長時間は持たないと察した。“頼む”と強く唇を噛み締める。

胸騒ぎがするのだ。早く見つけなくてはと。

気の遠くなるような時間の中から、彼女を探す。見つけられるかどうかなど、ある種の賭けだった。魔力を空にしたところで、彼女を連れ戻すことなどできないかもしれない。自分は無駄に命を落とすかもしれない。

それでもいい。彼女のためにできうる全てのことをしてやりたかった。たとえもう会えないとしても。

もちろん償いのためではない。彼女を誰よりも深く愛しているから。

こんなことになるのなら、きちんと告白くらいしておきたかったとザルクは思った。力が目減りするのが手に取るよう分かる。骨が溶けてゆく感覚に似ている気がした。

レオナルドは脈を取るかのようにザルクの手首を握った。

「兄上」

紺碧の瞳が悲痛に歪む。ザルクの表情からは、完全に色が抜け落ちていた。唇は青ざめ、体が寒さに震えだしている。吐き気をやつのことで抑えていた。

「兄上、これ以上やると！」

「あとどれくらいもつ」

「だからもう限界だって言ってるだろう！」

「私の体はあとどれくらいもつのかと聞いているんだ！」

レオナルドは目を閉じて唇を噛み締め、

「三分だ」

三分以内に彼女を見つける。

それ以外に結末など無かった。早くしなければ、今探し終わったところに彼女が飛んでしまいかもしれない。今やるしかないのだ。彼女が魂だけになってしまふ前に。

「どこだ！ どこにいる！ ソフィア！」

嫌な予感が胸をかき乱す。彼女が遠くへ行ってしまうような。

額から落ちた汗がパタパタと床へ染み込んでいった。頼む、もう二度と傷つけないと誓ったのだ。絶対に護ると約束したのだ。

「うう、大王様あ……」

ロキは泣きながら二人を見守る。自分がきつかけで招いてしまった事態に怯え、鼻水を垂らしていた。

「ごめん、ごめんねえっ」

「ロキ！ うるさいから黙ってる！」

「だって、レオ君、お母様にも怒られちゃうよあっ！」

「一緒に謝ってえ」と喚き散らすロキの言った言葉に、ザルクは何かを思い出したかのように“もしや”と力を込める。

魔力はもうあと一分も持たないだろう。

「ねえ、お前ホント殴ろうか？」

「レオ君、大王様、ごめんねえええ！」

「だから！ うっさいっての！」

「見つけた！」

その声に弾かれたように振り返る。

「兄上早く！」

「分かっている！」

レオナルドが彼女のいる時へと繋ぐ扉を開ける。本来過去や未来への行き来は禁止されているが、この際仕方あるまい。

ゴゴゴゴと床に現れた門が下へ大きな口を開く。白や黒や赤や黄の混ざった渦が不気味に待ち構えていた。

「オレはここで扉を開け続けていなきゃ。兄上！」

「ああ。もし私に何かあつたら、レオお前が」

下から吹き上がる風に髪を乱しながら、ザルクは言葉を紡ぐ。

「勘弁してよ。オレはこの国の王なんて仕事、絶対いやだからね」

そう笑みを浮かべて頷き合い、扉の向こうへと飛び込んでいった。

「ソフィア！ ソフィア！」

扉の中を吹き荒れる渦を抜けた先には、霧深い森があつた。このあたりは見覚えがある。幼い頃父や母と来た思いのある場所だ。母も妊娠中、ここで静養していたと聞く。

「ソフィア！」

いつもなら山だろっうがなんなく駆け回れるが、今は体中に鉛がつ

いているようだった。それに胸を強く圧迫されていつかのように息苦しい。だが休んでいる暇などなかった。彼女が危険な目に遭っているかもしれないのだから。

「ソフィア！ ……これは」

無数の足跡を見つけた。このひづめの形は

このあたりはかなり安全なはずだが、魔界は魔界。百パーセント保障されているわけではない。

「まさか」と額からやけに粘り気のある汗が流れた。急いでその後を辿って走る。

「……ソフィア」

背の高い草を掻き分けた先に、たくさんペリュトンに囲まれた彼女がいた。服はボロボロで髪も乱れ、頭を抱えて一人恐怖に泣いていた。

「陛下あああ！」

一頭のペリュトンがその鋭い角の先を突き立てる。

「ソフィアッ！」

足に力を入れて踏み込むと、半ば滑り込むようにして彼女を抱きしめ、襲い掛かるペリュトンと彼女の間ギリギリに体を割り込ませた。

肉を突き刺す鈍い嫌な音が響き、鋭い痛みと生暖かい液体がじわじわと伝っておりた。

腕の中に抱いた彼女は、恐ろしさで意識を失ったらしい。まるで人形のようにぐったりと体を預けていた。そしてザルクのその胸からは、血塗れた鋭い角の先が飛び出ている。

「ぐ……っ」

その先が彼女に当たらないように配慮しながら、体を起こしてペリュトンの頭を押した。動くたびにナイフでえぐられるような痛みが走る。ズチャツと角が抜けると共に、生暖かい血が小さな滝のように噴き出した。足元に赤い血溜まりができあがっていく。

普段なら何でもない怪我だが、かなり魔力の失った体には随分と堪えた。口へ湧き上がってくる血をペツと横へ吐き出す。

「去れ」

彼の姿を見ただけで怯えたように硬直していた怪物たちは、途端にワナワナと震えだした。

「行けっ！」

一斉に羽音を響かせ、ペリュトンは我先にとクモの子を散らすように真つ白な天空へと飛び去っていく。いくら今の彼がひどい傷を負っているといえど、彼らにとってはとんでもない敵であった。

再び訪れた静寂の中、腕の彼女を見つめた。

「ソフィア、間に合って良かった」

意識のない彼女の頬をなでながら優しく呼びかけ、出血がないか確かめた。掌や膝を少しすりむいているようだが、後はなんとも無さそうで胸をなで下ろす。彼女の顔についていた汚れ涙を丁寧に手

で拭ってやった。

『陛下ああああ!』

なぜ彼女はあの場で自分を呼んでくれたのだろう。一番に信頼しているのは、てっきり弟の方だと思っていたのに。

いや、いいほうに考えるのはよそう。何かほかに理由があるに違いないとザルクは思った。

ふと愛らしい唇が目に入って顔をぬぐっていた手が止まった。薄く開いた艶やかな色を放つそこから目が離せなくなる。シエルピンの唇は八チミツを塗ったようにみずみずしく、まるで熟した果実のようだった。

目を少し下へやれば、丸みを帯びた胸のふくらみが優しくドレスを押し上げ、スカートなどかなりきわどいところまで破れていた。隙間から見える柔らかかそうな白い太ももが、まるで“噛みついてくれ”と自分へ訴えかけているような気がする。

頬を染めてコクツと喉を鳴らした。

「や、やはりかわいいな」

彼女を前にして心臓が激しく、うるさいほどに鼓動する。

我慢ができない。呼吸も心なしに荒くなっていた。

そつとスカートの破れ目から手を入れる。

「だ、だめだ!」

寸でのところで手を止め、何度も頭を振った。

だが夢にまで見た彼女の体が、図らずも今、自分の腕の中にある。そんな状況と想像以上に柔らかかな体に興奮し、ますます体が熱くな

った。

彼女の薄く開いた唇に気が高ぶり、瞳を閉じて吸い込まれるように顔を近づける。

「ソフィア」

『もう、全てを終わりにしてください』

唇が触れあうほんの少し手前で動きを止める。

「あああ！ 何をやっているんだ、私は！」

意識のない彼女をどうかしようなどとは、と邪心を振り払うかのように地面に額をぶつけた。

しかも彼女とのあれやこれやの妄想に興奮しすぎて、気づけば傷口からドクドクと血が溢れ出している。我ながら愚かだため息をついた。

だが狂おしいほどに愛している女性を腕に抱きながら、危うかったとはいえ耐え抜いた自分を褒め称えたかった。ぶつけた額は少々痛むが。

カサツと草を踏む声に顔を上げる。目の前に現れた黒い髪の女性に目を見開いた。

「す、すみません。彼女、大丈夫でしたか」

ザルクの腕の中のソフィアを心配そうに見つめた。

「あなた様の恋人でしたか。目が覚めたらどうか彼女にお礼を」

ゆっくりとお腹を撫でた。

「強く優しい女性です」

そう、確かに彼女は強い女性だ。ザルクは腕に抱いたソフィアの顔を見ながら、処刑日のことを思い出していた。力はないが、心はきつと自分よりもずっと。

自然と笑みがこぼれた。

「あなた様もヴァンパイアなのでしょう。お名前を伺っても？」

ザルクはソフィアを抱いて立ち上がった。今まで何の音も立てなかった森を、心地よい穏やかな風が吹きぬけてざわめく。

「今はあえて。いずれあなたの前に現れるでしょうから。……ありがとうございました」

彼女はそう言って立ち去るザルクに軽く首をかしげ、そのうち何かを悟ったようににっこりと柔らかな風が微笑んだ。薬指の指輪を輝かせて。

「兄上、ソフィアは！」

現れた兄の姿に、レオナルドは声をあげた。

「無事だ」

彼女の体をレオナルドへ預けると、よろよろと立ち上がる。

「兄上、出血してるじゃないか」

「問題ない」

「いいから見せてみるよ。魔力の抜けた状態でのそのケガは」

ザルクは胸を押さえたまま扉へ向った。

「レオ、このことは彼女には言わないでくれ。彼女に聞かれたら、お前が助けたと言ってくれ」

「何？死ぬかもしれないような危険まで冒しておいて、そのことは言ったってか？」

信じられないと首を振る。

「その方が彼女にとっていいんだ」

「ちょっと格好つけすぎじゃないの？」

冗談めかしてそう言うレオナルドに、ザルクは足を止めて顔だけ少し振り返った。

「レオ、彼女を頼む。私が初めて心底惚れた女性なんだ。もう傷つかないよう見守ってやってほしい。どうやら……私ではダメらしいんだ」

そばにいてはいずれまた傷つける。

「兄上」

振り返った兄の表情がハツとするほどに透き通っていて、レオナルドは目を見張った。体を引きずりながら立ち去るその痛々しい背中を見続けることができず、目を閉じて俯いた。

「よっと」

ソフィアを馬車へ寝かせながら、レオナルドは軽く息を吐いた。自分の上着をかけてやり、そっと額を撫でる。扉を閉めようとするロキに「あ……ロキ、ちょっと待ってて」

「どこ行くの、レオ君」

「忘れ物だ。彼女に何かしたら歯を全部へし折るからな」

その脅しにロキは顔を真っ青にし、約束の塔を見せながら絶対にしないと誓った。

レオナルドは先ほどの古い建物の扉を開け、ゆっくりと中へ歩を進める。風でちよつちよつがいが妙に甲高い声を上げ、生暖かい空気があたりを包んだ。

黒の絨毯を一步一步踏みしめ、説教台の上に乗っていたグラスを見おろす。一つは割れてしまっているが、もう一つは

そばに置かれてあったレッドロット（血液採取器具）を手に取り、ポチャツとグラスへ浸した。数度かき混ぜ、ワインに濡れたままそれを引き抜く。ガラス管に溜まった鮮血を見つめ、目を細めて笑った。

軽く唇を舐め、それをゆっくりと先を口の中へ差し込み、血液を流し込む。滴ったワインが口角からアゴを伝い、まるで血のように緋色の筋を作っていた。

旨そうに飲み下す音が冷たい壁に反響する。

「はあ……」

熱く切なげな吐息を吐き出し、血のもたらす快感に酔いしれた。
電流がかけめぐって頭を突き抜けるような、体の芯を優しくくすぐるような、全身が熱くたぎるような感覚。器具を捨て、よろよろと歩いてヒンヤリとした壁に背中をつけた。

「傷つかないよう見守ってやってほしい」？ いいよ、兄上。オレが彼女を護ってあげる。その身も心も、そして彼女の中を流れるこの甘美な血もね」

真っ赤に染まった美しい歯を見せ、レオナルドは肩を震わせて笑った。艶やかな金色の髪の間からは、緋色の瞳がのぞく。

彼の笑い声は風のざわめきと重なって、不気味に闇夜を揺さぶっていた。

s t ?

The Promise (後書き)

あとがき

レ、レオくん……！？

「ああ、やだやだ！ 何でまたこの子ばかり嫌な目に遭うんだらうねえ」

ミセスグリーンは小さな頭を抱えながら、うろつろとテーブルの上を歩き回った。あの件について話すと、彼女はあんどりと口を開けた後、すぐに頭痛を覚えたかのように頭に手をやった。

「何が匿名のナイトだよ、寒いこと言ってるんじゃないよ！ 全く」

ビシッと指差された先にいたナイト様、いえ伯爵さんは、怯えたように体を震わせた。

「けれどミセス毛むくじやら。僕はソフィーちゃんの為を思って

「誰が毛むくじやらだい！」

私は紅茶に口をつけながら、向かい側に座る伯爵さんとミセスグリーンとの攻防に肩を震わせていた。言い争ってる割にすごく仲が良さそうでもとも微笑ましい。ミセスグリーンにとっても、少しできの悪い息子を叱りつけている感覚なんだろう。

そんな彼らから視線を外し、ふとキャビネットの上を見た。ここへ来た当初はそこに布でカバーされた絵がかけられていたけれど、ある日突然それは無くなっていた。真っ白な壁がやけに際立っている。専属メイドのミントさんにも聞いてみたけれど、彼女も知らないって。

何だったんだろう。

どこか部屋全体が寂しくなってしまったみたい。あのカバーの下には一体、何があったのか。私はそれがとても気になっていた。

「それよりアンタ、また勝手に後宮内に入ってきたのかい？」

「うん。ソフィーちゃんにお詫びをしようと思って……」

伯爵さんは悲痛な面持ちで、唇を噛み締めた。そっか。記憶がないけれど、私はどうやらレオ様に助けられたらしい。それで無傷だったとはいえ、彼なりに気にしてくれていたんだ。

「で、こうして僕のポストカードを持参してきた次第さ」

さまざまなポーズ（バラをくわえたり、楽器を演奏していたり、半裸もある）のポストカードたちをテーブルにぎっしりと並べ始めた。

「さあ、どれでも好きなだけもらってくれたまえ」

得意げに両手を広げ、暗闇でもキラリと浮かびそうなほどに白い歯を見せつける。

い、いらない……。

ミセスグリーンもまるでそれが汚いものかのように、踏まないよう慎重にテーブルからおりて行った。

「結局一枚もらってしまった」

バラをくわえ、ウインクする伯爵さんのポストカードを見つめな

がら魔文学の授業を終えて教室を出た。いらないとはいにくかつたし、あの中ではこれが一番無難そうだった。ギリギリシヨットなんてもつてのほか（やけに勧められたけれど）。あんなにたくさん自作のポストカードを作って需要はあるのかしら、なんて余計なことを考える。お金持ちのすることってイマイチ分らないわ。

突然ドンと肩に衝撃が走った。誰かにぶつかってしまったらしい。

「ったいわね！」

同じファーストクラスの女性が私を鋭くにらみつけた。でもぶつかった相手が私だと分かると、顔を凍りつかせて笑顔を取り繕う。

「あ、あら、ごめんあそばせ。ぼうつとしていたものですから、おほほほ！」

私がおか言おうとする前に、そそくさとその場を離れていった。周りの子たちは遠巻きに私を見ながら何か話している。いつものこと。何か悪いことをしたわけでもないのに、すごく居心地が悪かった。

ここへ移ってきた時から、私はまるでこのボスのように恐れられていた。理由は一つ、リザとのがあったから。貴族とのつながりが強いからなのか、それともリザの性格をよく分かっているからか、どうやら何となく真実を察しているらしい。だからこそ自分たちのことも王に告げ口されて、ひどい目に遭うんじゃないかって怖がってる。皆そんな態度だから飽き飽きしていた。もっと普通に接してほしい。

ああ、友達ってこんなに作るのが難しかったっけ。口から出るのはため息ばかりだった。

「あら、ソフィー？」

はりのある声に振り返った。

そこには見覚えのある、ブルネットの髪にそばかすの女の子がいた。彼女は確か乗馬場で話しかけられた

「アリス」

「よかった！ あなたもファーストに移ってたのね？」

重そうな箱を持ちなおしてかけ寄ってくる。

「あの馬のこと、大丈夫だった？ みんなすごく心配していたわ」

そう、スレイプニールが暴走して危うく崖から落ちかけた。

「ええ、陛下が助けてくださったから」

闇のように深い瞳をこちらに向けて、彼はとても必死になって私を助けてくれた。

けれど、そんなあの人の手を私は……。そのことを思い出すと、胸がズキッとする。

「そ、それよりアリスもファーストに？」

彼女は肩をすくめてニッと笑った。

「そうなの。それもセカンドを飛び越えていきなりよ？ びっくりでしょ」

彼女がそう言うのも無理はないこと。普通はファーストクラスへ

移される前に、セカンドで様子を見られた。成績とか先生たちの評判、あとは王に気に入ってもらえるような趣味があるかどうかとか。私は王が裏で糸を引いていたからともかく、サードからいきなりこちらへなんて、すごく有望視されているんだわ。

「それが聞いて驚かないで。私を支援してくれる貴族なんだけど、ものすごく高齢のおじいちゃんなの。それで私が何百年か前に亡くなった奥さんに似ていて、可哀想だから支援してあげるですって。別に正室になれなくていいからのんびり暮らしなさいって、これってとってもラッキーじゃない？」

「本当？」

そんなことがあるんだ。けれどアリスはきつととても優しくてまっすぐな子なんだと思う。だからきつとそんな幸運にも恵まれたんだわ。

ん、あれ……じゃあ私はなぜ色々ひどい目に。

「はあ……」

「どうしたの、ソフィー？」

「あ、ううん。もしかして今から部屋へ？」

引越しを手伝う申し出をすると、彼女は目を輝かせて喜んでくれた。

「やっぱりファーストクラスともなると、出される食事も違うのね！朝食なのにスープからデザートのコースになってるなんて」

「メニューの中にホルルのケーキなんてのもあったわ」

「すごい、お腹がぶよぶよになって陛下が寄り付かなくなりそう

「！」

二人で笑い合いながら、天井の高い立派な廊下を歩く。ときどきゴーストさんがせわしなく洗濯物を運んだり、ほうきで丁寧に掃除をしている横を通り過ぎていった。

「えっと、三階のリリーの間だから……ここだわ！」

部屋にはそれぞれ花の名前がついていた。私のところはローズ。白い扉にはそれをモチーフにした絵が描かれていて、闇の生き物であるヴァンパイアにしてはとてもセンスがいい。悪魔の名前とかだったら嫌なものね。“サタンの間”とか。ノックするのが恐ろしいもの。

「……何、これ」

ファーストクラス名物の美しい扉の前で、私たちは立ち尽くした。

「ひどい」

扉の前には虫の死骸やゴミが散乱していて、とても中に入れる状況ではなかった。“手荒い歓迎”というやつらしいと確信した。

「アリス、気にしないでこんなの」

「あらあら大変ねえ」

ピンク色の扇を持った女性三人が、汚いものを見るかのようにアリスを見る。フリルの愛らしいドレスには似合わないほど、目を細めイジワルに笑っていた。

「早く片付けてくださらない？ 目障りでしかたないわ」

リザだけじゃない。ここにはこういう嫌がらせを楽しむような輩がたくさんいた。王に近く、正室争いを近いところで行っているクラスだからこそ余計に。今から思えば、王がまるで有名舞台俳優のような憧れの存在と言つ認識でしかないサードクラスは、比較的平和だった。

けれど彼女らは私に気づくなり、ギョツとして頬をひきつらせた。

「お、お可哀想に。誰がこんなひどいことしたのかしらね」

「全くよ。ひ、酷いわ。おほおほ」

白々しい。

「アリス、気にしないほうがいいわ」

励まそうと彼女を見ると、彼女は俯いて肩を震わせていた。当然だわ、来て早々こんな仕打ちに遭うなんて。

「アリス、一緒に片付けよう？」

「つく……くくくくく」

ん？ あれ、泣いてない？ というか笑ってる？

彼女はガバツと顔を上げ、

「おーっほほほほ！ 望むところよ！ 燃える、燃えたぎるわ！ 私の中の熱き闘魂が！」

え、何……。闘、え？

「人生負けたら終わり！ 負けたら終わりなのよ！ 食事だって早い者勝ち！ 最後に残ったものはたとえ野菜のかけらだろうと確実にアタイがいただきます！」

あ、アタイ？ 何、彼女の中で一体何が覚醒してしまったの！

アリスはドンと持っていた荷物を下ろすと、ワシッと両手に虫の死骸を掴んで彼女らに投げつけ始めた。

「きゃああ！ あんたバカじゃないの！」

「やめなさいよ！」

逃げ回る彼女らを笑いながら追い掛け回す。見ようによってはとっても恐ろしい光景だった。

「ほーらほらほら！ どうした！ かかってこいよ、メス豚ども！

はははは！」

「きゃああああ！」

「いやああ！」

「……」

廊下中に響き渡る悲鳴。

こ、これは私も参戦すべき？ でも虫をわし掴みというのは、結構勇気が。

落ちているグロテスクなそれらをそっと見下ろし、背筋がぞぞつとした。

「何だ、ナヨナヨしてやりがいのない奴らだぜ。もっとガッツのあるのはいないのか、全く」

まごまごしているうちに、三人とも泣きじゃくりながら一目散に逃げ帰ってしまったらしい。まあ、私が彼女たちでもそうするけれど。

「あの、アリス……」

おずおずと声をかける。まさかこちらにも投げつけてこないかしらとちよっぴり心配した。

「え？ あ、ごめんねソフィーびっくりした？ 私男ばかりの孤児院で育ったから、遅くなっちゃって。虫とか全然平気なの！ 牛の糞の投げ合いもしたことあるのよ。これがもう、洗っても洗っても臭いがとれなくなっつて！」

「へ、へえ……左様でございますか」

カラカラと笑う彼女に、返す言葉が見つからない。というか、言葉遣いもかなり違う。“のよ”や“だわ”なんていうのは、ここへ連れて来られてから修正させられたんだろう。

「もう、あの子たちのせいで仕事が増えちゃったわ。今度見かけたらケツ……尻を思いつきり蹴り上げてやる！」

アリスは散らかしたものを一つ一つ、丁寧に拾い始めた。

「お掃除係の人を呼ぼうか？」

「いいえ、私が散らかしたんだもの、私が片付けなきゃ。平気、これくらいいつものことだから、フフ」

「アリス……」

はにかんだような笑みに、ホツとなごんだ。スイッチが入るとち

よっと怖いけれど、心根がまつすぐなことには変わりないんだわ。自分のやることに自らきちんと責任を取れるなんて、なかなかできることじゃない。

「アリス、私も手伝うわ」

彼女を見ていると、自然とそんな言葉がこぼれ出た。

「ごめんね、ソフィー。片づけを手伝わせちゃって」

片づけの際、直接触りたくなくて伯爵さんのポストカードを使って掃除してしまったことは本人には絶対に言えない（しかもそのあとゴミ箱へ）。

「いいの、手が空いてたんだもん」

アレを片づけてすぐ紅茶を飲むのは気が引けたけれど、折角彼女が入れてくれたものだから。そう思って口にしたけど、とても美味しくてびっくりする。ミントさんと気が合うかもしれないと思った。アリスは向かいの席で肘をつきながら、

「ああ、あなたっていい子ね。さすが陛下にお目をかけられただけあるわ」

「そんな……ことは」

もう会わないと約束したとは言えなかった。あの人とはもう半月も会っていない。謝ったら許してくれるのかしら。「今更何だ」って言われるかな。

「その指輪も陛下から？」

「う、うん」

あの時、払い落とししてしまった指輪を必死に探した。キャビネットの下にまで転がっていたそれを見つけたときは、どれだけ安堵したか。もう無くさないようにネックレスのチェーンに指輪を通して、首から下げていた。

「見せて、見せて！」

「いいよ」

首から外して彼女に渡す。光の当たり具合によって色を変える、本当に美しい指輪だった。

「わあ重い、さすがね。質に入れたらいくらになるかしら」

ムフフとアリスの目がキラリと輝く。一体人間界でどんな生活を送っていたのかと少し心配になった。

「あれ、ねえソフィー、これはどういう意味？」

指輪の内側の文字に彼女は目を留めたらしい。じつと目をこらしていた。何か書いてあるの？ 指輪を見つけたことが嬉しくて、そこまで見てなかった。

「そこにはなんて？」

「日付の後に“Thank you, Lots”って書いてあるわ」

“ Thank you , L t o S ” ?

「ソフィーがもらったものなんだから、Sはソフィーのことだろうけど、Lって誰かしら？ 陛下は“Z”でしょう？ ま、まさかレオナルド公爵様？」

「^{ルイズ}Louise」

ポロリと口からその名前が出た。あの美しい髪と瞳のあの女性。

「ルイズ様って、ええつと確か、陛下のお母様の？」

アリスはワケがわからず驚きに目をまん丸にしていた。しまった、余計なことを。

「ま、また多分別の意味があるのよ、きつと。” Love ”とか…

…」

「え、何？ ” Lav ” (トイレ)？」

それがおかしくて二人とも吹きだし、話題がそれってしまった。

「いいなあ、ソフィー。こんなに高そうなもの貰って」

「でも返さなきゃ」

「え、どうして？ せつかく貢いでいただいたのに」

不思議そうに首をかしげる。けれど私は結局彼女にその理由を話すことができなかった。私にはそれを貰う資格なんてないんだってこと。

大きな罪悪感に押し流されそうだったから。

「ええ、今日は本っ当に楽しかったわ、ソフィー。ありがとう！」
「私も。また授業で会いましょう」

彼女の部屋を出て、寂しい廊下を歩いて部屋に戻る。誰かと話しているのが紛れるけど、一人になるとあの人のことを思い出して少し憂鬱になった。

「どうしようこれ」

掌に乗った指輪を眺めながら、ふうとため息をついた。王はもう私の前に現れないって言うてるんだから、向こうからくることはない。私から会いに行くにも、どうすればいいのか。

いいえ、本当は私が「会いたい」と一言言えば、きっとあちらは何かしらのアクションを起こしてくれるはず。私は恐れているんだわ、あの人にはねつけられるのを。

傷つけた相手に謝るって、こんなにも怖いことだったのね。

『すまない、ソフィー』

もっとあの人の言葉をきちんと聞けばよかった。

その瞬間、誰もいない広い廊下の明かりが前も後ろも全て落ちた。何かしら？ 辺りが一瞬にして真っ暗になる。

「どうしたの」

暗闇で突然声をかけられ、驚いた拍子に指輪を落とした。それはコロコロと転がって、声をかけた主の靴で止まる。

「レオ様」

窓から差し込む月明かりに照らし出されたのは彼だった。闇夜に青の瞳が、まるで夜空に輝く星のように妖しく輝いて浮かんでいる。彼は緩慢な動作で足元の指輪を拾い上げると、

「これ、兄上からもらったの？」

「は、はい。でも返そうと思っ」

「ならオレから返しておいてあげるよ」

私の言葉に被せるように、彼は指輪をポケットにしまいこんだ。

「あ、でも私が直接……あの」

壁際へ追いやられ、両手の間に閉じ込められた。にっこりと笑いながら見下ろされる。

「っ……」

手で首筋に触れられ、思わず顔を背けた。それでも彼はゆっくりと、手を肩よりも下へとなぞっていく。暗闇の中で、緊張ぎみに震える自分の息遣いがやけに大きく聞こえた。彼の手の感触も鮮明に感じ取れた。背中 of 冷たい壁とは対照的に、体が熱くなっていく。

「あ、あの」

「オレも君に渡したいものがあるんだ。オレのは返さないでくれるよね」

なぜか、今日の彼はとても怖かった。多分、口元には天使のような微笑が浮かんでいるのに、目が少しも笑っていないからだと思う。

小さな光が瞳の奥できらついていた。

今度はゆっくり首筋に唇を近づけられ、何度も音を立てて優しく口づけられた。それに自然と鳥肌が立つ。

「あ、の……っ」

「受け取ってくれるよね？」

受け取とるって、

「何を、ですか」

黒い雲がゆっくりと月を覆い隠していく。それなのに、首筋から顔を上げた彼の目は少しもかげりを見せなかった。

「決まってるじゃない」

そつと内ポケットへと手を入れた。その間も私から一切目を離さず、まるで反応を楽しんでいるかのように笑っていた。

何？ 何を受け取れと言っの？ 思わず唾液を飲み込んだ。
スツと黒いものが見えた。

「じゃーん！ パーティーの招待状でした！」

目の前にそれを突き出され、目を丸くする。

そこには確かに Invitationと白い文字が躍っていた。
な、何だ……。

「びっくりした？」

招待状を少し横へやり、彼がその向こうから顔をのぞかせる。整

った顔に、イタズラっぽい笑みを浮かべていた。
それと同時に廊下もパツと明るくなって胸をなで下ろす。
よかった。

「わざわざ、ありがとうございます」

招待状を受け取りながら「来られるでしょう？」と聞かれ、「はい」と頷いた。

「何のパーティーなんですか？」

「うん。名目上は異国との懇親会だけど、事実上は」

レオ様は笑顔をすつと引つ込め、どこか硬い表情で、

「兄上の婚前パーティーだよ」

「え？」

それに耳を疑った。

謁見の間に黒い羽のついたトランプペットの高らかな音が鳴り響く。強く明快なこの楽器を操る奏者は、競争率千倍の狭き門をかくくつてきた超エリートさんらしい。とはいえそんな彼の演奏もここでは単なるバックグラウンドミュージック。

床のタイルは数万マイル離れた離島から一つ一つ運んだ石から作ったものだし、天井を飾る金のシャンデリアは二百人の職人が二百年かけて製作した渾身の一作だという。八場面に分けて描かれた天井画『ラトウーナス』は、魔界では有名な物語を元に描かれ、その一つ一つの細やかさは何時間見続けても飽きそうにはなかった。

そう、ここには世界の一流が揃えられていた。そこからこの強大な国の力が垣間見える。

金のツタで彩られた柱は、その姿を壁に半分以上埋められていた。聞いたところによると柱が壁にどのくらい隠れているかによって、こういった部屋の格式が変わるらしい。だったらここは文句なしにハイクラスのホールだわ。

十数段ある高座に、王がまっすぐ前を見据えて座っていた。その椅子したら大きくてきらびやかで、普通の人が座ったらきつと椅子のオーラに負けてしまっただろうほど。けど、さすがにあの人はしっかりと収まっていた。

彼は私がいることを知ってるんだろうか。早く謝らなくちゃいけないのに。それとも、もうどうでもいいと思っっているのかな。結婚するみたいだし。

「もうすぐ来るよ」

隣に佇むレオ様にそつと耳打ちされた。玉座の下で貴族たちが向かい合つて並び、道を作っている。ここは当然身分順なんだけど、私はレオ様の横に立たせてもらつてた。ありがたいけど、一般庶民出の私からすればできれば遠慮したい。アルカロツテやメヴェリーナとかいう、魔界最高級ブランドで上から下まで固めた周囲の気品に押しつぶされそうだった。指先にまで神経を使つてしまう。

もちろん私もレオ様の用意してくれたドレスに身を包んで入るけれど、何とか庶民出身の私には付け焼刃的な感覚が付きまどつていた。作法にしたつて、本で勉強したのが役に立てばいいけど。きちんと授業に出ておくんだつた、と今更ながらに後悔した。

ふつと小さく息を吐くと目を隠す薄いベールが小さく揺れた。仮にも王の次なる婚約者と噂される女性が来られるというのに、後宮の女性がいてはマズイだろうというレオ様の配慮で。

とはいえ私からはベールをしているのを忘れるくらいクリアに前が見えているから、王女様もしつかり見えるはず。

王のお妃になる人……か。どんな女性なんだろう。

なぜか気分が落ち込みそうになって、ぎゅつと目をつむつた。何なのかしら、これは。

ドン、と太鼓の音がしてハツと我に返る。

「ニユンペー国、第一王女。エヴェリーナ・ジエナ・カスタニエ・アキュアル様が到着されました」

な、長いお名前。

そう思いながらパチパチと拍手をすると、全員の視線が私に集まつた。

あれ？

「ソフィア、拍手はいらないよ」

レオ様に小声で耳打ちされ、カツと顔が熱くなった。周囲からヒソヒソと笑い声も聞こえる。恥ずかしい。恥ずかしすぎるよ……。

やっぱり私は庶民だった。

「陛下……」

王が前を見据え、一人手を打っていた。乾いた音がホールに響く。やがて王のそれにつられるように、戸惑いながらもみんな拍手を始めた。

もしかして、気を遣ってくれたの？

礼儀も知らない私への嫌味かしらとも思ったけど、やっぱり嬉しかった。とても。レオ様も「兄上らしい」と小さく笑っていたし。

ギイツと巨大扉が開かれ、カツンとヒールが床を叩く音がした。

「……っ」

拍手の手が固まった。声を出すどころか瞬きすらできない。呼吸が止まるかと思った。

白に近いブロンドの髪はパールのように艶めき、雪のようにきらめく素肌に波を描いて揺れる。朝露のようなつやつぱい唇に、形の良い高い鼻、常夏の海のような輝きを放つマリンブルーのパッチリした瞳をしていた。

一歩足を踏み入れたただけだというのに、その美しさに息をするのも忘れるほど一瞬で全てのものを魅了した。

彼女のお付きの女性たちはみんな目から下をベールで隠していたけど、その瞳の美しさだけでも容姿の端整さが伝わる。

「彼女らはニユンペー」

ニユンペー？

「確かニユンペーとは確か山や川なんかにいる精霊ですよね」

「そう。ヴァンパイアの王となる者は昔、ニユンペー国の第一王女と結婚していたんだ。その縁で貴族も彼女らの中から花嫁をもらってた。オレたちには女性が生まれないし、向こうは女性ばかりの国だからね。互いの利害が一致したってわけ。王と王女の場合は特に確約がなくても、自動的に許婚同士になっていた」

「人間の女性から結婚する人を選んでいたのではないんですか？」

そう投げかけると、レオ様はどこか言いにくそうに、

「数代前から人間の女性を伴侶にするようになったんだ。まあ何ていうか、彼女らは妻には不向きだね。早い話が、城内の風紀を乱す原因を作ってしまうんだよ。今だって」

「どうかされたんですか？」

胸焼けでもしているように、レオ様は苦々しげな顔をしていた。

「見て、周りのやつらの顔。特に男」

それにつられて周囲を確認すると、みな頬を赤く染め口を半開きにしたまま惚けたように彼女に釘付けになっていた。まるで快樂のるつぼの中にいるような表情。奥さんらしき女性に足を踏まれても、まったく目を離そうとしてはいなかった。

「ニユンペーは男を惑わせるフェロモンを自在に操れるんだ。それがまたすごい強力でさ、抵抗できるヤツなんていないんじゃないか

な。ま、オレには君がいるから平気だけど」

頭に軽くキスを落とされた。私がいるからというより、きっとレオ様の精神力が強いんだと思う。

「ああ……効いてないのがまだいたか」

レオ様の視線の先を追うと、肘掛に肘をつきものすごく不機嫌そうな顔でこちらを睨みつける王の姿があった。

こ、怖い。

やっぱり私が来たこと怒ってるのかしら。そうよね、終わりにしてって言ったのは私だもの。それなのに。

レオ様が心配そうに私を傍に寄せてくれた。それに王はこちらを見据えたまま握りこぶしを震わせ、完全に怒りの様相を呈している。レオ様にも近づくなつてこと？ はあ、どうしよう。

「陛下、陛下……っ！」

「何だ」

王の一番そばで控えていたシュレイザーさんに小声で咎められ、王はやっと王女様が玉座のすぐ下まで来ていたことに気づいた。

「あ、ああ……遠路はるばるよく来てくれた。滞在中は存分に楽しんでくれ」

「ありがたきお言葉ですわ。陛下」

スカートを持って恭しく頭を下げる。

鈴の音のような声って、これのことだったんだと思った。すずらんが鳴るとしたら、きつとこんなふうにかわいい音がでるんだろう。上から下までこんなに魅力的な女性がいるんだ。

そんなことを考えていると、ふと王女様と目が合った。いえ、でも私はベールがあるから向こうからは見えていないはず。気のせいかも。

「陛下」

王女は花が開くかのようにゆったりと右手を上げた。

王はそれに応えるように、階段を下りていく。それに即座に周囲は反応し、男性は胸に手を当て、女性はスカートを持ってそれぞれ軽く頭を下げた。今度こそはちゃんとできたわ。『ハウツーお出迎え』（タウンバード・サロン 19892年 城下中央書店）を読んでおいてよかった！ 拍手の件は載ってなかったけど。

「陛下」

王女のどこか泣きそうに震えた声に反応し、頭を下げながらチラツとのぞいた。ベールをしてるから大丈夫だろうと思って。

「ん……っん」

「！」

王女は王の首へ手を回し、深い口づけを始めた。う、嘘でしょう？ そんな出会って、も、ものの数十秒で？

あまりにしつかりとその光景を見てしまい、燃えるように顔が熱くなった。

「んっっ、陛下」

甘い声が謁見の間に響く。王も彼女へ手を回し、なんでもないので口に口づけに反応していた。

それにズキツとする。
痛い。胸がとても。ドレスを持つ手が震えた。
どうして。

私を本気で好きだと言ってくれた人が他の女性と婚約したから？
だったら私は、とても最低だわ。

「ソフィー、大丈夫？」
「へ？」

気づけばもうみんな顔を上げていた。

「あ、は、はい。ぼうつととしてしまっていました」

それどころか談笑しながら広間を出て行っている。

「今日は着いたばかりだから、限られたメンバーだけの食事を
するんだ。さつき着替えた部屋へ戻れば、それ用のドレスを着せて
くれるよ」

「分かりました。ではまた後ほど」

一旦そこを離れ、赤い絨毯の敷き詰められた広い廊下を歩いてい
った。ハアと小さくため息が漏れる。

「ねえ、あなた、お名前は何とおっしゃるの？」

その美しい声に振り返った。

「お、王女様！」

朝日をあびる赤いチェリーのような、美しい笑みを湛えて私を見ていた。えっと、相手が女性か男性で挨拶の仕方が違はずだったわよね、えっと……忘れちゃった。

「お名前ですわ、お名前」

一言何か話すたび、バラの香りが立ち込める。まるで言葉に香水が振りかけられているよう。

「そ、ソフィア・クローズです」

聞かれたことにだけ答えればいいのかしらと、何の作法も抜きにそう言った。王女は私のつけていたベールを強引に取ると上から下まで眺め（下を向いたときに見えたまつげの長いこと）、

「ふうん。こっちへいらして、ソフィアさん」

「え」

男性客を誘う高級娼婦のような、色っぽい雰囲気を全身に纏って、彼女は人差し指で私を招いた。あまりの優美さに思考が止まる。

その間に彼女の付き人に両脇を抱えられ、無理やり反対方向へ歩かされた。

「い、いえ、あの！ 私はあっちに。あの！」

その抵抗もむなしく、王女の後ろにつき従うかのように連れられていった。

「わあ、すごい」

彼女に割り当てられた部屋は、ものすごいことになっていた。十分広さがある部屋なのに、彼女が持ってきたらしいドレスや小物やぬいぐるみや花で一杯になっていた。今もまだぞくぞくと彼女の付き人たちがせわしなく物を運び入れている。

何の香りなのか分からないけれど、ものすごく上品な甘い香りが立ち込めていた。

舞台女優さんの楽屋もこんな感じなのかしら。

「くつろいでくださって結構よ、ソフィアさん」

「は、はい」

王女が部屋に入った途端、彼女は（たぶん魔術で）一瞬にして裸になった。目のやり場に困ったけど、細い腰やその柔らかな体のラインがとても美しい。まるで芸術作品でも見ているみたいだわ。あまり見ちゃ失礼だろうけど。

彼女がミニドレスのようにオシャレなシルクのバスローブを肌の上に羽織ったところで視線を外した。

これはお家から持ってこられたのかしら。お店より品揃えがいいんじゃないかな。

ずらりと並ぶさまざまな形の香水やお化粧道具、どれも高そうないい香りがした。

いいなあ。

「あら、結構地味なのはいてらっしゃるのね。あの方の趣味ですの？」

「え？ あっ！」

何か足元の風通しがよいと思ったら、王女は私のドレスをめぐり上げてしげしげと下着を見つめていた。

「な、な何を！」

「ねえ、ソフィアさん、あの方はどんなものがお好みですか？」

私のドレスからさつさと手を離すと、豪華なベッドの上に乗ったたくさんの方のトランクをあさり始めた。

「セクシー系？ キュート系？ 清純な白もありますわ」

下着を次々に持つては床へ捨てていく。選んでいるというよりは適当に放り投げているみたい。

「私はやはり可愛らしいピンクや情熱的なレッドがいいと思うのですが、好きな殿方の好みに合わせたいと思うのが女心ですね、ソフィアさん」

「あ、はあ」

「あなた、後宮の女性でしょ」

「！」

今さっき話しかけられただけなのに。どうして分かったの？

彼女は“やっぱり”と言いたげに口元に弧を描く。

「私の直感は、外れたことがございませんの」

驚く私を歯牙にもかけず、金銀の小悪魔たちが縁取る鏡の前で下着をあてポーズを取る。でも呆れたようにそれを放り投げ、

「あゝん、どれもイマイチですわ！ 後宮の女性ならご存知でしょ

う？ あの方の好み」

王の好きな下着なんて知らない。というかあの人のことだから、下着の下にはかり興味がありそうだけれど。

「ねえ、脱いでくださらない？」

「ぬ……、え？」

彼女が人差し指を空で回すと、私が答える前にハラリとドレスがひとりでに落ちた。いえ、ドレスどころか下着まで。

「お、王女様っ！」

う、うそでしょう？ クエストマークが全くもって役割を果たしてないじゃない！

無駄な抵抗と思いつつ、慌てて背中を丸め両手で体を隠した。

「あら、女性同士なんですから恥ずかしがることはありませんわ。殿方がご覧になったら鼻血でも流されそうな格好でしょうけど」

そりゃあ、あなたくらいきれいな体ならそうだと思いますけど。

「このタイプがいいかしら？ それとも飾りのついたこっち？ あ、ねえ、これつけてみてくださいいな」

ニユンペーっていうのは、こんなに強引なの？ やっぱり私の合意なしにことは進められていく。まるでマネキンのように王女の選んだものをつけられ、彼女はしげしげと眺めた。愛らしい唇が軽くすぼめられる。

「うん。よくお似合いですけど、いくら何でもセクシーすぎかしら。初めてでこれじゃあ気合が入りすぎですわ。やっぱり殿方は恥じらいのある感じがお好きでしょうし」

生地が少ないほとんど裸と変わらないような薄いピンクの下着に、泣きたい心地になりながら俯いていた。胸の前の大きなリボンもむなし。

お願いですから、もうご勘弁を。

その時、コンコンとドアがノックされた。瞬間、付き人さんたちはまるで敵を察知したプリーリードッグのように一斉に動きを止めた。かと思うと怒涛の勢いで散らばっていたものを隣の部屋へ移動させ始める。

え、何？ 私はどうすればいいの。逃げるべき？

「どうぞー」

ど、どうぞって私はまだ！

下着姿のまま、急いでベッドの下へ身を潜めた。何だか私、前にもこんなことした気がする。

「陛下、いらっしやませ」

へ、陛下？

よりによって！

必死になって身をひそめ、何とか王女がごまかしてくれることを願った。

「準備中に申し訳ありません、王女」

「やですわ、陛下。敬語なんてよそよそしい。それに私のことは、エヴェリーと呼んでくださいませ」

そんなことはいいから、追いついてください、王女！ 私は今、
とんでもないことに！

「エウエリー」

「はい、陛下」

お願い、早く！

「んっ……」

そんな甘い声の後、ドサツと重みでベッドの軋む音がした。あれ、
これ、ま……まさか。

「あっ、陛下」

人の上で何しようとしてるんですかっ！

「は……あっ」

衣のすれるような音に、顔が痛いほど熱くなった。何てこと。こ
んな。王女様ああ！

「どうなさったの、陛下」

「いや、すまない。顔を見に来るだけのつもりだったんだ」

王は急にベッドから下り、彼の足元が見えた。それにホッと胸を
なで下ろす。

「よいではありませんの。食事会までにはまだお時間もありませんし、

それに……夫婦になるのですから」

シユルリと紐のほどけるような音がして、パサツとベッドの下へ何か落とされた。

シルクのローブ？

それじゃあ王女は今……。

「陛下。ずっとこの日を待ち望んでおりましたわ」

王を追うようにベッドから下りた王女の、細くて白い素足が目に映った。近づきそのまま抱きつく。そして背伸びをする王女の足の裏が見える。

「ん……っ」

「ん、エヴェリー」

何でこんな。せっかく帰ってもらおうチャンスだったのに、わざわざ引き止めてまで。

何かの嫌がらせ？

「陛下っ」

なぜかしら。さつきからとつても体が熱い。もちろんあの二人の甘い時間に酷く緊張しているけど、それ以上に傍のベッドの足にでも恋をしているみたいにうっとりとした心地になる。

もしかして、レオ様が言っていたフェロモンのせいかしら。女性にも効くぐらい強力になってるってこと？

王女の王への強い想いの表れなのかもしれない。

”離したくない”っていう。

「ん、申し訳ないが、エヴェリー」

それでも王は動じず、彼女の体を引き離した。普段はあんな感じでも、やっぱりとても強靱な精神をしてるんだろう。あんなキレイな女性に裸で抱きつかれて、あっさりと冷静に返せるもの？

「私も準備が」

「陛下ったら、レディーに恥をかかせる気ですか？ 私、こんな格好ですよ」

「楽しみは後でじっくり」

「あら、お上手。では今夜」

はあ、助かったあ。

「それより、そこにいるのは誰だ」

え？

彼の革靴が近づいてきたかと思うと、大きな手に腕を掴まれ、乱暴に引きずり出された。

ど、どうしよう！

「一体こんなところで何……をっ」

見上げた先の王の顔が、一瞬で熟れたトマトのように赤くなった。

「そ、そそ、そ、ソフィア」

顔を真っ赤にしたまま目を見開き、黒目が落ちるように視線が下へと移る。そこは

「いやあ！」

慌てて体を隠すように片手で胸を押さえた。腕はまだ掴まれていてどこかへ隠れることもできない。

「し、し、しし下着……姿」

大量の唾液が食道へ押し込まれる音が聞こえた。

「見ないでください！」

「み、見るなど言われても、め、め、め、目が勝手に」

だったら手を離して！

「彼女のランジェリーを選んでさしあげていたのですわ。殿方の目からご覧になって、どうです？ これならきつと、レオナルド公爵様もお喜びになると思いませんこと」

王女はローブを羽織りながら少しイジワルそうに微笑んだ。

どうしてそこでレオ様が出るの？ それにこれは王女が陛下のために選んでいたんじゃない……。

腕を掴む力が強くなり彼を見上げた。頬を僅かに震わせ、憎しみを込めたように私を見る。瞳孔が萎縮して瞳が少し赤みを帯び始めていた。

「ほう、レオに見せるのか」

「こ、これは……」

「見損なつたな。そんな尻軽女のような格好を、喜ぶ男がいるのも思っているのか」

尻軽、女……。

「わ、私は」

「いつそのこと裸で抱きつければいいんじゃないのか？ ん？ どうなんだ！ こんな似合いもせん、下品な下着を見せびらかせるくらいならなァ！」

「陛下！ ひどいですわ！」

王女は庇ってくれたけど、彼の冷たい言葉は深く胸を突き刺さした。それを吐き出すかのように、瞳から熱い雫が零れ落ちる。

「申し訳、ありませんでした……っ」

「あ、そ、ソフィア、あの、すまない。言いすぎた。もう少し言葉を選ぶ ソフィア！」

涙をぬぐって、彼の手を引き剥がした。いても立ってもいらねず、そのままの格好で廊下を飛び出す。下着姿だったけど、誰かにすれ違ったかもしれないけれど、涙で周りの見えなかった私にはどうだっていいことだった。

S t

L a F i a n c e (後書き)

あとがき

陛下「廊下でソフィアとすれ違った男は全員……」(一)

次回『The Dinner Party』これだけ未練タラタラの中、婚約は……。

食事会の行われる部屋は決して大きいとはいえない。けれどもそこが特別な部屋だということはすぐに雰囲気で分かった。

温かみのある赤を基調とした幾何学模様の壁に、平たいシャンデリアが柔らかなムードを作り出す。窓はなかったけれど、美しい草原の絵画がその圧迫感を見事に取り払っていた。

中央には十数名が座れる大きな円卓が置かれ、白いテーブルクロスの上には縁が美しく彩られたお皿が並んでいる。光沢のあるコーヒー色のナプキンが立つその下では、ナイフ、フォークなどのカトラリーが寸分のずれもなく並べられていた。それがランプの明かりをちらちらと反射し、高級レストランの個室はきつとこんな感じなのねと思わせる。

一番奥には王が座るんだろう。少しお皿の柄や椅子が違う。彼から見て左にはきつと王女様が。

その向かい側にレオ様、そしてその隣に私は座らせてもらっていた。随分と王の席に近くて居心地が悪い。顔に出なければいいけれど、レオ様と二人きりで他愛もないことを話しながら考えていた。本当に限られたメンバーだからと、ベールもしていないし。

私たちのほかにまだ誰もいない部屋に、乾いたノック音が響く。

「ああ、ソフィア様ですね。はじめまして」

ウエイターさんに案内され、入ってきた男性はそう声をかけた。

肩まである紫色の髪を緩やかになびかせ、左手に革の手帳を持って歩み寄ってくるこの人。いかにも高貴で洗練されたこの雰囲気は、

確か王の補佐官の

「シユレイザー様」

椅子から立ち上がって握手を交わした。彼は快くそれに応えてくれたけれど、

「おや、私をご存知でしたか」

しまった！ 彼を初めて見たのはこっさり後宮を抜け出したときだったわ。

「あー、あの……」

人差し指を空中でむなしく回したところで、魔力のない私からは何も出ない。

「オレが話したんだよ。ね、ソフィー」

レオ様のフォローに感謝した。それに彼は「そうですか」と何度か小さく頷く。笑顔はないけれど全体的に穏やかで、“無愛想”だとか“怖い”という印象は受けなかった。

王ともレオ様とも違う、さわやかなフレグランスの香りもその印象を強めているのかもしれない。

「陛下が色々とご迷惑をかけたようで、まことに申し訳ありません」

そうきれいに整えられた眉をひそめ、頭を下げた。さらさらと芯のありそうな髪が流れる。

「あ、いえ。シュレイザー様は悪くありませんから」

とは言いつつ、ついさっき暴言を浴びせかけられたことを思い出して苦笑いした。

『見損なつたな。そんな尻軽女のような格好を、喜ぶ男がいるとでも思っているのか』

そんなこと言つて、自分はジロジロ見てたくせに。最低！

「陛下と王女様が入室されます」

数名の付き人を従えた王女様は、王にエスコートされながら天使の……いえ、ここでは魅力的な笑みのことを、“メデューサの微笑み”というらしいけれど（見た者を一瞬固まらせることから）、その形容がとても相応しい笑顔を浮かべて部屋に足を踏み入れた。何だかとっても絵になる二人。おとぎ話の王子様とお姫様みたい。

王女が座り、王が腰掛ける。

私もウエイターさんの引いてくれた椅子に座つて、なるべく王の方は見ないように努めた。とは言え目の端に映ってしまうけれど。片目をつぶるうかしら。

「なんなら陛下の頭に袋でも被せましようか」

「え？」

シュレイザーさんの言葉にハツとした。

「顔も見たくない」という表情をなさっているようなので。どうせまた何かやらかしたのでしょう。申し訳ない」

「いえ、そんな」

鋭い。おまけに少し毒舌なのかしら。ぜひとも王がやり込められている姿を見てみたいわ、と右隣に座る彼を見て思った。

それにしたって、やっぱりヴァンパイアってすごくキレイ。レオ様とシュレイザーさんに挟まれて、緊張で吐く息にも気を遣ってしまふ。

王女のお付きの人たちも皆、ここにいる三人の男性に見とれていた（私のことはたぶんカカシくらいにしかみえていない）。ときどきやけに胸が高鳴ったようになるのは、きっと彼女らのフェロモンのせいだろうと思った。男性である彼らよりも私の方がそれに酔ってしまいそう。

「失礼いたしやシ」

後ろからミイラ男さんが現れ、包帯の隙間から大きな歯を見せながら、私のグラスにワインを注ごうとした。

「ああ、ちょっと待って。ソフィーお酒大丈夫？」

「できればジュースか何か」

お酒なんて飲んだことがなかったから、そちらの方がありがたい。

「っていうわけだから持ってきて」

「お言葉でシが公爵様、こりは陛下の厳選された……」

「何か文句あんの」

「い、いへ……」

ウエイターさんはすごくすごと引っ込んで、なみなみと注がれたオレンジジュースを持ってきてくれた。周囲は王の選んだワインがいかに素晴らしいかを延々と褒め称えている。それを聞いていると少

し不安な気持ちになった。

「あの、よかつたんですか？ 私だけこんな」

「ワインのこと？ いいの、いいの」

「と、申しますか、私が選んだのですが」

「え？」

シュレイザーさんの小声で発せられた言葉に瞠目した。

王はまるで自分で選んだように話しているけれど、補佐官ってそういう仕事までするんだ。それとも王が彼に押し付けているだけかしら。

「シュレイザー様はずっと陛下の補佐を？」

「ええ、陛下が玉座につかれる前からずっとですね。かれこれ数百年になるでしょうか」

「大変そうですね」

それにシュレイザーさんはとても乾いた笑いをした。きっと相当な目に遭ってるのね。

「ソフィア様はこちらの生活に慣れましたか。まあ勝手に連れて来ておいて、なんですが」

「ふふ、そうですね。ですが楽しいこともあります」

「というと？」

「友人もできましたし、授業も物珍しくて。先生も優しく面白く面白く方ばかりです」

それにシュレイザーさんは小さく笑った。

「なるほど。あそこは随分と個性派揃いですからね。ご存知ですか、

魔法陣学のゾンビの教師は体の中に防腐剤を入れているんですよ」

「ええ、本当ですか？」

「もちろん。この間、新しいものに換え忘れたものだから腐って足がもげたと、慌てて医務室へ修理に行っておりましたから。そのあいだにも色々なものがとれて、それはもう廊下は大変な様になっておりました」

想像するとすごく可笑しい。シュレイザーさんって、お堅い見かけによらず楽しい人だわ。

「それに」

「おおおっほん！」

わざとらしい咳払いにそちらを見やると、王がものすごく鋭い目で睨みつけていた。私ではなく、シュレイザーさんみただけだ。

「はいはい」

彼はそれが何を意図しているのか分かったのか、小さくそう返事した。

「どづかなさったんですか」

「まあくだらないことです。お気になさらず」

お気になさらずと言われても。チラッと王の方を見ると不意に目が合ってしまった。彼は一瞬頬を赤く染めたけれど、さっきの王女の部屋でのことを気にしているのか、叱られた犬のような申し訳なさそうな顔をした。

けど私は、もううんざりとはかりに目をそらす。

「ねえ、ソフィアさん。レオナルド公爵様とはいつご結婚を？」
「え？」

王女様の問いかけに、オードブルのトマトを食べようとした手を止めた。

「だってソフィアさんは後宮の女性なのでしょう？ それなのにこの場にいるということは……違いまして？」
「えっと……」

戸惑いにレオ様を見つめた。どう返答すれば。

「オレはいつでもいいよ。兄上の許可もあるし」

「まあ、ステキですわ！ ねえ陛下」

「あ、ああ」

王はうろたえたように俯いた。

“許可”？ どういうこと。

「あの、レオ様」

「マネ貝のフューネ蒸しでシ。こちらの専用ペンチで割ってお召し上がりくだシ」

それを遮るように次なる料理が運び込まれた。

「どうかした？」

「あ、いえ」

気になるけれど、ここで聞くべきことじゃないわ。

「変わった貝ですね」

「ころころとまるで黒い球のような貝。」

「美味しいんだけど、殻がちょっと固いんだ。だからこうやって「なるほど」」

軽い音とともにいとも簡単に真つ二つにしてみせた。中からはアツアツのグラタンがほかほかと湯気を出している。おいしそう！レオ様をまね、さつそく同じように挟んでグリップを握った。

……って何これ！ ちよつとどころじゃなくてもものすごく固い！ えいと思いい切り力を入れると、スポンと飛んで王の額に直撃してしまった。

「……あ」

レオ様とシュレイザーさんは笑いを堪えていたけれど、周囲は凍りつき、私は真つ白になった。

「あ、あの、すみません」

額から垂れる蒸し汁をウエイターさんが必死にふき取る。

ど、どうしよう。

とりあえず愛想笑いをすると、王の怒りを湛えた視線が突き刺さった。

「まあ陛下、大変ですわ」

王女様はウエイターさんを弾き飛ばし（ちよつと可哀想）、王の顔を薄いピンク色のハンカチでぬぐった。というか、すでにウエイ

ターさんがきれいにし終わったあとだけねど。

「さすがは王女。お優しく、気が利く」

「まあ、そんな。手助けの必要な方へ当然のことをしたまでですわ」「そうですか、当然のことを……」

あからさまに私を見つめ、存分に嫌味のこもった視線を送りつけた。

「ソフィア、オレたちだけだったら構わないけど、こんな席だから一応形だけでも謝っておいて。心はこもってなくていいから、ねえ、シュレイザー」

「ええ。何なら頭を下げながら罵っていたいただいても結構です」

レオ様は何事もなかったかのようにマネ貝を食べ、シュレイザーさんは私の分も割ってくれている。ありがとうございます。ではなく、そんな感じでいいの？

おそろおそろ王に近づき、足元にひざまずいた。

「あの、陛下。どうか非礼をお許してください」

額の一点が赤くなっていて、さすがに申し訳なく思った。顔を直視できず俯く。

王は足元で屈む私に顔を近づけると、「私の方こそ、さっきはすまなかった」と囁いた。

「あんなことを言っつもりではなかったんだ。その、君がレオに見せるなどと言っから……」

「えっ？」

「あ、いや！ あれは言いすぎだった。本当にすまない」

とても申し訳なさそうにする王に、さっきの貝の件で相殺に
しまおうかなと思った。王に公の席で恥をかかせてしまったし、さ
つきからずつと悲しげに目を伏せている。

「陛下」

「しかしやはり焼く前のパンのようになかなかどうして白く柔らか
そうで、だがその実、焼きたてのそのようにそそられる。大き
さ的にも、くっ完全に私好みではないか」

どういう意味？ 俯く王の視線を辿ると、彼はものすごく真剣な
顔で私……の胸元を凝視していた。ドレスは襟ぐりが大きく開い
ていたし、コルセットでかなり寄せて上げられていた。そこへ足元
でひざまずいたから

この変態！ さっきのは心の声？ 外に漏れ出てるじゃない！
私の視線に気づいたのか、王は何度か咳払いをしてみんなに聞こ
えるような声で、

「ま、まあというわけだ。レディーの失態は笑って許すのが紳士だ
からな」
「どうも」

紳士があからさまに胸を見ますか。あんな心の声を外に漏らしま
すか！ 全く。

「まあ、さすがですわ、陛下」
「それほどでもない」

頬にキスされ、心なしか嬉しそうに見えた。そんなに仲良しなら、
また王女様を見せてもらえばいいのに。ああ、私がそんなこと言

わなくなつたつて今夜あの続きを

つて、な、何の想像してるのかしら！ だめだめ！

「申し訳ありませんでした。あとで私の方から仕返しをしておきます」

席についたときのシュレイザーさんの言葉が心強かった。彼から「どうぞ」とお皿が目の前に置かれる。

き、キレイ！ 殻の半分になったマネ貝が美しい花の形に整然と並んでいた。彼の仕事ぶりが垣間見えるよう。

「ねえ、ソフィアさん」

「は、はい」

口に放り込んだマネ貝を急いで飲み込む。クリーミーでとっても美味しい。

「ソフィアさんは、レオナルド公爵様のどのようなところが好きですか？」

「ど、どのような……って」

そう尋ねられ、レオ様としばし見つめ合ってしまった、恥ずかしさに顔が火照った。

「あ、それオレも聞きたいなあ。教えてよ」

光沢のある唇を優しく上げる、その笑顔に心臓がドキツとした。

“好き”というかステキだと思うところでもいいのかな。

「えっと、私は」

わくわくしているような表情のレオ様を見つめながら口を開いた。キャンドルの炎にゆれる青い瞳に、胸がとても高鳴る。

「私はレオ様の」

「おい、別のワインを持ってきてくれ！ こんなもの、料理に合わないだろうが！」

突然王が大きな声を出し、ウェイターさんを叱りつけた。それにソムリエが慌てて走ってきて、別のワインをあけて注ぐ。

「その、レオ様」

「この部屋暑いぞ！ 何とかしろ！」

「私」

「ナイフを落とした！ 早く別のものを持って来んか！」

今わざと落としてなかった？

「ちょっと兄上、うるさい。後でじっくり聞かせてね」

チラッと見た王は、どこか泣き出しそうに表情を歪めた。王女と結婚するくせに、何なのかしら一体。

「エヴェリー、今夜」

王は突然、まるであてつけるかのようにそう言い放った。

「はい、陛下」

彼女がそっと私に微笑む。

どうして。彼女の意図が掴めない。

「料理どうだった？」

「すつごく美味しかったです。私の舌も躍って喜んでました」

それにレオ様は「その表現いいね」と笑ってくれた。

お城のバルコニーで、少し夜風に当たっていた。目の前に広がる
広大な庭を二人で眺める。皆それぞれ部屋に帰ったんだろう。王と
女王様は同じ部屋かしら。

何を気にしてるの？ あんな人のこと。確かに私だって彼を傷つ
けてしまったけど、でも今は女王様と結婚するらしいし。

それに処刑の時だって、この間ペリュトンに襲われたときだって、
助けてくれたのはレオ様だわ。覚えてはいけないけれど、ドレスは血
が飛んで赤くなっていた。私を助けるためにひどいケガまでしたん
だわ。レオ様は“大丈夫だ”と言っていたけれど。

「あの、レオ様。この間は本当にありがとうございました。もう、
なんとお礼をすればいいか」

ふと見上げると、なぜか彼は物悲しい表情をしていた。それがま
た妙にキレイだけれど。不意に目が合ってそらす暇もなかった。

「これはやっぱり君から」

レオ様から手渡されたのは、王から貰った指輪だった。レオ様か
ら返すって言うてたのに。

「あの……」

「オレね。オレが今までこうやって自由に生きられたのは、兄上のおかげだって思ってるんだ。兄上が重責の全てを、弱音も吐かず一人で負ってくれているからだって。だから嫌なんだ、また兄上の心を犠牲にして何かを得るなんて」

レオ様はとても辛そうに胸を押さえた。

「オレは君をすごく好きだけど、でもそれなら兄上と対等の立場で競って君を得たい。だからもう一度兄上を見てあげて。もう一度だけ、話を聞いてあげて」

「それは、どういうことですか」

彼は一体、何を言わんとしているんだろう。

彼はとても穏やかに、けれどとても力強く微笑んだ。ワケが分からないのに、それがとても胸を締めつける。

「今言えるのはそうだな、アンフェアなことは嫌いつてことだけかな」

「レオ様……」

そのとき、一瞬だけ風のうねりが止んだ。

「だからさ、ソフィア」

「あの、ソフィアさん？」

そこで誰かに声をかけられた。レオ様は胸ポケットから出しかけた紙をスツとしまう。何だろう？

「王女様」

振り返ると、彼女が気まずそうな顔をして俯き加減でそこに佇んでいた。

「申し訳ありません、公爵様。彼女をお借りしても？」
「もちろん。彼女がいいのなら」

レオ様のことは少し気になったけれど、王女様のあまりに怯えたような表情に頷いた。彼女は腕を引いて廊下まで出て周囲を見渡すと声を落とす。

「今夜部屋に陛下がおいでになるの。でもいざとなると急に怖くなってしまう。お願い、かわってくださらない？」

「か、かわるって！ でも」

「お願い。あなたしか頼める方がいませんの。この通りですわ！」
バルコニーに立つだけでいいからと懇願する彼女は、そのガラスのような瞳からはらはらと宝石のような涙を流した。それに、それ以上の拒否をすることはできなかった。

「大丈夫よね」

声の中に留めることができるという、シャボン玉のような球体を持って王を待った。

別の女性と結婚しようという彼と王女の逢瀬を、こうして身代わりに迎えるのはとても複雑な心境だった。少し肌寒くて、部屋に置いてあったストールを肩にかける。

レオ様はああ言ったけれど、どうすればいいんだろう。だって王は彼女と

何を感傷に浸っているの。あの人のことなんてどうだっていいじゃない。

けれど胸の中がとてもモヤモヤとする。自分の気持ちさえはつきりとは言い表せなくて。

情けなさのため息がこぼれた。

「エヴェリー」

き、き、来たっ！ 扉を閉めると、王はゆっくりとバルコニーへ近づいてくる。急いでストールを頭から被ると、手の中の球体を強く握った。それがパチンと弾ける。

『申し訳ありません、陛下。今夜は少し疲れてしまって。どうかこのままお帰りくださいませ』

彼女の込めた声が風に乗って流れ出す。これでどうか

「いえ、王女。少し話があるのです。明日のパーティーの前に、しておきたい話が」

ど、どうしよう。声はこれしか……。何とかごまかさなきゃ。

でも王は構わず窓のそばまで寄ってくる。ストールの中で必死に縮こまった。

お願い、そこで止まって！

「王女」

本当に足を止めてくれて、ホツと胸をなで下ろす。そこからならカーテンもあるし、よくこちらが見えないはず。ちらりとみた影絵の王が、そつと口を開いた。

「この婚約を、なかったことにしていただきたい」

「え？」

思わず声が出てしまったけれど、ちょうど吹いた風のざわめきで彼はそれに気づいてはいなかった。

「この婚約を、なかったことにしていただきたい」

それに言葉を失った。木々のざわめきがやけにうるさい。カーテン越しに影絵となっていた王は、後ろ手に組んで前を見据えていた。その姿がやけに泰然としていて美しい。

「八十年前」と王はその場に佇んだまま口火を切った。

「幼かったあなたに無責任な求婚をし、これほどまで長きにわたってお待たせてしまったことをおわびします」と淡々とした口調で言った。

「ですが……」

それが、急に熱を帯びたように震えだす。

「私には、心から慕う女性ができってしまったのです。片時も忘れえないほどに想う女性が」

“心から慕う女性”。それに胸がトクンと高鳴った。

王の小さな吐息が耳を掠める。

「勝手なこととは重々承知しております。ですがこのまま結婚しようとして、私は彼女を忘れることなどできない。あなたをそばに置きながら、私はきつと彼女を追い続ける。この命ある限り永遠に」

その、彼女って

ざわめいているのは、森の木々だけじゃない。

さつきまで肌寒いと思っていたのに、頭から被っていたストールを取りたくなるほどの暑さを感じた。

あの人が、そこまで忘れえぬ女性。

「ソフィア・クロース。私は彼女を愛しています、心の奥底から」

手の中の指輪を思わず握りしめた。まるで熱を帯びているかのよう
に熱い。

“愛してる”。王が、私を。

今さら予想外だなんて言わない。けれどどこかに疑いはあった。
私の勘違いなんじゃないかって、考えすぎなんじゃないかって。

はつきりとその言葉を聞いて、息が苦しくなった。何かが胸を圧
迫するかのように、熱い風を吹きつけるように、私を狂わせる。

どうしよう。どうすればいいの……！

心臓までが、パニックを起こしたかのように暴れていた。

「ですが私は彼女を傷つけてしまう。愛しさのあまり、か細い腕を
強く引いて滑らかな肌を立ててしまう。彼女はそれをとても痛
がるのに、私はいつも血が滴って初めて己の愚かさに気づく。なら
ばいっそ、私の手の届かないところへ行ってくれればと。他に彼女
を優しく包んでくれる存在の元へ」

『兄上の許可もあるし』

まさか、それで私とレオ様を結婚させようとしたの？

「彼女が幸せになるのなら、私は一人それを遠くから眺めるだけで
いい。彼女の微笑みが見られるのなら、私は孤独の中でも幸福を見
つけられる。これが私にできる精一杯の愛情表現で、精一杯の彼女

への償いなのです。あなたには、愚盲な考えと一笑されるでしょうが」

陛下

彼がこちらへ来ようとしている気配を感じたのに、焦ることもできなほほどに動揺した。

「申し訳ない、王女。このような私をお許しください……ソフィアっ」

バルコニーへ出てきた王は振り返った私に驚き、その拍子に滑ってしりもちをついた。

「へ、陛下！」

大きな音を立てて、成人の男性が窓枠に頭をぶつける。めったに見られる光景じゃないだろうと思った。

「あの、大丈夫ですか」

慌てて駆け寄る私とは対照的に、王自身は何が起きているのか分からないと言いたげに、両目をまん丸にして顔を赤くし、じっと私を見つめていた。冷たい冷たいと思っていた瞳が、とろけそうなほどに熱を帯びて潤んでいる。

「あ、あ、あの、いや、違、これは……」

目を泳がせ、必死に言い訳を考えているみたいだけれど、もう遅い。

手を差し伸べると、彼はおずおずとそれを掴んだ。決して私に体

重をかけることなく自力で立ち上がると、それとなくお尻の汚れをはたいていた。

自然と手が離れる。

言わなきゃ。謝らなきゃ。両手をお腹の前で重ね、ぎゅっと力を入れた。

「陛下、申し訳ありませんでした」

声の震えを必死に押し隠す。

「あなたのプロポーズを、あんな風に。なぜ信じてくれなかったのかとあなたを責めたくせに、今度は私がああなたの言葉を聞こうとしなかった。これだって、大切なものだったんですね。それを、あんな風に払い落としてしまって、本当にごめんなさい」

掌に載せた指輪をそっと差し出した。後悔の念が波のように押し寄せてくる。彼はどこか寂しそうな色を浮かべ、

「いや、君のせいではない。もっと早く、そして素直に話をするべきだった。“償うため”などと誤魔化すことなく。余計なプライドも捨てて」

指輪を手に取ると、魔術で私のネックレスにそれを通した。

「あの？」

どうして受け取らないの？

彼は小さく笑うと、おもむろに内ポケットから一本のエンピツを大事そうに取り出した。軽く振って私に見せつける。

あれは……。

見上げた彼は穏やかな風に髪を揺らして、とても温順な顔をしていた。

「覚えているか？　これ。君のガラスの靴だ」

背景に色とりどりの星を負い、少しはにかんだように笑う。それに少し胸が高鳴った。

「私に二度も拾わせ、拳を置いていつてしまったが。あの時、無理にでも君を追いかけていれば、結末はまた違ったんだろう」

そのつぶやきは彼の心を針のように刺したらしい。チクリと痛んだように眉をひそめた。

「あの月の絵を見たとき　」

王は闇夜に浮かぶ白い月を見上げた。

はからずもあの時とよく似た月。墨を流したような空に、くつきりと浮かび上がる美しき夜の住人。ヴァンパイアをより魅惑的に、そして幻想的に照らし出す。

「あまりの繊細さと美しさに震えた」

淡い月と清らかな水と涼しい風と。エンピツを紙に走らせていたあの湖のほトリでのが思い出された。狭い部屋に閉じこもっていたばかりのあの頃。見知らぬこんな地で、他人の関わるのも億劫だった。王のことにだって、微塵も興味が無かった。

『ほう、上手いものだな』

その声に手を止めてそちらを振り仰いだ。

「湖のほとりで真つ白なシートにくるまれた君を見たとき、面白そうな者がいると思った。あんなところで、あんな格好で、一体何をしているんだと」

王は私が頭から被っていたストールで、まるであの時のように顔を覆った。映画のように切り取られた世界の中で、漆黒の瞳の彼が微笑んでいる。

「皆、私を一目見ようと押し寄せているというのに、そのシートの者は私に少しも興味がないらしい。その風変わりさに一瞬だけ目を留めた。そのまま無視しようとも思ったが、エンピツを紙に走らせるその姿がやけに私の気を引いた。顔は見えなかったが、とても楽しそうだと思った」

確かに楽しかった。暗闇の世界での数少ない安らぎだったから。

「興味本位に近づいてのぞくと、その人物は手の中にもう一つの月を持っていた。余計な脚色などない、それ本来の美しさと繊細さを湛えた月を」

黒真珠のような瞳を、反射した明かりが揺らめいた。布の間から見えるその顔は、やっぱり夢と現の区別を忘れるほどに美しかった。今まで見たたことも無いほど、美しい男性だと思った。胸がざわつくほどに。

『で？ 王である私に先に名乗らせた、無礼者の君の名は？』
けれどヴァンパイアだと分かると、伸ばされる手が恐ろしくて必死に逃げた。

それが今ではこんな傍にいて、恐ろしさではない感情でもって私を震わせている。

王は手の中のエンピツを寂しげに見つめた。

「その月を見て思ったんだ。彼女の瞳に映る“私”を知りたいと」

それがまるでついこの間のことのように、もしくは数十年前の昔話をするかのように、鮮明な情熱と懐古のうら寂しさを入り混じらせていた。

微笑んではいるけれど、それが物悲しく映る。まるで己の身に降りかかるうとして、ほの暗い末路を予感しているかのように。

「私は物心がつくつかないかの内に、すでに王としての責を担っていた。王としての礼儀を教えられ、王としての道を教えられ、王としての全てを学んでいった。優秀だと囁かれるようになったそのときには、すでに分からなくなっていた。私というものが」と目蓋を閉じる。

『メリットは』

『あなた方の国を助けて、我々に一体何のメリットがあるのです』

助けて欲しいと懇願する他国の王へ、せせら笑うかのようにそう言い放っていた。助ける力はあるのに、手を貸そうとはしなかった。それがどれだけ冷淡に映ったことが。

『同じ轍は絶対に踏めないからね』

より多くの国々の平和のために下した決断が、正しいのかそれとも間違っているのか、私には分からなかった。

“あの人は、違うんだらうか”。

そう思ったけれど、彼にもきつと分からなかったんだらう。その

苦しみが、刃のようになって彼の胸を貫いていたのかも知れない。あの薄暗い廊下をまっすぐに立ち去ってゆく背中の方こうで、その痛み一人耐えていたんだろう。

王は苦しげに胸を押さえた。

「欲しいものを欲しいと言えず、したいことをすることも許されず、過つことも、泣き言を言うことも禁じられた。そうするうち何も感じず、何も求めなくなっていく。目の前に出された食事を残らず平らげ、用意された服に文句も言わず袖を通す。山積する書類にサインをして、国にとって最良の決断を下して賛美を受ける。それだけの毎日だ。時に誰かの命を奪うことがあっても、まるで事務処理のように片付けていた。何も感じず、何とも思わない……ふりをした」

『根っから冷たいザルクじゃなきや勤まらない仕事さ』

「己を装い、冷酷と称され、優秀と謳われ。いつしか何が本物で何が作られたものなのか分からなくなっていく。この感情が王のものなのか、自分のものなのか。何をしたくて、本当は何を思っているのか。喜怒哀楽さえ誰のものか分かず持てあました」

『陛下は職務を懸命にこなすうち、何か大切なものを見失ってしまったのです。そしてそれを必死になって探し求めている。ご自身でも気づかぬうちに』

それでも、彼は周囲の求める王であり続けた。苦しみを覆い隠して。

「誤解しないで欲しい。私はこの国の王であることに誇りを持って

いる。重責といえど投げ出したいなど思ったことはただの一度もない。誰かに代わってほしいと思ったこともない。だが……過ちを犯したときには素直に謝って、苦しくなったときには弱音を吐きたい。時には何でもないことに笑い、甘えるのも悪くない。愛する女性を腕に抱いて、永遠を誓い合いながら存在を確かめられたらと。そんな風に生きていけたらと願っているだけなのに、私にはそれがひどく難しいことらしい」

一体どれだけの長い時間を、この人はそうやって心を孤独にして生きてきたんだろう。どれだけの長い時間、彼の中の彼は暗闇で立ちずくんでいたんだろう。

「こんな小さなことに苦しみ続けた私は、とても滑稽で馬鹿げているだろう？」

胸を締める苦しげな笑顔に、私は何度も首を横へ振った。

誰がそれを笑うことができるというの？ こんなにも痛々しい、張り裂けそうな笑顔を浮かべている人を。何百年という月日を、自分を殺しながら生きてきたこの人を。

彼の嘆きが伝わって、息苦しさに胸が詰まった。

「あの月の絵を描いた女性なら、教えてくれる気がしたんだ。あのような絵を描く彼女の、その瞳に映る“私”が、きつと本来のそれなのだろうと信じた。リザがそうだと思っていた時、彼女は私の背が好きだと言ってくれた。民を率いるこの背が好きだと。嬉しかった。恐れることはない、王たる私もそれで”私”の一部なのだと教えてくれた気がした。乖離が消えるような、どこか楽になったような気がした。ああこれで私は”私”を取り戻せたのだと思った。だからこそ余計に、誰の言葉にも耳を傾けなくなったのかもしれん。すまない……」

“だが”と彼は続ける。

風すら彼の切ない心を表現するかのように、低く唸ってあたりを掛けてゆく。

「違和感はずつと渦巻いていた。それなのに私は、大切な女性を…
…失ってしまった“私”というものを教えてくれた女性を傷つけられたと思ひ込んで、怒りに冷静さをかなぐり捨て、真実を見抜けず君を。本当は」

何かこみ上げるものがあつたのか、一瞬声を詰まらせた。

「本当はあの時すでに、“月の絵の女性”よりも、一度会っただけの君のことが忘れられなくなっていたのに。私に近寄ろうともしない、名前も明かそうとしない、生意気なサードクラスの女を。凜とした強さとまつすぐさをその全身から感じた。彼女を前にすると、なぜだか自然と感情が溢れ出して来るんだ。“私”の感情が。わざわざ教えてもらうまでもない。ただ君を見つめているだけで自然と」

彼は悲しげに、

「だが本気の恋をしたことのなかった私は、愚かにもそれに気づかなかつた。すまない」と唇を噛みしめた。

「カフェで君に会ったとき、私は君を知っていると云っただろう」

『だがサードクラスの女。私はおそらく君を知っている』

「自分の直感を信じればよかつた。そうすれば、君を傷つけずにすんだのに。苦しめずにすんだのに」

その痛々しい物言いに、目頭が熱くなった。

「月の絵の女性」と“サードクラスの女”。後に水晶のように透き通った瞳の君が、私の求めていた女性と同一人物と分かったとき、嬉しくて、そして絶望した。何ということをしたのかと。君は許してくれると言ってくれたが、分かっているんだ。もう何をしても手遅れなのだ。私が初めて心から欲しいと思ったものは、自分自身の咎でこの手をすり抜けていってしまうのだと。だが、どうしても君に聞いて欲しいことがある」

彼が瞳を閉じると、頬をいく筋もの光の玉が零れ落ちた。そのまま、覚悟を決めたように私を見やる。
まっすぐ見つめられる、あの瞳に。

「ソフィア、誰よりも君を愛している。たとえ世界が減びようと、星が地に降り注ぐと、この身が朽ち果てようと、私は変わらず君を愛し続ける。この腕より、足より、眼より、命より……君のことが大切だ、ソフィア」

言葉に込められた激情が、私を熱くして通り過ぎていく。
心臓の鼓動を全身に感じ、呼吸さえも満足にできない。私を愛し、いと訴えてくれる、この人の全てに揺さぶられた。その濡れた瞳が、震える唇が、それを噛む白い歯が、愛し続けるとの言葉が、胸を貫いて強く締めつけた。

「陛下……」
「待ってくれ。君に拒絶されるのが怖い。叶わぬのならこのまま夢を見続けさせてくれ、頼む」

片耳を塞ぎ背中を向けた。“怖い”そう切実に訴えかける彼が少

し愛しく思えた。

彼に近づき、そつと手を握る。

思いが言葉にならず、涙に溶けて溢れ出していった。被っていたストールを肩へ落とすと、冷たい風が頬を撫でていく。

「陛下」

それにつられるように、彼はおそおすと振り返った。

もういいんです。あなたは十分に苦しんだ。

だから、どうか

こちらを見つめる王に、涙を拭いながら精一杯の笑顔を作った。

「申し遅れました、私の名前はソフィア・クローズ。無礼を働き申し訳ありません。このたびは落としたものを拾っていただき、まことにありがとうございます」

ドレスを持って膝を軽く折ると、彼の手のエンピツを手を取った。

あのときこうだったらと思うなら、もう一度やり直せばいい。

あなたならきっとできる。そうでしょう？ 陛下。

彼の瞳が小さく揺れた。目を閉じて唇を震わせる。

「なぜ君は……。私は君に、あんなことをしてしまったのに」

王は表情を崩し、掌で口元を覆った。その手は闇に怯える子供のようにはたしている。私の中にあるこの掌も。

彼は嗚咽を漏らしながら背中を丸めた。ハラハラと銀の雫が舞い落ちる。

「ソフィア。やっと君の口から名を聞いた」

嬉しそうな彼の、大きな手が頬を包む。温かくて、優しい手。熱っぽく私を見つめる彼に動揺が走った。

「あの、すみません私……」

「本当は、君が私のことを愛していると言ってくれてからと思っていたんだ。だが、すまない。もう」

「陛下っ、あの」

強い突風が吹くと共にストールが天を舞う。

満天の星空の下、流れ星と共に柔らかなキスが落ちた。

唇を優しく挟み込み何度も何度も角度を変え、そのたびに彼の熱い思いが伝わってくる。

息苦しくなりそうなほどに強い愛が。

涙が詰まって喉が震える。熱い血液が体を満たしていった。

名残惜しそうに離れていく彼に、あまりに恥ずかしくて俯いた。心臓が痛いほどに内側から打ちつけている。まともに顔を見られない。

そんな私を追いかけてくるように、王は下から押し上げるようにキスをしてきた。

「ん……あのっ」

胸を軽く押すと、あっさりと距離を置く。けれど手を重ねられ、思わず引き込まれそうなほどに情熱的なその瞳に見つめられるうち、気づけばまた柔らかく触れ合っていた。そのたびに甘い痺れが体を駆け抜けるような感覚にひどく戸惑う。

「陛下っ、もう」

王はそれに少しがっかりしたように、最後に頬にキスを落として顔を上げた。

緊張気味に庭へ体を向け、目元を乱暴に拭った。

「格好悪いな、私は。好きな女にいいところの一つも見せられない」

「今後に期待します」

「だ、だが君はレオが好きなんだろう？」

「え？」

聞きにくそうに、まごまごとしてこちらを伺う。

そういえばこの人はよく、レオ様を引き合いに出しては、好きなかとかなんとか言っていた。確かに勢いでレオ様が好きと言ったことはあるけれど、疑いもせずそう信じてたんだ。

「あの方とは一応まだお友達です。そしてこれからはあなたとも」

一瞬嬉しそうに笑った王は、それを隠すようにそっぽをむいて、

「だ、だから、なぜ友達なんだ！ 君は後宮の女性だと言ってるだろう。全く君は何度言ったら」

「では他人のままでもいいです」

「友達になろう」

王に強く手を握られ、わざとらしく上下に振られた。
変な人。

思わずお互い嘖きだしてしまった。

「ですが陛下、王女様は？」

今夜、私が代わりにここに立っていた事情を話したけれど、王は別段興味を示さなかった。私の腰に両手を回し、引き剥がそうとしても微動だにしない。それどころか髪にたくさんのキスを降らせてくすぐりたい。

彼女は長い時を待ち続けたというのに、どうするんだらう。

「さっきのように、他に好きな女性がいるからと言えはいい。そもそも八十年前の戯言など本気にするほうがどうかしている」

そう言つと頭を押さえつけ、「好きだ」と言つて唇を近づけてくる。さっき“友達になる”って言ったばかりなのに。

王の胸を押して抵抗しながら、

「戯言？ そんな簡単にプロポーズなさつたんですか？」

それに王は触れ合う寸前で動きを止めた。浮かれて思わず零れ出した言葉に、しまったと言いたげな顔をする。

全く。呆れて物も言えない。

「あ、い、いや、若気の至りというか。ま、まあそんなことより、ソフィア、な？ もう一回」

キスしようとしてくる彼から顔を背けた。

「それだけ待たせたのなら、やはり結婚すべきです」

「は？」

「八十年ですよ？ ありえませんが。彼女と結婚してください」

それにムツとしたように、

「嫌だ！ 君と結婚したい！」

「子供みたいなこと言わないでください！」

「なら王女と結婚して、子供は君との間だけに作る」

「正妻様をないがしろになさる気ですか？ 通用しませんそんなこと。それに陛下との間に子供なんて嫌です！」

「い、嫌？ 何が嫌なんだ、私たちの子が可愛くないわけがないだろっ！」

「そういう問題ではありません。とにかく早くご結婚の準備を」

王はそれに顔色を変えた。下目蓋を小さく震わせる。

「来い」

「あ、ちょっと……」

部屋の中へ連れ込まれ、柔らかなベッドへ乱暴に放り投げられた。手首をシーツに縫い付けられ、押し倒される。

「陛下！」

「本心か？」

「え？」

覆いかぶさる彼を見つめる。怒ってはいないようだった。ただ、とても寂しそうな色を漂わせている。

「君は本心から、彼女と結婚して欲しいと言っているのか？」

そのあまりに悲しげな顔に、私は二の句が継げなくなった。彼の気持ちをもう十分すぎるほどに知っているのに、私は。

「ごめんなさい。勝手なことを言いました」

おそるおそる見上げた彼はなぜか、嬉しそうに笑っていた。それに心臓が跳ねる。

「可愛い」

「え、あの……」

「可愛いと言ったんだ。君が」

ダイレクトにそんな言葉を投げかけられ、胸の鼓動は早さを増した。

「こんな、急に素直に。」

今まで色んなものを我慢して押さえつけていた感情が、湧き水のように溢れ出して私に向けられているようだと思った。不快……ではないけれど。

王は頬に軽くキスを落とすと、

「こっちへ来てくれ、見て欲しいものがある。喜んでもらえると嬉しい」

その表情は、あの月の下で見たときよりも眩しく、美しいものだった。

s t

O n c e A g a i n (後 書 ぎ)

あとがき

王の中ですずに彼女は自分のもの。

s t H i s S u b j e c t (前 書)

G W 乃 の 二 話 同 時 u p (1)

「あの」

王女様の部屋を出ると、廊下を進み、大きくて立派な扉の前へと引つ張られていった。

王は扉の前にいたカメレオンのような衛兵さん二人をアゴで追いつめた後、ノブに手をかけて開ける。腕を引いて中へ入ろうとする王に抵抗して、その場に踏みとどまった。

「どうした」

「祖父がよく言っていました。“何か見せたいものがある”と言って女性を部屋に連れ込む男性には下心があるから気をつけろと」

王はそれに小さく笑いを漏らすと、

「君のおじいさんの言っていることは至極正しい。君もそんなことを言う男の部屋には絶対に入るなよ。ただし、“私以外の”だ。おいで」

「あ、ちよつ、陛下！」

あなたが一番危ないんですけど！

その言葉を発しようとしたときには、すでに扉の中だった。

とはいえそこは部屋ではなく廊下。左右にいくつも同じような扉がある。王はその中の一つを開け、中へ引つ張った。

「あの、ちよつと」

足を踏み入れたのは、ダンス教室でも開けそうなほどに広々とし

た部屋だった。右手に大きなベッドが見えて少しどきりとする。けれども彼はそんなことを微塵も気にすることなく、

「その辺でくつろいでいてくれ。帰るなよ」と魔法をかけるかのよう
うに人差し指を向けた。

そのままそくさと部屋の中にある、また別の扉を開けて姿を消した。随分とたくさんドアがあるのね。迷子になりそう。

何を見せてくれるのかしら。

彼を待つ間、部屋に置かれた物珍しい小物を眺めていた。魔獣生態博物館から寄贈されたらしい（土台にそう書いてあった）、精巧な作りのドラゴンの標本にそつと触れてみる。

それが突然“ヒギヤアア”と大きな口を開けて叫び声を上げ、驚いて肩をビクつかせてしまった。恥ずかしさに周囲を見渡したけれど、幸い誰もいない。

危ない、危ない。下手に触るものじゃないわ。

標本はまるで生きているかのように、“クルルル”と喉をならして首を振っていた。尻尾もゆらゆらとなびかせているけれど、本当に模型……よね？

「ソファイア！」

すぐに私を呼ぶ声が聞こえた。よほど急いだのか、彼は少し息を切らしながら布で包んだ額を持って現れた。両手一杯ありそうほど大きなそれに見覚えがある。

王に初めてファーストクラスの部屋へ連れてこられたとき、壁にかかっていたものだわ。いつのまにか無くなっていたと思ったら、ここにあったんだ。

「陛下、これ」

「き、君が、欲しがっていたものだ。いや、少し違つかもしれんが」

王は緊張気味にそう言った。私、何か欲しがってたっけ？

彼はそれを魔術で壁の少し高い位置にかけると、コホンと咳払いした。パチンと指をはじくと、布は滑り落ちるように消え、隠されていた絵が露になった。

現れたそれに思わず眼を丸くする。

「ど、どうだ？」

「これは、陛下が描かれたのですか」

「ま、まあな。君のために」

王は私の反応が気になるのか、そわそわとした様子で何度も後ろ手に組んだり髪をかきあげたりを繰り返した。

「ありがとうございます」

嬉しい、すごく。

王もホッとしたように息を吐いていた。

「ところで、なぜパプリカの化け物の顔周りに、たくさん人の足が生えているのですか」

「っこりと笑う赤いその物体。こういう生き物が魔界にいるのかしら。」

王は笑顔を凍りつかせると、口をへの子に曲げて眉間にしわを寄せた。

「これはパプリカの化け物ではない!」

「あれ、す、すみません。ハバネ口でしたか？　じゃなくて毒蜘蛛？　ウニかな。あれ、何かしら……」

絵とにらめっこしながら、思いついたものを口にする。それに王はますます機嫌を損ねたらしく、腕を組んで背中を向けてしまった。これはかなり申し訳ないわ。せっかく絵をプレゼントしてもらったのに。でも一体何の絵なのやら。逆さから見るとか？　それとも騙し絵？　でなければ

「……太陽だ」と彼は諦めたように頭をかく。

「え？」

“太陽”？　どうして。

「言っただろう？　欲しいと」

私そんなこと

『太陽が欲しいです。下さいますか』

言った。私、確かにそう言ったわ！

もう一度、絵を見上げる。

「ど、どうせ私は君のように描けん！　足の生えたパプリカの化け物で悪かったな！」

王は一息にそう言い切って、拗ねたようにそっぽを向いたけれど、私は絵から眼が離せなくなった。確かに太陽には程遠いその姿だけど、にっこりと微笑むその優しい笑顔が胸を締めつけた。そっと撫でるように手を伸ばす。

「太陽でしたか」

「そうは見えんがな」

ふて腐れたようにそう言い返す。

一生懸命描いたんだろう。見たことも無いそれを、彼なりに。いつだったかミントさんが、

『そうですよ。あれだってものすごく苦手なのに、一生懸命

』

って言ってたけど、これのことだったんだ。

そう思うと、かざした手の指の隙間から、さんさんとあの金色の日差しが差し込んでくるような気がした。眩しくなって眼を細める。

「いいえ。だってこの絵は、こんなにも暖かい」

「……ま、まあ私の愛がこもっているからな」

彼は照れたように、けれど少し得意げにそう言い放った。結構乗せられやすいタイプなのかもしれない。お世辞なんて聞き飽きてるでしょうに。

けれど一つ気になることがあった。筆先がぶれて、わずかに波打っているところがあちらこちらに見受けられる。

どうして。

「どうかしたのか」

「ああ、い、いいえ」

不思議そうな顔をする王に、なんでもないと首を振った。

「その、実はまだ仕掛けがあるんだ」

王はおずおずとそう言い出すと、明かりを消した。月明かりだけが差し込む室内で、彼は掌から小さな赤い光の玉を出した。それをそつと絵の方へ飛ばす。

その玉が当たって弾けると、さざ波のように虹色の光の輪が広がって行った。それが中央に凝縮すると、まるで本物の太陽のような優しい白の光が絵から注がれる。

舞台のスポットライトを浴びたように、私の周りが明るく照らされた。

「すごい」と思わず笑顔が零れる。

王は滝の水をすくうように、その光に手を差し入れた。

「私の魔力に反応して光るように、絵の具に細工をしたんだ」

「キレイですね」

まるで本当に太陽のよう。まぶしくて、心なしか熱さえも感じられる。久しぶりの光のシャワーに暗い気分が一掃されるような、満たされるような心地がした。日の光とはこんなに気持ちの良いものだったんだと、懐かしくて、恋しくて、嬉しかった。

「ソフィア、私にはこのようなものしか与えられない。闇に住む私は、君の求める光を差し出すことができない。金も権力もあるのに、君の一番欲しいものを与えてやれない。だからその……すまない」

陛下。謝ることなんてないのに。私さえ忘れていた願いに、無理を承知で言ったあの言葉に、これほどまで真摯に向き合って不安げな表情の王を見つめた。

「陛下も「ちらへ」

彼の手を引いて、その光の輪の中へ引き入れた。少し眩しそうに眉をひそめ、ゆっくり絵を見上げた。そして小さく笑う。

「やはりもう少し絵の勉強をしておくべきだったな」

「そうですね」

「どういう意味だ」

「いいえ、別に」

王の手が背中に回る。柔らかく抱きしめられるままにしていた。

この人の香水は好き。やさしい香りがするから。

彼は髪に顔を埋め、

「絵は昔からからダメなんだ。鑑賞は好きだが」

「誰にでもできないことはありません」

「誰もそんなことは言ってくれなかったがな」

王は顔を離し、ゆっくりと両手で頬を包んだ。なんだか右手だけほんのり冷たい。

そんなことを考えているうちにキスが落ちてきた。

胸の鼓動で全身が脈打っているようだ。髪を撫でられるのもすごく心地いい。無意識に私の方からも身を寄せていた。それに応えるように背中に手を回して抱きしめてくれる。

ゆっくりと離れていく彼との間に冷気が走り、温かさを名残惜しく思った。

「抵抗しないのか？」

それにハツとした。

そうだわ、私、何を大人しく。いえ、それどころか……。顔が熱を帯びていくのを感じた。

私は恥ずかしくて仕方ないというのに、王は勝ち誇ったかのように笑っていた。無邪気な表情を見せるかと思えば、抗えないような大人の色気で魅了する。翻弄されてしまいそうで、自分の中でも焦りが込みあがってくるのを感じた。

こんなはずでは。

「こ、これはお礼です。絵の」

「ほう、そうか。礼か」

右頬を上げて不敵な笑みを浮かべる彼に、私は目をそらすことしかできなかった。

それ以上何も言わない私に小さく笑って、王は部屋の明かりを戻す。

「陛下」

そつと彼の胸に頬を寄せた。

確かめなきや……。

彼は「ソ、ソフィア？」と動揺したように体をこわばらせ、手をどうしたものかと小さく上げ下げしている。それに笑みがこぼれた。攻めるのは得意だけど、一旦防御に回らざる負えなくなると対処に困るらしい。

「抱きしめてください」

「い、いいのか？」

「はい」

「な、なら遠慮なく……」

彼がゆっくりと両腕を回すと、背中に何か当たる感覚がした。
やっぱり。

「ソフィア」

再びキスしようとする彼の双眸そまへを見上げた。

「あの腕輪をしてるんですね」

「！」

すんでのところで動きが止まる。間近でみた王の黒い瞳は、驚きに揺れていた。

筆のぶれ。少し冷たい手。背中に当たる硬い感触。それにこの人の罪悪感の強さ。

考えられるのはそれだけだった。

彼は私から離れると「何の腕輪だ」ととぼけたように返す。

「私の処刑のときに使われた、あの贖罪の腕輪です」

「何を言っている。あれならもう破壊し」

「見せてください」

彼の肘を掴んで詰め寄った。

「見せてください、陛下」

誤魔化せないと悟ったのか、王は無言で上着に手をかけるとそばのカウチへ放り投げ、シャツの袖をまくった。包帯だらけの痛々しいその腕に、唇が震える。

「「ちらへ」

一緒にカウチへ腰掛け、丁寧に巻かれた包帯をゆっくりとほどいていく。床に包帯の端が垂れてゆくたびに、自然と眉間にしわがよっていった。

「……っ」

見えたそこに思わず目を伏せた。腕輪の周りはどす黒く変色していて、今も彼の腕の中へ入り込もうとむさぼるように侵食を続けていた。

あまりにひどい有様に、胃から食べ物逆流しそうになって口を押さえた。

「すまない。やはり君には見せるべきでは」

王はカウチにかけていた上着ですぐさま腕を隠そうとした。彼の手を掴んで止める。

心を落ち着かせ、彼を見上げた。

「いつからこれを？ 私が無実だと分かったあの時からですか？」

もしかしてもう随分と長い間。寝てるときも仕事をしてるときも、私に罰を請うたときも、私を助けてくれたときも、ずっとこの痛みに耐えていたの？

不意に流れた涙を急いでぬぐった。

「己自身を戒めようと思ったただけだ。口だけの反省になど意味はない」

「だからって。レオ様を呼んできます！」

「いや、後で見せに行くから大丈夫だ」

「でも」

「せっかく君と二人きりになれたんだ。余計な邪魔者などいらん」

王は冗談めかしてそういうと、再び包帯を巻き始めた。それを手伝いながら心臓が締めつけられるのを感じていた。

「申し訳ありません」

「なぜ君が謝る」

「もっと早く気づくべきでした」

ずっと無理して笑ってただろうに。いかにもこの人がしそうなことなのに。

どうして気づかなかったんだろう。私が言わなければ、きっとこの人は腕が取れるまで……。

「陛下も早くレオ様に治してもらってくださいね。絶対ですよ」

「ああ」

私の手首の傷はまだうつすら残っていたけれど、それも治ると言われていた。人間は魔力がほとんどないから、一気に魔術で治療すると体にかなり負担がかかるらしい。ある程度は自然に任せなければならなかった。それでも感謝してもしきれない。

「彼はすごいですね。あつという間に」

そこで口を指で塞がれた。

「私といるときは、他の男の話をしないでくれ。しかもそんな笑顔

で……」

「陛下の弟さんではないですか」

手を押しのけながら首をかしげる。

「弟でもなんでも男は男だ」

「その何が問題なんです」

ひどく恨めしそうな目で私を見すえた。長い足を見せつけるかのように組み、気取ったように自分のアゴに手を当てた。

「王女はかなり美しく成長していたな。あの時はまだほんの子供だったというのに、今では十分男をひきつける魅力を兼ね備えている。もしあの時今の彼女に会っていたら、どうなっていたか分かんないや、もちろん君は別格だがな。とはいえやはり男としては。分かるだろう？」

彼女を思い出すかのように笑みを浮かべていた。確かに彼女の容姿は並大抵じゃない。どんなに著名な画家や彫刻家でも、あの美しさは表現できないんじゃないかと思った。

「ええ、私も男性だったらきつと彼女から目が離せなかったと思います。お小さいときからすごく愛らしかったのでしょうか。まさしく美少女というか。どうでしたか、陛下」

「なぜ話に乗ってくる」

「？」

無視したほうがよかったってこと？　ひとり言のつもりだったのかしら。

王はしばし何か考えていたかと思うと突然、「うっ………」と腕を

押さえて体を折った。

「へ、陛下、痛むんですか？」

何？ どうしたの？

「いや、大丈夫だ。……くっ」

眉をひそめ、苦しそくに顔を歪める。もしかして体に異常が……！

「やっぱりレオ様を！」

「ダメだ、間に合わん。あっ」

「陛下！」

どうしよう！

「君の助けが必要だ」

王は肩で息をしながら、懇願するように私を見上げた。額には汗も滲んでいる。

「何を、何をすればいいんですか？」

混乱する頭を何とか落ち着かせる。

「人間にも魔力に値するものがある。それを……私に」

「分かりました、どうすれば」

「魔術で変換するか、もしくはく、口移し、しかない」

く、口移しってそれはつまり

「頼む」

王は苦しそうにつめき声を上げた。私に魔術は使えない。なら。口移し……。

「わ、分かりま……んっ」

そう言い終わるか終わらないうちに、彼は私に飛びかかって来て性急に唇を重ねた。

突然のことに驚き、反射的にのけぞった。でもいつの間にか腰にがっちりと手が回っていて全く動けない。

「ん、ソフィア」

腕の力は緩めてくれたけれど、私が少しでも離れようとするとなまた強い力で引き寄せられる。何度も唇に吸いつき、なかなか放してくれようとしないうちに戸惑った。

「ん、あの、陛下」

「ん??」

話しかけても解放してくれず、キスの合間に言葉を紡ぐ。

「あと、んっ、どのくらい」

「いいじゃないか。そんなこと」

“ いいじゃないか ” って言われても。それに

「あの」

「ん？」
「……手」

さっきから片方の手がお尻を柔らかく滑っている。最初は遠慮がちだったのが、今では随分と大胆に動き回っていた。

「こうした方が、ん、より魔力が吸収しやすくなるんだ」

そう言って下から持ち上げるように撫でまわし、ますます動きが怪しくなっていく。

本当に……？

「ではついでにこちらからも吸収を」と王の手が胸を柔らかく包んだ瞬間、

「いや！ この変態！」

思わず体を突き放して平手打ちをしてしまった。自分でも驚くくらい素早い動作で。

「いつ……。な、何をする！」

王は頬を押さえ、涙目で反論した。

「ま、魔力に相当するものをくれたなんて言って、嘘だったんですね？ 十分元気ではありませんか！」

「別に……嘘というわけでは」と口ごもる。

「あとでレオ様に聞きます。嘘だったら」

「こ、こういうことをする輩がいるかもしれないから注意しろ、と王直々に教えてやったんじゃないか。君はどうにも警戒心が薄いから

な。それを平手打ちとは随分だ。詫びの印として続きをさせる！」
と腕を掴んで引き寄せようとした。

自業自得なのに、なんて厚かましい！

「放してください！」

「君こそ大人しくしている」

引っ張ったり引っ張られたり、高級なカウチの上でなんともチーブな小競り合いをする。

絶対、王に非があるのに、どうして私がお詫びしなきゃならないの？

「嘘をついたのは陛下ではありませんか」

「だからあれは違うと言っている」

「何が違うんですか」

「だから……別にいいだろう！」

「よくありません！」

「いいんだ！」

「……痛い」

それにハツとしたのか、王はあっさりと手を放した。私の方は王から離れようと彼の胸を強く押していたものだから、勢いあまって思い切り突き飛ばしてしまった。

バランスを崩した王が、頭から床に倒れこむ。かなり大きな音がした。

「へ、陛下、すみません！ 大丈夫ですか？」

「なぜ私ばかりこんな」

うつろな目で天井を見上げて王はポツリとそう言った。

その悲嘆にくれる様がなぜかとても可笑しくて、私も絨毯へ腰を下ろして必死に笑いを堪えた。

「ソフィー、何がおかしい」と恨めしそうに見つめられる。

「いいえ、陛下。何も」

「ああ、ま、また魔力が！」

「もう騙されません」

頭を抱えていた彼は、やれやれと上半身を起こした。カウチに肘をつき、どこか決意に満ちたような力強い瞳で私を見つめる。

「ほう、ならば今度はもっと上等な手段を考えるとしよう。君が私を本気で愛していると言ってくれのような、素晴らしい手段を。覚悟している」

黒真珠のような瞳が挑戦的に色めく。

トクンと胸が鳴ったのには、何か別の理由がある。

決してこの人のイジワルそんな笑みや、言葉に揺り動かされたわけじゃないわ。絶対……。

「それより陛下、今後私の半径三フィート（約九〇センチメートル）以内には立ち入らないでくださいね」

そう告げた瞬間、彼は肘をついたままの格好で背中から床へ沈んだ。

s t . ? ? ? ?

H i s S u n l i g h t (後書き)

あとがき

引き続き『The Blood Law』ヴァンパイアたちの国に

亀裂が……？

s t . ?

The Blood Law (前書き)

GWなので二話同時upp(2)

あとがきにブラッド法全文掲載(読まなくても支障はありません)

「ついてこないください！」

「仕方ないだろう。君が半径三フィート以内には立ち入るなと言うから、エスコートができるのではないか」

ニユンペー国との懇親会、という名目の王の婚前パーティーが開かれる会場へ歩を進めていた。

それなのにそのパーティーの主役が、ずっと私の後を、まるで磁石のようについてくる。律儀に三フィートルールを守ってくれているのはありがたいけれど、とにかく目立っていた。

「王女様には事情を話されたのですか？」

重いスカートを持ち上げ、なるべく早足で廊下を進む。ただでさえ歩きづらいピンヒールが長い毛の絨毯に埋まってバランスが悪い。オマケにベールが顔に張りついてくるし。

それでも、後ろから王が付いてくるなんていう（おまけに衛兵さんたちまで）この状況を何とかしたかった。

足の長さが違うからなのか、余裕でついてくる王は私の問いに「ウツ」と声を詰まらせる。

「どうするおつもりなのです。もうパーティーは始まりますよ」

立ち止まって振り返った。ぶつかりそうなほどに距離が近かったので、一歩後ずさる。一瞬嬉しそうな顔をした王は、すぐに拗ねたように口を軽く尖らせた。

「懇親会の名目に実質が伴っただけのことだ。王女にはパーティー

中に折を見て話すから、君は何も心配する必要はない」

別に心配なんてしていない。でもパーティー中に話すなんて、あんまりじゃないかしら。

「ところでソフィア」

王が嬉しそうに近づいてきた分だけ、眉間にしわを寄せて後ずさる。それに王はわざとらしく、盛大なため息をついた。

「三フィートルはいつまで有効なんだ。もうそろそろいいだろう。ん？ 嘘をついたことは謝る」

「イヤらしいことをする人にはずっと有効です」

「ははは、あの程度でイヤらしいとは可愛いことを言う」

なんならもつとスゴいことを教えてやるつか、なんて全く反省の色が見えないこと言うてのける王に、怒りを抑えるので精一杯だった。

「さ、こっちへ。つまづいて転んだら大変だ」と手を差し伸べる。

もう、誰か助けて！

「陛下」

穏やかな湖に舞い落ちる朝露のような、透明感のある静かな声が聞こえた。王はイタズラが見つかった子供のようにビクリとし、気まずそうに表情をゆがめた。

「シユ、シュレイザー」

まるで大海を統べるポセイドンのごとき威厳をまとい、シュレイザーさんは腕を組んで佇んでいた。ライラック色の瞳で王を無表情に見つめる。

王は嫌そうな顔をしていたけれど、私はホツとして笑みをこぼした。

「王女はいかがされたのです。この期に及んで別の女性の尻……失礼、背中ばかり追いかけているとは。呆れて物も言えません」

「こ、これには訳がある。なあソフィア」

「ありません」

それに王は「くっ」と声を詰まらせる。

「“無い” そうですね？」

「ソフィア！ アレだけ愛し合っただけなのに！」

「ご、誤解を招くようなこと言わないでください！」

何を言うのかしら、全く。

「とにかく。陛下、今すぐに王女を迎えに行ってください」

「しかし」

「しかし、何でしょう」とすこまね、王は「分かった」と肩を落とした。

チラチラと後ろを振り返りながら、何とも元気がなさそうにその場を立ち去っていく。あわよくば“仕方ないですね、もういいですよ”なんて声を期待したのかもしれないけれど、あいにく誰もそんなことを言うつもりはない。

早く行けとばかりに、私もシュレイザーさんも視線で王の背中を

押し続けた。

「全く。では参りましょう」

王の姿がやっと（本当にやっとのこと）見えなくなると、シュレイザーさんはスツと腕を差し出した。

「シュレイザー様がエスコートを？」

何だか嬉しい。

「紳士の嗜みですから」

めったに見られない彼の微笑みに、何だか照れくさいようなムズムズとした感覚が駆け巡った。会って間もないけれど、どうやら心を許してくれているらしい。

おずおずと腕に手を乗せた。

彼の申し出はなぜかすんなりと飲み込める。ほとんど話したことのない彼が、私にとつても信の置ける人だからなのか、それとも他人を操るのが上手い人だからなのかは分からない。

ただ彼にエスコートされると、とても凜とした心地になった。

「あれ、珍しい組み合わせだね」

会場の入り口で私を待っていてくれたらしいレオ様が、私たちの登場を笑って迎えてくれた。レオ様に手を差し出され、シュレイザーさんから離れてその手を取る。

「では私は色々しなければならぬことがあるので、これで」

私たちそれぞれに会釈すると、彼はどこからか黒革の手帳を取り出して広げ、颯爽と会場の中へと消えていった。せつかくのパーティーだというのに、何だか慌しい。

「お忙しいのですね、国王の補佐官というのは」

庭に面したガラス窓の前に、トロトロと湧き出るチョコレートフアウンテンを見つけた。溢れんばかりの光沢を放つ甘いそれに興味を覚え、近寄って眺める。

「それもあるけど、シュレイザーは仕事の虫だからね」とレオ様はそばにあった銀色のピックを手にとると、山のように積み上げられていたマシユマロを一つ突き刺した。

「ご結婚はなさっていないのですか？」

見た目はとっても若いけれど、なんせヴァンパイア。もう随分と長いこと生きているはず。それで何をするのかしら、とレオ様の手元を見ながらそう尋ねた。

「恋人はどうか知らないけど、シュレイザーも独身だよ。まあ、オレたちは色々事情があつてね。ブラッド法がその最たるものだけど」

レオ様はそれをくるりと回しながらチョコレートをつける、私に「どうぞ」と手渡ししてくれた。ああ、そういう食べ方をするのね。すげえ。

お礼を言つて受け取り、

「“ブラッド法”？」

「あれ、習わなかった？」

習った……っけ。どうだったかな。

いくら記憶を辿っても、その言葉は一向に顔を出す気配がない。ああ、そういえばリザに面会しに行ったときにシェイラさんが言っていたっけ。

『お前も気いつけるよ？ 異性間の吸血行為ってのは、同性間と違ってすげえ快感が伴うんだ。“ブラッド法”があるとはいえ、お前もボーツとしてると、いつこの優しそうな面した公爵様にガブツてやられるか分かんねえぜ？』

チラリと青い瞳の彼を見上げる。彼はニコリと返してくれたけど、まさか、そんな……ね。

「ブラッド法。正式名称は“人間保護目的による規定外吸血行為禁止法”なんて長ったらしいものなんだけど」

レオ様の話によると、ブラッド法は今から二百七十三年前、魔暦一万九千六百三年に先代の王が制定したものらしい。この法律によってヴァンパイアは自由に人間の血を吸うことを禁じられ、人数も量もきっちり定めらるることになった。不正をしても検査で見つからずしてしまっ。

血をもらう場合も必ず同意書へのサインが必要で、それを破れば処罰の対象になるらしい。配偶者の場合は同意を得る必要がないらしいけれど。

「私が言うのもなんですが、とても厳しいものですね」

とろけそうになっていた、キラキラと光るブラウンのマッシュマロを一口で食べた。チョコレートの甘さがとっても上品で口の中だと

るけるように広がっていく。チョコレートを食べる幸福感と恋の幸せはとてもよく似ているらしいけれど、確かに自然と嬉しさがこみ上げてきた。

「今度は自分でやってごらん」と促され、イチゴやキウイやバナナやら、宝石のように光るフルーツを品定めする。

「君の言う通り厳しいよ。けどかつてヴァンパイアにとって“獲物”という存在でしかなかった人間を自分たちの生活圈へ取り入れていくうちに、徐々に関係が変わっていったんだ。単なる“獲物”から“配偶者”へとね。ほら、君だってそのために連れてこられた」

確かにそう。王の配偶者だけは嫌だけど。

胸やお尻を触られたことが甦り、その嫌悪感を振り払うかのよう
にイチゴを突き刺した。

「だからこちらも、子孫繁栄の良きパートナーとして人間に敬意を払うべきだって意見が上がってね。ブラッド法はその考えの元できた法律なんだ。あれがあるから、オレたちは理性で欲求を抑えている」

チョコレートにイチゴを浸そうとして止めた。

“理性で欲求を抑える”ということは

「本当は血が欲しい、ということですか？」

その瞬間、レオ様の眼にまるで獣のような香りが生まれた。瞳孔が小さくなっていき、蛇に睨まれた蛙のような心地になる。

あれ、もしかして私、地雷踏んだ……？

彼は後ろから腰に手を回してそっと耳元に唇をよせ、ささやくように、

「欲しいよ……本当はすぐ」

とても官能的な響きにピックを持つ手がかすかに震えた。

「特に愛する女性の血にはすっごく興味がある。どんな味がするのか、どんな香りがするのか」

鼓膜が心地よく震え、互いの髪が触れ合う感触に緊張して動けなかった。お腹に回っていた手が徐々に上がってくる。熱い吐息が耳の奥へと入り込んでいった。

「好きであればあるほど、血を飲んだ時の気持ちよさが増すからね。一生誰の血も飲まないでいられるヴァンパイアなんていない」

牙が柔らかく首筋に押し当てられるのが分かった。刺さってはいないけれど、どこか快感を掻き立てられる直前のような、奇妙な疼きに動けなくなった。そのまま突き立てられたら、一体どうなってしまうんだろう。

周囲はたくさん的人在りとても騒がしいはずなのに、まるで闇の中で二人きりになったように感じた。

「ねえ、君の血をくれる？」

ゾクリとした感覚が背中を走ったかと思うと、熱い舌が首筋を這い上がった。

まさか本気で？

「あの……っ」

「もう我慢できない」

ハツとしたときには、彼は口の端から赤みを帯びた液体を滴らせていた。

「焦って食べるからですよ」

チョコレートのおそばにおいてあった紙ナプキンで、レオ様の唇を濡らすイチゴの汁を拭った。

彼はあっさり体を離すと、

「ありがとう。てな具合に、これに強く反発している貴族は潜在的に多くいる。そんなやつらを少しでも黙らせるために、兄上やオレや特に近い者は自発的に長い禁欲生活を送ってるんだ。“王は妻の血すらもらっていない”ってアピールするためだね」

彼らが王女様たちのフェロモンに打ち勝つ精神力の源が分かった気がする。私にはこんなことができるだろうか。欲しくて仕方ないものを、無理矢理に押し込めるなんてこと。

「まあ今年は建国してちょうど九千年ってこともあるし、兄上もそろそろ結婚くらいは許されるかな。色々ゴタゴタはあったにせよいい機会だしね」

き、九千年！ そんなに歴史があるんだとひっそり驚いた。

確かヴァンパイアは不老不死ではなく、九百年ほどをかけてゆっくり年を取って寿命を迎えるのだと習った。そのあいだ病気なんかで死ぬことはほとんどないらしい。

やっぱり人間界とはスケールが違うわ。

「そっぴいえば、レオ様っておいつつなんですか？」

「オレ？ オレは兄上の三つ下。今年で二百七十五だよ」

お、おじいちゃんのおじいちゃんより年上だわ。もはや歴史の偉人レベルかもしれない。ヴァンパイアの中ではすごく若いほうなんだろうけれど。

レオ様の三つ上ということは、私と陛下の歳の差は……。

あれ、ど、どうしてそこである人が出てくるの。関係ないじゃない！

「どうかした？」と首をかしげるレオ様になんでもありませんときこちなく首を振った。

「それで結婚したら、やっぱり皆さん奥さんの血を？」

「まあ、そうだね。サルタイアー・サイクルもあるから」

「サルタイアー・サイクル」？

「ん？ ああ、ほら、数字の十って？って書くだろう？」とレオ様は空でそれを書く。？を“斜め十字”と見て“サルタイアー”と呼んでいるらしい。

「十年、つまりヴァンパイアが血を飲まなくても正常でいられる期間のことだよ。その間に一度も血を飲まなければ、血への強い枯渴感を覚え、ヴァンパイアとしての本能に全てを支配されてしまう。

そうなれば本人も制御不能の大変な状態になるからね。その前には、絶対誰かに血をもらわなきゃ。結婚しているなら妻のをもらっし、オレみたいな独身だと人間界に行って少し分けてもらう。その場合は一回に限って同意がいららないんだ」

「そうなんですか」

人間界にも……行くんだ。

って私、何にも知らないじゃない！ このために学校があるって

いうのに、今まで何してたんだろっ、情けない。

「でもまあオレが最後に飲んだのは五年ぐらい前だし、兄上も三年くらいは大丈夫だからしばらくは安心してて」

安心、していいのかな。

ヴァンパイアにとって血への欲望は、禁煙中のヘビースモーカーの心情に似ているのかも知れないと思った。普段は我慢できても、目の前にちらつかされるとどうなるか。

当たり前といえばそうよね。吸血鬼ヴァンパイアなんだから、人間とは違う。

「あ、それと一つ言っておいてあげるね」と私の肩に手を置いて耳に唇をよせる。

「血の話ってね、オレたちヴァンパイアにとっては性欲を駆り立てられる話題だから、他の男の前でしない方がいいよ」と少しイジワルそうに笑った。

う、うそ！ 私、思い切り普通に受け答えを。しかもそれを男性に指摘されるなんて……！

「はあ……」と穴があったら入りたい心地で俯いた。

「おやおや、公爵殿。お久しぶりです」

まるでバリトン歌手のような聞き心地のよい声に顔を上げた瞬間、おそろしさに鳥肌が立った。

グラスを手にレオ様に声をかけたのは、髪を後ろへきつちりと整えた紳士的なおじ様だった。その瞳はどこか他人を探るような鋭さを湛えていたけれど、その人ではなく、その後ろに控える若い男性にゾッと戦慄を覚えた。

彫刻のような美しい顔、燃えるように赤い髪は短く切りそろえられ、狼のような金色の鋭い瞳におぞましい光を宿し、ベールの向この私をジッと捉えている。形のよい唇から見える牙が、今にも首筋に突き立てられそうな感覚に足が震えた。

「グレイドー、お前も挨拶を」

スツと視線が外された途端、腰が抜けそうなほどに力が抜けた。何とか足に力を入れなおして踏みとどまる。何、あの人。何なの？ 二、三会話を交わすと、おじ様が私を上から下まで品定めするかのようには眺めた。挨拶をしなきゃと思うのに、体が凍ってしまったかのように動かない。

「そちらはよもや公爵様なの？」

「彼女？ 彼女はね……」

レオ様の手が背中に回り、後ずさるうとする私の意図に反し、ぐいと彼らの前に押し出された。

……どうして？

予想外の行動に驚いて、助けを乞うように彼を見上げた。けれど彼はただいつものように柔らかく笑っているだけ。いいえ、目が笑ってない。

この人は誰？ いつものレオ様じゃない。明るくて、優しい彼じゃない。

まるでサーカスへ売られたさらし者の気分だった。三人の好奇と嘲笑の入り混じった冷たい視線がやりのように降り注がれる。

やめて。レオ様

「彼女はソ」

「私の遠縁にあたる女性だ」

突然、目の前に大きな壁が立ちふさがった。

「陛下、下」

王はレオ様の手を振り払って私を庇うように肩を抱く。話しかけてきた二人は胸に手を当てて頭を下げた。

抱きしめられながら、彼の温かさに凍っていた体が溶け出すような心地がした。思わずその身に体をすりよせる。それに応えるように腕の力を強めてくれた。

「床に伏せ気味の病弱な方でな。お疲れのようだから、これで」

王に連れられながらそっと見たレオ様は、とても鋭い表情で王を睨み据えていた。

どうして？

訳の分からないまま、ぐいぐいと王に手を引かれていった。

あとがき

新キヤラ、グレイ登場。

以下ブラッド法全文

【人間保護目的による規定外吸血行為禁止法】（国内法全集より抜粋）

第1章 総則

第1条（目的）

この法律は、我々ヴァンパイアの配偶者となり子孫繁栄の手助けをなしてきた人間への敬意を表すものであり、そのような彼らの生命や尊厳を最大限に尊重することを目的とし、むやみな吸血行為による人間の生命の奪取およびその体へかかる負担軽減、さらにその意思にのつとらない非人間化を防ぐことを目的とするものである。

第2条（吸血行為）

この法律で吸血行為とは、首へ直接牙を立てての吸血行為のみならず、医療器具等を用いて血液採取し、それを服する行為をも指す。如何なる方法、分量によらず生きた人間の血を口にした時点をもって吸血行為をしたと見なされる。

第3条（罰則）

この法律に違反した場合、第4章にあげられる罰則が適用される。これは同時にサルタイアー・サイクル内に一度医師の血液成分検査を受けることの義務を付与し、全てヴァンパイアは違反の有無を調査することに同意するものと見なされるものである。

第2章（許可されない吸血行為）

第1条（禁止項目）

次に掲げる吸血行為をしてはならない。

1．サルタイアー・サイクル期間内の二度以上の吸血。ただしこれは原則であり、以下の項目に当てはまらない場合は許される。

2．合意によらない吸血。配偶者以外へ行う場合は合意が必要。配偶者の場合は強制が許されるが望まない非人間化をさせた場合（全血液量の40%以上の吸血をした場合）は処罰対象となる。

3．複数の人間に対する吸血。たとえ合意の上であっても、サルタイアー・サイクル期間内につき三人以上に対する吸血行為は禁止される。二人までの許可は、一人の人間に対する過度の負担を避けるためである。

4．一度の大量吸血。一ヶ月の吸血量は人間の全血液量の内の12%、約400mlを限度としそれを超える量の吸血は禁止される。また、吸血後は血液補充のためクループの実を食べさせ、十分に休ませる義務を負うものとする。

第2条（例外規定）

1．サルタイアー・サイクル期間内の一度目の吸血は、配偶者以外の人間から吸血する場合でも合意は不要である。ただし大量摂取は同じく禁じられ、第1条4項に準ずるが、保護までは要求されない。

2．処刑による吸血行為。王が許可した場合、フリーエスによつてのみ行われる。この際においては第1条の規定に縛られるものではない。

3．サルタイアー・サイクルのずれによる緊急事態。変異の間の吸血は第4章の罰則が免除される。

第3章（王に対する当法の規定）

1．国王もこの法律の規定に拘束される。後宮の女子に対しては配偶者の場合の条件が適用される。

2・第2章、第1条1項から4項まで適用され、違反した場合は以下の第4章の罰則が与えられる。

第4章（違反による罰則規定）

第1条（罰金）

第2章第1条に違反し、第2条の例外項目にあてはまらない行いをした場合、20万メセブ以下の罰金に処する。

第2条（没収）

違反が二度にわたった場合、私有地4分の1から2分の1の所有権を剥奪し、国有地とする。

第3条（爵位降格）

違反が三度にわたった場合、爵位が降格され、第1条、2条が併科される。爵位降格の詳細に関しては、爵位法にのっとる。

第4条（禁錮刑）

違反が四度にわたった場合、爵位剥奪および第1条、2条の併科、および30年以下の禁錮刑に処する。

第5章（受診義務違反による罰則規定）

血液成分検査受診義務違反をした場合、第2章第1条に違反し、第2条の例外項目に当てはまらない行為をしたものと見なされ、第4章第3条から適用される。

王に庭へ引つ張り出されると、肩をつかんで大きな噴水の縁に座らされた。少し離れたところから聞こえる会場のにぎやかな話し声も、悪魔の口から流れ出る水の音でかき消される。

ドレス越しに白い石でできた噴水の冷たさが伝わった。太陽の出不いこの世界は、物質をひどく冷やす。

「陛下……」

隣に座った彼の黒い瞳と、静かな水音に混乱が落ち着いた。王はそつと私のベールを取る。

街灯の淡い光が包むここは、誰かが近づいてくればすぐに分かるし、何よりあちらこちらで男女のカップルが愛を囁きあっていたから目立つことはない。王もそう判断してここに連れてきたんだろう。

「奴らとは関わるな」

眉間にシワを寄せ、王は低い声で咎めるように、もしくは誰かに聞かれるのを恐れるかのようにそう言った。ひどく真剣な顔で、そしてどこか怯えているようにも見えた。

「奴らとは、あのお二方のことですか」

乾いた喉から、言葉を紡ぐ。もう体は震えていないけれど、恐怖は十分すぎるほどに体に染み付いていた。あのピューマのような金色の目が頭から離れない。どこからか漂ってくる血の香りも皮膚に染み付いてしまったかのようにだった。

「そうだ。レイイェンズ家と関われば、ろくなことにならん。いいな、絶対だ！」
「は、はい」

“レイイェンズ家”。

確か王族を除けば、この国で一番大きな影響力を持っている名家だと聞いたことがある。何人も宰相や大臣を輩出し、各方面の有力な人物をその傘下に置いておられるらしい。そして有り余る資産をお金がなくて困っている貴族に低金利で融資し、とてもありがたいがられておられるとも耳に挟んだことがある。

それだけ聞けば、優秀でいい一族なんじゃないかと思う。実際、私もそう思っていた。

けれど今は……。

“どうして関わってはいけないの？”なんて聞く必要もなかった。あのグレイドールとか言う人、とても怖い目をしていた。

あれがヴァンパイア本来の目つきなのかもしれない。まるで人の皮を被った獣。

レオ様、は……？

『ねえ、君の血をくれる？』

鋭い牙を押し付けられた感触が、まだじんわりと残っているような気がした。処刑のときシェイラさんに血を吸われた時とは明らかに何かが違う。怖いのに、同時にそのまま牙を突き立てて欲しいと思う気持ちがあった。それがまた恐怖を煽る。自分が自分でなくなってしまうような感覚に埋もれてしまいそうだった。

王を見つめていると、とても複雑な心境が渦巻く。

この人は私を護ってくれた。愛していると言ってくれた。でもそれは一体何のためだったんだろう。ヴァンパイアが愛を囁くのはどんな時？ 血に飢えたときじゃないの？ 騙してその気にさせて、まんまと血を吸おうというときじゃないの……？ 信じたいという気持ちだが、何かに押しつぶされていく。

「ソフィア？」と心配そうに顔を覗き込んだ。

「奴らに何か言われたのか」

「いえ。あの……」

聞いていいのかどうか迷った。彼を疑うようなことを口にするのは憚られる。

でも

どうしようもない不安に駆り立てられた。

最初はあれだけ彼らに警戒していたのに、いつの間にか忘れていた。彼らは紛うことなき血を求めるモンスターなのに。住む世界も生きてきた年月も桁違いに違う、まったく別の生き物なのに。

彼は、人間じゃない。

こんな単純なことも忘れていたなんて。

「ソフィア？ 気分が悪いなら医務室に」

「陛下も……私の血を吸いたいと思われのですか」

彼は驚いたように眼を見開き、少し戸惑ったように目を伏せた。答えにくいことだろう。私だって聞くまでもなく答えを知っているのかもしれない。分かりたくなくて、分からないフリをしているだけなのかもしれない。

それでも聞いたのは、“そんなことはない”と言って欲しいから。お願い、そう言って！私の血になんて興味はないと。お願い！

王は慎重に言葉を選ぶように、

「吸いたくないといえば嘘になる。私とてヴァンパイアだ。ヴァンパイアは愛する女性の血を何よりも求める」

嘘偽りのない言葉だろう。なのに、ひどく心が沈んでゆくを感じた。ヴァンパイアを前にあんなことを聞いておいて、失望するだなんて勝手すぎるのに……。

「そう、ですか」

私が好きなのか、それとも私の血が好きなのか。どっちなんだらう。

誰を信じればいいのか……こんな闇の世界で。

「怖いかな？」

彼の白い指がこわごわと頬を撫でる。体がビクリと反応した。

怖い。

正直に言えば、すごく怖い。今すぐ逃げ出したいくらい。

彼らが悪い人じゃないってことは分かっている。それでもやっぱり考えてしまう。彼らが優しくしてくれるのは、血のためだけじゃないかって。その目的を果たすためだけに、笑顔を作っているだけなんじゃないかって。この人だって。

そしていつか私も

『おに、ちゃん……っ』

枯れることを知らない涙を拭い、墓地を後にした。色を失った私の世界の中で、黒服をまとった人々と、埋葬されるおにいちゃんの白い棺がひどく対照的に感じられた。生きる者と死せる者が、くつきりと分けられているかのように。

『本当だよ、あたしゃこの目でしっかりと見たんだ』

しゃがれ声にそちらを見やる。押し殺しきれない声が、周囲を憚りながらも語気を強めていた。大きな鼻のおばあさんが、しわしわの指を二本立てて自分の目を突くように指す。

『噛みつかれたような赤い斑点が二つ、あの子の首筋にしつかりとね』

口角泡を飛ばしながら、恐怖を煽るかのように興奮気味に口を開いていた。周囲の婦人たちは口元に手をやり、“まさか”とでも言いたげに小さく首を振る。それでもそこから立ち去ろうとはせず、食い入るように話に聞き入っていた。

『間違つて毒の実を食べた事故？ 突発的な病気？ 違つね！』
目をカッと見開いて畳み掛ける。

おばあさんはそこで一旦間を置くかのように、もしくは言い知れぬ恐怖から逃れるかのように十字架をぎゅっと握りしめた。

『吸血鬼に殺されたのさ』

違つ！

ブラッド法が施行されたのが先王のときだというのなら、お兄ちゃんも亡くなつたときにはすでにヴァンパイアは自由に血を吸えな

くなっていたはず。人を殺めることができなくなっていたはず。

“あれ”はきつと、倒れた拍子にどこかでぶつただけよ。“アレ”だってきつと別の意味があるのよ。

きつとそう。それだけのこと。

苦しい……っ。

助けを乞うようにネックレスを握りしめた。

けれどいつもと違う感触に、そういえばドレスに合わせて別のものをつけてもらっていたことを思い出した。

それに、見知らぬ土地で一人放り出されたような孤独感が噴き出し、不安がツタのように絡みついてくる。

怖い、怖いよ……。

「いや、そうか。よし！」

王の大きな声に顔を上げると、彼は何か決意したように腕を組んで俯いていた。

「ならばいつそ歯を削って平らにしよう。今よりもっといい男になるとは思わんか？　ん？」

あごに指を添え、モデルのようにポーズを取る。冗談なのか、本気なのかは分からない。

陛下

「ですが、授業で習いました。ヴァンパイアの牙はいつもある一定の長さになるように伸びると。削ってもまたもとに戻ってしまうのでは？」

「ふむ。そうだな、ならば抜くか？　しかし、差し歯の王というの

もな」

「ふふ、そうですね」

思わず笑みがこぼれ、彼の安堵したような表情がうかがえた。どうやら私の暗い表情を察じてくれていたらしい。

ヴァンパイアだけど、人間ではないけれど……でも少なくともこの人やレオ様だけは違う、きっと。

『ソフィア、私を信じてくれ。ひどく傷つけてしまった分、今度こそは君を護ると誓うから』

そう言ってくれたじゃない。

「信じても、いいですか？」

今度は言ってください。

”もちろんだ”と

王はとても真剣な色を浮かべ、私の両手を握りしめた。とても温かい。

ここへ来て初めて、彼らが決して生ける屍なんかじゃないと知った。ちゃんと体温があつて、心臓があつて、他人を命がけで護ろうとする心だつてある。

人間界で伝えられている彼らは、決して正しい姿なんかじゃない。たとえ太陽の出ない闇の世界であろうと、彼らは月の下でしっかりと生きている。温もりと誇りを持って。

「もちろんだ。何なら聖書に手を置いて誓ってもいい。君を裏切らないと」

それが妙に心に響いて、涙に頬を濡らしそうになった。

「ヴァンパイアが神に誓うのですか？」

茶化すようにそう言って、笑うふりをして涙を堪えた。

「たとえ灰になろうと、それで君が救われるのなら」

「陛下……」

彼の心遣いが嬉しかった。いえ、彼ならきつと本当にそうしてくれる気がした。

「ま、そんなことくらいでこの私が灰になるはずがないがな！ ははははは！」

照れたように大きな声を出して笑う。

よかった。ここにこの人がいて。

変なの。ここへは無理やり連れてこられたのに、さっきまで彼らに怯えていたのに。そんな風に思うなんて。

自然と零れる笑みを噛み締めた。

王は私の腰にゆっくりと手を回すと目を閉じ、端正な顔を近づけてくる。

「陛下だめ……」

それに王は唇が触れる寸前で動きを止めた。目を開いた彼と、視線が至近距離で交錯する。その間よりも深い黒に何もかもを飲み込まれそうになった。悲しい記憶も、涙も、不安も全て。

そっと目蓋を下ろすと、柔らかなものがフワリと押し当てられた。

まるで私を安心させるかのような、優しく甘い口づけが降り注ぐ。

「んっ……」

王の右手が頬を包んで滑らかに撫でる。それに力が抜けて行つたけれど、心臓の鼓動は反比例するかのように激しく脈打っていた。違う、これはきつとお兄ちゃんのことを考えて動揺したからだわ。ドキドキなんてしてない。

それなのに、唇を離す彼を名残惜しく思った。でももう一度してほしいなんて口が裂けても言えない。

本当に何かが変わ。強く押さえつけられているかのように胸が苦しくて、なのにそれがどこか心地いい。

王は濡れた瞳で、

「私を信じずに誰を信じる。心配しなくていい。この喉が渴き干からびても、君を怖がらせるようなことはせん。絶対に」

私のためにこんなにも優しい笑顔を浮かべてくれる。これが作り物だというのなら、きっとこの世界に本物なんて存在しない。

「陛下……」

「陛下。何をなさっているの？」

その声にわずかに飛び上がった。これはヒールの音が近づき、顔が照らされる。

「エヴェリー」

王は呆然と立ち尽くす彼女を静かに見つめた。こうなることが分

かっていたのか、それともわざと仕組んだのか。彼に動揺する様子は見られなかった。

王女様は王に抱きしめられていた私を一瞥すると、絶望したような表情で、

「どういふことなのですの……ひどい。ひどいですわ!」と王に詰め寄った。

瞳を僅かに濡らし、唇を震わせている。

王はゆっくりと立ちあがった。私もそれに従おうとしたけれど、王が肩を押さえつけた。

自分で対処する。そう言っているように感じた。

「王女、申し訳ない。あなたとは結婚できない」

「陛下、分かっておいでですか?」と彼女は張り裂けそうに笑う。

「私たちはプロメスをとても重んじますわ。言葉は空気の精の贈り物。口から出た約束は純粋性と信頼性を帯びて発言者を拘束する。破れば」

「ええ。その代償として永遠の孤独とむなしさを被る」

王女は信じたくないと言いたげに、首を何度も振った。美しい髪が露出した肌をなでる。

「私は、八十年もあなたをお待ちしていたというのに。こんな、こんなことって」

顔を覆ってむせび泣く彼女に、罪悪感がこみ上げてきた。確かにひどすぎる。私だって彼女の気持ちを分かっているながら何と云うことを。

王はそんな彼女に慰めの言葉をかけるでもなく、無表情で佇んでいた。けれど、内心は穏やかではないだろう。自分のために、こんなにも純粋な女性の心を傷つけ

「なんて言つと思いませんか？」

「……は？」

素っ頓狂な声を上げたのは王。けれど、私も同じ気持ちだった。何、どうということ？

王女は大きなため息をつく、やれやれと肩をすくめた。

「まだお気づきになりませんの、陛下。全く、あの時のことを覚えておいで？」

王は懸命に思い出そうとするかのように、眉間に深いしわを寄せた。

「と、当然だ。確か、あー……パーティーの最中だったか、どこか庭の噴水の前で風に当たっていた私に君が『お慕いしていますわ』か何か言ったような。だから多分私は……あれだ」

ほとんど覚えてないじゃない！

王女はカリスマ教師のように軽く腕を組んで歩き回った。王の言葉に相槌を打つかのように、コクコクと頷く。

「ま、”思ったよりは”覚えていらっしやるようですね。でも、肝心なことが抜けています。あなたは風に当たっていたのではなく、お仕事の話をなさっていたのですわ」

「仕事の？」

「ええ、とある方と」一緒に

それに王は何か思い当たる節があったのか、「まさか」と頬をひきつらせる。

「確かにあの時、私は胸の内を告白いたしました。あれは陛下へ申し上げたものではありませんわ。ですからそもそもプロメスは不成立。あなた様は勘違いなさったようでしたけれど、私が本当にお慕い申し上げますのは……」

王女は突然ポツと花咲くように頬を薄ピンク色に染め、パーティー会場へ目を向けた。王はため息をついたけれど、誰を見ているの？

王女はパンと軽い音を立てて手を組み、うっとりとした表情で、

「はぁん、まさしく私の理想のお方ですわ。芯のある艶やかな髪、キリリとした眉、洗練された出で立ち。とても気が利いて、物腰も柔らかくって。仕事もおできになるのどこかユーモアもありになる」

並びたてられていく言葉を聞いていくうち、ぼんやりとある人物が浮かび上がっていく。

あれ、それってまさか。

「まさに完璧なジェントルマンですわ、シュレイザー様ッ！」

ええっ！　と思わず声を上げそうになって飲み込んだ。

「私、あの方に会いたくていつも謁見の申し出をしていましたのに、陛下ったらいつも門前払いなんですもの。ものすごく腹が立ちましたわ！　ですが陛下のご様子を一目見てピーンと来ましたの。あな

た様はソフィアさんを愛しておられると。ですから色々と遊ばせていただきましたわ」

「待て。ではまさかあの下着の一件やレオとの結婚云々の話は……」

『殿方の目からご覧になって、どうです？ これならきつと、

レオナルド公爵様もお喜びになると思いませんこと』

『ソフィアさんは公爵様といつご結婚を？』

王女様は、少し濃い目の口紅を引いた唇を妖艶に吊り上げた。

「仕返しですわ、陛下」

まるで快樂殺人犯のような美しく狂気じみた表情に、王は絶句する。口を薄く開いたまま、瞬き一つしていなかった。まるで色のついたブロンズ像のよう。

言われてみれば、夜食会で彼女が話しかけてくる前は、決まって私がシュレイザーさんとお話をしていた時。

王のことが好きだとばかり思っていたから、全く気づかなかった。

「まあもつとも、ソフィアさんがベッドの下へ隠れている上で、他の女性とヨロシクなさる陛下に嫌悪感を抱かせよう作戦は失敗いたしましたけど」

王女様、体張りすぎです！

王は「だが……」と口を開く。

「残念ながらあいつは“女性は体型が崩れ始めた頃からが旬だ”と
か言っていたが」

“残念ながら”で始まった言葉にも、王女様はパアアツと顔を輝

かせた。

「分かりましたわ！ 体型を崩せばよいのですね」

「いや、そうではなくヤツは年増の女が」

「まあ、大変ですわ。私っていくら食べても脂肪が胸に行ってしまうものですから」

「聞いていないな……」

王女は花の蜜に誘われる蝶のごとく、「シュレイザー様あ」と我を忘れたかのような表情でパーティー会場に飲み込まれていった。

後に残された私たちの間に、何とも気まずい空気が流れる。

よかったような、拍子抜けしたような。

「あの、陛下……」

王はスツと掌を私に向けた。

「何も言ってくれるな。私も格好悪いという自覚はある」とも一方の手で目頭を押さえた。

ええ、確かに。でも

王女様は勘が鋭いと言っていた。もしかして私たちの間にあるわだかまりに気づいていたのかもしれない。現に彼女がいなければ、王とあんな風に話すことも無かっただろう。そう尋ねても、彼女はきつと否定するだろうけれど。

「ま、だがこれで王女のご事は心配なくなっただな」と王は私のアゴを持ち上げた。

突然思考を切られて驚く。王はこのことをもう過去へ追いやったのか、楽しそうに笑っていた。

「私は正妻をないがしろにしたりはせん。ちゃんと正妃たる君との間に子を」

「な、何をおっしゃってるんですか！」と王の手を払った。

全く。子供子供って、そんなに

“子供”？

そこでふと“あの子”のことを思い出した。馬車で町を駆けていた途中、小さな男の子を見かけたはず。あの子がもし、迷い込んだ人間の男の子だったら……。

モンスターかもしれない。でも

一度考え出すと止まらなくなってしまった。

「どうした。その気になったか」

「な、なりません！ 何でも……ないです」

町のある方向をじっと眺めた。もう一度、外へ出よう。でもどうやって

私の中で、とあるナイト様の姿が浮かんで消えた。

「ソフィア・クローズ……」

ザルクとケンカするように戯れる彼女を、遠くから見つめる金色の瞳があった。

「はっ……ん」

首筋に牙をつきたてられた女は、一糸まとまぬ姿で裸の男の背に手を回していた。

ベッドの上で座り込むように抱き合いながら、女は恍惚とした表情で空気を求めるように呼吸を荒げる。男の腰や背には別の二人の女たちが、同じくうつとりとした顔でからみついていた。

鉄と女の匂いで満たされた部屋は、ますます熱を帯びて高まっていく。

「グレイドー、様……っ」

グレイドーが一層強く赤い髪を揺らすと、女はさらに高い声を上げて気を失った。続けざまに隣の女の首筋目がけて牙をつきたてると、女は一瞬で我を失ったかのように艶やかな声を上げ始めた。

気を失った女を邪魔だとはかりに横へ転がし、牙を突きたてた女に覆いかぶさるように押し倒す。

温かな血を喉へ流し込む音が、やけに鮮明に聞こえた。

「三人相手とは、お盛んだねグレイ。ブラッド法も真っ青だ」

笑いを含んだこの場にそぐわぬ明るい声に、グレイドーは動きを止めてゆっくりと顔を上げた。

「一応ノックはしたよ」

封筒を持ったレオナルドは悪びれた様子もなく両手を広げ、肩を

すくめてそう言った。妙な場に居合わせた、という自覚はないようだった。

体を起こそうとするグレイドローを手で制止し、

「いいよ、オレには構わず続きをどうぞ。ついでにこれ持ってきただけだから」

窓の脇にあったガラスのローテーブルへ封筒を放り投げ、ソファの背もたれに腕を組んで腰を下ろした。再び聞こえ始めた女の甲高い声も気にならないかのように、じつとそばにある窓の外を見つめる。

「レオナルド様」

女の一人がうつとりとした表情で近づき、まどっていたシーツを床へ落とした。彼の膝の上にゆっくりと跨って首に手を回す。ふわりと少々きつめの香水の香りがあたりを漂った。

「ん……ふ、んっ」

深い口づけをしながら彼の下腹部へ手を下ろした。すでに男に酔っていた彼女は、自ら積極的に舌をからませ、怪しげに手を動かす。

「レオナルド様っ、ん……」

鼻息を荒くし、体を自ら押しつけて顔を赤く上気させる。

何ら反応を示さない彼のそこにも、もう待ちきれないかのようにジッパーに手をかけた。一息に引き下ろそうとした瞬間

とても重い荷物が倒れるような大きな音がした。

女は突然のことに何が起こったのか分からず、ただ口を開けて自

分を突き落とした彼を見上げる。

「オレに触らないでくれない？ 気持ち悪い」

レオナルドは濡れた唇を拭いながら、まるで下水を走る鼠を見るかのような目で女を見下ろしていた。女は体を隠すことも忘れ、その恐ろしい瞳にただ身をガタガタと震わせる。何か言おうにも言えず、涙を流そうにも流れない。ただ恐怖だけが女にまわりついて揺らしていた。

レオナルドはそんな女を引き起こすどころか目もくれず、窓の前までいくと小さく息を吐いて景色を見つめた。

「次からはもつと上等なのを用意しておきます」

グレイドーは意識を失った女から顔を上げ、唇についた血をなめ取りながらベッドの下に落ちていたズボンを拾い上げる。

「頼むよ、グレイ……とびきり上等な女を。兄上に先を越される前にさ」

グレイドーはシャツを羽織り、ソファアのそばで震えながら座り込む女の後ろにかがみこんだ。体に腕を回し、間髪いれずに首筋に牙をたてる。

「あ……あっ」

恐怖に囚われていた女は、一瞬で怯えを忘れた。うつとりとした表情で熱い吐息を出し始め、白い首をのけぞらせる。グレイドーの髪に指をからませ、喜びに浸るように声を上げた。

やがて絶頂に達したかのように気を失い、牙が引き抜かれると同

時に冷たい床へ倒れこんだ。

グレイドーは口元を拭って立ち上がり、女を放ってレオナルドの横へ佇む。

「ならなぜ兄上と彼女を引き離さないのかって顔してるね。いくらでもそうできるのにつて。気になる？」

試すような口調にも、グレイドーはじっと押し黙っていた。

「目くらまし……ではないよ。生憎兄上はそんなバカじゃない」

そう言って可笑しそうに笑う。

「あえて言つならそうだなあ。“兄弟愛”ってやつかな」

窓ガラスに映った二人の歪んだ瞳は、血塗れたように赤かった。

「こつち、こつち」

後宮への出入りにはルートが二つあるらしい。

一つは一般用通路。王からの許可書を見せて通してもらうルートで、レオ様もここから出入りしている。以前私もここを使って抜け出した。

もう一つはファーストクラスの棟の奥にあるという、秘密の特別通路を使うルート。王の部屋と直結するらしく、普通は王以外の通行は絶対に禁止。

けれどその通路を通れる唯一の例外があった。

それは王がその通路の”鍵”を渡して通行を許したとき。王妃やそうなることの決まった信頼できる女性に対して、後宮内外への自由な行き来を許可するということらしい。

その鍵が今、私の手元にある。

パーティーの後部屋に戻ると、壁には王の描いたあの太陽の絵が飾られていて、テーブルにはこの鍵と封筒と花束が置いてあった。

封筒の中を確認すると、“君に持っていて欲しい”という言葉と共に、通路への道筋が書かれてある手紙が入っていた。読み終わるとすぐに、青く冷たい炎に包まれて消えてしまったけれど。

好き好んで王の部屋になんて行く気はないし、返そうかなとも思った。

でもこれは“使える”。

町で見かけたあの子を探さなきゃ。

前にどこかで聞いたところによると、この一見何の変哲もない古びた鍵には特別な術式が組み込まれているとか。

許可を受けた女性以外がこの鍵を使っても扉は開かないし、それ以前にもっと別な仕掛けがあるということらしい。その仕掛けが何なのかは知らないけれど、まさか不純な動機で扉を開けた者は悪魔に魂を食べられたり……とかじゃないよね。

陛下の部屋にはあの伯爵さんが待機している（おそらく部屋の前の衛兵さんを幻術で惑わせて）。ミセスグリーンがそうことづけてくれた。

なんでも最近一般用通路には幻術防止の魔術が張られ、衛兵たちを惑わせて出入りすることができなくなってしまったのだと聞いた。許可書を貰うにも、王は私を連れ出したことのある彼に頑として

許可を下ろさないんだとか。

とはいえ後宮を抜けられたところで、お城から町へ行くには誰かの手助けが必要になる。王に言ったってダメだろうし、レオ様にもきつと止められる。誰かを町へやって探してくれるかもしれないけど、こんな不確かなことに人員をさいてもらうのも申し訳ない。

どうしようかと困っていたところへ、伯爵さんとの橋渡しをミセスグリーンが自ら買って出てくれた。これで町へ行ける。

鍵をぎゅつと握りしめた。

本当はこんな使い方、あの人の信頼を裏切るようですごく申し訳ない。

でも、王を何とかしようと言うわけでもないし、逃げるつもりもない。すぐに戻ってくる。

だからお願いします。今回だけは許してください！

「ううう〜！ すっごくワクワクするね！」

「本当、あたしまでドキドキしてきたよっ」

一緒についてきてもらうアリスと、彼女の肩の上に乗ったミセスグリーンも興奮を隠し切れない様子でそう言った。

伯爵さんを信じていないわけじゃないけれど、二人たつてのお願いでもあったし、私も心細かったから正直すごく嬉しい。

アリスもミセスグリーンも町に出るのは初めてだと言っていた。アリスはともかく、ミセスグリーンも？ と思っただけれど、人が多いところは踏み潰される危険があるから、お買い物は小人や小さな生き物たちが営む専用の市場でしていると聞いて納得した。

だから二人ともすごくワクワクしている。もちろん私だってすこ

く。

それに彼女らが会ってすぐに意気投合してくれて良かった。ミセスグリーンもアリスがお転婆な七十八番目の娘にあまりにそっくりだと言って随分笑っていた。

「あれ？　ねえ二人とも、特別通路はこっちよ」

浮かれすぎたのか、アリスもその肩の上に乗るミセスグリーンも曲がるべき角をぐんぐんと通り過ぎていく。そんな彼女らを慌てて呼び止めた。

でも足を止めて振り返った二人は、訝しげな顔をして私の指差すほうを眺めるだけ。

「どうしたの、二人とも？」

「ソフィー……こっちってというのは、一体どっちのことだい？」

「ミセスグリーンが”はて？”と小さな頭をかしげて尋ねる。

「だからこの廊下を」

「だってそっちは壁じゃない」

え？

アリスの言葉に目を丸くした。

何を言っているの？　ちゃんと立派な廊下が続いているわ。

からかっている……わけでもなさそう。

「見て、ほら」

廊下に一步足を踏み入れて振り返ると、二人は腰を抜かすんじゃないかというくらい面喰らっていた。

「ソ、ソフィー！」

「ちよつと、嘘でしょう？」

目の前にいる私を探すかのように、キョロキョロとあたりを見回し始めた。何だろう？ 一体どうしたの？

「ねえ、二人とも」

「ひやああっ！」

元の場所へ戻ると、心の底から驚いたかのように二人は大きな声を上げた。ミセスグリーンもアリスの肩の上でピョンとかなり高く飛び上がる。

「ね、ねえ、今までどこにいたの？」

私が実はゴーストじゃないかと疑うかのように、アリスは私の両腕をおおおと叩いた。

「どっつてずっと目の前にいたわ」

そんなはずはないと言いたげに立ち尽くす二人に、“もしかして”と思った。

掌の中の鍵を見る。

まさかもう一つの仕掛けって

「これに触れていないと、通路が見えないのかもしれない」

それにミセスグリーンは急かすように「二人とも、ちよつと手をつないでみて」

彼女の言葉にアリスと手を繋いでみた。その途端、彼女たちはまるでこのあたり一体の空気を全て吸い込もうとしているかのように、大きく息を呑んだ。

「本当だ！ 廊下がある」

アリスは目を真ん丸くしてその廊下を見回し、ミセスグリーンも“さっすがだねえ”としきりに感心していた。

バロック建築のお城らしく、廊下はコリント式の円柱が等間隔で並び、壁はまるでロングギャラリーのようにたくさんの絵や像がずらりと並んでいた。

それらはどれも“愛”をテーマにしたもので、美しい男女がさまざまな場所で手を取り合って微笑み合っていた。一部直視しづらいものもあったけど。

アーチ状になった天井を見上げると、満天の星空の下を歩いているかのような絶景が描かれていた。数千マイルの彼方からだろうと、この場所に来るためだけに訪れる価値がある回廊だわ。

誰も。

私もアリスもミセスグリーンも、誰も口をきかなかった。ただそれぞれに絵や美術品を眺め、おのおのその世界の中へと引き込まれていた。まるで魔法にかけられたかのように。

「あ、あれね」

いち早く現実世界に戻ったアリスが、目の前の扉を見つめてそう言った。私は夜空の中の男女の絵から目を離し、扉へ視線を移す。

この城内の扉はどれもそうだけど、とても背が高くて迫力があつた。

光沢のあるダークブラウンの扉は、他の絵や美術品と違って何の装飾もされていないシンプルなものだった。にも関わらずどこか異質でおごそかで、魅惑的な雰囲気をかもし出している。

それはきつと私が、いえ、陛下やここにいる誰が生まれるよりもずっとずっと昔からここに佇んできたという、歴史の重みがそうさせるんだろうと思った。まるで深い森の中で樹齢の長い大木と対面しているかのような、神秘的な香りがする。

「じゃ、いくよ」

「うん！」と二人は力強く頷く。

アリスとしつかり手を繋いだまま、鍵を差し込んでゆっくりと回した。まるで時空の扉を開くかのように。何が起こるか分からない緊張感で胸がドキドキした。

ミセスグリーンも落ち着かないのか、アリスの肩の上から私の方へと移ってくる。

何重にも魔術が仕掛けられていると聞いていたけれど、カチャリと音を立てて意外にもあっけなく開いたらしい。ドアノブに手をかけ、右にそつと捻った。じつとりと汗ばんだ掌にノブが張り付いてくる。

王のお母さんも、その前の王妃たちも、皆こんな風に通っていたんだらうか。右手にかかる小さな鏡は、きつと最後に髪やお化粧の具合を確かめるためにあるんだらう。そう思うと、とても特別な場所のような気がした。

キイと古そうな扉のちょうつがいが鳴き、おずおずと三人で中を覗き込んだ。

「はい！ ハニーたち！」

いきなり見えたバラの香りをかぐ伯爵さんの姿に、三人とも思わずのけぞってしまった。

「ふふ〜ん。まるで愛の逃避行、アバンチュールって感……へ、へ、へクシヨンツ！」

盛大なくしゃみをして鼻をこする伯爵さんに、少々言葉を失った。今度は……大丈夫、よね？

「ああー、もう嫌！」

独特な匂いと湿気が立ち込める中、リザは頭巾を取ってイライラと叫んだ。

「うるぜえよ。さっさと働けや、メス豚」

手に持ったたくさんのお菓子をボリボリと食べながら、魔豚小屋を掃除する彼女らをぼんやりと見つめてそう言い放つ。

掃除をしたそばから食べこぼして汚すその監視係に、リザは嫌悪感丸出しに歯の開いたブラシの先を向けた。

「豚はアンタでしょうか！ セルド（スペイン語で豚）さん？」

それにイラツとしたのか、彼は食べかけのチョコレートのリザに向け、

「セルドじゃねよ！ シルドだ！ オレの国の言葉で“勇敢な騎士”なんだよ」

「はあ？ あんたにみたいなのが甲冑着たら、中でむれて蒸し豚になるんじゃない？」

「中身が腐ったメス豚よりはマジだ」

うまく言えたと思ったことをまんまと言い返され、リザはぐつと悔しそうに押し黙った。

「……あの女さえいなければ」

その言葉に、真面目に掃除をしていたルルーがやれやれと息を吐く。

「もう面倒ごとは起こさないでよね、リザ」

「そうよ！ これ以上ヒドイ目に遭いたくないわ」

現状ですらこの有様だというのに、これ以上というならホームレスにでもなるしかない。こんな世界でそれがどれだけ恐ろしいことかトリザの様子にうんざりしていた。

後宮にいた頃に比べて随分と質素になったとはいえ、ご飯にも家にも困ってはいないのだから。

リザは彼女らの様子を小ばかにしたように鼻で笑った。

「だったらあなたたちはずっとここにいるのね。私はいつか……あのお城へ、あの美しいお方の元へ帰ってやるわ。そして私からあの方を奪った、憎たらしいあの女をッ！」

ブラシの柄を折らんばかりの力で握りしめる。その地獄の帝王のような形相にシルドは、

「お前がそんなだからダメなんじゃねの。オレだってお前みたいな

超絶腹黒女じゃなくて純粹で可愛い女選ぶけど」

「うるさいわね！ 私があの方の妃になった暁には、あんたを真っ先に焼き豚にしてあげるから覚えておいてくれるがいいわ！ オーホッホッホホホ！」

「はいはい。くだらね妄想してねえで掃除しろ」

全く相手にしないシルドを尻目に、リザの目には強い意気込みが渦巻いていた。

s t . ?

The Door (後書き)

あとがき

リザ再び登場。

・投票でご希望があつたので、流そうと思つていました前回の王女様の恋の行方をどこかに入れようと思ひます。他にも何かあればお気軽にドウゾ。応えられる範囲でお応えします。

「うーわあ！ すっごい」

町はたくさんの人たちで溢れていた。

頭が獣だったり、目玉がたくさんあったり。一見してモンスターだと分かる人もいれば、人間と何ら変わらない人たちもいて、何だかハロウィンの日のような不思議な光景が広がっていた。私も小さい頃、よく魔女や妖精の格好をしてお菓子を貰って回ったなあ。後でみんなで交換したりして。

高く積み上げられた白い骨、あちらこちらにぶら下がるコウモリ、道なんて関係なしに壁を通って出てくるゴースト、お化けかぼちゃたちの行進。

色んなものに眼を惹かれてる私たちに、鉤鼻の女性が妙な形のリングを売りつけてくる。何でも理想の人に出会える効果があるんだとか。やんわりそれを断ると、次はマーメイドさんに”嘘をつく”と口から泡の出るキャンディー”の試食を勧められた。

ソーダ味のそれを機嫌よくそれを舐めながら、小人族さんらの七人目のメンバーの募集の熱い演説を聞く。もう一三二年も募集しているらしいと聞いて、アリスが「きつともうすぐ見つかるわ。私分かかるの」と励ますと、口からシャボン玉のような泡が出て皆でびっくりして笑った。「嘘じゃないわよ?」と言った彼女のその口からまた泡が出て、笑いが止まらなくなる。

「ああ、まるで童話の中みたいね」

アリスも「本当!」と頷きながら、目は曲芸をして火を噴くミニドラゴンに釘付けになっていた。その火がミイラ男さんの乾いた包

帯の端にボツと燃え移って、皆が慌てて踏みつける。

鎮火にホツとして町を見渡すと、あちらこちらで舞台の宣伝ポスターが貼られているのに気づいた。気取ったように手に銃を持ち、口にバラの花をくわえた（まるで誰かさんみたいな）男優さんが、星の瞬くような研ぎ澄まされた瞳でこちらを見つめる。

最近メイドさんたちの間で俳優のジャック・ライ・ベトロという人が流行ってるって聞いたけれど、どうやら彼がその人らしい。立ち止まって見とれていた女の人にぶつかった巨人さんが、吹き飛んで果実の山に吹き飛んだ彼女に平謝りしていた。

「あの、ナイト様」

「ん？ なんだい」と彼は見知らぬ下半身がヤギの人の方を向いて答える。

「こつちです」と袖を軽く引くと、

「ああ、すまない。よく見えなくて」

このままでは目立つからと、私もアリスも伯爵さんの用意してくれた茶色いローブを羽織っていた。確かにお城で着ているようなドレスでは違和感がありすぎるわ。まるでレモンの中のイチゴのように。

「被っておられる、そのマスクは何ですか？」

気遣いに感謝しながらも、当の伯爵さんはまるで仮装大会にでもでるのかしらと思うような謎のマスクを被っていた。あえて言うなら派手なライオン？

「ヴァンパイアはおおむね上流階級に属しているからね。こつ町をぶらぶらなんてしていると、人目を引いてしまうのさ。気軽に散策で

きる市民が羨ましいよ、そうだろうマイプリンセス」

と口をポカンと開けて佇む見知らぬ半魚人さんに話しかけていた。今の方が人目を引いている気がするんだけど、伯爵さんからすれば立派に身を隠せているんだろうか。

「うん。それよりソフィーが見たって言う男の子はどこにいるのかしらね？」とミセスグリーンは私の肩の上で唸る。

「ホンホ、あまいに手がかりが少らいわ」

いつの間にか手にしていた洋ナシにかじりつくアリスは、まるでリスのように頬を膨らませながら答える。

“アーチタウンへようこそ”という古びた看板を見つめ、

「そう、ちょうどこのあたりで見かけたの」

可愛らしい花屋さんを通り過ぎた、このお店の角のそば。

キヨロキヨロを見渡して見たけれど、その子の姿はどこにもない。住んでいるなら、きっとこのあたりだと思っただけ。

とりあえず誰かに聞いてみようということでは決まった。

「え？ 最近この辺で小さな男の子を見なかったか？」

刑事さんのごとく、露店で聞き込みを試みる。いつも外にいる人なら、見かけたこともあるかもしれないとミセスグリーンの提案で。

耳が尖っていて額からツノの生えたおばさんが、赤いエプロンを締めて店の前で呼び込みをしていた。彼女でちょうど十人目。何か知っていればいいけれど。

彼女はエプロンで手を拭きながら少し思い出すようなそぶりを見

せたあと、

「ああ、あの子ね。知ってるよ。このあたりをチヨロチヨロしているのを見かけたけど、知り合いかい」

「あ、まあ」

「だったら警察に行ったほうがいいかもしれないねえ。何日か前に連れられてるのを見たから」

「けーさつ……」

それにアリスは嫌そうに眉をひそめた。人間界でもやんちゃだったようだし、きっとよく怒られていたんだろう。

「だったら保護されたのかもしれないわね、ソフィー。その子の特徴も一致するし」

「そうみたい」

よかった。それならそれでいい。いくら魔界の警官といえど、保護するくらいだから酷いことにはなっていないだろう。

「それより、これどおくだあい？」

彼女はザブンと水の張った樽に手を突っ込むと、水を弾きながら暴れる紫色のカエルを鼻先に突きつけてくる。不気味で毒々しい色と見た目に、思わず顔が引きつった。

「スープにすると、いい塩梅で味が染み出るんだよ」

私が人間と知ってあえて言っているんだろう。オバサンはからかうように、ゆっくりと左の眉を上げた。

「あ……いえ、結構です」

でももしかしてこれって、この辺りでは普通の食材なのかしらと不安になった。だって、それならお城で食べているのもグツグツと大なべで煮立てられる、見たこともない生き物を想像してゲンナリした。

帰ったらミントさんにでも聞いて……やっぱりやめておこう。

「二人ともごめんね。余計な心配だったみたいで」

露店のおばさんに教えられた道の通りに、私たちは警察署へ向かっていった。杞憂に終わるようで、よかったような彼女らに申し訳ないような。

アリスはいつもの明るい笑顔で、

「いいのよ、そのおかげでこうして外に出られたんだもの。ああー、やっぱり町は楽しいわ」

アリスは両手を広げ、生き生きとした表情でクルリと一回転した。

「よおし」とミセスグリーンが口火を切る。

「それじゃあせっかくだし……終わったら観光を兼ねたショッピングといきましょうか！」

「ええ、それはいいわ！」

ああ、こんな感じ、いつぶりだろう。すごく楽しい！

「あれ、そういえばナイト様は？」

ふと後ろを振り返ると、彼の姿がすっかり消えてしまっている。

「本当だわ。いない」

アリスも今気づいたようだけれど大して気には留めていない風で、まるで捨てようと思っていたアクセサリーを失くしたかのようなトーンだった。

「はあ、糸も切れてるわ」

ミセスグリーンは、長い腕にペロンと元氣なく垂れ下がる透明の糸を見つめる。

「ミセスグリーン、伯爵さんに糸をつけていたの？ どうして？」
「ソフィー、あの方はアンタをお城から連れ出して結婚式を挙げようとするお馬鹿なんだよ？ どうせ迷子になって誰かに迷惑をかけると思つてね」

さすが。何百もの子供を育ててきただけあるわと感心する。それでもそれを切つてどこかへさまよい行ってしまう伯爵さんも、なかの猛者でしょうけれど。

「ま、あれだけ目立つ格好をしていたらそのうち見つかるでしょう。先に行きましょう」

そうよね。私よりやアリスよりずっとずっと年上だろうし、何より生まれながらの魔界の人なんだから。大丈夫……よね？

「あ、でも待って。その前にちょっと孫たちにお土産でも買ってもいいかしら」

ミセスグリーンはお店の一角を食い入るようにじっと見て、少し申し訳なさそうにそう申し出た。

「ええ、もちろん。警察署はもうそこでしょうし、きっとお孫さんたちも」

うつ……。

ミセスグリーンが見つめていたお店を一目見て絶句した。

店内には見たこともない虫たちが樽の中で蠢いていた。ときどき出て行くこうとするそれを店員さんが面倒くさそうに戻す。ゆっくりと血の気が引いていった。

「二人はせっかくだから待っている間別のところへ行っただらっしい。後でこのお店の前で集合すること。さ、一旦解散！」

どうやら彼女には全てお見通しだったらしい。

「うん。じゃあとで」

ミセスグリーンをお店のスタンド看板に下ろすと、私たちはアリスと二人で近くをぶらつくことにした。

「あ。ねえ、アリス」と呼び止める。

「ん？」

「ここ見てみよう」

そこは可愛らしい雑貨屋さんだった。木でできた看板には、見たこともない文字が躍っていたけれど、ショーウィンドウには可愛らしい小物がたくさん並んでいた。

「人間界にいたときに、こことよく似たお店があったの」と懐かしい心地を胸に抱きながら中を見つめる。

キラキラと光るスノードームを見つめながら、そういえばこれが欲しいって泣いて、お兄ちゃんを随分と困らせたことを思い出した。その時はダメだと言われたけれど、あとでクリスマスプレゼントとしてくれたときどれだけ嬉しかったか。お兄ちゃんはサンタさんが置いていくのを見たなんて言ってたけれど、あれはきつと……。

「ソフィー、行こ行こ！」

「うん」

OPENのプレートのかかった扉を押して中へ入ると、カランカランと真鍮製のドアベルが涼しげな音を立てた。

「ウエルカム、ダナ」

一つ目の店主さんが、読んでいた本から顔を上げてカウンター越しにそう声をかける。私たちを見るためにずらした鼻眼鏡を再び押し上げ、ゆっくりと本に視線を戻した。売りつけられることもなく、ゆっくり商品が見られるのはありがたい。ゆつたりとした時間を過ごしたいから。

店内には木製のキャビネットや棚が並んでいて、その上に色々な商品が所狭しと置かれていた。自分の意思とは関係なく勝手に愛の言葉をつづりだす羽ペンや、投入金額が少ないと噛みつかれる魔犬の貯金箱、姿を映すと全然別人に映っている鏡や、スープからデザ

ートまで豪華なフルコースの“香り”が楽しめる擬似ダイナーキヤンドル、注ぐと全ての液体がイチゴ味になるティーカップもあった。

「ふふ、面白いわね、このお店！」

アリスは動くサボテンをツンツンとつついて笑う。そのうち怒ったサボテンがトゲを伸ばして威嚇したけれど、アリスはそれもクスクスと笑ってかわしていた。

「これ買って帰ろうつ」と嫌がるように必死で暴れるサボテンの鉢を手を取った。

「でも、お金は？」

「お金……あ、そうだったわ」

「これ使えるのかしら」

私はポケットをあさって一枚のカードを取り出す。ファーストクラスに来たときに、これで宮内のものはこれで買うのだと渡されたそれ。確か王の口座から引き落とされるとか言ってたような。一度も使ったことがないけれど。

「どうなんだろう？」

アリスも支援貴族から渡されていたカードをじつと見つめた。

「まあいいや、やってみよつと！ これをお願いしまーす」

深く考えるのは性に合わないらしい。彼女はきびきびとそれを力ウンターへ置いた。店主さんは「はい、ダナ」とメガネと本を横へ置き、一瞬ギョツとしたように口を真一文字につぐんだ。

「何か？」

「い、い、いえ。しよ、しよしょうお待ちくださいーれダナ」

何をそんなに焦っているんだろう。

けれど、使えるのなら私も何か買おうかしら。うーん、でも王の口座から引き落とされるっていうのは、あんまりいい気がしないわ。あとで何か見返りを要求されるかもしれないし。ケチというのはなく、何かにつけてキスだの何だのを迫ってくるから。まあ何もなくても押さえつけてくるけれど。

軽快なベルの音に玄関口を見ると、制服姿の警官二人が立っていた。
見廻りかしら。

「Entschuldig^{エントシュルディグUNG}、お嬢さん方」

二人の内の一人が、ドイツ語交じりに話しかけてきた。

ドキツとするほど顔が整っていて、さらにとても精悍な印象を受けるお巡りさんだった。

「ちょっと伺いたいことがあるんですが、ここではなんですの
この署までご同行願えますか」

「え？」

何で？ いきなり。

人間界にいるときだって、こんな風に話しかけられたことなんてない。

アリスと顔を見合わせ、首をかしげた。確かに今から行こうとしていたから、ちようどいいといえればいいけれど、これじゃあ何だか悪いことをしたみたい。

ふとお店の奥を見ると、もう一人の警官とお店の人が何やらヒソヒソと話をしている。一瞬目があつた店主さんは、ビクリと肩をすくめた。

眉をひそめながら店内を何気なく見ると、“カード犯罪にご用心！”のポスターが貼られてある。

まさかこれって……通報された？ やっぱり後宮内の物とここで使えるものは何かが違うんだわ！

「私たち別に怪しいものじゃありません。それとも何か根拠でもあるんですかあ？」とアリスが強気に出る。嫌悪感たつぷりなのは、やっぱり彼女がこういった職業の人が苦手だからだろう。

お巡りさんは少し腰をかがめて私たちの顔の高さに合わせ、胡散臭いほどの笑顔で、

「オレたち鼻が利くんスよー。ヴァラヴォルフなもので」と手前にいた私の耳元へ顔を寄せて鼻をひくつかせる。

「ああ、イイ香りだ。きつと一般庶民では買えないような、いい石鹸使ってるんでしょうねえ。オレの月給分くらいだったりして、ははははは」

冗談めかしてそう言いながらも、彼の目の奥がキラリと光った気がした。

鋭すぎる、この人。

『ヴァラヴォルフなもので』

ということは、狼男……？

見かけは人間となんら変わりは無かった。歯の尖っているヴァン

パイアよりもっと。

コルク色の髪に、少しオレンジがかった銀色の瞳。どちらかといえば線の細いヴァンパイアに比べて、随分とがっちりした逞しい体つきをしていた。

どこか探られているような鋭い眼をしているけれど、これはヴァラヴォルフだからというより彼の職業病の一種なのかもしれない。

「ダン」

アリスが店主さんに渡したあのカードを手に、相棒らしきもう一人の警官があごをクイツとあげる。彼もヴァラヴォルフなんだろう。髪の色は少々違えど、目はやっぱりオレンジがかったきれいな銀色だった。

“早く連れて行くぞ” そう言っているように見えた。

「というわけで、すぐ終わりますから」

王宮の紳士たちのような滑らかな動作で、ドアの方を手で指す。

「きゃあああああ！」

どうしようともごっついていて、突然外から女性の鋭い悲鳴が上がった。

それにお巡りさんたちが弾かれたように顔を見合わせる。

「アンタたちはここに。窓のそばにも寄るな！」

ホルスターから素早く拳銃を引き抜き、それを手に急いでお店を飛び出す。

寄るなといわれつつ、つい気になって私たちも窓から外をのぞい

た。もちろんなるべく体は隠して、目だけで。

外を見ると、道路の真ん中に二人いた。一人は熊のような顔と体をしていて、怒り狂ったかのように女性の頭に拳銃をつきつけていた。犯人の腕にはお札のはみ出たバッグが下がっていて、アリスが「強盗ね」と興味深そうに見やる。

「どけえ！ どけつつつてんだろがああ！」

かなり興奮しているのか、強盗は拳銃を振りかざして威嚇した。

「余計な真似はよせ。ここを突破したつてすぐに捕まる」

拳銃を突きつけながら、“ダン”と呼ばれていたさっきのお巡りさんが鋭い眼で相手を見据えていた。さっきの冗談半分の尋問とは何だか人が違う。

「うるせえ！ ここには純粋なシルバークレジットが入ってる！ これで撃たれたらお前も終わりだ！」

それに彼の表情が一瞬変わつてすぐに元に戻った。

「シルバークレジット？ そんなものどこで手に入れた。メッキ製ならともかく、純銀製なんかそう簡単に買えるもんじゃないだろう？」

「黙れ！ 早く道をあける！ 撃つぞッ！」

それでも彼は銃を下ろさなかった。まっすぐに構え、微動だにしない。彼の相棒も隙を窺うかのように拳銃を握りなおしていた。

「おい！ 聞いているのか！」

「助けてえっ！」

人質が泣き出す。

どうする？ どうするの？

緊迫した空気じつとりと掌が汗ばんだ。

「早くしやがれえッ！」

ダンさんは小さく肩を落とし、「分かった」

両手を挙げ、犯人に逆らわないという意味を示した。相棒さんも先に銃を地面に置く。

「お前も銃を地面に捨ててこっちに渡せ！ 早くしろ！」

彼もそれに従い、ゆっくりと右手の銃を地面に下ろした。

その時

彼の左手からハヤブサのように飛び出した何かが、犯人の銃に突き刺さった。

「！」

犯人はパニックを起こして引き金を引いたけど、投げられたナイフが引っかかっているのか銃弾が出ない。刺さったそれを引きぬこうとした瞬間

「Es ist das Ende. (そこまでだ)」

いつの間にか拾っていた銃の先を、犯人のその眉間に突きつける。強盗は汗まみれになって何もできないままに硬直し、応援に駆けつけた警官たちに取り押さえられた。

「わあ……あのお巡りさんすごいね、アリス」

アリスは半ば睨みつけるかのように、じいっと食い入るようにその場面を見ていた。

人質も、犯人すらも傷つけずに事態を収束させる。

その鮮やかな逮捕劇に、まるで活劇のワンシーンを見ているかのようにだった。さっきの舞台もこんな感じなのかしら。

「よおし、今だわ！ 逃げるが勝ち！ 行こう！」

「え？」

アリスは私の腕を引っ張って外へ飛び出し、ゾロゾロと集まり始めた野次馬たちの間を掻き分けていく。さっき食い入るように現場を見てたのって、もしかして逃げるタイミングを見計らってたの？ 後ろを振り向くと、さっきのあのお巡りさんと視線がかち合った。彼の表情は見る見るうちに焦りを見せ始める。

「Scheisse！ 待て！」

後ろからけたたましい警笛の音が聞こえてくる。怖い怖い怖い！

「どいて！ どいてください！」

人ごみを無理矢理くぐり抜け、ぐんぐん奥に入り込んでいく。

「アリス、これからどうし」

「ぐふふふ！ この感じ、懐かしいわ！ 簡単に捕ってたまりませんかい！ あーははははは！」

高笑いする彼女に言おうとしていた言葉が全て飛んだ。

「ん？ どうしたのソフィー？」

「え、ううん、何でも」

あ、相変わらず遅しい！

モンスターさんたちの間を潜り抜けながら、次第に小さくなっていく警笛の音に心が落ち着きを取り戻し始めた。その気の緩みが出たのか、ワツと一斉に周りが動いた拍子にアリスと手が離れてしまった。

「アリス！ アリス！」

「ソフィー……」という彼女の声が人に紛れて聞こえなくなっていく。

人波にうずもれながら、大きな不安に包み込まれた。

アリス、どこ行っちゃったんだろう。

ここはどこ？

じつとりと湿っぽい香りのする、どう見ても裏通りだろう場所に迷い込んで来てしまった。月明かりだけが頼りの暗がりの中、どこからか絶え間なくピチャピチャと雫が垂れて足元に浅い水溜りができていた。壁には見たこともない虫が壁を這っていて、時おり誰かの怒鳴りあう声が反響しながら聞こえてくる。

怖い。

何が出てくるのか分からない。助けを求めようにも、こんな所に

いるモンスターたちを信じていいのかも分からない。

レンガでできた建物の間に挟まれながら、不安に胸元の服をギョツと握りしめた。

どうしよう。

「お久しぶりね、ソフィア」

それに肩が大きくビクつく。

私のことを知ってる？ こんな所で？

それにこの声

振り返って“まさか”という思いが確信に変わった。

「リ……ザ」

腕を組んでにっこりと微笑む彼女の後ろには、下卑た笑いを浮かべる男たちの姿があった。

s t . ?

Der Werwolf (後書き)

あとがき

犬のお巡りさんならぬ、ヴァラヴォルフのイケメンお巡りさん。

ヴァンパイアと違って庶民なので、仕事終わりはきつと豪快にビールとソーセージ(笑)

不敵な笑みを浮かべるリザと再会。

【本文中の独語】

・ Entschuldigung「エントシュルディグング」：すみません

・ Scheisse「シャイセ」：くそ

「いや、やめてっ……!」

男の一人に後ろ手に拘束され、身動きが取れなくなった。

目の前には人間っぽい人から爬虫類の顔をした者まで、十数人がニタニタと笑いながらこちらを見ている。

「いや、やめてっ……」 だってよ、きゃわい〜」

顔中にピアスをあけた男が、ヌラヌラと光る長い舌を近づいてくる。必死に顔を背けて抵抗するしかなかった。今にも舌が肌に当たれりそうで、荒い鼻息と共に、吐きそうなほどにひどい臭いが漂ってくる。

「ソフィア、助けて欲しい?」

リザは満面の笑みでそう言い放った。

久しぶりを見る彼女。この町にいたんだ。

「助けて欲しければ、あの方へあの件についての告白書を書きなさい。本当は、私は悪くなかったんだって。全部あんたのせいだったんだって。そして今すぐここから消えるのよ」

ビツと腕を伸ばしてどこか指さす。

またあの人絡みのこと。諦めてなかったんだ。

「ねえ、リザ……。あなたはあの人のが好きなの」

「はあ？」

リザは左頬を上げて、顔を不愉快そうに歪めた。

「地位？ それとも外見？ そんな表面だけであの人は」
「知ったような口を利くんじゃないわよ！」

リザに強く胸倉を掴みあげられる。その表情は、私をひどく憎んでいるというより、とても深い悲しみに包まれているように見えた。

「全てよ。あの方の全てが好きなの！ なのにあなたのせいで！
あなたのせいで、あの方と私は引き裂かれたんだわ！」
「リザ……」

うつすらと涙を浮かべるその瞳は、今まで聞いてきた彼女のどんな言葉よりもその内面を強く伝えていた。
まるで純粋な乙女のような。真っ暗な空に輝きだした一番星のような。

陰りのない、はかなくもまっすぐな光が垣間見える気がした。
それほどまでに深くあの人を想っているんだ。彼女のやっていることは正しくなくとも。

「おいおい、もういいだろ？ そろそろ始めさせるよ」

男の一人がクルクルとナイフを回しながらそう言った。それにリザは顔色を変える。

「始め……ち、ちょっと待ちなさいよ！ 約束が違うじゃない！
言ったでしょう？ 私はただこの女を脅」

「うるせえ！」

パシン！ と男に頬を叩かれた彼女の体は、地面にあっけなく倒れた。

「リザ！」

水溜りに転んだ彼女は顔までドロがまみれた。リザはキツと頬を叩いた男を睨みつけた。男はリザの元へ屈みこみ、ナイフをちらつかせながら顔を覗き込んだ。

「何言つてんだ？ お前みたいな小娘に命令される覚えなんてねえんだよ」

「そうそう。お前も道連れ。売り飛ばして儲けも二倍だ！」

「まずはオレたちと心行くまで遊んでもらうがな。ひひひひ」

好き勝手にそう述べる彼らに、リザは怒りに打ち震えていた。

「あんたたち！」

「じゃあソフィアちゃん、お服を脱ぎまちょうねえ」

男はそれを無視して立ち上がると、キラリと光るナイフをねつとりと舐めあげた。ガツと乱暴に私の服をつかみ、ナイフを押し当てる。男たちのイヤらしい笑みに、ゾツと悪寒が駆け巡った。

「いや、やめて……ッ！」

「へへ、楽しませろよ」

「全員手を頭の後ろで組んで伏せろ！」

凜とした声に周囲は凍りついた。
ダンさんが銃を構えて佇んでいる。拳銃の先が鈍い光を放って、男達に向けられていた。

「ちツ……サツだ」

「何をしている、早くしろ！」

「こうなったら……日ごろの怨みを晴らしてやる！」

隻眼の男が古びた巻き紙を取り出し、クルクルと紐を解いて広げた。

ルルーたちが狂言でリザを襲ったとき、魔法陣を描いていた紙と同じもの。魔力の染み込んだあの紙があれば、人間でも魔力の弱いモンスターでも、強力な魔術を使えると聞いた。

魔法陣が緑色に光りだし、何か黒いものが矢のように次々と飛び出してくる。

“ガウガウガウガウツ！”

「！」

姿を現したのは、数十頭もの犬だった。

シエパードのようにも見えたけれど、もちろん普通じゃない。皮膚はところどころが赤く焼けただれて骨が見え、口の中は黄ばんだ鋭いサメのような歯がびっしりと並んでいた。

ネタネタとしたヨダレが糸を引いて流れ落ちる。血のように真っ赤な両目がランランと輝いていた。

ひどい油の匂いが立ち込める。

「ヘルハウンド
地獄犬……」

ダンさんがそうつぶやく。この数を目の当たりにしてか、チツと舌打ちした。

“ウウウウ”と低い唸り声を上げ、ヘルハウンドたちは足をまげて低く頭を下げた。筋肉粒々の肩が強調され、恐ろしさに拍車がかかる。ボタボタと鋭い牙の間から生臭いヨダレを滴らせて彼を威嚇していた。

「くそ……っ！」

ダンさんは構えていた銃を一旦上げると、脱出経路を探るかのようになり瞬時に見渡した。この辺りは横道こそあれど、どれも細くて横向きにしか進むことができない。走って逃げられそうな道は彼らが塞いでいる。

三人が逃げ切るのはかなり難しいようなのは、私から見ても明らかだった。

どうすればいいの？

数頭が私の方を調べるかのように、スンスンと鼻を引くつかせる。必死で体を引いた。

「おい、下手なことはよせ。すぐに他の警官が応援に来る」とダンさんが言う。

「その頃にはお前さんの息はないだろうがな、へっへっへ」

「警察に怨みがあるなら、オレを好きにだけいたぶればいい。そのかわり二人は解放してやれ。何をしようにも、寿命の短い人間なんか役に立たないだろう」

「その人間だから価値があるのさ」

それにダンさんは目の奥を、わずかにギラリと光らせた。

「何だと？ どういうことだ」

「そりゃあ……」

「おい！」と別の男が腕を叩く。

「あ？ 別にいいだろ。あいつもどうせ死ぬんだからよ」

「誰か近くのヤツに聞かれたらどうすんだよ！」

「あ、そっか」

ダンさんの方を見ながらニタニタと笑う。

「というわけだ。悪いなあ」

ヘルハウンドたちに一斉に襲い掛かられば、いくら彼だって考えるよりも早く、体が動いていた。

「止めてください！」

ぼんやりとしていた男の手を払い、ダンさんの元へ走って両手を広げて立ちふさがる。

「あの女、売り物の自分なら傷つけられないと思って！」と男の一人がくやしそうに齒噛みした。

「アンタ、何やってんだ！」

ダンさんに腕を引っ張られ、隠すように彼の後ろへと押し込まれた。

前歯のない男が、まるで幼子を諭すかのように膝に手を当てて私を見る。

「いいか、譲ちゃんよく聞きな。ヘルハウンドに噛まれるとどうなるか……知ってるか？」

ダンさんの背中から男とにらみ合う。

「かまれたところから熱う〜い油を注がれるみてえに、ぐうるぐうる血管を通って全身内側から肉を溶かすんだ。そりゃあもうブクブクに焼けただれる。最後に残るのは骨だけだが、それまで三日三晩苦しみ続けるのさ。もちろん譲ちゃんのその可愛いお顔も溶けてなくなつてゴーストみてえに真っ白い骨になつちまうぜ。たとえ……かすり傷でもな」

ヘルハウンドが鼻息を荒くして、そろそろと足元へ近寄ってきていた。

「や……っ!」

「しっ、静かに」と口を塞がれる。

「奴らは、目があまりよくない分、音や匂いにはかなり敏感だ。刺激するな」

それに頷く。

けれど分からなかった。どうすればいいのか。それはきつとダンさんも同じ。このままここで終わってしまうの？ それを知ったあの人はどう思うだろう。勝手なことをするからだ、やっぱり怒るかな。

「悪かったわね」

不意に誰かのそんな呟きが耳に入ってきた。
リザ。

彼女は座り込んだままの姿勢でじつと俯いていた。きれいだった

髪もあのときのよくな艶はなく、化粧だってまともになされていない。あの人と結婚するのだと言っていたときのキラキラ輝いていた彼女は、もうどこにもいなかった。

ゆっくりと顔を上げる。まっすぐに私を見つめた。

「悪かったわねって言ったのよ、ソフィー……っ」

“ソフィー”

彼女にそう呼ばれたのは、いつが最後だっただろう。まだ私たちが“友達”だった頃。彼女は確かそう呼んでくれていた気がする。あのときは彼女らに何か思惑があるなんて思わなくて、ここへ来てできた初めての友達だと信じていた。

彼女のそのぶつきらばうな謝罪は、今回のことだけではなく、今までのこと全てを指しているような気がした。

出会って、お茶をして。

絵を交換されているのに気づいて、笑われて、そして

それら全てをひっくるめて、謝ってくれているような気がした。

以前聞いた偽りの謝罪なんかじゃない。本当に、彼女の心からの。

「……ダンさん」

「何だ」

私の中で、ある決意が芽生えていた。このまま終わりになんてしてはダメだと。理由なんて単純。

もう一度、リザとお茶をしたいから……。

「この犬たちさえいなければ、どうにかかりますか？」

それにダンさんは一瞬思考を停止させたようだった。

「何だつて？」

「どうだ？ 怖いだろう。こっちへおいで、譲ちゃん。悪いようにはしねえさ、へへ」

男たちがへらへらと笑って、まるで子犬を呼ぶかのように手招きをする。“おいで、おいで”と。

そんな悪魔の誘いになんて乗らない。

ダンさんの腰に挟んであった警笛を奪い取って、それをくわえながら走った。

「おい！」

“ピイイイイイ！”

鋭い警笛の音がレンガで覆われた周囲に響き渡る。そばの細い路地に体を滑り込ませ、妙な匂いにも構わず奥へと進んだ。ヘルハウンドたちはほとんど反射的に私を追いかけてくる。

狭い通路を横向きに進みながら、何とか振り切る道を探す。なかなか思うように体が行かず、焦りに足が絡みつきそうになった。ヘルハウンドたちもその大きな体が邪魔らしく、進みづらそうにしていた。それでもどこまでも追いかけてくる。

回りこんでいたヘルハウンドの姿を見つけて急いで方向を変えた。少し広いところに出て、後ろを振り返る。ヘルハウンドたちの不気味な赤い目がこちらを見据えた。

「……っ」

急いで駆け出そうとして、足を止める。別のヘルハウンドが地を

蹴ってこちらへ駆けてきた。

目に留まったそばのパイプを上る。

普段なら絶対に触らないであろう、コケだらけの真っ黒に変色したパイプが命綱。彼らは上には来られないはず。その間にダンさんの呼んだ応援が来てくれれば。少しの間、耐えることができれば。

「あつ！」

ツルツルと上った分以上に下がってしまった。途中の金具に掴まって懸命に持ちこたえる。

パイプは思いのほかヌメリがひどく、しがみつこうにもぬるぬると滑って下へ下へと吸い込まれるように落ちていった。

“ウウウウウウウ”

足元に集まってきたヘルハウンドは、風の唸りのような声があげながら私を見上げ、必死に二本足で立ち上がって足かいていた。ガリガリと壁を引っかく音が聞こえる。

悪い油のようなムツとする匂いが辺りにたちこめ、それだけで胸焼けを起こしそうになった。そのうちの一匹はパイプに噛みついてる。それに余計恐ろしさが湧き上がってきた。

「んっ……くっ……」

足かき手を伸ばし、何とか上へと懸命に体を動かした。腕を力一杯に活用して歯を食いしばった瞬間、ゴツと足元のパイプが嫌な音を立てて折れた。

「きゃああああ！」

背中から落下する感覚に、パイプにしがみつきながら目を閉じた。

空気抵抗に髪がなびく。

それはゴツという衝撃とともに終わりを告げた。

恐る恐る眼を開けると、折れた先が反対側の壁にぶつかって止まっていた。

けれど、宙吊りになった背中にヘルハウンドたち伸ばした足の爪や牙がひっかかってロープがビリビリと裂けていく。

もう、ダメ……。

腕は限界まで来ていた。もうパイプにひっかかっているのは指と膝先だけ。爪は白くなり、それ以上は耐えられないと言っていた。

「……っ」

ギョツと目をつむった。

あの時の記憶が駆け巡る。伯爵さんに初めてお城の外へ連れ出され、どこか別の世界へ飛ばされたときのこと。ペリユトンに追いつめられ、角で突き刺されそうになったこと。

「助……て」

もう指に力が入らない。感覚が無い。爪が剥がれてしまいそう。あの時と同じ。とてつもなく大きな恐怖心。

『ヘルハウンドに噛まれるとどうなるか……知ってるか？ 三日三晩苦しみ続けるのさ。……かすり傷でもな』

「誰か……っ」

男の言葉が脳裏を巡る。

喉が震え、その震えすら下へ落ちてしまう原因を作ってしまった。うで恐ろしかった。

怖い。泣いている場合ではないのに、意思に反して涙があふれ出てきた。心臓が異常なほどに早く脈を打っている。耳がいつもより数倍鋭くなって、ヘルハウンドの垂らすよだれが滴る音まで聞こえた。その熱い息遣いも感じられる気がする。

「助けて……お願い……あつ」

最後の力がつきた。

ヘルハウンドが後ろ足で立ち上がるような、爪の引っかかる音が聞こえる。

「ごめんなさい。勝手に抜け出して、こんなことになっても、許してくれるというのなら、どうか、また助けてくれませんか。」

あの時のように

「陛下あああああつ!!」

“ガウガウガウツ”というヘルハウンドの声の中心へ落ちていきながら、私はその人を必死に呼んだ。

「助けるさ。何度でも」

そんな声が耳を掠める。

ポスンと落ちた先は硬い石の上ではなく、柔らかなところだった。柔らかくて、温かな

「護ると誓ったからな」

「陛下……下っ」

柔らかな笑みを浮かべる、あの人の腕の中。
切れ長の眼に美しい黒の瞳を湛えたその人。来てくれた。やっぱり助けに来てくれた。

「大丈夫か？」

「はい」

安心して、ギュツと首に腕を回した。けれどすぐに状況を思いだして、弾かれたように周りを見渡す。犬たちは？

ヘルハウンドたちは確かにそこにいた。

けれども細い足をガクガクと震わせ、尾を後ろ足に挟んで後ずさっている。

「どうした、ソフィア。遠慮せずもっと強く抱きついてくれて構わないんだぞ？」

軽い調子でそう言ってのけたけれど、一体何をしたんだろう？
どうして彼らはあんなに怯えているの？

「おい！ やったか！ 早く……って何だ？」

「誰だ、てめえ！」

王は私を下ろすと、肩にかけていた黒布で顔を隠した。すでに三人になった男が、この光景に息を呑む。

「何してやがる！ 早く行け！」

男にけしかけられても、ヘルハウンドはまったく動こうとしなかった。それどころか、男たちの一人が持っていた紙の魔法陣へ次々

に逃げ込んでいく

「おい、待て！ この……グアアアアア！」

ヘルハウンドを私たちの方へ押しやるうとした男が腕をかまれ、叫び声を上げながら一緒に引きずり込まれていった。

「ちっ！ 奴らに何をしやがった！」

王は何も答えなかった。それに隻眼の男は余計にいら立つ。

「おい、もう逃げようぜ！」

「うるせえ！ サツもてめえらも皆殺しだ！」

男は別の紙を取り出すと、紐を解いてそれを広げた。

「召喚魔術！ 出でよ、我が地獄の猛牛！」

魔法陣が緑色に光り始め、どす黒い煙が湧き出してくる。空気がビリビリと震え、

“アアアアアアアアアアアア”

お腹の底から響き渡るような、空気を押しつけて引きずるかのような咆哮が響き渡った。

尋常じゃない。そう直感した。

元々暗かった空に分厚い雲がかかり始め、月の光さえ覆い隠す。魔法陣からドツドツと波動が起こるかのように、黒い煙が輪になつて広がっては壁にぶつかって消えた。

バサバサバサと紙が震えると同時に、人の背丈ぐらいあるつかと

いう巨大な角が又ツと姿を見せ始めた。

「！」

その角はマグマのような地獄の炎に包まれ、見ただけで体が溶けそうなほどの感覚を覚えた。その禍々しさに体は震えることすら忘れる。

家を丸呑みできそうなほどに巨大で、醜悪な悪鬼の顔が現れた。鼻は無く、目玉もない。眼窩がんかは強い風の渦が竜巻のように吹き荒れている。それが目玉のようにギロリとこちらを見据えた。

“ギアアアアアアアアアアアアアアアアア！”

この世のものとは思えない、実際そうではない光景に体は芯から冷えていった。強い風が吹き荒れて動けない。それを呼びだした男たちですら、恐れおののいて震えていた。

そんな中、王は黒いローブをなびかせて静かに佇んでいた。表情は見えないけれど、とても落ち着いているように感じられた。こんな状況なのに。

「く、くそ……ここまでか」

化け物は肩の辺りまで出ると、何かにつつかえたようにそれ以上は出てこれないようだった。多分、紙の力がそこまでないんだわ。それでも十分。十分すぎるほどに恐ろしい力を湛えていた。

人間の私ですら、その怖さをヒシヒシと感じた。かろうじて立っている状態で、いつまで立っていられるかも分からないほどに。

“ギアアアアアアアアアアアアアアアア！”

怪物は雄たけびを上げると、巨大な頭をぐわんと振ってそばにいた男の一人に噛みついた。

「おい、やめろ、やめ……あああああ！」

抵抗むなしく、口の中へと押し込まれ飲み込まれる。ボリボリと嫌な音に目を伏せた。

「は、ははははは！ やっぱすげえな！」

仲間が襲われたというのに、隻眼の男は感激したように笑う。

「陛下っ……っ！」

彼の腕にギュッと掴まる。それに答えるように、彼は肩を抱き寄せてくれた。

「へっへへ、行けえええッ！」

“ガアアアアアアアアアアアアッ！”

洞窟のように大きな口が私たちに向かって迫ってくる。

もうだめ……。

王はゆっくりと手をあげると、空中に素早く陣を描いてまっすぐに腕を伸ばした。

「召喚魔術？ -70、フレイムアクス」

「！」

男が怪訝そうに顔を歪める。

緑色に光り始めた魔法陣からどす黒い煙が噴き出し、襲いかかるうとしていた怪物がピタリと動きを止めた。

“ギアアアアアアアアアアア！”という鳴き声と共にどす黒い炎に包まれた巨大な怪物が姿を見せる。彼が呼び出そうとしたあの怪物と全く同じもの。

彼らのように顔だけなんてことはない。全身。池のように大きな足も小山のような尻尾の先も全部。そのおぞましい姿を見せつけた。下から見上げるそれは、大迫力なんてものじゃなかった。

すごい。

怪物も、陛下も。ヘルハウンドたちはきつと、こんな彼自身を恐れただろう。

彼らが呼び出した怪物はその姿に闘志をなくし、一瞬で魔法陣の中へ引っ込んで行った。それに隻眼の男も焦る。

「冗談だろ。何だ……なんだよこいつ……うわあああああ！」

よろめきながらガクガクと震える足を奮い立たせ、何とも無様な姿で逃げ去っていった。

王の出した怪物も霧のように姿を消す。

「ハッ、私に挑もうとするなど百万年早いわ！」

私の方を振り返りつてスルリと顔の布を取り払った。

「ソフィア、怪我はないか？」

「陛下」

自分から抱きついてしまった。普段ならそんなことできないけれ

ど、今回ばかりはしっかり抱きついて体を寄せる。

「ソ、ソフィア……こ、怖かったな、もう大丈夫だ」

大きな掌が、ぎこちないながらも慰めるように私の頭をゆっくりと上下する。それだけでそれに冷え切っていた体が温められ、震えていた手足が感覚を取り戻していった。不思議な人だと思う。とても。

「ごめんなさい。あなたの信用を裏切って、勝手にこんなところへ……」

「逃げようとしたのではないんだろう」

それに慌てて首を振った。逃げようだなんて、そんなことは。

「ならば私はそれを裏切りとは言わん」

「陛下……」

甘すぎです、私に……。

「さ、もう帰ろう」

王は私を抱きしめ、頭をポンポンと軽く叩いてくれた。それに妙に安心する。

「大丈夫か！」

「ダンさん！」

彼が息をきらして滑り込んできた。かなり急いで駆けつけてくれたんだろう。苦しげに肩で息をしていた。周囲からは警官たちの警

笛の音が聞こえ始めていた。

終わったんだ。

ダンさんは黒衣をまとった王を一瞥し（王はいつの間にかまた顔を覆っていた）、怪訝そうに眉をひそめた。

「あの、この方は怪しい方ではありません。私の」

私の……？

「えっと……」

「だから僕は怪しいものじゃないんだって！ 放して！ 放してえ
〜！」

聞き覚えのある声。

「な……ナイト様っ！」

その先にはライオンの仮面を被ったまま連行される伯爵さんの姿があった。どうやら伯爵さんもこちらに気づいたらしい。

「あ、大王様とマイプリンセスだ！ おおおおい！ 助けて！ 助けてええええ！」

「うるさいわね！ 黙りなさいよ、このチカン！」

ふ、不審者扱いされてる。

「誤解だつて！ 大王さまあ〜っ！」

「はあ……」

王は頭痛がしたのか、額に手をやってため息をついた。

st.?

For Her (後書き)

あとかき

王の身長等をお知りになりたいというご意見があったので、小話風で以下に記しておきます(サイドストーリーがいつできるか不明なので 笑)。王オンリーですが、見たくない方は今すぐバック!

首からメジャーを下げ、ベスト姿の灰色の猫が前で手を揃えて佇んでいた。

「はじめましてニヤ。このお城にて仕立て屋をさせていただき、早790年。城内テーラーのチーフを務めております、猫人のワダフと申すものですニヤ。えーっと、陛下のお体のサイズを書いた紙……は、どこへやったかニヤ」

とワダフはポケットをゴソゴソと漁る。

「あつたあつた。えー陛下のご身長185センチ、体重68キロ、胸囲94センチ、ウエスト72センチ、ヒップ90センチのスレンダー系マツチヨでありますニヤ。それはもうモデルのようなお体で思わず見とれて……え、ご覧になりたい? それは直接ご本人へ。ではニヤ」

【プロフィールまとめ】

<ザルク・ヴィン・モルターゼフ>

身長:185センチメートル 体重:68キログラム

胸囲:94センチメートル ウエスト:72センチメートル ヒ

ツブ：90センチメートル

s t . ?

The Kid

「Entschuldigend Sie, bitte! 申し訳ありません!」

恰幅のいい署長さんが、とてもおかしな格好で必死に頭を下げていた。私と陛下はソファに座って床にひざまずく彼を見つめる。この署長さんが普段どんな服を着ているのか知らないけれど、目の前の彼はタキシードに身を包んでいた。明らかにこの場にそぐわないその姿。テラテラと滑らかそうな黒の背広に、白いシャツ。黒い蝶ネクタイは少し曲がっていて、モーニングカットのパンツは彼の足の太さもあってかキチキチと今にもはち切れそうだった。

急いで用意したのか、何だかサイズが合ってなさそう。袖も短い。

彼は両膝を立てて座り、大量の汗を額に滲ませていた。青いハンカチがしきりに顔を行き来する。その隙間から、ヴァラヴォルフ特有の色の瞳がやぼったい目蓋の下から垣間見えた。

少し古めかしくどこか騒然とした建物の、一番よい部屋と思われる一室に通されていた。けれど隅の観葉植物は少ししおれているし、ランプはクモの巣がたくさん張っている。そしてどこからか持ってきたらしい、汚れた短いカーペットをまるでお城のレッドカーペットのように敷きつめていた。

まさに急ごしらえの場。見栄えは決してよくはない。けれど彼らなりに歓迎しているんだろうと思うと何だかとても微笑ましかった。

「へ、陛下自らが隠密で町の視察にいらしているとは知らず、何たる無礼をつ!」

連行されてしまった伯爵さんを迎えに来たはいいけれど、王も全身黒づくめのかかなり怪しげな格好をしていたこともあって、正体を隠したまま彼を連れ出せずこんな大事になってしまった。

王が顔を覆っていた布を取ったときの、周囲の驚きっぷりは尋常じゃなかった。怪しげな彼と私に対して、取調室でタバコをふかしながら高圧的に尋問していた刑事さんたちが一瞬で青ざめ、口をあんぐりと開けたまま随分長い間硬直していた。タバコの灰が毛むくじらの手の甲へ落っこちて焦げるまで。

『い、い、急いで署長を呼んでまいります！』

と一人の刑事さんがすっ飛んで行って、上からギーギーガタガタという音が続いた後、ちぐはぐなタキシード姿の署長さんにこの部屋へ通されて今に至る。

王と普段から何ともなしに会話している、シュレイザーさんやレオ様のような貴族たちばかり見ていたからかしら。何だかすっかり忘れていた。

私の隣に座るこの人はこの国の頂点に君臨する人で、とても特別な人だつてこと。

この国の人全てが彼を畏れ、子供から大人まで彼の名を知らないものはない。彼に関する本は何百冊とあって棚をいくつも占領し、学校では彼の成し遂げたことがテストに出る。他国の民すら彼の話題を酒場や食卓でもしきりに持ち出し、その功罪について熱く論議を繰り広げるといふ。

そんな人物がこんなところにいるんだから。

さっきまで読んでいた歴史書の人物が目の前に立っていたような衝撃だろう。

なら、この人の隣に座る私は一体どんな風に映っているのかしら。今更だけど、もしかして私はとんでもない人に好かれてしまったんじゃない……。

「ああ、どうすれば」と署長さんがつぶやく。

署長さんたちに非があるわけではないけれど、“ヴァンパイア王国史上最も冷酷”と囁かれる王のお供を捕らえてしまったとあれば、解雇になるか首が落ちるかと真つ青になっていた。

当の王はさつきから目を閉じて腕と足を組み、ふんぞり返るように座ったまま何も喋らない。その沈黙がまた恐ろしさを生み出す。彼がそんな態度なのはこの状況が面倒だからかしらとも思っただけれど、思い返せばこの人はいつもこうだったかもしれない。

笑わない、感情を出さない、そして何もかも突き放したかのようにつきごく冷たい。

おかげでこのあたり全体が戦々恐々と震えているかのように感じられた。隅の観葉植物ももつと萎びて見える。

「す、全ての責任は、この私……の部下であるダニエル・ゾイゼが全て被ります！」と隣で同じく両膝をつくダンさんの背中を叩いた。「え？ いやいや、そこは署長だろ。何でオレオンリーなんすか？」とダンさんは顔をしかめる。彼だけは普段どおりのようで、焦った様子もそれを堪えている様子も見られなかった。

「だ、だあらっしやい……！ 下の監督はおみやあさんに頼むと言うたでしょうが！」と小声で叫ぶ。

「だからそれもひっくりくるめたトップがあんただって」

「いっつも問題起こすおみやあさんはともかく、ワシに何かあったら可哀想でしょうっ？」

「おいこの人、めちゃくちや自己中なんですけど」

私の視線に気づいた署長さんがオホンと咳払いをした。

「ほれ何ぞ陛下と姫君を楽しませる話を振りゃあ」と肘で彼を小突いた。

それにダンさんは肺にたまった空気を全て出し切るかのようなため息をついた。キツと王を見据える。

わざとらしく、

「女性を連れてのお忍び視察はどうでしたか、へ・イ・カ」

「ドウアン！」

それに署長さんは、“任せた自分がバカだった”とばかりに頭を抱えて苦しげに身悶える。

王は長いまつげをゆっくりと上げるように目を開いた。漆黒の瞳でまっすぐダンさんを捉えた。

「随分とトゲのある言い方だな」と余裕たつぷりに返す。本当にいつもと雰囲気が違う。

「あれ、そう聞こえましたか。そんな気はなかったんですけどねー」

「彼女はカムフラージュに連れてきただけのことだ。フシダラなことでも想像していたのかヴァラヴォルフ」

「オレにはちゃんと名前がありますが」

「生憎大して能のない者の顔と名が覚えられんのだ」

「へえ、ヴァンパイアにはそれほど能があまりに。ヒョロヒョロの体をされてるわりにすごいんだ。おつと失礼」

何だろっ、このイヤミ合戦は

王は小さく鼻で笑う。何もかも見透かしたように「そうか」と声

を漏らすと、まるで相手を焦らして楽しむかのようにゆっくりと膝の上で肘をついた。

「ヴァンパイアに支配されているのがそれほど不服か。プライド“だけ”は高いようだからな、ヴァラヴォルフは。ああ、今のは集合体のことだ。もちろん君も含まれているが」

ダンさんのコメカミにピキッと青筋が浮かんだ。

「それはどういう意味なんすか」

「“それ”とは？」と王はとぼけながら革張りのソファアへもたれかかり、私の肩に手を回した。馴れ馴れしいそれに私はそっと彼から距離を置く。

「あれ陛下嫌がられてますよ」

敏感にそれに気づいたダンさんに指摘され、今度は王の顔が引きつった。

「照れているだけだ。なあソフィア」と私を見つめる。

「ソフィア」

確認するかのように、そしてどこか噛み締めるように彼は私の名前を口にした。それに王は私の肩にまわした手に力を入れる。ちょっと痛い。

「あ、あのダンさん、先ほどは危ないところをありがとうとつございました」と何とかこの場を和らげようと話を変えた。署長さんのハンカチなんて絞れそうなほどに湿ってるから。

「いや、助けられたのはオレの方だ……ソフィア」熱を込めたようにそう言う。

「私が？」

私はただヘルハウンドに追いかけていただけなのに。

「ああ。けどもうあんな無茶はしないでくれ。たまたまい方に転んだだけだ。危ないことはオレに任せればいい」

ダンさんの言うことは尤もだね。ああいう場合はプロに任せるべきよね。私はどうも夢中になると前が見えなくなるみたいだから。

「ま、そういう女は嫌いじゃないけど」

「え？」それはどういう……？」

「オッホン！」と王が咳払いする。

「君は次期王妃に敬意も払えんのか」

「次期“王妃”？」

ダンさんが驚いたように瞠目する。決して次期王妃なんてことはないけれど、もしかすると私を使用人Aくらいに思ってたのかもかもしれない。それに彼の反応から察するに、王が以前婚約していた云々はどうやらまだ町には広がっていなかったらしい。私の処分が終わってからしようと思ってたのかしら。

うん……最低。

けれど王は「証拠を見せてやる」と自信満々な顔でこちらを見るのと、覆いかぶさるように唇を寄せてきた。「あの……」とギリギリのところまで彼の胸を押さえて距離を取った。ダンさんたちから見れば、私たちがキスをしているように見えるかもしれないけれど。

「な、何のパフォーマンスですかこれは」と小声で抗議した。

「もちろん君が私のものだというアピールだ」

「なぜ突然そんなことを。それにそもそも私は陛下のものではありません」

「いや、すでに私のものだ。それに国を支配し、さらには君のような女性とこんなこともし放題だと見せかけたほうがヤツにより一層の屈辱感を与えられるだろう」

「何ですかそれ、性格悪いですよ。や……ちょっと」

「焦らさないでくれ、ソフィア。君の香りで、このままではどうにかなりそうだ」とうっとりしながら悩ましげに眉をひそめる。変態的な発言なのに、それに心臓が少し跳ねてしてしまった。

「し、知り、あの……んんっ」

全ての抵抗を力でねじ伏せられ、強引に唇を重ねられた。しかも彼らに見えるようにわざわざ体の角度を変え、わざとらしく音まで立てて何度もついばんでくる。どうしたというの？ 私までこんな風に巻き込んで。

名残惜しそうにそっと離れると王はチラリとダンさんたちの方を一瞥し、唇を噛み締めて悦に浸った。

私も気まずいと思いつつ二人の方を見ると、署長さんは肩をすぼめて軽く顔を伏せ、ダンさんは怒りに拳を震わせていた。やっぱり警察署でこんなことはダメよね。ごめんなさい。

「……陛下」と諫めるように軽く服を引っ張ると、王は「分かった」とばかりにため息をついた。

「いいから早く奴を連れてこい。私は忙しいんだ」と追い払うように手を払った。

「は、ははあ！ ただいま！」

それに立場が上であるはずの署長さんが真つ先に部屋を飛び出した。たぶん一刻も早くここから出たかつたんだろ。これまたサイズが合っていないらしく、真新しい革靴のかかとを踏みながら歩きにくそうにしながらも最高速度で出て行った。

王はまた目を閉じて何も言わなくなったけれど、残ったダンさんはさっきのやりとりもあってか目で射殺さんばかりに王を見ていた。気まずい。

「あ、あの、ダンさん。一つお聞きしたいことがあったのですが」

そういえばあの小さな男の子のことを聞かなきゃと思い出した。けれどちよつど話を切り出したそのとき、誰かが扉に突撃するよつに飛び込んできた。

「ダーニー。お弁当持ってきた！」

バスケットが浮いている！ と思うくらいまだ小さく幼い男の子。茶色く柔らかそうな髪をかき分け、可愛らしい耳が二つ生えていた。

「ルッツ」とダンさんが振り返る。

「ダーニー、よしよしして」と男の子はバスケットをダンさんに渡すと、その腕にギュツと抱きつく。

「はいはい。Danke、ありがとな」

ダンさんは優しい手つきで男の子の頭を撫で、彼はそれに嬉しそつに微笑む。その見覚えのある顔にハツとした。

「そ、その子！」と思わず立ち上がった。

「え？ ルッツのこと知ってる……知っておられるのですか？」

彼は途中でとてもわざとらしくそう言い直した。

そう、その子こそがずっと探していた男の子。ルッツ君っていうんだ。

けれど何と答えればよいのやら。“人間じゃないかと心配して探してた”なんてちょっと恥ずかしくて言いにくくて適当に笑って誤魔化した。

「ヴァラヴォルフだったんだ」と腰を落とすように座った。正直なんだか拍子抜け。結果的にはよかったんだけれど。

ルッツ君は私のつぶやきに反応するようにパッとこちらを振り仰ぐと、

「ううん、ぼく猫しゃんなの。にゃあ！」

小さな拳を突き出し、ルッツ君はキラキラした笑顔でそう言った。か、可愛い……っ。

「バツカ！ ルッツお前、仮にも誇り高きヴァラヴォルフの身で他族を語るんじゃないよー！」

「やだやだ、猫しゃんになるの。にゃあ」

「やめろっつってんだろが！ ほら、耳も引っ込めろー！」

「にゃあにゃあ」

「うるさいー！」

ダンさんの周りをそう言って走り回るルッツ君と、叱るダンさん。仲がよくても微笑ましい。

ルッツ君はこちらへ駆けてくると、ピョンと膝の上に飛び乗った。クリクリとした曇りの無い瞳で、

「僕ルツツ。お姉ちゃんNameは？」

ピコピコと耳を動かす。

ナーメ？ 名前のことかな。

「ソフィア・クローズと言います。よろしくね」

「ソフィア、ソフィア！」

猫が甘えるように、ルツツ君はスリスリと胸に頬をよせてきた。
わぁ、ちっちゃくてかわいい！

思わずぎゅっと抱きしめた。それにルツツ君も嬉しそうに笑う。

「おい！」

王は突然ルツツ君の首根っこを掴むと、強引に私から奪い取って持ち上げた。少し不機嫌そうに眉をひそめる。何をそんなに怒ってるのかしら。

「僕ルツツ。Onkelは？」

プランとぶら下がりながら、ルツツ君は王にそう尋ねた。子供に怖いものなんてないらしい。

「この国に住みながら、私を知らんのか。それと私は“おじさん”ではなく“お兄さん”だ」

「お兄さん？」とルツツ君は王の顔をじっと見つめる。

「そうだ」

「んー……にゃあー！」

少し考えるようなそぶりを見せていたルッツ君は、勢いよく可愛いパンチを繰り出した。

「ぐっ」

それが運悪く王の鼻の辺りに直撃する。打ち所が悪かったんだろう、少し涙目になっていた。

「すみません、ソイツ意味が分からないこと言われると、そうやって誤魔化すんで」

「貴様はなぜ半笑いなんだ」

まださっきのいざこざを引きずっているみたい。

私より随分年上なのに、子供っぽいんだから。

「陛下あっ!」

それにビクリと肩が跳ね上がる。

帽子を脇に挟んだ若い警官が、極度なほどまっすぐ背筋を伸ばして佇んでいた。緊張からか、顔色もすごく悪くて帽子を持つ手もガタガタと震えていた。ノックも忘れていたみたいだし。

「ま、まっことに申し訳ござりませんがこちらへおいで願えませんかでしょうか! お連れ様はかなり情緒不安定になっております、医務室に運ばれてからずずずと陛下をお呼びしているようです」

「知ったことか。なぜ私が」

「大王様ああ、大王様ああ」

どこからともなく聞こえてくる大きな声に、陛下は「ウツ」と声を詰まらせた。

「はあ、行ってくる」

そう言っつて私の頬にキスを落として立ち上がった。何だかんだで優しい。

「Onk eーどこ行くの？」とルッツ君が王の足にまとわりつく。

「おじさんではないと言っているだろう」

「お菓子買いに行く？」

「行かんわ！」

陛下とお菓子……。なんだかちぐはぐな感じ。

「やった！ お菓子、お菓子い！」

「うるさい、行かんと言っているだろう！」

すっかり気に入られてる。それともお菓子に釣られただけ？

「おい、あれじゃあオレがお菓子やってないみたいじゃないか」

二人きりになると、ダンさんはやれやれと立ち上がって私の隣に座った。王よりも肩幅や胸板がある分、何だかすごく大きく感じる。

「弟さんですか？」

「いや、違う」

少し空気が変わった。ダンさんは物憂げな表情で手の中の警帽を見つめていた。

「アイツの両親は事件に巻き込まれて亡くなった。他に身よりもないし、孤児院に連れて行こうとしたんだけど、妙になつかれてそれ以来オレが……。オレ、ガキは大っ嫌いなのに。うるさいし、まとわりついてくるし」と警帽を目深に被って顔を隠した。

嘘だなと思った。あの態度を見ていれば分かる。彼が本当はどんな人か。どんな思いを持ってルッツ君と接し、暮らしているのか。

「何笑ってんだよ」帽子を少し上げて銀色の瞳をのぞかせる。イタズラっ子のような表情だった。

「いいえ。あのダンさん、ひとつお願いしていいですか……」

気になる人が、もう一人いた。

「リザ」

薄暗い取調べ室に一人、彼女が肘をついてふて腐れたように座っていた。私の姿を一瞥すると、体を起こしてわざとらしくため息をつく。ダンさんには席を外してもらって、彼女の向かい側に座った。

「リザ、今は何をしてるの？」

彼女はそれに答えようとはしなかった。

「あ、そ、そういえばあのコウモリは？ 確かいつも一緒に
「うるさいわね！ 知らないわよ！」

話を換えようとしたのも逆効果だったらしい。面倒くさそうに髪を乱す。どう見てもいい暮らしをしているようには見えない。

「リザ、もしあのことを本当に心から反省してくれるのなら」

それに彼女は気色ばんだ。バンツと私たちの間の机を叩く。

「アンタの同情なんかいらないわよ！ 何様のつもり？ あの時私が謝ってあげたからって、改心したとも思った？ 冗談じゃないわよー！」

「リザ……」

彼女はどうしていつもこうなんだろ。強気な態度に出ることで、何かを必死に守ろうとしているように見える。本当はとても繊細なんじゃないかって思った。

「そっだ、一つ面白いことを教えてあげるわ」

私のそんな考えは、彼女のその一言に打ち切られた。

「あんた、お兄さんがいたわよね。事故で亡くなったっていう」と半ば笑うようにそう言った。

「ええ……」

急に何？ 嫌な予感がして妙な汗が掌からにじみ出てくる。

リザは動揺する私の反応を楽しむかのように、大きな瞳を私の頭の上からつま先まで流し見るように動かす。

何だっというの？ その意味深な笑みは何？

「私……」と口を開く。

廊下は王の出現からずっと騒然としていたのに、この部屋はやけにシンとしていた。ランプの周りを飛ぶハエの羽音が聞こえそうなほどに。

「あなたのお兄さんを殺した犯人知ってるわよ」

それに世界が止まった気がした。

世界中の時計の針や振り子が刻みを止めたように、大きな無音の空間が私を包んだように、この世にただ一人取り残されたような感覚に襲われた。それを振り払うかのようにネックレスを握る。

「何を言ってるの？ お兄ちゃんは誰かに殺されたんじゃないわ」

「あんだだっでずつと不思議に思ってたんじゃないの？ 本当に事故なんだろうかって」

リザは机に両手をつくくと、腰を浮かせて私の方へゆっくりと近づいてくる。オレンジ色の明かりに照らされた彼女の唇は、濡れたように艶やかで妖艶に見えた。耳元にその唇を近づけ、まるで空気を押し出すかのように囁く。

「首筋にあったんじゃないの？ 何かに噛まれたような赤い斑点が

二つ」

「！」

『ソフィー、行ってくる。今日は早く帰ってくるからね』

頭を撫でてくれるお兄ちゃんの姿。いつもと同じ仕事へ行く背中を笑顔で見送った。

『遅いよ、お兄ちゃん』

すっかり冷めた夕食を前に、それでも帰りをひたすらに待った。あの日は、お兄ちゃんの大好きなシチューだったのに。帰ってきたら文句を言っ、それから仲良く食べようと思っていたのに。

『ソフィー！ ジェイが……ジェイがッ！』

近所のおじさんが血相を変えて飛び込んできた。

「誰？」

自分でも思っただ以上に低い声が出た。リザはじっと押し黙っている。顔は見えなかつたけれど、息を殺して笑っているように感じた。

「一体、誰だっというの？」

湧き上がってくるのは汚い感情。それは分かった。分かっていたけど、抑えきれない。

「リザ！ 誰だっというの、ねえ！」

彼女の胸倉を掴んで激しく揺らした。

私からお兄ちゃんを奪ったのは誰？ あんなに優しくして温かいものを私から奪ったのは誰？ それに……それに犯人がいるというの？ それをあなたが知っているというの？

「ねえ！ リザ！」

ガタンと椅子が倒れ、大きな音が響く。異変に気づいたんだろう、ダンさんが駆け込んできた。

「おい、よせ！」と私の腕を掴む。

「リザ！ 誰？ リザ！」それでも諦めなかった。彼女へしつこく手を伸ばす。

「ソフィア！」

ダンさんは無理矢理彼女から私を引き離すと、その場に踏みとどまろうとする私の体を強引に引っ張って廊下へ連れ出した。すぐに別の警官が部屋に入って扉を閉める。

「ソフィア、どうした。何を言われたんだ」

分からない。

分からない！

分からない！

誰かがお兄ちゃんを？ 違う、そんなことはありえない。少なくともヴァンパイアじゃないはず。ここにはブラッド法が、あの法律があるんだから！

違う！ 絶対に違う！

「ダンさん、ブラッド法の違反者は厳しく取り締まられているんですよ。そうなんですよね？」

彼の制服を掴んで必死に問いかけた。教えて、本当のことを。違うと自分を説得するものが欲しい。お願い！

彼は申し訳無さそうに目を伏せた。

「あいにくそれに関しては、警察といえどヴァラヴォルフは一切関係できない。ヴァンパイア独自で決まりを作って、監視して、処罰している。今までどれだけの違反者がいるのか、適正に法が施行さ

れているのかも知らない」

「知らない」？ どうしてですか！ 警官なんですよ！」

「悪い……」

ダンさんを責めたってダメ。こんなただの八つ当たりだわ。

「いえ……すみません」と手を離れた。何をやってるの？ 額に手を当てた。こんなきつとりザの思う壺だわ。彼女は私に仕返しをしたいだけよ。

「あんた人間だよな。純粹な」

そうポツリと言う彼を見上げた。

「向こうの生活から無理矢理引き離されて来たわけだ。本当は帰りたいんだろ？」

それに少し冷静になった。彼は一体何が言いたいの？

手をぎゅっと握られる。王のように傷一つ無い白く繊細な指ではなく、無骨で節くれだった大きな手だった。けれどまるで彼の中の情熱をあらわしているかのように熱い。

「悪いことは言わない。やめたほうがいい」

“やめたほうがいい”って何を？

彼のシルバーの瞳をじっと見つめる。まるで鏡のように、情けない私の顔が映っていた。

「人間はヴァンパイアの傍にいないほうがいい」

「！」

はっきりとそう言い切るダンさんに、私は返す言葉を失った。

「見せてやるよ、来い」

混乱する私の手を引いて、彼は薄暗い廊下の奥へと歩を進めて行った。

st.?

The Kid (後書き)

あとがき

王の前でソフィアを口説く猛者ダンと、また事態を引っ掻き回すリザ。

【本文中の独語】

- ・ Entschuldiggen Sie, bitte 「エントシユルディゲン シエ ビツテ」：申し訳ありません
- ・ Danke 「ダンケ」：ありがとう
- ・ Name 「ナーメ」：名前
- ・ Onkel 「オンケル」：おじさん

【本文中の名古屋弁】

- ・ 合ってるのか分かりません（笑）

ジャラジャラと鍵の束の中からの確に一本選び出し、ダンさんはそれを鍵穴へと差し込んだ。油の切れたちようつがいが大きな音を響かせる。

地下の拘置所はどこか薄気味悪く、消えかけのランプの火が大きくなったり小さくなったりを繰り返していた。

先に入ったダンさんに続いて中へ足を踏み入れる。

何かしら、さっきからずっと変な音が響いている。船の汽笛のようない音と……ビリヤードのように玉がぶつかり合う音。それに重い何かを引きずるような。

何だろう？

「この間保護した。覚悟して見てくれ」

一番奥の檻の前でダンさんはそう言って足を止めた。”覚悟して”という言葉に引っかかりを覚えつつ、彼の隣に立って中をのぞく。

「っ！」

思わず両手で口を塞いだ。

目の前に“モノ”を見た衝撃に胃液が喉まで上がる。

「大丈夫か？」と背中を擦ってくれた。

「はい……」

深呼吸をして胸を押さえた。目を閉じながら思い返す。

さっきのあれは何？ 何なのあの物体は！

ゆっくり眼を開いた。

檻の中の“それ”は「ンンン」「と息継ぎもなしにずっと低い

唸り声を上げていた。これで船の汽笛のような音の正体だったんだ。腐りかけのボロボロで真っ黒な体、数箇所の変形は目や鼻や口の名残だと悟った。手や足はダラリととんでもない方向へ捻じ曲がっていて、それはどうやら誰かにそうされたのではなく痛みを感じないが故に自分自身でやってしまうのだらう。体を引きずる音や腕や足の関節がゴリゴリとこすれるような不気味な音が鳴り響いていた。思わず耳を塞いでかがみこみたくなる。

「これが非人間化した姿。おそらくブラッド法ができる前のヤツだ。オレたちは“エンプティーズ（空っぽの人たち）”と呼んでいる」「エンプティーズ？」聞いたことがない。

「ヴァンパイアは血を吸うとき同時に唾液を流し込んでいる。人間に痛みを感じさせないようにすることと、快楽を与えて抵抗意欲を削ぎ性欲を満たしやすくするためのだ」

『異性間の吸血行為については、同性間と違ってすげえ快感が伴うんだ。お前もいつこの優しそうな面した公爵様にガブツてやられるか分かんねえぜ？』

シェイラさんの言葉が甦った。

「そのためにヴァンパイアの唾液には濃度の高い魔力が混ざっている。だから短時間にある一定量の血液を吸うと同時に入り込んだ唾液が細胞の内部に入り込んで定着し、あつという間に変異を起こす。それが人間の非人間化する四十パーセントの血液量、“限界値”だ」

徐々に冷静になりつつあるというのに、どこかそれを他人事のように感じていた。あまりのことに、頭の理解がつかないんだらう。ダンさんは続ける。

「肌や筋肉の色や形や質を変え、神経を狂わせ、脳を犯す。そうやってこんな怪物を作り上げるんだよ。血だけじゃない、魂も理性もない空の肉体。意思のあるアンデッドたちとも違う。全てを失ってその身だけになっても、死ぬことができず、苦しみだけが永遠にまわりつき続けることになる」

死んでいるようで生きている。自我はなくとも痛みはある。こんなことってあるの……。

「その、限界値さえ超えなければ大丈夫なのですか」

ダンさんは神妙な面持ちで首を振った。

「非人間化することはないただだ。多く血が失われれば当然命に関わる。吸血は本能だ。どうしたって強く求めてしまっただろう」

人間じゃない。

そのことが、こんなにも大きな障壁になるなんて。

ダンさんは細目で檻の中を見ていた。彼はその視線の向こうでヴァンパイアという存在を見ているような気がした。

「ヴァンパイアと一緒にいるということは、常にこうなる危険性を帯び続けるということだ」

重々しい言葉。喉の奥へ、ごくりと唾液を流し込んだ。

私もいつか……こうなってしまうの。

「分かったか？ あんたは、ここにいちやダメだ」とダンさんが私の両肩を掴む。その銀色の瞳は必死に危険を訴えていた。彼がヴァンパイアに対していい印象を持っていないから、なんてそんな単純

なことじゃない。

ヴァンパイアがいかに人間にとって害のある存在か、とても切実に伝えようとしていた。

「今すぐにも逃げたほうがいい。あいつらが優しくするのは、あなたの血が欲しいからだ。ブラッド法だっていつまでも存在し続けられるか？ 王だってヴァンパイアだ。血を飲むことは、乾いた喉に水を流し込みたいと思うことと同じ。自分の中から湧き上がってくる強く自然な欲求を押さえつけてまで、あの法を堅持し続けられるのか？ もし王が廃案書にサインすれば、一発で……」

これほどまでに大きな危険から、あの法は私たちを護ってくれている。

それなのに、その法を生かすも殺すもこんなにも心もとないなんて。

ダンさんが必死になるのも分かる気がした。彼はきつとすごく優しくくて心配性な人なんだろう。身寄りの無いルッツ君を引き取って育てているくらいだから。

彼の指が肩へ食い込む。私の肩よりもきつと、彼の心の方が痛んでいるんだと思う。

「ソフィア、早くやつらから離れるんだ。逃げたらここにはいられなくなるけど、オレも別の仕事を探すし、オレの分削ってでもお前を食べさせてやるから。絶対に苦勞かけないように働くから」

” お前を食べさせてやる”？ ” 苦勞をかけないように”？ え？

何だかそ、それって……。ドクドクと心音の高鳴りを覚えた。端正な顔の彼を見つめる。ダンさんは大きな決意を抱えているように見えた。

「ソフィア、オレと来い」
「っ！」

突然のことに顔が一気に熱くなった。全身から湯気が出そうなくらい。

「そ、そんな、あの、で、でも今日会ったばかりで……ですから、えっと」自分で何を言っているのか分からない。

「時間なんか関係ない。一時の気の迷いでもない。オレは本気だ」
「ダン……さん」

鏡のような瞳に胸がくすぐられた。その真剣な眼差しは、決してからかっているわけではないと分かる。心配からくるものだけではないことも。

『私……犯人を知ってるわ』

リザの言葉に心が乱される。

『オレと来い』

ダンさんの言葉に揺さぶられた。

『あの子は吸血鬼に殺されたのさ！』

信じたいという気持ちと、信じていいんだろつかという不安。それらはまるで水と油のように弾き合い、いくら混ぜても答えが出ない。

「ダンさん、私」

「ロイヤルストレートフラアッシュ！」

別の区画からなのか、大きな声が空気を震わせながらここまで響いてきた。それも……聞き覚えのある女の子の声。

駆け足でその声の方へ向かうダンさんの背中を私も追いかけた。

「ぐあああ、負けたああ！」

「ありえんぜ、譲ちゃん！」

「丸儲け丸儲け！ あーっはっはっはっは！」

見えたのは大笑いしながらポケットにお金をしまいこんで、賭けに興じるアリスの姿だった。しかもこなれた感まで感じる。

ア、アリスったら何をしてるの……！

隣でダンさんの舌打ちが聞こえた。

「お前ら、檻の中で何をやってんだ！」

「やべ、バレた！」

男たちは慌てて目の前のトランプとお金を服の中へしまいこむ。そんなことをしても、もう見つかってしまったあとなのに。

「あ、ソフィー！ ソフィーだ！ おーい！」

私のことに気づいた彼女が大きく手を振る。環境適応能力の高さに驚いた。

「やれやれ賭けも刺激的でたまにはいいかもね」

トトトトとミセスグリーンが一人鉄格子の隙間から出てくると、私の肩へとよじ登ってきた。

「え、ミセスグリーンもいたの？」

「逃げ回ってたアリスと偶然会ってね」

「そうなのソフィー。何だかよく分からないけど、ソフィーとはぐれたあとケンカに巻き込まれちゃって」と鉄格子の間から顔をのぞかせる。

「いや、譲ちゃん。アンタが真っ先にけしかけてたぜ」とヒゲもじやのおじさんに指摘され、そうだったけととぼけたように頭をかいた。け、ケンカをしかけるなんて……。無事でよかったけど息を吐く。

「あ、あのダンさん。さっきのお話ですが」

小声のそれに、彼の体が緊張気味にこわばったのがわかった。

「私、帰ります」と彼を見上げた。

彼はため息をつきながら、どこか悲しげに頭を振った。

「ソフィア……」

「ありがたいことですが、でも私だけなんて。それに」

『聖書に手を置いて誓ってもいい。君を裏切らないと』

そう言ってくれた人がいる。

信じなきゃ。あの人だっけと懸命に戦ってるんだから。キユツと唇をかんだ。

「そっか。ソフィア、悪い。脅そうと思ったわけじゃないんだ」と申し訳なさそうに俯く。

「大丈夫です、ダンさん。いずれ考えなければならぬことですか

ら

そう、彼らとともに暮らす以上は。

「何の話だい？」と小首を傾げるミセスグリーンに「なんでもないと笑って首を振った。

「ダーニー！ onkeyにお菓子買ってもらったあ！」

地下まで下りてきたらしいルッツ君が元気よくダンさんに駆け寄る。大きなキャンデーの袋を手に彼に飛びつくように抱きついた。

「お、そりゃよかったな」と抱き上げる。小さな手でアメを口に入れてもらう光景は、本当の兄弟か親子みたい。

その向こうで面倒くさそうに立つ王へ、しぶしぶ頭を垂れる。何はどうかあれヴァンパイアのことは大嫌いらしい。

アリスも無事に外へ出してもらって、馬車に乗り込もうとする私の腕を突然ダンさんが掴んだ。

耳元で「医師師には気をつける」と囁かれる。

見上げたその真剣な目には、僅かな不安が滲んでいるように見えた。

「 827 W……W」

膨大な量の本から、目的の物を探す。いつもなら『あなたもできる簡単魔法』や『紙とエンピツで魔物を呼び出そう』なんてものに

惹かれそうだけれど、今はそれどころじゃない。

「あつた。『警察白書 一九六〇四年版』」

かがんでパラパラとめくる。ブラッド法の違反者について調べてみた。紙の上に指を滑らせる。

王には聞けない。ヴァンパイアが私のお兄ちゃんを手に掛けたかもしれないなんて知ったら、ヴァンパイアに疑いを持っているなんて気づいたら、あの人はそれをとても気に病んでしまう。ただでさえあの肩にたくさんのものがのしかかっているのに。

彼にこれ以上負担はかけられない。自分でどうにか真相をつきとめなきゃ。ブラッド法がきっちり適用されているとさえ分かれば。

「ない」

ブラッド法ができた翌年から一番新しい情報まで調べてみたけれど、一切の記載が無かった。まるでその存在すらひた隠すかのよう

に。
やっぱり後宮内の図書館で得られる情報なんてたかがしれているわ。数は多いけれど、この国の内部に関することを知ることなんてできない。

「ソフィー」と小声で呼ぶアリスを振り返った。

「どう?」

彼女が私の隣にかがむ。

「見て。ほらここ、この文」

一緒にブラッド法について調べてくれていた彼女は、国内法全集という分厚い本を開いていた。今までにないほど細かな文字がびっしりと並んでいて目がチカチカしそうだった。よく探してくれたと

思う。

「読むわね。“この法律に違反した場合、第四章にあげられる罰則が適用される。これは同時にサルタイアー・サイクル内に一度医師の血液成分検査を受けることの義務を付与し、全てヴァンパイアは違反の有無を調査することに同意するものと見なされるものである”」

難しく聞こえるけれど、それって

同じことが頭をよぎったんだろう。コクリとアリスが頷いた。

「つまり医師が一番深くこの法律に関わってるんだわ。この判定で全て決まるんだもの」

「医師師……」

“彼”の顔が浮かんで消える。

『医師師には気をつける』

ダンさんもそれを分かっただけでああ言っただらう。

でも確かめたい、知りたいという気持ちが自分ではどうにもならないくらい膨らんでいた。これ以上疑心暗鬼な気持ちを抱えたまま、ここにいるなんてできないわ。

「でもソフィーのお兄さんがもしかしたらヴァンパイアにだなんて……」

アリスはそれを自分自身の痛みのように感じてくれていた。明るい彼女が眉間にシワをよせて目元に影をおとす。

本当にお兄ちゃんを手を掛けた人がここにいたら。私は一体、ど

うすればいいんだろう。

『ソフィア！ 兄ちゃんと一緒に絵を描きに行こうか』

そう笑ってくれた人はもういない。

それを奪った相手は、何の罰も受けずにここでのうのうと暮らしているかもしれないのに……。ぎゅっと拳を握りしめた。

「ソフィー大丈夫。きっと何かの間違いだわ」とアリスが背中に手を回してくれる。

「ありがとう」とそれに応じるように彼女に抱きついた。優しく背中を叩いてくれる。今はそれが何より心強かった。

Leonard · V · Morterzefz

医師師の研究室が並ぶプレートにその名を見つけた。周囲を見渡して誰もいないことを確認し、扉に耳をつける。中はとてもシンとしていて、人の気配は無かった。ノックをしても誰も出てこない。鍵がかかっていたらどうしよう。

そう思いながらドアノブをひねる。それはあっさり開いた。ほんの少しだけ開いて体を滑り込ませるとすぐさま扉を閉める。ドアを背に小さく息を吐いた。

はあ……。本当はすごく怖いし気がひける。

こんな、他人の部屋に勝手に忍び込むなんて。それも王に貰ったお城の中へ続く鍵と透明マントを使って。

とても悪いことをしているのは分かっている。みんな、本当にごめんなさい。

視線を上げて部屋を見渡した。かすかに薬品の匂いがただよっている。キャビネットにはたくさんの瓶や天秤が納まっていて、壁には人体の図が書かれたポスターやお薬のリストが張られていた。どこかに血液検査の資料があるはず。それを見ればきっと何かわかる。

研究室の中の扉をさらに開け、執務机とたくさんの本が並んでいる部屋へ足を踏み入れた。とてもきちんと整理された部屋。

どこ。どこにあるの？ あちこち乱さないように丁寧に探す。あそこ……？

目についた茶色の戸棚を開けるとABC順にファイルが並んでいた。やった、カルテだわ！ これを見れば何かわかるかもしれない！ 頭から被っていたマントを取る。一番調べるべきなのは……。

『レディエンス家とは関わるな』

そう、レディエンス家のもの。

L……L……L。
レオ様がその担当なのかは分からないけれど。あるならそれに越したことはない。

L……L……。
やけに喉が渴いてきた。

でも王が一番その存在を懸念しているレディエンス家さえちゃんとしていれば、他はきっと大丈夫である可能性が高いはずだわ。それさえ確かめれば、もうこの話は終わりにする。

L……L……L。 あ……っ た！

見つけたレディエンス家のカルテから、すばやくファイルを一っ取り出した。

“Glaydow Aron Ladyence”

グレイドー？

『グレイドー、お前も挨拶を』

あの人……！彫刻のような美しい顔、燃えるように赤い髪は短く切りそろえられ、狼のような金色の鋭い瞳におぞましい光を宿したあの。

激しい焦燥感に駆られるように、中をあらためた。まるでパンドラの箱を開けているような心地がする。ああ指が震える。こんなことをしているうちに、レオ様が帰ってきたらどうしよう。怒るよね、絶対。

かさかさの指先でできるだけ早くめくる。定期健康診断表、眼科、内臓機能、聴力……どれ？ここにある保証はない。まさか別の場所？病歴一覽、呼吸器……どれ？どれ、これじゃない。違う。循環器、消化……あつた！”血液検査結果表”と書かれたそれを急いで引つ張り出す。

ずらりと術式が並んでいて、何が何だかさっぱり分からない。

やっぱり医術の知識のない私には無理だわ。いえ、帰って図書館で調べれば何とかなるかもしれない！敏速にそれを乱雑に折りたたんでドレスの中にしまいこんだ。他の紙を揃えてファイルを棚へ戻す。戸棚をピッタリと閉じた。これでいい。

もう帰ろう。長居はダメ！早く！

透明マントを握りしめ踵を返したそのとたん、鼻に何かがあたつた。誰かの胸元……？

冷水を浴びせかけられたかのように全身が震えた。

「何をやっている」

静かなのに殺気を含んだかのようにゾツとする声。

レオ様じゃない……。ぎこちなく顔を見上げた。

萎縮した瞳孔、ピューマのような金色の瞳のその人が立っていた。今まさにカルテから紙を抜き取った相手。グレイドー・アロン・レディエンスその人。

どうして、どうしてここに！ 全身から汗がふきだす。

後ずさるうとした瞬間、手首を思い切りつかまれ叩きつけるように床へ投げられた。掌がすれてヤケドをしたように熱い。全身を打ちつけて痛かった。

乱れた髪の間から彼を見上げた。

いつからここに？ ずっと見てたの？ だとしたら、カルテを抜き取ったことが分かってしまう！

どうすれば……。

彼はなぜかジッと私の足元を見ていた。それを辿る。

「っ！」

倒れた拍子にドレスがめくれて太ももが露になっていた。急いでそれを覆い隠す。

レディエンス家のその人はゆっくりと上唇をなめた。真っ赤な舌が恐怖をそそる。

「いや……っ！」

彼は私にまたがると、とんでもない力で私を床へぬいつけた。唇から除く牙が怖い。なんて恐ろしい空気をまとっているんだろう。

片手だけで私の両手を頭上で固定すると、もう一方の手で私の唇をなぞった。体が小刻みに震える。おそろしさにぎゅっと眼をつむった途端、氷のように冷たい唇を押しつけられた。

「んん……っ」

足をばたつかせても手を捻ってもびくともしない。舌をねじ込まれそうになって、必死に口を結んで耐えた。

彼のもう一方の手が首へ下りてくる。ゆっくりと圧力をかけられて苦しさに拍車がかかった。

息が……！

空気を求めて大きく口を開けた。それを見計らったかのように彼が舌を滑り込ませようとしたその時

「何やってんの、グレイ」

穏やかなのに、ゾワリと鳥肌がたつような声だった。恐る恐る視線を横へずらすと、白衣を着たレオ様が腕を組んで壁にもたれかかっていた。今まで聞いたことのないくらい怒気を含んだその両目で私の上の彼を見すえる。

レイエンス家の人がゆっくりと立ち上がった。

「いい女がいたもので」

「だろうね。けど残念、オレのだ」

その人は胸に手を当てて会釈すると、それ以上何も言わずに出て行った。それに全身の力が抜ける。

怖かった……っ。

「ソフィー、大丈夫！」

レオ様が上半身を抱き上げてくれた。

大きな安堵感と、残留する恐怖と、見つかってしまった罪悪感と。色々なものが混ざり合ってまともにレオ様の顔を見られなかった。

「ごめんなさい……勝手に」

「そんなことはいいから。こっちにおいで」

フワリと体が浮く。それが横抱きにされたからだと気づいて焦りに身をよじった。

「え、あの！」

「異論は認めない」

にこりと笑いながらも、どこか心配そうな青い瞳に申し訳なさがついった。大人しく服にしがみつく。

「よくオレの研究室が分かったね」

そう言って柔らかなソファアへ座らせてくれた。

「すみません突然」

「謝らなくていいよ。オレもちょうど君に話があったから」

レオ様はカップにお湯を注いでいた。ふんわりと甘い香りがする。レオ様が私に話？ 何だろう。

「どうぞ」とそのうちの一つを渡してくれる。

「ありがとうございます」

湯気の立つそれにゆっくりと口をつけると、何だかじんわりと体が芯から温まる心地がした。ちょっとだけ落ち着く。

「あの、レオ様のお話って？」

温かい飲み物のおかげなのか、だんだん平常心を取り戻してきた。さっきのシヨックは、正直まだくすぶっているけれど。

「ん？ オレから話していいの？」

確かに訪れた側から話を切り出すのが筋だったのかもしれない。それでも彼はカップをソファアの前のローテーブルに置くと、私の前にひざまずいて両手を包んだ。

「王女のパーティーでさ、君を怖がらせちゃったかなと思って」

絶妙な角度で上がっていた眉がキュツとひそめられる。

あのことね、と思った。確かにあのときのレオ様は少し怖かった。私の知らない彼の顔を見てしまった気がして。

「ずっと謝りたかったんだ。血を吸いたいたとか……怖かったよね。本当にゴメン」

嘘偽りの無い綺麗でまっすぐ瞳が向けられる。

そう、これが彼。あの時は少し変だったけど、やっぱり、レオ様はレオ様よね。

「大丈夫ですよ」と笑うと、レオ様は心からホツとしたように息を吐き出した。

「そうだ。 그레이のバカのせいとどつか体に異常がでてるかもしれないから一応診てあげるよ。ほら、せっかくこんな格好だし」と彼は着ていた白衣の襟を引っ張る。

「へ？」

白衣……。来たときはあんな状態だったけれど、落ちついて改めて見てみると何だか変に緊張する。な、何だろう、この感覚。もしかして私って変態なの？

「あ、い、いいえ、結構です！」

「あれ、心臓に異常が」

彼はいつの間にか私の胸に聴診器を当てていた。上目づかいの魅惑的な微笑みにさらに心臓が跳ね上がる。

警察署でヴァンパイアの怖さを再認識したばかりだというのに、もしかしたらお兄ちゃんの死に関わっているかもしれないのに、それなのにヴァンパイアはやっぱり幻想的で美しくて。完璧だった。鼓動が強くなっていく。こんな男性から情熱的に愛を囁かれれば、って何を考えてるのかしら、私は……！

混乱してる。

そんな私を彼は下からのぞきこんだ。

「うーん顔も赤い。ショックによる発熱かもしれないね。大変だ」

「いえ、違うんです、これはただ」

「すぐに治さなきゃ」

「んっ……」

柔らかくて温かな唇が押し当てられ、彼のいつもの香水が鼻腔をくすぐる。さつき口にした甘い飲み物の味がした。

ゆっくり離れるとどこか戸惑い気味に「消毒……にならない？」と小首をかしげた。

さつきレディエンス家の人にされたことを心配してくれているら

しい。

「ありがとうございます」

こんなにも優しく気づかってくれる。

それでもやっぱり、ヴァンパイアにとってあの法律を守るのほとても困難なものなんだろうか。

分からない。彼らのことが。

「ソフィア、本当は何か知りたいことがあって来たんでしょ？ 何でも答えるから言ってみて」

隣に座って優しく髪をなでてくれるレオ様に少し戸惑いを覚えつつも、私は言うべきことをきちんとして整理しながら口を開いた。

王とこの人だけは、きっと信じられるはずだから。
きつと。

s t . ?

The Empties (後書き)

あとがき

結構むちゃするソフィアさん。

「ブラッド法における血液検査について……か」

そう言っつてレオ様はあごに手をやった。

「あの、ここにいる人たちをを疑っているというわけではなくて……」

「分かるよ。お兄さんがそんなことになったんだから、はっきりさせたいって思うのは当然のことだからね」

けど……と言葉を切る。

「血液検査はヴァンパイア全員に義務づけられている。違反すれば社会的制裁や罰則もあるからね。まあ誰かが結果を誤魔化してるんじゃないかっていうのは……そうだ、ちょっとやってみようか」

レオ様はそう言っつと、デスクのイスを引いた。革張りの高そうなそれ。

「どうぞ」と言われ、大人しく腰かけた。

何をするんだろうと思っつていると、彼はキャビネットを開けて空の試験管数本がおさまった木製の試験管立てを取り出し、コトリと机に置いた。次に引き出しを引いて茶色い紙を一枚取り出し、それをピラリと私の前に置く。

“血液検査結果表”と書かれていたその紙は、私がさつき抜きとつたカルテと同じものらしい。

レオ様は本棚から赤茶色の本を抜き取ると、「えーっ」と何か探すようにパラパラとページを開いて紙の隣へ置いた。

「これから君自身の血液検査をしてもらうよ」

「私の……?」

「そう。ちよっとゴメンね」

レオ様はそういうと、私の首筋に何か冷たいものを滑らせた。万年筆のようなその器具は見たことがある。

伯爵さんと結婚式を挙げそうになった時に使った、血液採取の道具だわ。どうするんだろうと見ていると、レオ様は中身を試験管へ入れた。

自分の血が目の前にあるというのは、何だか変な感じ。

「このページの術式を、そっくりそのままこの用紙の左側の枠へ写し取ってくれる?」

「これをですか?」

「そう。一つも間違えずにね」と羽ペンを渡され、インクをつけながら書き込んでいく。本には妙な記号が踊っていた。確か魔術基本学で習ったことがあったはず。あんまり成績はよくなかったけれど……。

ページ半分にびつしりと書かれたその術式を、間違えないよう慎重に慎重に書き込んでいく。

それを確かめるためか、レオ様は私の肩に手をまわすようにして手元をのぞきこんだ。それに少しドキツとする。ヴァンパイアはあまりにキレイすぎるから。

「術式や魔法陣っていうのは、どちらも魔力に具体的な効果をもたせるための変換装置。それぞれに一長一短つてところかな。魔法陣は強力に効果を発揮するけど、それだけで完成形だから効力のかげあわせがきかない。術式は魔法陣ほど強い力がないけど、記号を組み合わせれば無限の可能性が生まれる」

それも授業で聞いたことがある気がするわ。

レオ様はもう一枚同じ紙を取り出すと、話しを続けながらさらさらと長い長い術式を書き始めた。見れば私と同じものを書いているみたい。

全部暗記してるんだ。すごい……。

「だから医師は術式の開発に力を入れてる。人間界で言えば新しい治療法やクスリの研究に似てるのかな。けどこれが非常に難しい作業なんだ。術式は数万もの特殊な記号を組み合わせなければならぬ。どこか一箇所でも間違っていれば効果が百八十度狂ってくる。途中までうまく行っても、効果が打ち消されてペアになることもあるんだ。だから新しい術式を見つけられるのはとんでもない強運の持ち主か、ずば抜けた頭脳とセンスの持ち主だと言ってもいい」

「な、なるほど……っ」

大事なことを教えてもらっているのに、彼が何か言うたびに振動でゾクゾクとした感覚が走る。顔や耳が赤くなっていなにか心配だった。

「で、できました」

レオ様はそれをさっと流し見るように確認すると、小さく頷いた。

「うん。じゃあ次は手袋をして、検査対象つまり君の血液をスポイトで一滴、君の書いた検査用紙とオレの書いた検査用紙の今度は右側の上の枠に垂らしてみて」

「はい」

何だかお医者さんを手伝うナースにでもなった気分。

試験管を恐る恐る手にとって、そばのスポイトで少しだけ吸い上げた。

ちよつとドキドキする。

言われたところへポタリ、ポタリと赤いしずくを落とした。けれど何にも起こらない。

私は魔力が無いから、魔力を染み込ませた魔法紙がなければなにもできないみたい。

でも二枚同時にレオ様が軽く触れると

「　！　すごい」

まるであぶり絵のように、何もなかった右下の枠内へ浮かび上がるかのように数値があらわれた。

けれど数字が出たのは私の書いたほうだけ。レオ様のほうには何も出てこない。

「実はオレの書いたほうは、途中の記号が一つだけ違うんだ」と指し示す。

確かに+>というところが+<になっている。

一箇所違うだけで、全てが狂うと言う言葉が甦る。

「こつやって血液検査の結果を出しているんだ。以前は検査薬を使つてたけど、二百五十年ほど前にこの術式が開発されてからは全てこれだよ。誰がどうやったって、例えば医師師にワイロを渡したって誤魔化せない。少しでも変えればこの通り結果そのものが出ないし、用紙を見ればすぐにバレてしまうんだから。これを提出して確認してもらつというわけ」

そうだったんだ。それなら絶対に大丈夫だわ、よかった……。胸のつつかえが取れたよう。

リザの言ったことはハツタリだった。

そうよね、一番怪しいレディエンス家の検査を、一番信用の置けるレオ様が担当してるんだから間違いようがない。

「安心した？」

「はい」

よかったと言いながら、彼は机の端に腰掛けた。

「けど医師師つて術式に関して守秘義務があるから、本当はこういうの教えられないんだ。だから兄上には言わないでね、ここでのことは絶対に。誰にも。いい？」

「はい。そのかわりと言ってはなんですが、私の兄の話も陛下には……」

「もちろん」

「オレたちだけの秘密ということで……」

誓いの印ということなのか、レオ様は頬に軽くキスを落ととしてやんわりと微笑んだ。

ああ、やっぱりレオ様に相談してよかったわ！

やっとモヤモヤが解消できたと羽のように軽くなった心もちで、後宮へ帰る扉に手をかけた。でも押しても引いてもうんともすんとも言わない。

あれ？

「今度はどこへ行っていたんだ？ ソフィア」

「！」

ドキッとして振り返る。いつの間にか王が腕を組んで後ろに立っていた。

「へ、陛下っ……」

み、見つかった！

扉に背をつけ、何とかごまかす方法を考える。王はそんな私に近づき、両手を扉について私をその間に閉じ込めた。

「その様子では私に会いに来たわけではないんだろう？」

王の無理矢理な笑みに、汗がにじみ出てくる。

「え、っ……さ、散歩に」

「ははは、なんだ散歩か！。そんなマントをかぶって」口元に笑みを浮かべながらも、細目で私を見すえた。

言い訳が下手すぎたらしい。

「……すみません」

王は小さくため息をつく。

「全く。何をしに行っていたんだ？ まさかレオに会うためではないだろうな」

ドキッとした。そのつもりはなかったけれど、結果的にはそうなってしまったから。それに研究室でのことは絶対に言えないし。

「いえ、その……か、鏡を探しに」とつさに思いついたことを口走る。

「陛下が言っておられたアラゾークの魔鏡を見たいなと思いついて不思議な力を持っているというのでどんなものかなあと気になつて。つい……」

なぜか彼はそれに目を輝かせた。

「それは……私と結婚してくれる気になつたということか？」

「え？」

結婚？ どうして？

「ああいや、違うんじゃない……。別に焦ってるわけではないんだ、ゆっくり考えてくれ」

赤く染めた顔を慌ててそらす王が、何だか少し可愛く見えた。

「……あの時の傷は大丈夫ですか？」

「あの時？」

「以前、伯爵さんと初めてお城を抜け出したとき。別の世界へとばされた私を助けてくださったのは、本当は陛下だったのでしょうか？」

それに王は「レオ……」と苦虫を噛み潰したかのような顔をした。

「レオ様は何もおっしゃいませんでした。ただ、話を聞いてあげてほしいとおっしゃっただけです。ですがこの間も陛下に助けられて、何だかそんな気がしたんです」

「あ、そ、そうか」

自分自身で白状してしまったからか、気まずそうに髪を軽く払った。彼の“どこか居心地が悪い”ときのサイン。

「大丈夫ですか？ 腕輪の痕も……」

「そうだな」とはぐらかす。どこか遊び心があるような目を向ける。

「いや、やはりそれは言えん」

「なぜです」

「なぜだと思っ？」

私の心配をよそに、唇の端をくいつとあげる王の表情はどこか挑戦的だった。

その色気のある表情に胸の高鳴りを感じながらも、まさか本当はまだつけているんじゃない……という冷静な疑いが首をもたげた。

「言うておくがもうちゃんと外してある」つけてないことをアピールするためか、王は腕に手を滑らせた。凹凸なく滑る掌。

「ならなぜ？」と眉をひそめる私にくつと顔を近づけた。漆黒の双眸ぼっに少し不安げな自分の姿が映る。

「そうやって君にいつまでも心配してもらいたいからだ」

人の心配をよそに、嬉しそうに微笑む。全く……。

「そういえば月の絵は陛下が持っておられるのですか？」

さっきまで穏やかに笑っていた王はその問いかけに笑顔を凍りつかせ、やけに視線を泳がせた。

「あ……ま、まあ」

そう言って私から離れ、目を見ようとしない。また髪を払っている。

「どこですか？ 返してください」

「それはダメだ！」強い口調で返しながらも少し困ったように私を見た。

「なぜです？」

私の絵なのに。

「も、もう飾ってしまって取り外せない。見たいのなら、いつでも見に来ればいい」

「なら見せてください。どこにあるんです？」

「い、今か？」

今ではダメだというの？ 一体何をそんなにビクビクしているのかしら。

「いや、実はちょっと、まあ、遠いところに……」

「遠いところ」？

しばらくじつと王を見つめていると、彼は私に引き下がるようすがないと悟ったらしい。諦めたように肩を下げてため息をついた。

「分かった。こっちだ」となぜか壁へと向かっていく。見たところ本棚があるだけで絵なんて一枚も見あたらない。しおりのように本に挟んで保管してるのかしら。

王は本棚に手を掛けると、それをスライドさせるように横へやっ

た。後ろから古びた鉄の扉が現れる。
隠し部屋！

「どうぞ」それを開けて中の明かりをつける。普段から使っているんだろつか。歴史の感じる扉のわりに、ちようつがいもさび付いた様子はない。調子よさげに音もなく開いた。
でもなぜそんなところに絵を？

おそろおそろ足を踏み入れた。

「じ、これ！」

さほど大きくはないその部屋。本が並んだ、腰の高さの茶色いキヤビネットとソファー、ローテーブルと小さな本棚があるだけのシンプルな造り。ここで王が、一人静かに読書でも楽しんでいる画が頭に浮かんだ。

そして壁一面には、ずらりと私の絵が飾られていた。リザが私の部屋から盗んだ絵のすべてがここにあるみたい。どれもがエンピツ描きのそれに似合わないほどの立派な金の額縁をつけられ、ほこり一つかぶっていなかった。

ここはきつと彼の一番私的なスペースだろう。掃除係のゴーストさんも入ることもないほどに。ならここまできれいにしてきているのは、おそらく王自身。

真ん中にかけられたあの月の絵は、ちようどカウチの向かい側にあった。座ったときの目線の高さにあわせるかのように。

読書の合間にいつも見られるようになるのかなか、それとも絵をじっと座って眺めてくれているのか。

どのみち、とてもくすぐったい気分になる。

それに……。

四面ある壁の内の三面はきれいに壁紙が張られてあったけれど、一面だけ石がむき出しになっている。そこへゆっくりと近づいて、裸の石に指を這わせた。

それは、私が死を覚悟して牢の中で描きつけたあの太陽の壁画だったから。

「ソフィア……」

心配そうな声が耳に届く。あの時のことを思い出すのではと案じてここを見せたくなかったんだろう。

思い出さないことはない。こみ上がってくるものがないわけがない。

私がいなくなっても誰かが私を想ってくれればと思いつながら、私の命の全てを描きつけたつもりだったのだから。

そしてあの檻を出たとき、この絵を振り返りながら思った。

もう二度と、私自身はこの絵を見ることのないのだと。

それがどれだけ苦しかったか。どれだけ絶望的なことだったか。胸がキリキリと痛む、今でもこんなに。

この絵と対面して正常でいられるのが怖くて、気になりつつも考えないふりをしていた。

再会は唐突。でも心は思ったより乱れないことに自分自身でも驚く。

きつと色々な人が支えてくれて、知らず私を癒してくれていたんだろう。私の周りのみんなが。

あの絵はここにあった。王の心の中たるこの部屋に。お気に入りの本を読んで、絵を見て静かに過ごす。そこへ彼はこの壁画を持ってきた。腕輪を外したからといって、彼が自責の念を忘れたわけではないのだと伝わってくる。

この部屋に、心の奥底にまで深くあの罪を刻みつけている。命ある限り永遠の苦しみを覚悟して。

何も言わず私の後ろに佇む王は、きつととても不安げな表情をしているだろう。自分自身ではなく、何より私の心を気づかっている。私の痛みは何より敏感であろうとする人だから。私の背を見て彼が何を思っているのか、手に取るようにわかる気がした。そう、薄々気づいていたのかもしれない。

そんな彼を“愛しい”と思いはじめている自分に。

私の一挙一動に感情を動かし、助けを求めれば命をなげうってでも庇ってくれる彼への感情に。

お兄ちゃんのことを知られなくなかったワケに。ブラッド法が適正に処理されていると知って、安心したその理由に。

それは、どこか放っておけない彼に対する“慈しみの情”……なのかもしれないけれど。

この絵を見て、確かにこの胸の奥にはつきりとした痛みを感じる。消えかかった命のともし火を、なんとか自分の生きた証を残そうとあえぐ自分自身が見える。

でも、今から振り返って彼の顔を見るとときには絶対に涙を見せな

い。
分かるようになったのは、彼のつく分かりやすい嘘だけじゃないから。

「陛下、この絵の中に何が見えますか」

少し震える声でそう尋ねてみた。ひどい苦しみの中で描いたものだけど、ここにあるのはそれだけではない。それに彼は気づいてくれているのだろうか。

王は私の隣に立って、壁にそつと触れた。

「まっすぐに生きようとすると、君自身だ」

たった一言で、私に対する何よりも深い愛情を思い知る。

「陛下つ、私」

王を振りあおいだ拍子に、腕が本に当たって床へ落ちた。アルバムだったらしく、写真があたりに散らばる。

「すみませ……ん？」そこで言葉を失った。

「あ、いつ、い、いやこれは！」

王は血相を変えて散らばったそれらを拾い集めた。けれどその写真に写っているのは全て

「これ……私？」

ハツとして屈んで数枚手にとってみる。授業中や、食事中、どこかを歩いているところや本を読んでいるところ。

な、な、何これ!?

「い、い、いや! これは違」と大慌てで隠しながら汗まみれで取り繕う。

「……っ!」

まだ落ちていた一枚を拾い上げると、そこにはベッドへ横たわってスヤスヤと眠っている自分の姿があった。しかもネグリジエがはだけて肩や足や胸元が……。

「どうやったらかんな写真が? まさか……夜中に勝手に部屋へ忍び込んで……。」

自然と睨みつけるように王を見る目が鋭くなった。

「陛下っ?」

「ち、ちち違うんだ、た、たまたま……。」

慌てふためく王をよそに、そばのキャビネットの扉を開けて中を調べる。

「何だか嫌な予感がする!」

「ソフィアああ!」

王の声にも耳をかさず、瞬時に両腕に抱えるほどの箱を手にとった。

けれど蓋に手をかけ何かが見えそうになったところで、王にそれを取り上げられた。

「ダメだ! これだけは絶対にダメだ!」

高々と持ち上げられては届かない。でも確実に怪しいと第六感が

告げている。

「なぜですか？ 何が入ってるんですか？」

「ぷ、ぷ、プライベートなものだ！」王は耳まで真っ赤で、何とかこの状況を逃れようと必死さが垣間見えた。

「プライベートなものとは何ですか！」

「プライベート、じ、重要な書類だ！ 国の機密に関わるものだからいくら君にでも見せられん！」

「書類？ プライベートなものではないではありませんか！ それにそんな風には見えません！」

「そう見せかけているだけだ！」

「だったらチラツとだけでも見せてください。それで納得します」「絶対にダメだ！」

何をそんなかたくなに！

ふと私のものじゃない絵が目にとまった。王が描いたんだろう、ミカンをたてに二つ重ねたような姿のものに目や鼻がついていた。

私の視線に気づいたのか、王は箱を高々と上げたまま体でそれを隠した。

「いや、これは……イヤらしい感じではなく芸術的なあれで、あの時の記憶を残しておこうと」

“あの時”？

それで直感した。その絵はエヴェリーナ王女に無理矢理つけられた下着姿の私だと。

「……っ」

勝手に撮られた大量の写真。

怪しすぎる箱の中身。

王の絵。

太陽の壁画のほうじゃなくて、本当はこっちを見せたくなかったのね？

ふつつつと怒りが込みあがってくる。

複雑に絡み合っていたはずの感情のほとんどが吹き飛んで、今残っているのはシンプルな憤りと呆れだけ。
最ッ低！

「陛下の変態ッ！」

王の頬をはたく乾いた音が響いた。

「陛下、失礼します」

シュレイザーが部屋に足を踏み入れると、魂を失ったかのように机に突っ伏す男の姿があった。

「私の心の癒しが……」とブツブツつぶやいている。

シュレイザーはそれにハアと少々おおげさにため息をついた。大方の事情は読める。

「隠し撮りでもバレたんですか？」

「ああ。コレクションが全部没収され……なぜ知っている！」と体を起こしたがすぐに「いや、……オホン」と咳払いをして誤魔化した。

シュレイザーとしても、今まで女性に不真面目だった彼がこれほどまでに一途に心変わりしたのはありがたいところだった。それほどまでに彼女は純粹で、擦り切れた彼の心を癒し、引きつけてやまないのだろう。

だが、最近はそのところではないような。どこか言い知れぬ胸騒ぎを感じていた。

何か動き出しそうな不穏な空気を。

その原因は分かっている。

「これが届きました」

シュレイザーの差し出した真つ赤な封筒に、ザルクはスツと無表情になってそこから目を離した。

「捨てておけ」興味なさげに言い放つ。

「中身のご確認はなさらないんですか」そう言うだろうと予想はあった。あくまで念押しのため。

案の定ザルクは下らないとでも言いたげに、唇を歪めた。その目は今の今まで机に伏せていた情けない男のものではない。強大な国を取り仕切り、そのためには手段を選ばないような冷たいオーラを漂わせる王の顔をしていた。

彼女の前では二度と見せないであろう、獣のような残酷さのにじむその表情。

「私の在任中だけで何百通同じものが届いたと思っている。どうせ貴族どもからの署名入り嘆願書だろう。内容にかわりばえもなく面白くもない」目を飢えた狼のようにギツと瞳孔を萎縮させた。

常人ならば恐れおののいて一言目を発することもできないだろう。

だが長年彼のそばで手腕を奮ってきたシュレイザーにとっては、何ら障壁にならないようだった。ただいつものように淡々と返す。だからこそ、ザルクも厚くこの側近を信頼していた。

「ええ、ですが」と封筒を立てて側面を見せた。

「徐々に厚みが増しております」

これが意味するもの。

ザルクは軽く息を吐いて立ち上がると、後ろで手を組んで窓から外を望んだ。

「だからどうした。あの法が気に食わないなら数ではなく力で私をねじ伏せればいい。できるなら……の話だがな」

窓ごしに鋭い眼光でそれを睨みすえる。

ガラスに映り込んだ封筒が放射状に割れた。

s t . ?

The Examination (後書き)

あとがき

箱の中身は……？

「全く、隠し撮りなんて最低!」

洗面所の鏡に向かいながら、私は濡れた髪を拭いていた。

この間、王から取り上げた写真の山を思い出して、怒りが再び込みあがってくる。

もうしないって約束してくれたとはいえ、あの件以来どこにいても落ち着かなかった。どこかであの人が覗き見てるんじゃないかって。

ちょっとしたホラーだわ。

バスルームを出てタオルを食事前テーブルのイスにひっかけると、嫌なことは寝て忘れようと掛け布団をめくった。

「は……っ!」

大声を上げそうになって慌てて口を塞ぐ。そこには私より先に横になっている人がいた。

いつもの黒曜石のような瞳は閉じられ、白い枕に小さな墨の川を描いてすやすやと寝息を立てているその人。

「陛下……っ」

びっくりした。まだ心臓がバクバクいつてる。

何してるの、こんなところで。まさかまたイヤらしい写真を撮りに……?

とりあえず起こそうと手を伸ばした。

「……ソフィ、ア」

楽しい夢でも見ているのか、幸せそうに微笑んでつぶやかれたのが私の名前でドキリとする。布団をめぐられても起きる気配がないから、よっぽど熟睡しているんだろう。

このまま寝かせてあげようと思った。きつとすごく疲れてるんだわ。

寝巻きじゃないから苦しくないかしらとも思ったけれど、上着と靴はきちんと脱いであるし。

そつと布団をかけて、慎重に目にかかっていた髪を払った。

こうしてみると、なんてキレイな顔立ちをしているんだろうとつくづく思う。薄く開いた唇から牙さえ見えていなければ、まるで天使や精霊のよう。

ヴァンパイアのくせにこんなに寝入るなんてと思いつつ、それだけ心を許してくれているのかとくすぐったくもあった。

『良かった、無事で。もし君にまた何かあったら、私はこのさき生きては行けん』

『この腕より、足より、眼より、命より……君のことが大切だ、ソフィア』

『たとえ灰になろうと、それで君が救われるのなら』

人形のように眠るこの人と、過去にもらった言葉が重なり合う。私を何よりも深く愛してくれている人。

「おやすみなさい」

ごく自然な動作で頬にキスを落とした自分に、私自身が驚いた。

心を許してしまったのは、きっと私も同じ。

カウチに寝そべって、薄いブランケットを体にかけた。少し熱のこもった息を吐いて。

やっぱりカウチは少し寝づらかったみたい。いつもはミントさんが起こしに来るまで寝ているけれど（朝日が昇らないから起きづらい）、今日は勝手に目が覚めた。時計を確認すると七時十五分前。彼女はいつも七時丁度に起こしてくれるから、もう起きていようと体をおこした。

肘かけと高さが合わなかったらしく、少し首が痛い。

ベッドに目をやると、陛下はまだぐっすり眠っているらしい。よっぽど働きづめなのかもしれないけれど、多分もうそろそろ起きなければならぬ時間だと思う。

バスルームでネグリジエから普段着のドレスに着替えて、そっとベッドに近づいた。

寝ているようにみえるのはフリで、いきなり腕を引つ張られたらどうしようと思いつつも、寝息は規則正しく聞こえてくる。

顔をチラッと覗くとドキッとするくらいキレイでそれでいてちょっと可愛い。口も無防備に開いているし。

慎重にベッドの端に膝をのせて、ゆっくりと体をゆすった。これが意外と重くて力がある。

「陛下……陛下」

整った眉が安眠の妨害を嫌がるようにくしゃりと曲がる。

「陛下、朝です。陛下？」

「ん……ああ……分かった」

掠れた声でそうつぶやくと、不機嫌そうに枕に顔を埋めた。

「何時だ」

「もうすぐ七時に」

しばらく何も言わないからまた眠ったのかと思ったけれど、いきなり腕を引つ張られて唇を押し付けられた。

「ッ！」

でもいつもと様子が違う。

愛のこもっていない、ただ唇同士を合わせただけの冷たいキス。

私の顔も見ずにベッドの反対側へ行くと、サイドテーブルに乗っていた上着を無言で着始めた。

何だろう。何か怒ってる？

写真を取り上げたから？

そんな。あれはどう考えたって王が悪いじゃない。

「陛下？」

「悪いが朝食は一人で取ってくれ。時間が無い。いつも言ってるだろ」

何その突き放したような言い方……。それに“いつも”って？

拒絶するように向けられる背中に、なぜか少し悲しくなった。

「私は別に、一緒に食べようなんて言ってますが」とふて腐れて

みる。

「そうか一緒……っ」

言葉を途中で切ったかと思うと、靴を履こうとしていた手を止めてバツと勢いよくこちらを振り返った。

今日初めて私をちゃんと見た。熱っぽいその双眸は私を映しながら驚きに見開かれている。

「ソ……ファイア。あ、いや、あれ……？」

王は急にそわそわと髪をかき上げ始め、状況がよく分からないかのように周囲を見渡し始めた。

「どうされたんですか」

「わ、私は昨晚……君と？」

そんなわけがない。

「……まさか。陛下がそこで休まれていたので、私はカウチで眠りました」

なぜかそれに少しがっかりしていた。

「そうか、すまなかった。ところで私がさっきキスしたのは、君……か？」

変なことを言うなと思った。他に誰がいるのかしら。

「もしかしてどなたかと部屋をお間違えになったんですか？ だったら私で申し訳ありませんでした」

「ち、違う！ 朝起きて君がいたから驚いて……。そうか君だったのか」

王は急にはにかんだように笑うと、キラキラした光を瞳に湛えてベッドに乗ってこちらへ向かってきた。

「な、何ですか」

逃げるようにベッドから下りて後ずさると、王に追いかけられて抱き寄せられた。彼は無理矢理私の頬を両手で包むと、瞳を閉じて顔を近づけてくる。

「あの、陛下……！」

胸を押して抵抗した。王はすねたように眉をひそめる。

「何だ……」

「何か怒ってたんじゃないんですか？」

あんなにそつけない態度を取ってたくせに、この変わり身の早さは何？ それに王はやけに目を泳がせた。

「い、いやアレは……そう、寝起きが少し悪くてな。冷たくしてすまなつた。だからキスもやり直そう」

もはや当然のように迫ってくる。

まだ友達以上になつた覚えはないのに。

「やり直さなくて結構です」と胸を押し返すけれどびくともしない。「照れなくていい」嬉しそうにニコニコと笑う。

「照れて、ちょ……っんん」

さつきとは段違いに優しく温かなキスが降り注いだ。ふわふわと包み込むように唇を挟み込まれる。私を離すまいとする腕の力はすごく強いのに、とても穏やかな口づけだった。

一度も離すことなく何度も角度を変えて合わさる。高い鼻の先が当たってつぶれるほどにしっかりと押しつけられていた。

柔らかでしびれるような感覚に翻弄されそうになる。心の奥がむずむずとして、頭がおかしくなりそう。力が抜けていく。

「ふ……っ、んん」

いつの間にか彼の胸を押すことを忘れてキスにばかり気を取られていた。それどころか自分からも首を伸ばして彼の唇に自分のものを押しつけている。それが恥ずかしくてしかたないのに、なぜかやめることができなかった。

鼻にかかったような吐息が混ざり合う。

やっぱりだめ、と急に意識がはつきりして強く王の胸を押した。

突然キスが終わったことが不満だったのか、不足分を補うかのようになにも言わずまた近づいてくる。

「陛下……っ」

顔を背けて拒絶を示すと、まだ諦めきれないかのように熱っぽい目でこちらの際を窺っていた。

「ダメです」

それでも近づこうとしたり離れたりと繰り返しながら、やっと諦

めがついたのか「分かった。バスルームを借りる」と類に軽くキスをして私を解放した。

王が扉の向こうに消えると、腰が抜けたように壁にもたれかかった。ドキドキと早鐘のように打つ鼓動と、沸騰したように熱い血流に本当に頭がおかしくなったのかと思った。妙に息苦しい。もうすぐ朝食が運ばれてくるというのに、胸がつまったように何も喉を通る気がしない。

ダメ。普通にしてなきゃ。変だって思われたくない。

そつとまだ熱を帯びている唇に手をやった。

私は一体どうしてしまったんだろうと戸惑いながら。

テーブルにパンや分厚いベーコン、それにおいしそうなフルーツが並ぶ頃、陛下がバスルームから出てきた。どうやらシャワーを浴びていたらしく、髪が濡れていた。ふんわりと漂ってくる石鹸の香りが私と同じで、少し不思議な感じがする。

鼻歌なんて歌いながら扉を開けたけれど、ミントさんの姿をみると急に咳払いをして向かい側の椅子に腰掛けた。

そんな王に昨晩からの疑問を投げかける。

「陛下、何か用事が？ どうして昨日はここで休んでおられたのです」

「まあ君とイヤらしい……」

「え？」

「い、いや、ではなく……」

今何を言いかけたの？ と疑いの眼差しを向けると、王は慌てた

ように前髪を何度も払った。ミントさんの方を向くと、

「二人にしてくれ」

「へえ？」

パンをお皿に置いてくれていた彼女が気の抜けた声を出す。それはそうだろう、給仕中に出て行けなど言われたことがなかっただろうから。

「ほら、早く」

王に急かされ、ミントさんは訝しげな顔をしながらトングとバスケットをカートへ置いて壁をすり抜けていった。

私が“なぜ彼女を追い出したんですか”と聞く前に、王はテーブルに乗っていた私の手に自分の大きな手を重ねた。トクンと胸が小さく鳴る。

「あー、その、今日から招待されている国へ訪問することになっていてな」

「そうですか、いつてらっしゃいませ」

「そう笑顔で言われると辛いんだが……」

王はしょぼんと力なく俯きながら、

「三泊四日ほどここを空けることになる」

王の話に耳を傾けながら、何を言わんとしているのか探ろうと彼をジッと見つめる。

「い、一緒に来ないか？」と緊張気味にきいてくる。

「一緒に、ですか？」

どうしてわざわざ？ と小首を傾げると、「他の国も面白いぞ、
こことはまた雰囲気が違う！ 当然VIP待遇だしな。美味しいもの
も口にできるし、見世物だって……」と早口でまくしたてた。身振
り手振りまでつけて懸命に。

「いえ、私は結構です」

王と他国を公式訪問だなんて、何だか結婚するという事実上の公
言になってしまいそう怖い。

心の整理をゆっくりつけたいの、そんなに急かさないでほしか
った。ここへ来てから色々なことが一気に起こりすぎだわ。

でも王はあきらめ切れないのか、私の手をギュッと握って身を乗
り出すように話を続ける。その目は真剣そのものだった。

「もしかしたら向こうの姫に言い寄られるかもしれん。いや、それ
どころか寝室に押しかけられたり抱きつかれたりとか。私には君と
いう女性がいるから当然断るが、強引にという可能性もなきにしも
あらずだ。そうなってもいいのか？」

“ いいのか？” って。

そういうのってもつと余裕ぶつた感じで言ったほうが効果的だと
思っただけど、そんな必死な顔で言われてもあんまり説得力が……。
ウンと言わない私に、王はまた次なる一手を考えるように口もを
へ手をやる。

「そ、そういえばあの国の絵画は相当に美しいらしい。一緒に見に
行こう、な？」

ちょっと食指が動いた。ああ、でもやっぱりダメ。

「頑張ってきてください」

「丸二日も会えないんだぞ？」とため息を心の内を吐露する。

そう、表情から察するに多分これが本音。

「たった二日です」

何を言われようとしていく気はない。

王もそんな私の決意を読み取ったのか、ムスツとしたように軽く口をとがらせた。ジト目で私を見ると、

「私がない間、一切の男の出入りを禁止する」と宣言した。

「出入りを……ってどういうことですか？」

「私が戻ってくるまで誰であろうと男とは絶対に口を利くな。レオもダメだからな！」

また子供みたいなおもむきを出して。

そんなに私って信用

と思っただけで、よくよく考えてみれば私は二度も王の許可無くお城を抜け出した上に一度は他の男性と結婚式を挙げそうになり、一度は変な人たちにどこかへ売り飛ばされそうになった。お巡りさんやらヘルハウンドにも追いかけられたし。

もし私が王の立場なら、確かに危なっかしい人間と思うかもしれない。

“城を出るな”ではなく“男性と話すな”と言っているのが、ちよつと引つかかるけれど。

「分かったな。もし約束を破ったら……」

王の周りをヒンヤリとした空気が覆う。

「数ヶ月後、君はその腕に私の子を抱いているだろう」と口元を不気味に歪ませた。

何それ！ 怖い！

王は「はい……」と答える私に満足したのか、コーヒーを一気に飲み干すと「そろそろ」と言って立ち上がった。それ以外何も口にしていないのに、何だかすごくせわしない。

忙しくて朝食云々は、あながち嘘や誇張ではなかったらしい。こうやって時間を作ったのは、私を誘うために少し無理をしたんだろう。結局断ってしまったけれど。

扉に向かった王を見送るために後ろを歩く。

その途中も「本当に行かないのか？ 楽しいぞ？」と未練がましく振り返る。

「今回は遠慮します」

「そうか……行ってくる」

心からがっかりしたらしい王を、何だか少し可哀想に思った。

忙しいながらも、できるだけ私と居たいと思ってくれているのは伝わる。

「陛下」

袖を引っ張ると、秘密の話をするように小さく手招きした。

「どつした」と屈む彼の白磁器のような頬に軽く口づける。
「いつてらっしやい、陛下」

自分のしたことに羞恥を覚えて、俯き加減にそう言った。王は拳をとろけるように緩んだ口元へやると、星空のように輝く双眸をこちらへ向けた。

その表情は、きつと一生忘れることができないんじゃないかと思うくらいにきらめきに満ちていた。つられるようにこちらの胸も熱くなる。

少し赤い頬は、多分私も同じ。

王が部屋を出て扉を閉めた途端、私は扉に背をつけて座り込んだ。体が熱い。

そう言えば、王を起こすことばかり考えていたからあまりちゃんとお化粧できてなかったかもしれない。髪ももっとよくとかせばよかった。それにやっぱり最後のキスは余計だったかな。

私、変だった……？

病気でもないのに、胸がつまったように苦しい。

突然ガタツと音がして心臓が飛び跳ねた。

何？ 何の音？

方向からして、多分ウォークインクローゼットからだわ。何か荷物
物が崩れたのかしら。

ひょっとして泥棒かと思ったけれど、警備の厳しいこんなところへ忍び込める盗人もいないはず。

おそるおそる近づいて扉を開くと、扉にもたれかかっていたらし

い何かが足元へどさりと倒れこんだ。

「ひ、人……？」

ボロボロの汚れた服を身にまとい、そこから骨のように細い手足が垣間見える。魔法使いのような三角帽子はツギ八ギだらけで、長らくお風呂に入っていないらしい体から汗と何かがまぎったようなツンとした匂いが漂う。

「うう」と唸り声が漏れる。急いでその人の下へかがみこんだ。

「あの、大丈夫ですか？」

一体どこから入ってきたんだろう。ここの召使さんか何かかしら？

「ふにやつ？」

と顔を上げたのはシワシワの小柄なおじいさんだった。長いひげを蓄え、黄色い大きな歯が一本口の外へ出ていた。ヒビの入った小さなメガネをずらしたまま、きよろきよろと辺りを見渡す。

「あ？ ここはどこじゃあ？」

どう答えればいいんだろう。ここの地名？ お城の名前？ それともクローゼットということ？

「ここは……ヘルグステインキャッスルの後宮です」

とりあえず無難にそう答えた。

おじいさんは「こおきう？」と首をかしげたけれど、もう場所については興味がなくなつたのか私の方を向いて上から下までジロリ

と流し見ると「君は誰じゃあ？」と尋ねた。

「ソフィアです。ソフィア・クローズ」

「ああーソフィアたんか……かぁわいいの」カラカラと笑いながら、シワシワの指で私の頬をつつく。

「悪いが何か食わせてくれんか。腹が減って額と膝がくっつきそうじゃあ……」

どんなお腹の減り方なんだろうと思いつつ、腹部を押さえてつらそうなおじいさんを放つてはおけない。

「ちようど今、朝ごはんを食べていた所ですから。よろしければ一緒にどうぞ」

「ああーありがとありがと」

おじいさんは何度もお礼を言う。ミントさん呼び戻して、お皿やカトラリーは新しいのを用意してもらわなきゃ。

けれどそこでふと思った。

おじいさん……。

男性……。

もしかしてこれって、

さっそく王との約束を破ったことになる？

「公爵様」

レディエンス家の長、ジェフ・ハブ・レディエンスはエヴェリー王女のパーティーで会ったときと同じように髪をきっちりとなでつ

け、笑顔でレオナルドを自分の応接室へ迎え入れた。

壁には巨大なドラゴンの首がかけられ、隣には絵画の中の立派なダークタイガーがギラリと両目を輝かせていた。

レオナルドは何も言わずに足を踏み入れる。ジェフの甥であるグレイドーも、彼を出迎えるように部屋の中央で胸に手を当てて僅かに頭を垂れていた。

ジェフの案内に従って部屋の奥のソファーへ腰掛ける前に、レオナルドは何か思い出したようにグレイドーのすぐ後ろで立ち止まった。

「そうだグレイ」

グレイドーが振り返ろうとしたところを、レオナルドに軽く背中から押された。

「この前彼女に手を出した罰」

グレイドーが軽く視線を落とすと、自分の胸から血塗れた刃の先が突き出ていた。そこからポタポタと赤い雫が小雨のように床へ舞い落ちる。

レオナルドが装飾美しい短剣が突き立てたまま軽く柄を回すと、グレイドーの唇の端から紅の筋が下りた。

「っ」

甥がそんな状態にあるにもかかわらず、ジェフはまるで他人の家のグラスを割ってしまったかのような軽い調子で額に手をやった。

「ウチのバカがそんなことを？ それはそれは申し訳ありませんでした、公爵様。何せ女の体が欲しくてしかたない年頃のようにして

町のごろつきどもに品を流して買い付けるのも大変なんですよ。すぐに血を飲み干してしまいますからね」

レオナルドが柄から手を離すと、グレイドーは無言で口元を拭いた。

「抜かれてたよ。お前の血液検査の結果」

高級そうな革張りのソファーに腰を下ろしながらレオナルドはそう言った。グレイドーは背中に突き刺さった短剣を抜き取りながら、レオナルドを見る。

「ま、心配いらないよ。あの血液検査の術式を開発したのはオレ。ごまかし方だつて完璧だ。どんな医師に見せたつて分かるはずはない。……そんなことより、そっちはどうなわけ？」

座らずソファーの傍に佇んだままのジェフが口を開いた。

「数は集まってきたものの、やはり陛下の力は強大すぎます。謀反を起こしたところであっけなく潰されるのがオチでしょう」

レオナルドはそれを鼻で笑う。

「そうかなあ？ 完璧だった兄上も、今はどうしようもない弱点があるだろう」

「ソフィア・クローズ」

「そう。彼女をエサにすれば、兄上に魔力制御の印を刻むことだってできる。魔力が無ければ兄上もただの人間と同じ。いくらでも廃案書にサインをさせられる」

「それ以上のことも」

「それ以上？」

背もたれに腕を乗せ、レオナルドはジェフを振り仰いだ。

「もしかして暗殺しろって？ 怖いことを言うんだね、お前は。オレたちは仮にも血の繋がった兄弟なんだけど？ 殺さなくたって国外追放とかいくらでも手段が」

「ですが彼女は陛下に心を奪われ始めている」
「……ああ」

“何たる悲劇” という表情を貼り付けたジェフが小さく首を振った。

背もたれから腕を下ろし、レオナルドはゆっくりジェフから視線を外す。

「よく見てるじゃないかジェフ」

「あなたがどれだけ深く彼女を想おうと、どれだけ辛いときにそばで支えようと。ソフィア様は振り向かない」

それにレオナルドは自嘲気味に笑った。

「なぜあの二人を引き裂いておかなかったのです？ いくらでもチャンスがあつたのに」

レオナルドは小さく息を吐くと、立ち上がりながらポケットへ手を突っ込んで窓へ向かった。

「兄上はこの先どうせろくな未来が待っていない。兄上は父上の作ったブラッド法を何としてでも守ろうとしている。それが壊されたとなれば、きっと兄上は心を共に壊すだろう。だから少しはいい思い

をさせてあげようって、彼女とのことにもしばらく目を瞑ってた」

そう語るレオナルドの後ろに寄り添うかのように、ジェフは悲しそうな顔をしたままゆっくりと彼の方へ近づいていった。

「ご兄弟想いのすばらしいお考えです。しかしそれは……」

「ああ……余計なことだった」

「彼女は王を愛した」

その言葉を聞いた途端、レオナルドは目の前のガラスを割った。興奮したように息を切らし、怒りに打ち震えていた。

「オレだって気づいてる！自分を何より深く愛してくれている兄上のことを、彼女も……！」

何かに耐えるように、割れたガラスの破片を握りしめた。血が拳を赤く濡らす。

「お気の毒に。あの誤認逮捕のときあれだけ苦労なされたのに、ひどい話だ」

「冗談じゃない。あの時あれだけ味方になってあげたのに、よりによって自分を殺そうとした相手を……！」

「なぜ陛下に」

「何でオレじゃない？」

「おっしゃる通りです。報われないなど」

「女は薄情なのか？」

「それでも彼女を愛しておられる」

「当然だ。あんなに純粹で可愛いソフィアに憎しみをぶつけるなんてできない」

「陛下さえいなければ、全て解決しますよ」

「兄上さえ……」

「そうです。陛下さえ……この世にいなければ」

右手で頭を押さえていたレオナルドが、ゆっくりと顔を上げた。決意に満ちた強い眼差しを湛え、静かに前を見すえた。

「お前の言うとおりで、ジェフ。王の座も彼女もオレが手に入れる。ブラッド法も……オレが直に潰せばいい」
「では……」

ジェフは最後の結論を聞くべく、そう促した。残った窓ガラスに映るレオナルドの瞳が薄く細められる。

「兄上はこの国のためにずっと頑張って働いてきた。もう休ませてやろう、永遠に」

レオナルドの言葉に応えるように、ジェフはニタリと笑った。

「彼女を傷つけることなく、気づかれることもなく。兄上を」

レオナルドも狂気じみた笑みを浮かべ、ジェフを見やる。

「殺せ」

その瞳には迷いもためらいも情もなかった。

「仰せのままに」

ジェフとグレイドーは胸に手を当て、レオナルドに頭を下げた。

「あの、ソフィア？ アタシだって別に偏見があるとかじゃないよ？ けど……」

テーブルの上のミセスグリーンは両手をふわふわと心もとなげに浮かせ、それは彼女の言葉にならない何かを表現しているようだった。

クローゼットから出てきた謎の小柄なおじいさんは、さつきから止まることなく朝ごはんを食べ続けている。ベーコンにかぶりつき、サラダを口に突っ込み、ジュースでそれを流し込む。

ミントさんがせわしなく片付ける傍らで、食べ散らかしたお皿がどンドン積みあがっていた。

「よーっぱとお腹が空いていたみたいね」

アリスが私の隣に座りながら、斜め向かいのエディーさんの食べっぷりに感心したように言った。

王が男性の出入りを完全に禁止したせいで、先生たちまで入ってこられなくなったらしい。つまり学校もお休みということ。

数日お城を空けるくらいでそこまでする？ って思ったけれど、皆はレポートの提出が延びたって喜んでいるらしい。

暇になったからとアリスが来たただけれど、彼女にならこの謎の人のことを隠し立てすることもないだろう。

「ぴひゃー！ 食った食った、ゴエツプ……失敬」

ナプキンではなく袖でゴシゴシと口元を拭った。ヒゲにまだサラ

ダのドレッシングがついているけれど。

「ソフィアたんのおかげで助かった助かった!」

おじいさんは倍以上に膨れ上がったお腹をさすり、満足げに天井を仰いだ。

「いえ、私は何も」

私は単に朝食と一緒にとっただけですもの。

それより、もうそろそろ何か尋ねてもいいのかしら。

危険人物には見えないけれど、素性の知らない人が自分の部屋にいるのはどこか居心地が悪い。

「ところであなたお名前は?」

ミセスグリーンが先に口を開く。

「えーつとエディー……忘れちったあ!」

自分の名前を忘れたというのに、彼……エディーさんはカラカラと笑っていた。

ミセスグリーンは小さな頭を抱える。

「あの、エディーさんはモンスター……なんですか?」と私も尋ねてみる。

「ワシ? ワシは守護的な妖精じゃ!」

得意げに鼻先を伸ばす。

妖精?

なんだろう、イメージとだいぶ違う。

妖精といえばこう可愛い小さな女の子で、金の粉を撒き散らしながら飛んでいると思っていたんだけど、おじいさんもいるんだ。それともおじいさんが基本なのかな。

「それより妖精ジジ……ジイちゃんはどこから入ってきたの？ こ
こはお城の後宮よ？」

アリスの問いかけに、エディーさんはなぜか瞳をきらめかせた。

「それが魔法陣でピュー！ ドスン！ バァン！ というわけなん
じゃよ！」

ものすごく大きな手振りでそう説明してくれたけれど、何が何だ
かさっぱり分からない。

場所から場所へ移ることのできる魔法陣があつて、それで飛ばさ
れてきた……って解釈で合ってるのかしら。

「ドンでもボタンでもいいけど、早く帰ったほうがいいんじゃない
？ 誰かに見つかって捕まったら大変よ。ここの王様はすごい怖
いんだから」とアリスが肩をすくめる。

「もうちつといいじゃん！ ていうか、帰る方法も分かんないし」

大らか……っていうのかなこういうの。とりあえずすごく肝がす
わってる。

「それよりあのパプリカの化け物の絵はなんじゃ？ 魔よけかえ？」

エディーさんがキャビネットの上に掲げられている絵を指差した。

「ああ、あれは太陽です。陛下が私にと」
「へえ？」

エディーさんは驚いたのか、素っ頓狂な声を上げた。
そうよね、闇に住まうヴァンパイアの王が“太陽の絵”だなんて。
アリスは物珍しそうに顔を横にしたり、下からのぞきこむように
して壁の絵を見つめていた。
どの角度から見ても同じだよ……。

「魔界ではああいうのが芸術なのかしら？」

私にはいい絵なのかどうかさっぱり分からないわ、とアリスが付
け足す。

「ああ、どうかな。そうなのかも……」

「下手クシヨなだけじゃね、フヒヤフヒヤフヒヤ！」

エディーさん、それは言ってあげないで！

「あの陛下がねえ」

ミセスグリーンは、彼女専用の小さなカップをソーサーに置いた。
人間で言うならきつと、大きく目を見開いて信じられないと肩をす
くめていると思うわ。
確かにあの人が女性に自分の絵をプレゼントだなんて、最初の頃
からは想像できなかった。

後片付けをしながら、ミントさんがグフフと笑った。

「噂で聞いたんですけど、これ何百回も描きなおした渾身の作品

らしいです。絵は苦手で、もう二百年も筆を取ってなかったらしい
ですのに、ソフィア様に気に入ってもらったためにそりゃあ必死で。
絵の講師も驚いていたとか、いなかったとかあ」

何だかその様子が目に浮かぶよう。

完成したそれを見て、陛下はきつと無邪気に笑ったんだろっな。
顔に絵の具をつけていたりして。

……あれ何だろうこの感じ。何を知られて私も笑ってるのかしら。
急いで緩んでいた顔を引き締める。

「ソフィー！」

アリスの大きな声に、思わず肩が跳ね上がった。

「え、な、何？」

「大丈夫？ 何回も呼んでただけど」

意識をどこかへ飛ばしていたらしい。

どんな顔してあの絵を見てたんだろっ。恥ずかしい……。

ミセスグリーンは少し尋ねづらそうに、モジモジと手を擦り合わ
せた。

「あの、ソフィーはあの方をお慕いしているのかい？」

その質問に、心臓の鼓動が急に速度を上げた。

「え？ えつと……」

とりあえず口を開いたけれど、続く言葉が見つからない。

確かに彼には妙な力がある。

冷淡かと思えば情熱的で。

泰然としているかと思えば頼りなげで。

でもいつだって私を大切に護ってくれようとする。

あの件で激しく自分を責めている陛下を、放っておけないのは事実。

本当はすごく繊細な心を持ったあの人を愛おしいと思っているのも事実。

それを私にだけ向けてくれていることに、むず痒さのようなものを覚えているのも事実。

これは……この胸の奥がギュツと締め付けられるように苦しい気持ち……。

やっぱり、慈しみの情じゃなくて？

「あの……えっと、だから」

どうしてだろう。考えが上手く言葉にできない。

ミセスグリーンは私の心を察してくれたらしい。

「いや、いいんだよ？ あんなことがあったとはいえ、あの方なりに反省をして謝罪して、ソフィー自身がそれを受け入れたんなら、それはそれで構わない。ま、あたしはあの人を心のどっかでまだ許せていないけど？ けど……決めるのはソフィー自身なんだから」

彼女はトトトと私の方へ近づくと、「ね?」とそつと手を撫でてくれた。

彼女の足先のうぶ毛を通して、温かみを感じる気がする。

「ごめんなさい、自分の気持ちなのにこんな曖昧な」

大きすぎるこの気持ちに、頭がついていかない。

自分の心を分かっている気がするのに、正面から受け止める準備ができてない。

一体何を怖がってるんだろう、私は。

「いいのよ、ソフィー。愛ってというのは、ほら……何て言うのかしら、あれね、そう」

ミセスグリーンは言葉を探すように手の先を空で回す。

「複雑だから」とアリス。

「そ、複雑だから」

「ありがとう、二人とも」

アリスはティースプーンを上唇と鼻の間に挟みながら、感慨深げに息を吐いた。

「ソフィーが陛下と結婚したら王妃様ね。私はそのお友達になれるなんて、なんだがすごくわくわくするわあ」

そういうものなのかしら。私は王妃なんてものすごく気が重いんだけど。

「ああ、安心してソフィー」

にやりとアリスが笑う。

「陛下は私の部屋には一度も足を運んだことはないから。それに最近は全く音沙汰がないって、お隣さんが鼻の穴をコインみたいに広げて怒ってたわ」

「わ、私は別にそんなこと気にしてなんて……ってあれ。エディーさんは？」

アリスの視線に耐え切れずエディーさんの方を見れば、彼の姿が忽然と消えている。

急いでテーブルの下をのぞいてみたけれど、そこにもいなかった。

廊下へ続く扉が少しだけ開いている。

ま、まさか外へ？ マズいわ！

ガタリと両手をついて立ち上がった。

すると彼が扉の隙間から顔と手を出した。

「この鍵もーらっぴい！」

チラチラと振ってみせるそれは、王の部屋へ通じる……！

「エディーさん？ え、エディーさん！」

急いでその後を追いかけて、廊下に飛び出した。

幸い誰もいないけれど、いつ誰と出くわして衛兵に通報されるか！

「はっちゃけたジジ……おじいさんね」

途中で訂正しながらアリスが言った。

エディーさんは老人とは思えないほどのスピードと身のこなしで廊下を突き進んだり曲がったりを繰り返している。

何てすばしっこい。

「あの、エディーさん！ そっちはダメです！」

振り回すうちに途中で落としたらしい鍵を拾いあげる。

早く捕まえないと！

彼が急に右に曲がり、その後を追いかけて走るうちに気づいた。

「あれ、アリスがいない……ちょっと待って、ここ」

高いアーチ型の天井。左右にずらりと並び、男女の愛をモチーフにした絵画や像。

そう、王の部屋へ通じる秘密の廊下だった。

「どうしてエディーさんがここを通れるの？」

鍵を持つものしかこの廊下が見えないはずなのに。

もしかして妖精には効果がないのかもと思いつつ、小さな背中を追いかける。この先は鍵のかかった扉がある。そこでなら捕まえられるわ。

そう思ったのもつかの間、あるうことが彼は魔術で扉の鍵を開けて中へ入った。

嘘でしょう。

妖精ってそんな力があつたんだ……！

「エディーさん！」

普段用の比較的ロータイプなものとはいえ、ヒールで走るのってすごく大変。靴ずれでかかとか痛い。つま先も。

やっとのことで扉を開けると、エディーさんが陛下のベッドの上でピョンピョン跳ねていた。

私はハアハアと肩で息をしているのに、エディーさんはものすごく元気みたい。

「わぁー広い部屋じゃのお。ソフィアたんもここに通つとるのか？
ぐふふふ」

「エディーさん、ここにはダメです。不法侵入で捕まってしまったらどうなるか。お部屋に帰りましょう。しばらく使ってください結構ですから」

エディーさんは飛び跳ねるのを止めて、割れたメガネの先の目を大きくして、驚いたように私を見つめた。

「へえ？ 置いてくれるのかね」

「は、はい。帰る方法が分かるまででよければ。私はアリスの部屋で眠りますから、大丈夫です。それにあそこは基本的にミントさん以外出入りしませんし、彼女も告げ口なんてしませんから。ね？」

エディーさんはそれにウルウルと涙を浮かべる。

「こんなどこその者とも知らぬ浮浪妖精に……そこまで親切につ。でも探検してからにしようっ！」

「あの、ちよつとエディーさん、本当にダメですって！」

「ワワワホッホーイ！」

次々と扉を開けて、王の部屋を出て行く。
ここまで自由奔放な人、初めてだわ……！ レオ様以上じゃない
つ。

守護妖精じゃなくて、単なるイタズラ妖精なんじゃないかと思っ
た。

見失った。

どこ？ どこにいるの？ まさか衛兵さんに捕まったんじゃ？
ひっそりと静まり返る廊下を見渡す。廊下に並ぶ絵や美術品はと
ても美しいけれど、今はそれを鑑賞している場合じゃない。

どうしよう。陛下もいないし。
額に手を当てた。

あれ、今何か音がした？

近くで小さく”カタリ”、と何かがあたるような音がした。

そつと廊下を歩いて、角から覗く。

行き止まりのそこには、大きな黒い扉があった。一番上を見てい
たら、後ろに転んでしまいそうなほどに背の高い扉。

材質は何か分からないけれど、キラキラと全体的に何か光って
いた。そつと触れると、色が薄桃色に変わって反射的に手を離す。
扉は何事もなかったかのように色を戻した。

不思議な扉……。

おそろおそろ金色の取っ手に手を掛けた。ゆっくりとそれを押す。

鍵はかかってなかったみたい。

「エディーさん？ エディーさん？」

やけにドキドキしながら顔だけ覗かせてみた。

まるでダンスホールのように大きな広間だった。薄いグリーン色の床。何本もの太い柱が等間隔に天井を支えていて、ぼんやりとオレンジ色の明かりが柔らかく周囲を包み込んでいた。

「エディーさん？」

もう一度呼んだ。でもやっぱり返事はない。

けれどあの人が大人しく出てきそうにもない。どこかに隠れて私を驚かしてやろうと息を殺しているのかもしれない。

「エディーさん」

そつと中へ入って扉を閉めた。少しヒンヤリと冷たく肌寒い。それにしても、すごい所……。

ヒールが床を叩き、まるで高級な打楽器のように美しい音色を奏でる。

どこかしらと柱の影をあちこちのぞいてみたけれど、エディーさんの姿はない。

ここじゃなかったのかな。

「大きな鏡……」

扉のちょうど真正面にあった巨大な鏡に目を奪われた。私の身長
の三倍くらいありそう。

鏡の下に、私の上半身が映りこむ。溶けそうなほどに磨きこまれた表面。縁にはたくさんのガイコツや悪魔の彫刻がなされていたけれど、まがまがしさよりもその高い芸術性に心引かれた。そつと手を伸ばしてみる。

『さわるな』

「ひゃっ！」

突然聞こえた野太い声に思わずしりもちをついた。床が硬くて腰が痛い。一瞬目の前に火花が見えたわ。

鏡の中を黒い煙が渦巻き、それが何かの形を成して行く。

何？ 何が起こるの？

尻もちをついたまま後ずさる。

グググと鏡からせり出すようにドラゴンが巨大な顔を見せ、大きな鼻先を私の目の前に突きつけた。

『我が名はアラゾーク、人間ごときが余に触れるな』

薄緑色のドラゴンは、ゴーストさんのように透き通っていた。それでもびっしりと顔を覆うウロコはとても硬そうで、私の体の半分くらいありそうな目は生氣を持ってランランと輝いていた。

洞穴のような鼻孔を二度ほど開閉させ、ドラゴンはググツと体を起こした。

見下ろされる威圧感に息が詰まりそう。

あれ、アラゾーク？ アラゾークって言った？

『私の妻になれば “アラゾークの魔鏡”^{まぎょう}が何でも願いを聞き入れてくれる』

陛下の言葉を思い出す。

まさか、これの……こと？

『お前の願いは何だ』

それに目をパチパチと瞬かせる。

ドラゴンは岩のような顔をグイッと傾げた。

『欲しいものを言う方がいい、哀れな人間よ』

洞窟に響くかのような重低音の声。彼が何か話すたび、体の芯が
ビリビリした。

鋭い牙がびっしり生えた口を開ける。

「欲しいもの……」

『そうだ。金？ 美貌？ 宝石？ 他者の心を支配できる力？』

ドラゴンが何か口にするたび、札束を握ったり、おめかししたり、
宝石で着飾ったり、腕っ節を見せつけたり、せわしなく姿を変えて
動いた。

動く絵本のように楽しい。

『何でも与えてやるぞ』と学校の長机もびっくりな爪を差し向け
られる。

その大きさにおっかなびっくりしながらも、ゆっくりと立ち上が
った。

ドラゴンの顔を見上げながら、

「あの、王妃にならなければ、願いは叶えてもらえないのでは？」

『まさか、そんなケチくさい。遠慮はいらん。さあ、言え!』

両手にお札、首にネックレス、それにヒドイお化粧姿でふんぞり返る。

願い……私の願い。

「私が欲しいものは……」

ドラゴンの目がそれに合わせて大きく見開かれる。

「特にありません」

がつくりとして身につけていたものが全て剥がれ落ち、ドラゴンは元の姿に戻った。

“人間界に帰りたい”と言わなかった自分にも、あまり驚かない。

『フン!』

突風のような鼻息が吹きかけられた。髪がブワツとなびく。

『お前が何ぞ欲しい物を言ったところで無駄だ。願いは王の口を通してのみ叶えられる。人間が何を言おうと知ったことではない!』

何それ。自分で聞いておいて。

「私を試したのですか？」

それにドラゴンは体全体を揺らして笑った。

盛りあがった目蓋に囲まれた鋭い目で、ギロリとこちらを見る。

フウと強く息を吹きかけられ、ツルツルと後ろ向きに滑って柱に背

中が当たった。

ドラゴンが顔をぐいと近づける。

『試す？ 試す価値もないッ！ お前たち人間のようになちっぽけな存在など、王の世継ぎを生むことしか取り柄がないのだからな！』

「そ、そんなことはありません！」

『そうかそうか、ではどこかに魅力があるということなのだ。どこ？ どこどこどこにある？』

ドラゴンは巨大な虫眼鏡で私の頭のとっぺんやら肩やらあちこち見まわる。

初対面なのになんて失礼な！

「陛下は、人間をそんな風に思っていないません！」

ドラゴンがポイと後ろへ虫眼鏡を放り投げると、ガシャンとレンズの割れる音がした。

『ハッ！ 何を根拠にそのような。確かに先王とルイーゼは、ヴァンパイアと人間の垣根を越え、驚くほど深く愛し合っていた』

その言葉に合わせるかのように、鏡の向こうで一組の男女が仲睦まじく手を取り合っているのが見えてドキッとした。

一瞬陛下が映ったのかと思って。

でも違う。

女性は見たことがあるわ。ルイーゼさん、王のお母様。

だからあの陛下やレオ様によく似た男性は、きっとお父様だわ。

教科書に載っていたのはヒゲを蓄えていたけれど、あれは若い頃

のお顔なのかしら。

お二人はとても幸せそうだった。

互いに額をつけて、至近距離で見つめ合って。お互いを思いやる柔らかな空気がにじみ出していた。こちらまで思わず笑顔になるかのような。

口づけしようとするお二人の姿がスツと消えた。目の前にドラゴンが割り込んでくる。

反射的に顔を引いた。

『だがあれは例外中の例外だ。お前のような取り柄のない小娘に、王が本気になるわけがなからう！ お前は家畜の魔豚と同じだ！ せいぜいお飾りの妃として血の提供者となるのが似合いであろう！ ガーッハッハハハハ！』

それに唇を噛み締める。陛下はそんな人じゃない……！

「あなたはあの人の何をご存知なんです！ ずっとここにいろくせに、あの方がどんな方かも知らないというのですか？」

『はっ！ 口の減らんおしゃべりな小娘が。口ごたえとは、ますます王には相応しくない。王もお前のことなど大勢の女の一人として思っておらんがなあ！』

「なぜそう言えるのです」

ドラゴンは耳まで裂けた口を意地悪そうに曲げた。短い腕を組み、物知り顔でひげをなでる。

『なぜって、お前は王がここに誰も連れてきたことがないと思って

いるのか？』

それに胸がズキリと疼いた。

ドラゴンはどこからともなくスケッチブックを取り出し、ものすごい勢いで何枚もの絵を描き始める。それを流れるようにパラパラめくると、キレイな女性の絵が動き出した。

『この先月来た女は、この通りなかなかスタイルが良くてなあ』

グラマーな女性がそれを強調するように胸を揺らし、投げキッスをする。すごい美人。

ファーストクラスにいるのかしら。見たことはないけれど、こういう人もきつと住んでいるだろう。

『そしてこれはついこの間来た女』

百合のように穏やかで清廉さを感じさせるブロンドの女性が、優しく微笑んだ。

とても頭が良さそうで、育ちのよさを感じさせる。私にはないものを持っているように見えた。

『王妃としての品格を備え、それはそれは王とも釣り合いが取れていた。王も心から慕っていたようだしな。ここで仲睦まじく抱き合い、永遠を誓うキスをしていた』

パラパラと絵が動いて、陛下と知らない女性が愛おしそうに口づけをかわす。

まるでさっきの陛下のご両親のように。

もちろんこれはただの絵。

でも言い知れない感情が沸きあがってきた。
怒りなのか悲しみなのか悔しさなのか、それすらも判別できないような感情が。

後宮は、陛下が女性と愛をささやき合う場所。そこに私も住んでる。王に愛されたいと願う多くの女の子たちと一緒に。

アリスは陛下が最近他の女性のところへ通わなくなったって言うてたけど、彼女が知らないだけかもしれないし、今はそうでもいずれ私の元を離れていくかもしれない。

私は暗い部屋で、あの人が来てくれるのをじっと待つことになるんだろうか。陛下が他の女性に愛を囁いている間も、ずっと一人で

下目蓋からじわじわと水がせりあがってきて、景色が滲んでいった。

涙を零してしまわないよう飲み込んだ。それでもどうしようもない悲しみが喉の奥からこみ上げてきて唇が震える。

ゲラゲラ笑っていたドラゴンは、私のおかしな様子に気づいたのか、ハタと笑うのをやめた。

『小娘、おい、どうした、おい……』

調子が狂ったのか、どこか動揺しているように感じられた。

『ほ、他の女を連れてきたというのは嘘だ。王とはここ百年近く顔を合わせていない。ほ、ほんのジョークではないか、ジョーク！』

そう言ってスケッチブックをビリビリに破いて捨てる。

今更そんなこと言われたって……。

『小娘……小娘え〜』

ドラゴンはガラガラを取り出して振りながら、右手にピーピー鳴くゴブリンの人形を持って揺らした。

私は赤ん坊じゃない！

そう思うと同時に頬を涙が伝った。それにつられるように、反対側からも零れる。

『な、泣くな！ 面倒な！』

ドラゴンはガラガラと人形を後ろへ放り投げる。

だって、どうしろと言うの？ 勝手に零れるんですから……。

「もしまたここに来ることがあっても、あなたにお願いなんてしません！ さようなら！」

涙を拭いながら早足で扉へ向かった。ものすごく惨めで嫌な気分。

『上等だ！ 王に告げ口をしたら許さんからな！ 小娘！ 小、ちよつと待て！』

背中に掛けられる声も全部無視。

『何もそんなに急いで出て行くこともないだろう？ 戻って来い、戻っておいで！。ほら、楽しいゲームをしよう！ な？ 小娘？ 小むす 』

バンと扉を閉めた。

扉にもたれて息を吐き出す。

悪い夢を見たとも思うしかないわ。陛下が他の女性とあんな…

まわりつくものを振り払うかのように、軽く頭を振った。

いえ、それより今はエディーさんを探さなきゃ！

廊下を壁に沿うように歩いて周囲を見渡す。透明マントもないし、見つかったら確実に怒られちゃうわ……。

ああ、どこ行ったんだろう、エディーさん。

「ソフィア！」

ドキリとする。ハツとして振り返った。

レオ様！

彼が驚いた様子でこちらに早足で近寄ってきた。

ど、どうしよう。また勝手にこっちに来てしまった。それにレオ様と話したら、今度こそ王との約束を破ったことになっちゃう！

急いで目をそらして踵を返した。無駄だとは分かっているんだけど、逃げなきゃと思って。

「待つて！ 逃げないで」

手首をつかまれる。

恐る恐る振り返って見上げた先のレオ様は、どこか顔色がすぐれないように見えた。

なぜか辛そうに眉をひそめ、息も切れている。この距離でそうなるはずもない。ずっとどこか走り回っていたんだらうか。

「よかったソフィア、無事だったんだね。後宮のどこにもいないからびっくりしたよ」

彼は一度ギュッと私を胸に抱くと、手を握りしめ、膝を床につけて見上げた。

その苦しげな表情と紡がれた言葉に、ただならぬものを感じる。

「あの、無事って……どうかしたんですか」

どうしてかしら。ソワリと鳥肌が立った。

何なの、この悪寒……。

「落ち着いて聞いて」

誰もいない静かな廊下に、彼の荒い吐息がやけに響く。

レオ様は声のトーンを落とした。

「実はさっき入った情報なんだけど、ブラッド法反対派の奴らが、兄上を襲撃する計画を立ててるって話が出てるらしいんだ」

「……え」

どういう……こと。

レオ様は辛そうに瞳を閉じ、またまっすぐに私を見つめた。

「真偽はまだ不明だけど、兄上が好意を持つてる君も危険かもしれない。だから君は一度ここを離れて、騒動がおさまるまで別の場所に避難してほしいんだ」

避難？

私も？

混乱しそうになる頭で、何とか冷静さを保とうと唾を飲み込んだ。

「わ、分かりました。だったらアリスたちも」

レオ様は首を振る。

「いや、危険なのは君だけだ。それにもしこれが本当じゃなかったら、城内の連中を無駄に刺激してしまう。だから君だけこっそりここを抜けるんだ。今すぐ。そこにいるグレイと二人で」

”そこにいる”？

「っ！」

いつの間にか、レディエンス家のあの人が背後に立っていた。ポケットに両手を突っ込み、あの金色の瞳で冷たく私を見下ろしている。

“二人で”って。

それに戸惑いを覚えた。じっとこちらを見る、獣のような双眸が恐ろしくてしかたない。

押し倒されて、無理矢理口づけされて。

そんな人と二人きりなんて。怖い。

「あの、レオ様の傍にいてはだめですか？」

助けを乞うように彼を見つめた。頬が引きつっているのを、自分でも感じる。

レオ様はとても申し訳無さそうに目を伏せた。

「ごめん、オレは……別に用があるから。けど大丈夫、グレイももうあんなことしないって約束してくれたから。ね？」
「はい。申し訳ありませんでした」

無機質な謝罪が右から左へ抜けていった。

こんな……。

謝られても、不安は拭えない。信用もできない。
なのにどうしてこの人なの？

本当はそう叫びたかった。

でも陛下の身に何か降るかろうとしている、こんな非常時にわがままなんて

今朝見た、陛下の嬉しそうな微笑みを思い出して苦しくなった。

陛下……っ。

言い知れぬ不安が表情に出ていたんだろう。レオ様の両手が私の頬を包んだ。金色の髪の間から、美しいサファイアブルーの双眸が目の前に見える。

「大丈夫、兄上は必ずオレが護ってみせる。絶対に」

信じるしかない。この決意に満ちた瞳を。

レオ様がそう言ってるんだから、きっと……きっと大丈夫よね。

「レオ様も、どうかご無事で」

そう言ってレオ様の背中へ手を回すと、彼もしっかりと抱き返してくれた。

けれどなせだろ。

彼が一瞬、鼻で小さく笑ったような気がした。

s t . ?

The Dragon (後書き)

あとがき

遅くなってすみません…… - - ;

「何が追加資料だ。下らんものばかりよこして」

ザルクは盛大にため息をつきながら、それでも大人しく資料をめぐっていた。

夜空を数十ヤードにも渡って馬車の列が駆ける。まるでパレードのように華やかだったが、軍人たちの勇ましい表情が周囲の空気を引き締め、どこか鬱陶気を醸かなものにしていった。

中でもひととき豪華絢爛な車の中は、そこが車内であることを忘れるくらいに広々としていた。

ヴァンパイア王国の君主、ザルクが柔らかなソファアーにだらしなくもたれかかり、長い足を組んでも余裕がある。

愛想笑いを浮かべたゴブリンが、備え付けのテーブルの上へ紅茶を二つ用意すると、ヒョイと飛び降りて机の下の小さなイスにちょこんと腰かけた。

「文句を言わず目を通しておいってください、陛下。遊びに行くのではないのですから」

ザルクとは対照的にシュレイザーはきっちりソファアーに座り、隣から次々と書類を渡していく。

「そ、そんなことは分かっている……」

小言を並べながらもページをめくっているのは、彼の存在によるところが大きいようであった。要は頭が上がらないのだ。

「へー王様でも怒られるんすね」

その声にザルクは顔を上げた。

そう口にしたのはザルクの向かい側に座る衛兵らしい。帽子を目深にかぶり、艶やかなライフル銃を小脇に抱えている。その姿がやけにサマになっていて、熟達したエリート兵士であろう印象を受けた。

だがザルクはその声に聞き覚えがあった。それもここ最近、“城の外で”聞いた覚えが。

「お前……」

衛兵がクイツと指で帽子のつばを押し上げると、シルバーかかった瞳の端正な顔立ちの男がいた。町で会ったあのヴァラヴォルフ警官である。

「何をしている」

「転職しました」とダンは軽く手をあげる。

だがザルクには笑えない冗談だったらしい。

「嘘をつけ。入ったばかりの軍人がこんなところに護衛につけるはずないだろう。ウチの近衛隊長をどこへやった」

「大丈夫ですよ。ちょっと縛って閉じ込めてるだけなんで」

悪びれるようすもないダンに、ザルクは短い嘲笑を浮かべた。

「やることが派手すぎるな。組織ではかなり使い勝手が悪い。私なら即刻クビにしている」

だがダンは、そんな他人の評価などどうでもいいいらしかった。銃を横へやり、腕を組んでザルクを見すえる。

「ソフィアはどこに？　こんな狭苦しいところでデカイ野郎三人つて何かの拷問っすか」

「お前が勝手に入ってきたんだろ。それと次期王妃たる彼女の名を軽々しく呼ぶな」

「誘ったものの断られたんですよ」
「シユレイザー！」

ザルクの顔に、“言うな”という感情と“なぜ知っている”という驚きが入り混じる。

「それはお可哀想に。本当は嫌われてんじゃないすか？」ダンはずとらしく肩をすくめる。

ザルクはそんな挑発に一瞬感情的になりかけたが、すぐさま冷静さを取り戻した。何かを思い出したかのように嬉しさを隠し切れないう笑みを見せる。

「嫌われているだと？　彼女からキスされたのにか」
「キス？」

ダンの眉間にシワがよった。ザルクはチラリとそれを確認し、まします気をよくする。

「そうだ。“朝”、“彼女の部屋から帰ろうとする私”を“わざわざ”呼び止めてごう、可愛く手招きをしてだな」

いちいち関係を深読みさせるような言葉を強調し、嬉しそうにつ

らつらと今朝方のできごとを語る。

「そして『陛下、昨晩はステキな夜をありがとうございました。とても愛しております』と小さな唇を自ら私に……ああ、今思い出しただけで……」

「陛下、資料二の三ですが」

「なぜ邪魔をする……」

半分妄想とはいえ、いいところだったのにと齒噛みした。

「けど陛下はソフィア以外にも行くところがおりなんでしょう？ 後宮があるんですもんねえ、ああ羨ましい」
「お前には関係のないことだ」

ザルクの声のトーンが落ちる。

「“オレ”にはそうっすね」

口調は軽かった。だがそこに幾分の蔑視の念が滲んでいることをザルクは敏感に感じ取っていた。

虚言や美辞麗句ばかりの世界で生きてきたが故に、他人の一言一句から正確に本音を読み取れる。

ソフィアに関することとなるとどうにもその能力が曇ってしまうようだ、目の前の男が何を言いたいかはすぐに分かった。他の女の元へ通うことで、一番大切な彼女を傷つけているのではないかと言いたいのだ。

ザルクの漆黒の瞳の奥が、ロウソクの炎のように揺れる。

「私はお前以上に彼女を愛し、理解しているつもりだ。もう一度だけ言っ。お前には関係のないことだ、お前が彼女に気があるうとな」

「……」

ダンもまた、職業柄他人の表情を読み取ることには自信があった。だがこの男は何を言わんとしているのか、霞がかつたように見えない。何か決意を抱えているような目をしている気がするが、踏み込む余地はあつという間に遮断された。隙のない男だと思う。どこか底知れぬ恐ろしさすら感じた。

「陛下……」

シュレイザーだけは何か勘づいたようだった。何とも言えぬ、驚きの混じった表情をしていた。それが何を意味しているのか、部外者たるダンには分からない。

ザルクは小さく笑うと、再び資料に視線を落とす。

「シュレイザー、その後エヴェリーとはどうなった」

場の空気を変えたかったのか、それとも話題を変えたかったのかは分からない。声のトーンを戻してそんな何でもない話の種を振る。シュレイザーも先ほどのやりとりなどなかったかのように、いつもの無表情さを取り戻した。

「どうなったとは？」

「交際を申し込まれたのだろうか？ 寝たのか」

あのあと、どうやら彼女は数十年の思いの丈をシュレイザーに吐露したようであった。

ザルクが本人たちから直接聞いたわけではなく、帰り際のエヴェリーナ王女のすつきりとした様子で悟つただのだ。

シュレイザーは呆れたようにため息をつく。

「あの方は第一王女ですよ？ あの方と結ばれればニユンペー国の次の王になってしまふ。私はこの国に生涯を捧げると誓った身。そのようなことはできません」

シュレイザーは何か書き込みながら書類のページをめくる。

「なんだつまらん」

ザルクは紅茶のカップを手に取り、口をつけた。

「と申し上げたところ、家を出るとおっしゃって現在私の屋敷にいるのですが」

「ブツ」

ゴホゴホと咳き込み、驚き入った表情でシュレイザーを見つめる。テーブルの下ではゴブリンが自分の頭に降りかかった雫を上着の裾で拭いていた。

シュレイザーはザルクと目も合わせず、ただ小さくかぶりを振っていた。

「早く荷物を持って国に帰るよう陛下からも説得してやってください。ご両親からの手紙は絶えない上に」

足元からバスケットを取り上げてみせた。

「本日もこのようなランチボックスまで持たされて。今日作ったものが四日ももつはずないでしょう」

「そこまでアグレッシブな女だったとは……」

ザルクは内心、好かれたのが自分でなくてよかったなどと失礼なことを思っていた。

「国王補佐つてのは、色々お世話が大変なんすね」

「ご理解いただけて恐縮です」

妙な連帯感を見せるダンとシュレイザーを尻目に、ザルクは面倒そうにページをめくる。

「で？ 何の用だヴァラヴォルフ。下らん用事なら蹴り落とす」

ダンはそれに双眸をギラつかせた。この国の最高権力者を前に、彼はタカのような警官の目をしてみせる。

かなりの正義感の強さが垣間見えた。無茶な捜査方法も、そこから起因しているのかと思わせた。

「いえ、ちょっとした聞き込みつすよ。王に電話を取りついでくれて言ったらダメだって言われたんで。さすが敷居が高い」

「聞き込み？」

「あの時、ソフィアを襲ったやつらを全員逮捕したんですが」

一瞬の間を置く。

「消えたんですよ」

「容疑者を取り逃がすとはとんだ失態だな」

「逃げたんならまだマシ。本当に一人残らず姿を消したんすよ。煙のように」とダンはパツと指を広げた。

「シルバードブレッドやら高い魔力を含んだ印紙やら……最近どうにもオカシイんですよねえ」

世間話などではない。彼は事件の答えを求めていた。

「ほう、我々ヴァンパイアの中に、町の人間たちを売り買いしている者がいるのではないかと疑っているわけか」

「まさか黙認してるんじゃないですよ？ もしくは……」

「私を疑うのなら筋違いだ。私は誰よりもブラッド法を重視している」

淡々としているのに、酷く重苦しい会話だった。

言葉の裏で、腹の探りあいをしているかのような。

「ヴァラヴォルフのオレにはよく分からないんですがね」

ダンはクイツと帽子のツバを下げた。隠し切れない疑いの眼差しを覆ったためだったのだろうが、ツバの下から僅かに見える瞳に宿る光はサーベルのように鋭く突きたてられる。

「そんな紙に書かれた数行の文章ごときで、ヴァンパイアが血への欲望を抑えきれるとは思えないんすよね」

明らかかな敵対心を持っていた。どこか憎しみにも似た感情にも思える。自分の見初めた女性が、彼女がいつかこの男の欲にまみれた毒牙にかかって化け物になってしまうのではないか。

そんな怒りや、どうにもできないもどかしさが胸の内に湧き出ているようだった。

だがそんな炎のような感情をぶつけられても、ザルクは深夜の湖のように穏やかだった。

「つまりヴァラヴォルフは、空腹になれば愛する女の肉も喰らうのか。随分と野蛮なことだ」

「話をそらすな……」

軽口を受け止める余裕も、立場をわきまえるゆとりもなかった。

あの時、彼女を無理矢理にでもこのヴァンパイアから引き離して町を出るべきではなかったのか。そんな思いがまとわりついて離れないのだ。

ザルクはそつと目を閉じる。

「お前が我々をどう言おうと勝手だが、今度あの法を“数行の文章ごとき”などと口にしたら」

そこで空気が凍りついた。

比喩的ではなく、実際にダンはゾクゾクとして鳥肌が立つのを感じた。体が芯から冷え切り、シュレイザーすらも冷や汗を流し、表情をなくしていた。

「職を失うだけではすまないと思え」

目を開けたザルクのあまりの冷酷な赤い瞳と怒りに打ち震える口元に、そこにいる誰もが戦慄を覚えて言葉を失っていた。

私がレディエンス家の人とやってきたのは、霧の中に佇む小さなカントリーハウスだった。

レンガ造りのその家は煙突があつて、小さな馬小屋が隣接してい

て。こんな雰囲気じゃなきゃ、ドールハウスのように可愛く素敵な家。

けれど周りは断崖絶壁で、空飛ぶ馬、スレイプニールの引く馬車じゃなきゃ来られないようなところ。生き物の気配が一切なく、不気味すぎるほどに静かだった。それに少し肌寒い。無意識に腕をさすった。

こんなところで身を潜めていなきゃいけないなんて。しかも私を襲いかけた人と。

「馬車から荷を下ろして運び込んでおけ」

彼はそう言い残すと、馬車を降りて一人で家の中へ入っていく。どうして私かと思いつつ、仕方なく下車して積んであった大きなトランクを引っ張った。

「重い……っ」

何これ、何が入ってるの？
歯を食いしばって思い切り引き出す。

「よ……っしょ！ きゃっ」

とんでもない重量のそれに、思わず落としてしまった。足の指に当たらなくてよかった。だって落ちたところの土がぱっくりとえぐられてる。

「役立たずな女」

背後から突然声が出てビクリとした。

彼は地面に落ちたそれを軽々片手で持つと、一人家へ向かう。最初から持つてくれればよかったのに。

そう唇をとがらせつつ、そのあとを急いで追いかけた。

「お前はここだ」

レディエンス家の人は、三つほどあった部屋の内の一つを開け、中に入ってトランクを置いた。

内装も愛らしく、柔らかかそうなベッドに小さな丸テーブル、ちょっとしたキャビネットに小物が並んでいた。

最近まで使われていたんだろうか。緊急事態でここに来たわりにはホコリっぽさもなく、とても手入れが行き届いている。

「なぜそこに突っ立っている」

戸口に立ったまま中に入ろうとしない私を、彼は部屋の中から振り返った。

「あなたが出て行ったら入ります」

彼は無言で私の前までくるとポケットに手を入れ、目だけでギリと見下ろした。それに少し後ずさる。

本当に怖い。おびえを気取られないように、ギュッと両手を握りしめた。

「心配するな。お前がどれだけオレを誘おうとお前とは交われない」
「ま、交わ……」

そういつと彼はズボンからシャツを引き出して脇腹を見せた。一瞬ドキツとしたけれど、どうやら何か魔法陣が描かれてあるみたい。

「これのせいで“オレのアレ”が使い物にならないからな」

何て答えればいいのか、それに……！

思わず眉をひそめた。誰にそんなことをされたのか分からないけれど、やっぱりそういうことに手の早い人なんだわと思う。

あ、あれ……がそうだからって、安心していいものなのかしら。

「何だ。そんなに“欲しかった”のか」

「違います!」

シャツを適当にしまいこむ彼に声を少し荒げる。この人って普段からこんなことしか言えないの？

いえ、ここの住人は確かそういうお話が好きだったわね。忘れてた。それを加味してもストレートすぎるけれど。

彼とすれちがうようにそそくさと部屋の中へ入った。

「あの、これはいつおさまるのですか」

彼の背中に問いかける。

「さあな」

そうよね、分かるはずない。

陛下が他の国に入ってしまったては、多分反乱貴族たちも手を出せないはず。

ならお城に帰ってくるべきを狙って……？ でもそれなら十分対策を練る時間があるわ。

大丈夫よね、……絶対。

窓の外を見つめた。霧の向こうに険しい山脈がうつすらと見えるだけ。ここからは何の情報も得られない。私にできるのは、陛下とレオ様をここで信じているだけ。

陛下……。大丈夫なんですよ。レオ様がいるんですものね。

「お前は絵を描くのが得意なんだろう」

まだ戸口付近にいたらしい彼が、キャビネットの引き出しから紙とエンピツを取り出して丸テーブルの上へ乱暴に置いた。

「描け」

「何を……ですか？」

彼の金色の瞳を見つめる。彼もまっすぐ私を見た。

「女の裸」

この人、頭の中どうなってるのかしら！

口を開けばそんなことばかりで、こんな状況なのにと怒りすら芽生える。

「勝手に好きなものを描いている」

私が半ばにらみつけるような視線を送ると、彼はそう言って部屋を出て行く。

冗談だったの？ 分かりづらい。

不安が厚い雨雲のように心を覆っていたけれど、何とか落ち着かなくなきやと椅子に座ってエンピツをとった。

こんな状況で何を描けばいいのかわからない。

『むしゃくしゃしているときや、悲しくてしかたないときは、そのままそれを描き込めばいいんだよ、ソフィア』

お兄ちゃんのそんな言葉を思い出した。

そうね。その通り。

ただエンピツの赴くままにまかせた。

「ほえ、ソフィアさんは王様と違って絵が上手いの」

それに思わず笑みがこぼれる。

「ありがとうございま……」

え？

思わず手が止まる。

この部屋には私しかいないはず。ハツと声の方を見やると、向かい側の椅子に座って私の絵を覗き込んでいる小柄な人がいた。

「え、エディーさん！ どうしてここに？」

見失って探していた人の登場に息を呑んだ。

「あれに入ってきたんじゃない！」

彼はシワシワの指でトランクを指す。

あんなところに？ だからあんなに重かったんだ……。

「あの男とアバンチュールかい！ ぐふふふふふ！」

両手で口を押さえて肩を震わせる。

「ち、違います。少し……事情が」

「じじょう？」

エディーさんが首をかしげたとたん、グルルルルと音が響いた。
私じゃない。

「お腹しゅいた」と彼はシュンとしてお腹を押さえる。

あんなにたくさん朝食を食べていたのに、もう？ と思って時計をみれば、もうお昼はとくにすぎている。気づかないうちに、こんなに時間がたっていたんだ。

なら少し早い夕食でもいいかもしれない。

何も喉を通る気はしないけれど、気は紛れるわ。

「分かりました。何か食べ物を探してきます。エディーさんは絶対にここを出ないくださいね」

「ほーい！」

部屋を出て扉を閉める。確かこの家の出入り口あたりに台所があったはず。

レディエンス家の彼はどこにいるのかしらと考えていたそのとき、ダイニングから何か硬いものをかじるような音が聞こえた。

まさか……と足を止める。

ひ、人の骨か何か食べてるんじゃない……。いいえ、まさか。でも相手はモンスター。何をしてたっておかしくない。思い切って中を覗いた。

「何だ。腹が減ったのか」

クッキングストーブの前の大きなダイニングテーブルに座って、レイエンス家の彼が生ニンジンをはお張っていた。

食べるとばかりに木箱に入ったたくさんの野菜を差し出してくる。もちろん、そのまま。多分皮もむいていないんじゃないかしら。洗って……もなさそう。

「あの、それおいしいですか」

彼はニンジンで頬を膨らませたまま、かじったところをじっと見つめた。

「硬い」

「……そう、ですか」

何だろう。

この人が怖くなくなった気がする……。

「貸してください。あるもので何か作ります」

野菜の入った箱を抱えて流し台へ向かう。

棚には調味料もあるみたいだし、水も出る。料理するのに問題はなさそうだわ。

「お前はシェフだったのか」

真面目にそんなことを尋ねてくるものだから、少し可笑しくなつた。

けれどそうね。貴族たる彼からすれば、そんなことができるなんて普通じゃないのかも。

「そんな大層なものでは。でも料理は久々で楽しみです。こんな状況ですけど……」

鍋やらまな板やらを用意しながら、少し油断すれば、マイナスに傾きそうになる心を取り直す。

大丈夫、大丈夫と言い聞かせて。

「お前は」

不意にかけられた声に振り返る。

「お前はなぜ陛下だったんだ」

「え？」

なぜ陛下だった？ なんのこと？

「あの、何がおっしゃりたいんですか？」

そう尋ねたけれど、レディエンス家の人はそれ以上何も言おうとはしない。

宙ぶらりんになった疑問に首を傾げながら、私はダイコンに包丁を入れた。

出来上がったスープとサラダ、温かいパンをテーブルに並べた。レディエンス家の人は食卓のそれをじっと眺めている。

貴族の彼にとっては質素なものかもしれないと少し気になったけれど、こんな事態の中で豪華な料理を作る気力もなかった。

これで我慢してもらおうしかない。

「一つ聞いてもいいですか」

食前の祈りをするのもなく（もちろんだけど）、おもむろにパンにかじりついた彼を見つめながら、私は立ったまま口を開いた。

「いったい誰がこんな恐ろしいことを企てているんです」

レオ様は”襲撃”だと、なるべくショックの少ない言葉を選んでくれたけれど……陛下を襲うということはつまり……暗殺、ということなんだろう。

ピタリと彼の手が止まる。

「お前に言っても分からない」

そっけない返事だった。でもそれが彼にとって、どこか聞かれては困る類のものであるかのように感じた。

目の動きがどこかぎこちない。

「大丈夫なんですよね？　そうですね」

「オレは何も聞かされていない」

そうじゃない。口止めされているんだわ。
やっぱり、レオ様に無理にでもついて行けばよかったのかもしれない。いまさらだけれど。

そう思いながら、無言で、まるで流し込むかのように料理に手を付ける彼の様子をじっと見ていた。

自然と両手に力が入る。

内側から湧き上がってくる、怒りにも悲しみともいえない感情を噛みしめた。

「自分たちの欲望のために陛下を手にかけてようだなんて……勝手に勝手がぎます。最低です！」

どうして正しいことをしようとする彼を狙うの。
血を飲むことだって、完全に禁止されているわけじゃないじゃない。
い。

なのにどうして。どうしてあの人の命まで狙うの！

「お前はヴァンパイアを理解していない」

彼の金色の瞳が私を捉える。その目がまるで何もかもを知り尽くした賢者のそれのようで、妙な居心地の悪さを覚えた。

「でもあなただって愛する人間の奥さんがいるのでしょうか？」

さつき気づいたこと。

彼の左手薬指には指輪が光っていた。

でも彼はそれを、まるで私が指摘するまで忘れていたかのようにしげしげと眺める。

面倒くさそうに指から抜き取ると、ポイと無造作に床へ投げ捨てた。指輪はコロコロと転がって、壁に当たって止まる。

「！」

信じられない。永遠の愛の証をそんなぞんざいに扱うなんて。

「女は死んだんだからつけている意味がないだろう」

私の絶句する様子に対する、彼なりの返答なんだろう。

でもだからってこんなことする？ それに奥さんを“女”だなんて。

……そっか。分かった。

「血が欲しくて結婚したんですね」

ブラッド法には確か、奥さんの血ならその同意なしにもらえるもあった。考えたくないけれど、この人の態度を見ていたらそうしか思えない。

血を得るために人間を囲い込むなんて、扱いがまるで家畜じゃない。

レイエンス家の彼は、手に持った食べかけのパンを口にしようとしてやめた。

「魔力のない人間と結婚することに、他に何のメリットがある。陛下もお前の血が欲しいからお前を愛しむふりをしているだけだ。それがヴァンパイアだ。血欲を”愛”などという言葉でごまかしているに過ぎない。お前は愚かにもそれを真に受けただけだ」

「何を根拠に……。あの人は必死にブラッド法を護っているじゃないですか！」

彼は下らないとでも言いたげに小さく笑う。

「なぜそう反乱貴族側の肩を持つんです……あなたもまさか、本心では陛下が殺されればいいと思っっているんですか？ 血欲を満たすためだけに！」

つい大きな声が出た。時を刻む柱時計の振り子の音がやけに大きく聞こえる。

どれだけ待っても、彼は“違う”とは言わなかった。

つまりこの沈黙は、“Yes”だということ。無言の肯定だった。

どうしてレオ様はこんな人と一緒にいさせるの……。

「もう休みます」

あふれそうになる怒りと涙を懸命にこらえて、彼に背中を向けた。これ以上彼と話していると、何か壊れて爆発してしまいそう。

「ヴァンパイアが血を求めて何が悪い」

投げかけられた声に足を止める。

「陛下とて本心ではお前の血を吸い尽くしたいはずだ。これは本能だ。誰も抗えない。陛下も暗殺以前に、反乱貴族側の主張に納得する可能性が高いはずだ」

唇を噛みしめた。

彼の言葉がとても悔しい。

陛下が本気で法を無くしてでも血を欲しがっているのなら、その機会はいくらでもあったはず。そうしたって誰も責めないはず。

でもあの人は、絶対にそんなことをしない。歯を食いしばってでも、耐えようとしている。

何の力もない、弱い人間たちのために。

なのにこの人はそれをせせら笑って、陛下が必死に護っているものを踏みにじって、揚句の果てにはあの人死なぬことを望んでいる。全ては血のため。それだけのために。

陛下の心が踏みにじられているようで、とても悔しくて悲しくて、そして恐ろしかった。

息を大きく吸い込んで、テーブルに座るレイエンス家の人を振り返る。

「確かに陛下もこうおっしゃっていました。血を吸いたくないといえは嘘になる。ヴァンパイアは愛する女性の血を何よりも求めるのだと」

涙も怒りも、もう抑えることなんてできなかった。

「けれどもこうも言うてくれました！ この喉が渴き干からびても、君を怖がらせるようなことはしない。聖書に手を置いて誓ってもいいと！ あなたは気高いヴァンパイアなんかじゃない。誇りも自制心も無い、欲にまみれただけの化け物だわ！ あの人と一緒にしないで！」

言うだけ言って、急いで部屋に戻って勢いよく扉を閉めた。真っ暗な部屋の中で扉に背を押し付け、ずるずると座り込む。

『ヴァンパイアが神に誓うのですか？』

『たとえ灰になろうと、それで君が救われるのなら』

怖い。

怖くて仕方がない。

闇の中、一人取り残されたかのように。

お兄ちゃんの遺してくれたネックレスをつかんだ。なのに、私の孤独と不安は少しも解消されなかった。

違う。これじゃない。

私のこの寂しさと恐怖を取り除いてくれるのは、このネックレスじゃない。

会いたい。今すぐ

「陛下……っ、お願い。無事でいてください……」

もし、もし彼の身に何かあったら。

それを想像するだけで、私の心は震えて悲鳴をあげていた。

熱い涙が止まることなく流れ出る。自分で自分の体を抱きしめながら、また大切な人を失うかもしれない不安に耐えようとした。

「どづいたんじゃ？」

泣きじゃくっている私を心配するように、エディーさんはそばへ

寄ってきて、私の手を握ってくれた。眉をひそめて私を覗き込む。ごしごしと、少しツンとした匂いのする服のすそでぎこちなく私の涙を拭ってくれた。

「エディーさん、ごめんなさい。これは……お料理に失敗して……」

余計な心配をかけたくなってそう言ったけれど、きつととても不自然な言い訳。

「ごめんなさい……っ」

それでもエディーさんは、何も言わず、何も聞かず。シワシワの小さな手で私の頭をやわらかく撫でてくれた。

それが今の私にはとても心強くて、温かすぎて、逆に涙が止まらなくなってしまうた。

「はいはい分かりました。そこまで言うんなら、信用しますよ」

ザルクの威圧を受けてから随分たって、ダンはやつとのことので口を開いた。

その久々の発言が上から目線の憎まれ口であったことにも、彼を知るものなら大して驚きはしない。

ザルクも小さく苦笑した。

「町で起こっている事件について関与しているのがヴァンパイアだとしても、警察こっちへ引き渡してもらえると約束してもらえればオレは

それで構わないすから」

態度とは裏腹に、凜とした力のあるシルバーの双眸。彼は警察組織に相容れずとも、誰よりも警官らしいとザルクは思った。

「好きにしる。私は同族だからといって、咎人を庇いだてなどせん」
ザルクは予定を確認するかのように、小さな手帳をしきりにめくっては真剣な表情で見つめていた。

「言ってることだけは素晴らしいですね」

そう呆れ気味に言ったのはシュレイザーだった。ザルクはそれにギクリとする。

「全く。こんな話題のさ中だというのに、さっきから何を見ておられるのです」

シュレイザーがそう言うのも無理はなかった。ザルクが手帳を真剣に見ていたのは、今後のスケジュールではなく、ソフィアの隠し撮り写真であった。

「べ、別にいいだろうが！　これから三日も会えんのですから……」

耳まで赤くなって慌てて手帳を閉じる。

王の威厳は粉々に飛び散っていた。

「確か写真は没収されたのでは？」

「ははは！　私を誰だと思っている。隙を見て何枚か死守した」

“誰だと思っている”という言葉の割にチンケな行動だと思ったことを、シュレイザーはそっと心の内に秘めておく。

その時、ハラリと手帳から紙が足元に落ちた。

「何です？ まさかまた期限の過ぎた重要な書類ではないでしょうね」

シュレイザーが写真の間に挟まっていたらしいその紙を拾って広げた。

「カルテ……ですね。血液検査の結果の」

シュレイザーからそれを受け取りながら、ザルクは「なぜそんなものが」と眉をひそめた。

だがそれを瞳に映した瞬間、一瞬にして顔色が変わる。

「引き返せ」

訳が分からず、シュレイザーは聞き返そうと口を開きかけた。

「いいから城へ引き返せ！ 早くッ！」

血相を変えてそう叫ぶザルクに、シュレイザーは急いで御者へ指示を出そうと窓を開けた。その時、一匹のコウモリが風に舞う木の葉のように滑り込んだかと思うと、羊皮紙を落として姿を消す。

シュレイザーが手早くそれを広げて読み上げた。

「『あなたの大切なものはこちらの手中にある。自ら見える位置に魔力制御の印をお刻みの上、赤く輝く星の下へおいでください』」

読み終わった直後、羊皮紙は黒い炎に包まれて灰も残さずに消えた。

「何すか、それ」

ただならぬ事態に、警官たるダンも普段は冷静沈着なシュレイザーも、冷や汗をにじませてザルクを見やった。

「陛下……」

「覚悟していた。いずれこんな日が訪れることを」

ぼつりとそうつぶやくと、天空に浮かぶ不気味な赤い星を見つめた。その横顔は、言い知れぬ怒りと悲しみをにじませているようであった。

「お前は運命って信じる？ 何をどうあがいても、定められたレールの上から逃れられないんだって話」

レオナルドはどこか屋敷の中で、レディエンス家の長、ジェフと共にチェスを楽しんでいた。慣れた手つきで駒を動かす。

部屋には彼らだけではなかった。殺気立った空気を隠すこともなく、レオナルドと同じ黒いローブに身を包んだ大勢のヴァンパイアたちが妖しげな木のように立ち並ぶ。

そんな殺伐とした室内にもかかわらず、チェス盤の周りはとても穏やかで優雅なひと時が包んでいた。

「運命ですか？ いやあ、考えたこともありませんなあ」

ジェフは散々迷った挙句、白いナイトをつまんで自信ありげに盤に置く。だがそれをあざ笑うかのように、レオナルドはあえてそのナイトすぐに取り払って見せた。

ジェフはまた、しきりにあごへ手をやる。

「たとえばオレがこうしてお前とチェスをして、今までずっとそうだったように、お前がオレに勝つことなんてない。これって一種の“定め”なのかなってこと。もっといえば、オレがお前とこうしていることか」

「あなたが王になられることとか……ですか」

ジェフは齒をのぞかせ、小さく笑う。

「陛下が目的地点へ向かい始められたとのことですよ！」

帰ってきたコウモリから連絡を受けた男が報告する。レオナルドはゆっくりと立ち上がった。

ジェフは駒を持ったまま、

「まあ、少なくともブラッド法の運命はきつと、誕生したその瞬間に決まっていたのでしよう。陛下と共に消滅する」

そう言ってトンと駒を盤に置き、「どうだ」とばかりにフードを目深にかぶるレオナルドを振り仰いだ。

「それじゃあお前は定めを信じるってことか」

「そうかもしれないませんな。公爵様は？」

「オレ？」

レオナルドは腰をかがめて駒を動かし、キングの動きを完全に封じた。ジェフはやられたとばかりに額を押さえる。

「オレは運命なんて信じてないよ。これは間違いなく、オレ自身が選んだ道なんだから。何より愛するソフィアのためにね……」

赤く染まっていくブルーの瞳は、ゆっくりと広がる血の海のように見えた。

s t . ? ? ?

The Destiny (後書き)

あとがき

暗殺計画がじわじわと実行へ

「クーカー、クーカー」

泣く私を慰めてくれていたエディーさんは、すっかり疲れ果ててベッドで眠ってしまった。あれからどれだけ経ったのかは分からないけれど、随分長い時間だったような気がする。

常夜のここは、やっぱり時間の経過がわかりづらい。

彼に柔らかく布団をかけて立ち上がる。

外の空気でも吸おうと思った。やっぱりじっとなんてしてられない。

「！」

扉を開けて息をのむ。

レディエンス家のあの人が、お皿を持ったまままるで人形のように突っ立っていた。じろりと金色の瞳で見下ろされる。

「な……何をしてるんですか」

おずおずと尋ねる。正直あまり話したくはなかったけれど、この状況は無視して素通りする方がつらい。

「お前の分だ」

ぶっきらぼうにそう言い放つ。手に持っていたのは、私が作ったスープらしい。

「ずっと、ここで待っていたんですか。これを持って」

彼は何も答えなかった。けれど、きつとそれは無言の肯定なんだろう。

お皿を持ったままずっと扉の前で待つてくれたのかと思うと、さっきの怒りもゆっくり溶けていくみたい。

こういう不器用なところは、どこかの誰かさんに似ている気がしたから。

「温めなおします」

しばらく考えて彼からお皿を受け取ると、それを持ってキッチンへ足を運ぶ。

鍋に戻して火にかける私の背中を、彼はじつと見ていた。遠慮のない視線が突き刺さる。

「あの、何ですか？」

居心地の悪さに、ほんの少し顔だけで振り返って尋ねる。泣いて目が赤いところは、あまり見られたくないから顔を隠し気味にして

「人間の女など魔力もなく、何もできない役立たずな種だと思っていた。今はオレのほうが決立たずだ」

自分で温めなおしたかった、ということなんだろうか。

それができないから役立たずなんて、あり得ないのに。

自然と笑みがこぼれた。

妙なところで重大な責任を感じているのが、何だかおかしくて。

「人間に魔力はありませんが、色んな知識があります。それにあな

ただって役立たずなんかじゃありませんよ。知らないことがあるだけ」

火の加減を見ようと身をかがめると、不意に影が下りた。

近づいてきていたらしい彼を見上げる。なぜか片手で自分の脇腹を押さえていた。

「どうしたんですか？」

そこは確か……わ、私と妙なことができないように男性機能を抑えるような魔方陣があったところよね。もしかして痛むのかな。

「グレイドーさん？」

「あの陣が消せないか考えていた」

「……消さなくていいです」

何てことを！ 冗談？ 冗談よね！

羞恥に赤くなる顔を隠すように、不自然に視線を泳がせると、彼が投げ捨てた結婚指輪が目に入った。

それを見ると、とてもさみしい気持ちになる。

窓枠下のそれに近づいて、そつと拾い上げた。

「どうぞ」

彼の方へ指輪を差し出す。

グレイドーさんは表情のない顔をそらした。

「必要ないから外して捨てた。なのになぜそれを返そうとする」

確かにそう。

でも

「今から言えば、あなたはヴァンパイアが血を求めるものだと言いながらも、どこかそれを否定されたがっているように見えました」

彼の眉が一瞬上がる。

ヴァンパイアはこうなんだ、ああなんだという彼の言葉はどれも、自分にそう言い聞かせているように感じられた。

「ですからこれも、捨てるより持っていた方がいいような気がして受け取ろうとしない彼の手を取って、無理に指輪を握らせる。

「余計なお世話ですけどね」

何だか妙に照れくさくなって、鍋の火を確認するふりをしてごまかした。

ちらりと盗み見た彼は、掌のそれをじつと見つめている。彼の結婚生活がどんなものだったのか分からないけれど、血に溺れることをあまり喜んでいるようには見えなかった。

色もなく冷たく見える瞳は、自分の心を探してさまよっているからじゃないかって気がする。あくまで感覚的だけれど。

「お前を怒らせるつもりはなかった」

『お前はヴァンパイアを理解していない』

『ヴァンパイアが血を求めて何が悪い』

『あなたは気高いヴァンパイアなんかじゃない。誇りも自制心

も無い、欲にまみれただけの化け物だわ！ あの人と一緒にしないで！」

あのやり取りが思い返される。

「いえ、私も失礼なことを言つてすみませんでした」

感情的になつて、とてもひどいことを言つてしまった。いくらなんでも、化け物なんて……。

「あの人のことで少し頭がいっぱいになつていて。でもきつと無事ですよ、レオ様もいるんですから！」

「レディエンス家は……」

よし、そろそろ温まつたかな。テーブルに乗っていたお皿を手に取り。

「オレは陛下を暗殺しようとしている一人だ」

え……？

それに耳を疑う。指先が震え、止まつた足が冷えていった。

「何を言つてるんですか」

これも、この人の分かりにくい冗談なんでしょう？

金色の瞳がランプの光を反射して揺らめく。それが決して嘘なんかじゃないと言いたげに。

「伯父上は先王がブラッド法を制定してから、ずっと廃案するよう抗議してきた。貴族の署名を集め、嘆願書を提出し続けた。だが

「

そこで彼は言葉を切る。

認められなかったんだろう。だからこそあの法は今も存在している。

「先代が病で崩御され、幼かった今の陛下が即位されたとき伯父上は喜んだらしい。子供ならコントロールできると思ったんだろう。だが今の陛下もそれをかたくなに拒み続けた。小さな心に父の遺志を引き継ぎ、今までどんな取引にも応じずあの法を護ってこられた。『血ばかり求めるお前は誇り高いヴァンパイアではない』と言われ、それが伯父上の逆鱗に触れたらしい。伯父上は先代以上に、今の陛下を殺したいほどに憎んでいる」

「ちょっと待ってください。それじゃあ……」

ボコボコと煮立つスプーンの音も、今は耳に入らない。

「陛下を暗殺する指揮をとっているのは、オレの伯父上だ。オレもその下についている。お前は人質だ」

バリンと手から滑り落ちたお皿が割れる。破片が足首に当たった。

「だって、あなたとここへ来るように言ったのは……避難するよう
に言ったのはレオ様」

「陛下の弟たる公爵様も利用されている。元々ブラッド法に反対されていたあの方の心の隙間に入り込んだ」

彼から目を離さず、ゆっくりと後ずさる。

この人は一体、何を言っているの？ 「冗談なら冗談だと言って…

…！早く！

「何を……言っているんですか？ レオ様はブラッド法に反対したり、そんな隙を見せるような方じゃありません！」

「お前のせいだ」

「！」

「お前が陛下を選んだからだ。あの方はひどく失望された。自分の兄を手につけようと思うほどに。陛下の暗殺を最初に口にしたのは伯父上だが、最終的な判断を下したのは他ならぬ公爵様。あの方を完全にこちらに引き込み、お前の身柄をこちらで押さえれば、計画は間違いなく完遂される。じきに」

窓の外に見える赤い星を睨みつけ、彼はそう言い切った。それがいったい何を意味しているのか私には分からないけれど、切迫した空気に焦りを感じる。

「そんなことはあり得ません！ レオ様は陛下のことだつてすごく愛しておられました。尊敬をして、いつも気にかけていました。陛下を避ける私に、あの方の話を聞いてあげて欲しいと言ったのは、レオ様ですよ？」

そんな彼が、陛下を暗殺しようだなんて考えるわけない！

「それでもお前が自分の方へ来てくれると思つたんじゃないのか」

「そ……んな」

「心から愛するお前の心と血を得るため。ヴァンパイアならば共感できる感情だ。その行く末が」

「陛下の暗殺でもですか！？」

血……血……血。
そればかり！

「そんなに血が欲しいんですか？ だったら私の血を全部あなた方にさしあげますッ！ いくらでも飲めばいい！ 私を空っぽの怪物にでも何でもすればいい！」

彼の胸倉をつかんで精一杯揺らした。けれど彼はびくともせず、ただあの冷たい金色の瞳で私を見下ろすだけ。

どうして……どうしてあの人恨まれなくてはならないの。他ならぬ、味方であるはずのヴァンパイアたちに！

「私の血を差し出すかわりに……あの人のところへ連れて行ってください。……会いたい……会わせてッ」

ぼたぼたと大粒の涙が床に落ちた。それを拭う気力もない。ただ立っているだけで精いっぱいだった。

胸が痛い。肺が締め付けられているように苦しい。
陛下……。

「なぜそこまでヴァンパイアを愛せる」

ゆっくり床にうずくまる私の頭上に、そんな疑問が落ちてきた。

私は、ヴァンパイアを愛したわけじゃない。私は

「陛下は私を愛してくれているからこそ、何より私の気持ちを優先してくれる。それがどれだけ辛いことだろうと、我慢してくれるのです。思い込みが激しくて、どこか子供っぽいところがあって、暴走することもありますけど、私を護ろうとしてくれていたときはいつも必死でした。そんな彼だからこそ、私も……彼の愛に応えたい

と」

ヴァンパイアじゃない。あの人自身を好きになった。いつからか、あの人から目が離せなくなった。あの人の笑みに胸をくすぐられるようになった。

私を処刑しようとした人だけど、同時に、命を懸けてまで愛してくれた人。

「彼が私の血を求めるなら、捧げてもいい。……本当はとても、怖いけれど。でも、あの人になら」

全てを差し出しても構わないと

「……お願いです、あの人を殺さないでください……お願いします。殺さないでくださいッ」

こんな風に敵にお願いするしかできないなんて……。大切な人が危ない目に遭おうとしているというのに。こんなことしかできないなんて！

「ずっと心の中に妙なわだかまりがあった。女の血と体」

ポツリ、ポツリと言の葉が落ちてくる。それはなぜか彼の心の奥底からのものに思えた。

「伯父上に欲しいものを欲しただけ与えられて、欲望を好きにだけ満たすことができた。だが……したいことをしていても、オレにはそれがどこかむなしく感じられた。結婚をしても、女には金を求められ、オレは女に血を求めるだけ。それだけだった」

グレイドーさんは、悲痛な面持ちで指輪を握りしめた。

「やっと気づいた。欲に忠実に生きるとは、自分の中に何も残さないことだと。誇りも愛も信念も、耐えて忍んだ先に生まれるものなんだと。アンタを見てると、それがよく分かる気がする。ブラッド法を護る意義も」

あんなに怖かった金色の目が、まるで磨き終えた宝石のように見えた。

そう、これはきつと自分の心を見つけた目。

「オレは中身の無い伯父上よりも、苦しみに耐えながらあの法とアンタを護ろうとする陛下を支持する」

「グレイドーさん……」

その瞳を心強く思った。とても。

「お前を人質にとつたと陛下をおびき寄せ、魔力を抑える術式をかけて息の根を止める計画だ。場所はあの赤い星の下だ」

彼に励まされるかのように、私も立ち上がる。ずっと座り込んでなんていられない。

「きつとレオ様も危険です！ 早く止めないと！」

外へ出ようと足を踏み出したけれど、グレイドーさんは動こうとはしなかった。

「あの一！」

どうして？ 早くあの赤い星の下へいかなきゃいけないのに！

「グレイドーさん！」

「あそこへいく手段がない」

「え……ここへ来たとき乗ってきた馬車があるんじゃない」

「あれはすでにここにはない。お前を完全にここに閉じ込めておくために帰した」

帰した？ そんな。

「ならどうすれば……っ！」

足元から期待がガラガラと音を立てて崩れ去っていくような気がした。

計画が分かっているにも、ここから出られないんじゃないやどうしようもない。

どうして？ せつかくどうにかできるかもしれないと思ったのに。どうして……！

トコトコ

外から地を叩くヒツメの音と、馬の鳴き声が聞こえる。

これって、まさか

「よーし、よしよしよしよ〜」

バンと勢いよく窓を開けると、そこには一頭のスレイプニールがいた。空を駆ける馬。これさえあれば陛下たちの下へ行ける。

でもどうしてここに？

よく見ると、手綱を引いてその顔を撫でる小さな影があった。

「誰だ？」

「エディーさん！」

嬉しくなつて、無謀にも窓から外へ駆け出す。

「五つ葉のクローバーを探しておつたら飛んできたんじゃ！ ぶわわーっとなー！」

「エディーさん」

ありがとう。のどでつつかえてしまった言葉の代わりに、強くギョツと抱きしめる。

「どづいたんじゃ？」

エディーさんはそう首をかしげていたけれど、不思議な人。守護妖精だと言っていたけれど、何だか私を護ってくれているよう。

「これで……」

「ぼやぼやするな」

彼を振り返ろうとした瞬間、お腹に手を回されて馬の背に放り投げられた。

痛い……。陛下ならもっと丁寧に扱ってくれるのになんて考えている暇もない。

陛下、レオ様。今すぐに行きますから、どうかご無事で。

そんな思いがどうか届くようにと願いながら、私の後ろにまたがったグレイドーさんと共に夜空へ舞い上がった。

ていつか聞いたら必ずあるよ

陛下の暗殺が行われるという場所へ、天空を駆ける馬に乗って向かう。その途中、色んなことが頭を巡っていた。

思えば、レオ様との出会いはとても不思議だった。

『お探し物はこれですか？ カワイイお嬢さん』

今でも覚えてる。初めての出会いを。

図書館であるお気に入りの本を探している途中、突然うしろから口をふさがれた。

てつきり蛇男司書さんが誰かだと思ったのに。
振り返った彼があまりにきれいでびっくりした。

その、宝石のように青い瞳に見つめられるのが恥ずかしいくらい。彼はすでに私の名前を知っていて、私は彼の名前を聞いて驚いた。

『王はオレの兄。兄弟いるって知らなかったの？』

知らなかった。この世界のことになんて、興味がなかったから。ヴァンパイアをとても恐れていたはずなのに、明るくてどこか憎めないあの人に対しては、そんな恐怖心や忌避の心なんて忘れてしまっていた。

『オレ、君に決めた』

あの場でプロポーズされて、抱きしめられてキスをされた。

リザたちに本をぶつけられたときにできた額の傷も、処刑されかけて瀕死だった私の体と傷ついた心までも癒してくれた。どんなときでもいつもそばにいて、励ましてくれたのに。

思えば、初めてのキスだって。

誰からも慕われて、悪く言う人なんていないとみんなが口をそろえて言っていた。
それはきつと、

『オレが今までこうやって自由に生きられたのは、兄上のおかげだって思ってるんだ。兄上が重責の全てを、弱音も吐かず一人で負ってくれているからだって』

そうやって、自分のことよりも、周りの人の気持ちを考えてやる優しさがあったから。自分の地位に甘んじることもなく。感謝も忘れなかった。

そんなあの人が……こんな……。

涙がこぼれてしまいそうになった。

でも泣いてはいられない。止められる可能性が一パーセントでもあるのなら、まっすぐ前を見ていなきやいけない。

それが私のせいだというなら、なおさら。

そう思っても涙で滲んでくる瞳に、己の弱さを感じた。
しっかりとしないと……しっかりとしろ……！

その時ふいに、ある仮説がふわりと私の中に浮かんだ。
もしかしたら、彼は

「確かにレオ様は、今までとても優しく接してくださいました」

突然口を開いた私に、 그레이さんは黙って耳を傾けてくれる。

「でも、あの人は私に好かれなくて優しくなかったわけじゃない。たとえ私が男性だろうと、子供だろうと、きっと同じように接してくださいます。だからみんなに信頼されて……彼はそういう人です」

「何が言いたい？」

彼にまとまりのないことを話している内に、徐々に推定が確定に変わっていくのを感じた。

きつと、きつと

「彼は、陛下を暗殺しようとしてるんじゃないかもしれません」

思ったより、張りのある声が出た。それはきつと、私の自信によるもの。

「どういうことだ。あの方は、反乱側である我々をけん引するお立場なんだ」

「それを利用して、この反乱事態を失敗させようとしてるんです。ブラッド法に反対する人たちを捕まえるために」

「！」

그레이さんは、静かに息をのんで手綱を持つ手に力をいれる。あまり感情を表に出さない人だからこそ、それで大きな動揺と驚きを感じているのが分かった。

「なぜそう思う」

「なぜ……」

それを言われると困った。今までのレオ様の言動から推察しただけのことだから。

明確にこうだからなんて言えない。でも……

「きつと陛下もレオ様も、お互いに事情を知ってる。そう考えた方がずっと自然です。それに陛下を暗殺しようと思うほど私を愛してくれてるなら、きつと私を利用しない方法を考えます、あの方なら「ならオレの伯父上は、反乱のきつかけとなることを『言わされた』というのか。お前のことで怒りを見せたのも、全て演技だったのか……」

グレイさんもポツリポツリと私の考えを裏付けるかのように、言葉紡ぐ。

「二重スパイ……」

グレイさんはすぐには納得しかねるのか、考え込むように眉をひそめた。

けれど私は自分の仮説を確信してる。

とてもあやふやなものではあるけれど、今まで見て聞いて感じてきたことや彼らを信じたい。

「ここだ」

赤い星の下に降り立つ。周囲は断崖絶壁で、けれどこの崖の上には木々が生い茂っていた。鳥も小動物さえもない、深い谷に囲まれた一角はとても静かだった。

「とにかく探さない」と

草をかき分け、前に進もうとしたそのとき、茂みから突如として現れたものに抱きつかれた。

身構える隙もなく腕の中に閉じ込められ、一瞬何が何だか分からなくなる。

「見るな」

抱きつかれていて顔が見えないけれど、聞き覚えのある声だった。それにこの武官のように遅しい体、と柔らかな茶色い髪は。

「ダン……さん？」

傍にいたグレイさんが、衛兵に拘束される。

「あの……」

「落ち着くまで、ここにいた方がいい」

落ち着くって？ 何が起こってるの。

まさか……陛下の身に何か。私の考えは、間違ってた？

「は、放してくださいっ……！ あの人のところへ行かせてください！」

「ダメだ。ソフィア……」

「ダメ？」

「ヴァンパイアは、身内同士でも容赦しねえんだな」

少し距離を置いたダンさんの顔は、いつもの凜々しいそれとは違って真っ青に青ざめていた。

心臓が冷えていくかと思った。
どういうこと？

あの人に会ってはいけないの？ それとも会えない

鼓動が激しくなる。心臓が震えて、勝手に涙がゆっくりとあふれ
てくる。

「陛下！ 陛下ああ！」
「ソフィア！」

違ったんだ！ 二人は手を組んでたわけじゃなかったんだ。間に
合わなかったんだ。間に合わなかったッ！

私をダシにして、陛下は呼び出された。そして……そして

た。ダンさんの手を振り切り、一直線に走って目の前の草をかき分け

「ッ！」

目の前の惨状に息をのんだ。

赤い星の下らしく、あたりは緋色に包まれていた。むせかえるよ
うな血の香りに包まれて濡れたように真っ赤な景色が広がっていた。

「こ、んな」

指先が震える。足も中から冷え始めていた。

まるで捨てられたゴミのように点々と倒れているのは、黒いロー
ブをまとったヴァンパイアたちだった。岩に叩きつけられ、手足が
あらゆる方向に曲がっている人もいる。

折れた木の幹が、棘のように体を貫通している人もいる。
重なりあうように倒れている人もいる。

明らかに亡くなっているだろうと思われる人たちは、小さな光の泡を出しながら消えていく。そんな人たちが、あちらこちらに転がっていた。

何という地獄絵図だろうと思った。ダンさんが止めるはずだと。でも、この中に陛下がいるんじゃないかと思うと、目がその恐ろしい光景を追ってしまう。

その瞬間　陛下を見つけた。
出血のせいか、服がどす黒い。

後ろ姿だけど、あれは間違いなくあの人の。
あちこち服が破れているけれど、木に向かって、ポケットに手を入れて凜と立ってる。よかった。無事だったんだ。
それならやっぱりレオ様と手を組んでたのね。だったら彼も無事なんだ。

「陛下……！」

駆け寄ろうとするとすぐに足を止めた。声を引っ込めた。

衛兵さんが陛下のそばを退いた途端、ある人の姿が見えた。

のど元に鋭い剣を突き立てられ、木に串刺された人。
口からは大量の血を流し、足元には大きな血だまり。

ピクリとも動かない彼の姿が。

「レオ、様……」

息が止まる。

何が……どうなってるの。

「まだ起きてるか」

陛下の冷たい声。それに反応するかのように、レオ様は咳込んだ。彼は生きてはいた。でも、それを素直に喜ぶべきなのか分からない。ひどい状態であるのは変わらない。

どうして？

手を組んでたんでしょう？

そうやってブラッド法を反対する貴族を捕まえようとした。そうなんでしょう？

なのにどうして……レオ様が傷だらけにならなきゃいけないの。

「やっぱ……兄上には敵わないか……」

レオ様の声はとても掠れていて、今にも消え入りそうだった。

「血に狂って徒党を組み、国にまで反旗を翻すとはな」

陛下の怒りを含んだ声がとてもはっきりと聞こえてきた。

私の想像した計画とは、全く違うストーリーと共に。

「三日やる。それまでに洗いざらい吐いておくことだな。王家の恥

さらしが

「はつきり言えよ。三日後、何……？」

濡れた瞳の光を、陛下に向ける。こんな状況なのにどこか挑発的なのは、きつと気のせいじゃない。

陛下が首に突き刺さっていた剣を乱暴に引き抜くと、レオ様の体は地面に崩れ落ちた。木の幹が真っ赤に染まる。

私の傷を癒してくれたレオ様が、今傷だらけになって倒れている。

理解できない。目の前の光景が。

「三日後、お前を……死刑に処する」

「ッ！」

体に電流が走ったかと思った。

レオ様が……

死刑

「兄上……」

顔を上げる気力もないのか、レオ様は振り絞るように陛下を呼んだ。

「何でも、ない」

何が言いたかったのかは分からない。けれどそれきりレオ様はぐったりとしてしまった。

「連れて行け」

陛下の命令で、部下たちがレオ様の両脇を抱えて引きずるように運び始める。

崩れそうになる私の体を、誰かが支えてくれているようだった。

けれど、何だか頭の中が真っ白で何が何だか分からない。これは現実？

夢なら覚めてと願いつつも、頬を伝う涙はとても熱い。自分が処刑宣告を受けた時よりもっと、ずっと胸が苦しい。胸が押しつぶされて息ができない。

「レオ様……………レオ様ああ！」

バカみたいに叫ぶ自分の声すら、聞こえなくなっていた。

ここに充満する死の香りが、全ての感覚を遮ってしまったかのよう。
うに。

ただ苦しみという感情だけを残して。

s t . ? ? ?

The S m e l l o f D e a t h (後書き)

あとがき

次回、処刑執行日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2112q/>

The Vampire Castle

2011年9月26日17時38分発行